山梨県北巨摩郡長坂町

健　康　村　遺　跡

－（仮称）東京都新宿区立区民健康村建設事業に伴う発掘調査報告書－

1994

新宿区区民健康村遺跡調査団

山梨県北巨摩郡長坂町

健　康　村　遺　跡

－（仮称）東京都新宿区立区民健康村建設事業に伴う発掘調査報告書－

1994

新宿区区民健康村遺跡調査団

遺跡全景（南から）

A地区全景（南西から）

健康村遺跡出土土師器

健康村遺跡出土灰釉陶器

刊行にあたって

山梨県長坂町は八ヶ岳南麓地域に位置し、近傍には縄文時代の遺跡をはじめ中世から戦国期に及ぶ様々な遺跡が点在し、古来からの人々の営みを窺うことができます。

このたび調査を終了しました長坂町中丸地区の新宿区区民健康村遺跡は、仮称東京都新宿区立区民健康村建設を契機に発見されました。

新宿区に区域外調査の前例がないため、調査は新宿区立新宿歴史博物館の全面的なご支援のもと、早稲田大学人間科学部助教授谷川章雄先生を調査団長とする新宿区区民健康村遺跡調査団を設置して実施され、発掘は平成4年7月2日に開始し同年11月30日に終了しました。

しかし、約21haという広大な事業用地であることから、全体で170箇所の試掘坑を設定・調査後、炎天下に始まった本格調査は施設建設部分を中心に24,800㎡に及びましたが、谷川団長の指導のもと、調査員はじめ現場作業担当者の方々の並々ならぬ努力の結果、調査報告書の刊行を迎えることができました。

今回の調査の結果、縄文・平安時代等の住居遺構や遺物が多数確認されたことで、八ヶ岳南麓地域における新たな歴史資料を提供することになったものと考えます。

調査にご指導とご協力を賜りました山梨県教育委員会・地元長坂町役場はじめ関係者の皆様には、改めて厚く御礼申し上げます。

平成6年3月31日

新宿区区民健康村遺跡調査団
副調査団長　　吉野道雄
（新宿区生活文化部長）

例　言

1．本報告書は、山梨県北巨摩郡長坂町大字中丸字新代1622番地ほかに所在する健康村遺跡の発掘調査報告書である。
2．本調査は、（仮称）東京都新宿区立区民健康村建設事業に伴う緊急発掘調査として、新宿区からの委託によって実施されたものである。
3．発掘調査から報告書作成までの費用は、新宿区が負担した。
4．調査は、新宿区区民健康村遺跡調査団を組織し、谷川章雄団長の指導のもとに実施した。
5．本書の作成は、谷川章雄団長、富樫雅彦参与の指導のもと、調査団員が行なった。
6．本書の執筆は、第１～５章については主に坂倉が行なったが、第１章第２節を黄川田が、縄文時代の遺物のうち、晩期のものを小林が、その他を荻野が行ない、第６～８章については、文頭に文責を記した。なお、編集は、坂倉・荻野が行なった。
7．自然科学分析および石器の石質鑑定は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
8．遺物の実測・トレースの一部は、株式会社シン技術コンサルに委託した。
9．遺構の実測・トレースの一部は、アジア航測株式会社に委託した。
10．遺物写真は、ナカ・アートスタジオに委託した。
11．本調査において検出された諸資料は、山梨県長坂町教育委員会の責任において保管・活用を図るものとする。
12．発掘調査から報告書の作成に至るまで、次の方々や諸機関から御指導・御協力を賜わった。記して感謝する次第である。（敬称略五十音順）

石川郁　今福利恵　小野正文　河西学　葛西美智子　桐生直彦　佐藤方里子　斎藤孝正　末木健　瀬田正明　長沢宏昌　野口佳子　野代幸和　橋本眞紀夫　平川南　保坂康夫　二辻利一　山出眞一
加藤重機建設株式会社　小淵沢町教育委員会　新宿区遺跡調査会　新宿区企画部　新宿区教育委員会　新宿区生活文化部　須玉町教育委員会　豊科町教育委員会　長坂町　松本市立考古博物館　武川村教育委員会　山梨県教育庁　山梨県考古学協会　山梨県埋蔵文化財センター

凡　例

1．遺構・遺物の縮尺は次のとおりである。
遺構　全体図1/250・1/300・1/500・1/600・1/2000、住居跡1/60（付帯施設1/30）、土坑1/30・1/60、埋甕1/10・1/20、石組土坑1/30、竪穴状遺構1/60
遺物　土器実測図1/3・1/4、土器拓本1/3、土製品1/3・1/4、石器1/1・2/3・1/3・1/6、金属製品1/3
2．遺構断面図中のレベルポイント部分にある数字は、標高を表わす。
3．石器観察表の（　）は、現存値を表わす。
4．平安時代遺物観察表における法量の欄については、上から口径・器高・底径を表わす。なお、（　）は推定値を表わす。
5．図中のスクリーントーンの指示は次のとおりである。
▨ 地山　■ 黒色土器

目　次

巻頭図版
刊行にあたって
例言・凡例
目次
第１章　調査の経過と概要
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　地理的環境……2
　第３節　調査方法・発掘調査区域……4
　第４節　調査・整理作業の経過……7
　第５節　試掘調査の概要……8
第２章　A地区
　第１節　概要……15
　第２節　縄文時代……16
　第３節　平安時代……45
　第４節　中世……81
　第５節　その他……88
第３章　B地区
　第１節　概要……90
　第２節　出土遺物……91
第４章　E地区
　第１節　概要……93
　第２節　遺構と遺物……93
　第３節　遺構外出土遺物……101
第５章　G地区
　第１節　概要……113
　第２節　遺構と遺物……114
第６章　自然科学分析
　第１節　健康村遺跡　自然科学分析調査報告……116
　第２節　健康村遺跡出土の信州系土師器の蛍光X線分析……129
　第３節　健康村遺跡出土の動物遺存体について……143
第７章　考察
　第１節　山梨県における縄文時代前期末から中期初頭の様相……144
　第２節　中期後半の土器……154
　第３節　縄文晩期終末の土器について……156
　第４節　健康村遺跡出土の土師器について……165
　第５節　水洗選別……173
第８章　総括……182
写真図版

第１章　調査の経過と概要

第１節　調査に至る経緯

１．調査に至る経緯

平成元年９月、新宿区は山梨県北巨摩郡長坂町大字中丸字新代1622番地ほかに位置する約210,000㎡にも及ぶ広大な土地に、区民の総合的余暇活動施設としての「区民健康村」建設を決定し、山梨県及び地元長坂町と協議に入った。

平成３年10月29日、新宿区長より長坂町教育委員会あてに、当該地における埋蔵文化財の有無について照会をしたところ、長坂町教育委員会から、当該地内の２カ所に周知の埋蔵文化財包蔵地が存在するものの、そのほかは包蔵地となっていない旨の回答があった。平成４年１月、長坂町教育委員会が当該地内において埋蔵文化財の存否確認調査を実施したところ、遺構・遺物が検出されたため、本格的な発掘調査が必要となった。

新宿区と長坂町は、山梨県教育委員会の指導のもと、長坂町が発掘調査を実施することで調整を図っていたが、平成４年５月25日、諸般の事情により、長坂町が発掘調査を実施することが困難となった旨の申し入れが新宿区あてにあった。その後、新宿区と長坂町、山梨県とが協議を進めた結果、平成４年６月、山梨県及び長坂町の指導の下、新宿区が調査団を組織して、発掘調査を実施する事で合意した。

平成４年６月22日、谷川章雄（早稲田大学人間科学部助教授）を調査団長とする「新宿区区民健康村遺跡調査団」が発足し、７月２日より調査が実施された。

２．調査組織（新宿区区民健康村遺跡調査団）

調査団長	谷川章雄	早稲田大学人間科学部助教授
副団長	森岡泰弘	新宿区企画部長（平成４年12月７日まで）
	山田外彦	新宿区企画部長（平成４年12月８日から平成５年３月31日まで）
	吉野道雄	新宿区生活文化部長（平成５年４月１日から）
	小松伊勢夫	長坂町企画課長
事務局長	鹿島一雄	新宿区生活文化部区民健康村開村準備担当課長
事務局次長	菊池宏利	新宿区生活文化部地域振興課区民健康村担当主査
事務主任	安沢万起子	新宿区生活文化部地域振興課区民健康村担当主任
事務補佐	有泉幸彦	新宿区生活文化部地域振興課区民健康村担当主査
監事	小林喜文	長坂町企画課地域計画係長（平成５年３月31日まで）
	小沢孝文	長坂町企画課地域計画係長（平成５年４月１日から）
	田崎晴夫	新宿区企画部企画主査（平成５年３月31まで）
	小川洋三郎	新宿区生活文化部地域振興課管理係長（平成５年４月１日から）
	高須達郎	新宿歴史博物館文化財主査（平成５年３月31日まで）
	村田純子	新宿歴史博物館文化財主査（平成５年４月１日から）
参与	富樫雅彦	新宿歴史博物館学芸員
総括主任	板倉敏之	新宿歴史博物館研究員
主任調査員	池田悦夫	新宿歴史博物館研究員
調査員	黄川田修	明治大学考古学専攻生
	萩野早苗	國學院大學卒
	小林青樹	國學院大學大学院考古学専攻生
調査補助員	松島悦子	國學院大學
整理作業員	滝浪美登里、影山典子	

第2節　地理的環境

1　遺跡周辺の環境

本遺跡は、山本行政の火山列である八ヶ岳の南麓に位置している。

八ヶ岳は、北は蓼科山から南は編笠山まで、南北約21ｋｍにわたって標高2,000m級の山が連なる雄大な火山列である。この山列は北八ヶ岳と南八ヶ岳の2つに分けられ、その長期にわたる火山活動により、東・南・西のそれぞれの方角の山麓に、広範囲でなだらかなスロープが形成されている。

南に向かって広がる南麓地域は、南八ヶ岳に属する権現岳（標高2,786m）を頂点として南に広がる、雄大なスロープである。権現岳に源を発する多くの小河川は、下っていくに従って大地を深く削り、凹凸に富んだ地形を形成するようになっていく。

その雄大で豊かな自然は観光へ、あるいは牧畜へと利用されており、牧場、或いは避暑客のための観光施設が、ここでは数多く見られる。

2　遺跡の立地

本遺跡が立地するのは、長坂台地と呼ばれる台地の北部である。

この台地は八ヶ岳南麓地域の他の台地と同じく、権現岳の爆発によって形成されたものであり、凝灰集塊岩・凝灰角礫岩・火山灰などから構成される火山砕屑岩流堆積物、及び溶岩から構成されている。台地の南端は釜無川によって削られて崖状を呈し、台地上には北から釜無川へ注ぐ河川によってV字状の谷が数多く作られ、大変起伏に富んだ地形となっている。本遺跡も、東を大深沢川、西を小深沢川が流れ、両河川の谷に挟まれた馬の背状の地形に位置している（第1図）。特に東の大深沢川の形成する谷は深く、遺跡の東側は部分的に崖状を呈している。

遺跡は東の大深沢川にむかって北西から南東へと緩やかに傾斜する場所に立地している。極めて水捌けが良く、日当たりが良い。そして、付近には八ヶ岳に源を発する湧水が数多く存在している。極めて人の居住に適した環境であり、調査前から数多くの遺構の存在が予想されていた。なお、標高は約750mである。

3　周辺の遺跡

長坂町は1985年に、山梨考古学協会に町内の遺跡分布調査を委託しており、162ヶ所の遺跡の存在を確認している。それらを時代別に見てみると、縄文時代が102遺跡、平安時代が68遺跡と、両時代によってかなりの割合が占められており、「長坂町誌」では「町内のどこでも（両時代の）遺跡をみることができよう」とまで述べられている（註1）。本遺跡の近くでは、事業地西側に隣接する畑（No.82遺跡）において縄文時代前期と中期の土器が、南側に隣接する土地（No.88遺跡）からは、縄文時代中期と平安時代の土器が出土したことが報告されている。

周辺の有名な遺跡としては、柳坪遺跡と金生遺跡とがある。

柳坪遺跡は、1973年と1984年に計三次の調査が行なわれ、その内容・規模から、長坂町の代表的な遺跡となっている。ここでは、縄文・弥生・古墳・平安のそれぞれの時代の遺構が検出され、なかでも、縄文時代中期及び平安時代の資料は特に豊富で、これらは八ヶ岳南麓及び周辺地域における重要な資料となっている（註2）。

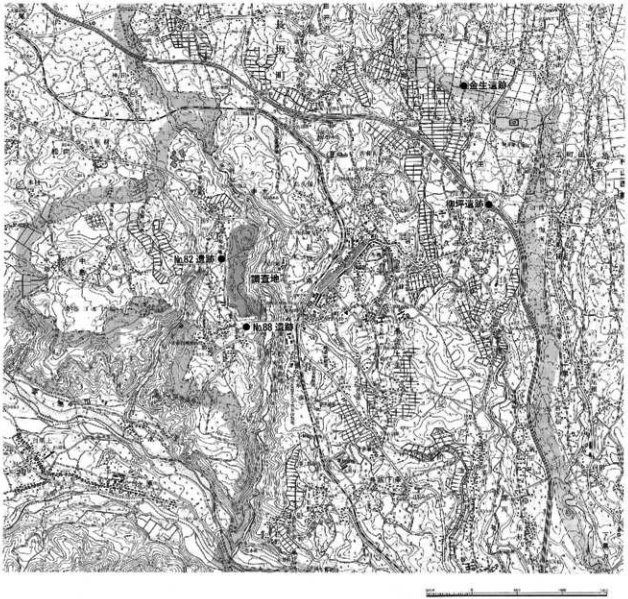
また長坂町の北に位置する大泉村の金生遺跡は、八ヶ岳南麓地域において極めて重要な遺跡である。1980年に調査が行なわれたこの遺跡では、縄文時代から中世まで及ぶ様々な時代の遺構が確認されたが、最も重要なのは、縄文時代後期・晩期の大集落である。後期から晩期にかけての住居址が38軒確認されたこの集落は、幾つかの空白期間を除いて後期・晩期に継続して存在していた事が確認されており、八ヶ岳南麓地域における当時の人々の活動拠点の一つであったと考えられている（註3）。

八ヶ岳南麓地域は、藤森栄一氏の『井戸尻』刊行により、中部地方における縄文時代研究の重要なテーマとなり、今でも数多くの課題が残されている（註4）。また、保坂康夫氏によって、平安時代における鍛冶遺構の集中分布地域の一つとして指摘されており（註5）、平安時代の生産・流通における重要な地域として認識するこ

とが可能となってきた。現在、以上の様な認識がなされている当地域において、大規模な発掘調査を行なった本遺跡の意義は誠に大きい。周囲の遺跡との比較・対比によって、当地域における先史時代・古代史研究に対し、少なからぬ寄与が出来ると思われる。

註

1）長坂町誌編集委員会　1990　『長坂町誌』　長坂町
2）末木健　1975　『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』　山梨県教育委員会
　米田明訓　1986　『柳坪遺跡』　山梨県教育委員会
3）新津健　1989　『金生遺跡Ⅱ（縄文時代編）』　山梨県教育委員会
4）藤森栄一　1965　『井戸尻』　中央公論美術出版社
5）保坂康夫　1992　「山梨県下の平安時代鍛冶遺構の様相」『山梨県考古学協会誌』第五号　山梨県考古学協会



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

第3節　調査方法・調査区域

1．調査方法

事業用地は約210,000㎡と広大であるが、事前の山梨県及び長坂町の教育委員会との協議の結果、切土・盛土を行なう約80,000㎡を調査の対象とすることとし、先ずその5％にあたる4,000㎡分（170箇所）の試掘坑を設定して、埋蔵文化財の遺存状況を把握する目的で試掘調査を実施した（第2図）。

① 調査対象範囲現地確認（便宜的にA～G地区と称す）
② 樹木伐採及び障害物撤去
③ 国土座標系による試掘坑設定（4×4と4×12m、170ヶ所）
④ 表土機械掘削
⑤ 自然層人力掘削
⑥ 遺構確認精査
⑦ 平面図作成
⑧ 試掘坑土層断面精査
⑨ 土層観察・断面図作成
⑩ 写真撮影
⑪ 図面・写真整理
⑫ 埋蔵文化財確認調査報告書作成

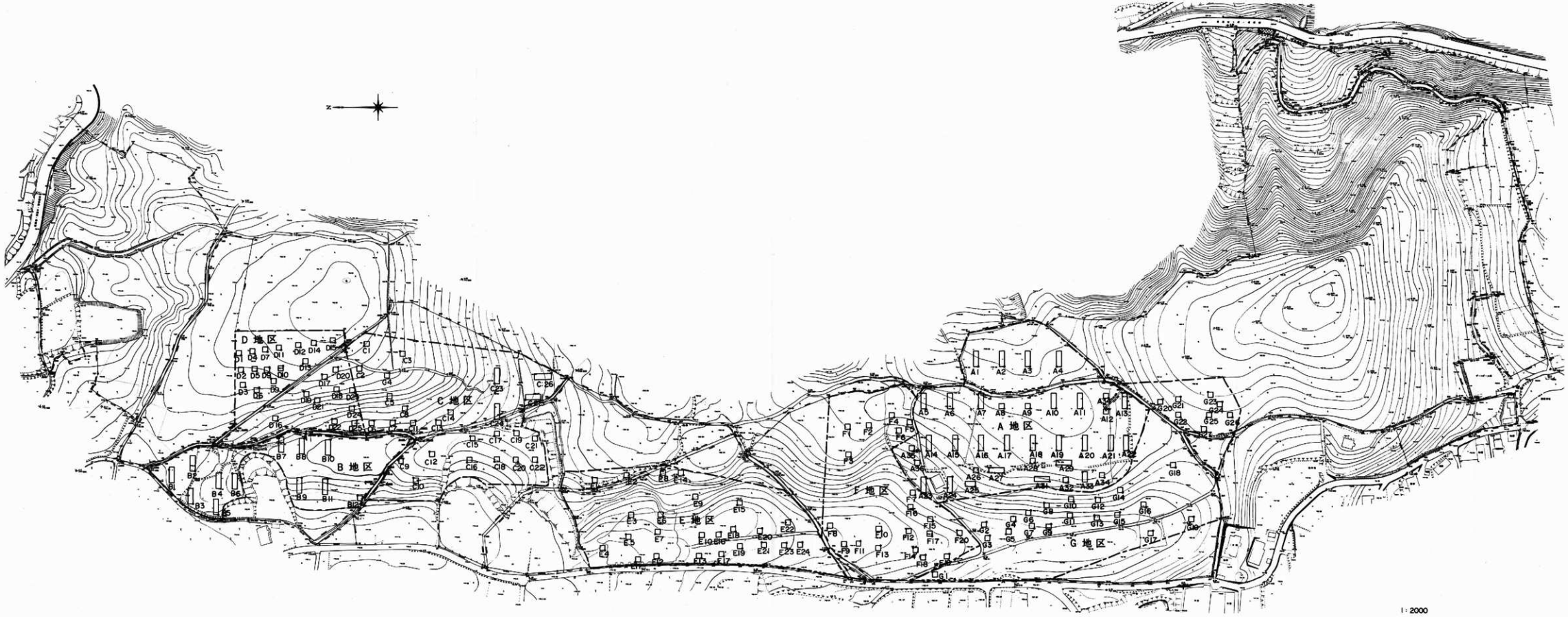
試掘調査の結果、遺構382基、遺物518点が検出された（詳細は第1章第5節参照）。この結果をうけて、調査委員会（詳細は第1章第4節参照）を開催し、A・B・E・Gという4地区（約25,000㎡）について本格的な調査を実施することとなった。

① 本格調査の範囲を確定させ、試掘の際に残されていた樹木の伐採と障害物撤去を行なった。
② 表土の掘削は、重機によって行なった。
③ 表土掘削終了後、遺構確認面までの掘削を行なった。A地区は土層堆積状態が複雑で、遺構確認面を確定するのに手間取った。
④ 遺構確認作業を行ない、住居跡、石組土坑、土坑、炉跡、埋甕、性格不明遺構という遺構ごとに番号を付した。
⑤ 遺構調査は、十字ベルトの設定後の掘削若しくは半截によって土層観察帯を設け、写真撮影、図面作成、土層観察後完掘し、全景写真撮影を行なった。なお、平面図の作成は写真測量によったが、住居跡の生活面の平面図及び微細図は、手取りの実測で行なった。
⑥ 遺物は、原則として遺構ごとの一括取り上げを行なった。
⑦ 一部の遺構において覆土のサンプリングを行ない、ウォーター・セパレーションを実施した（詳細は第7章第5節参照）。

2．調査区域

調査区は、試掘調査の際に便宜的にA～G地区と称した。なお、本格調査の範囲を確定させる際に、F地区の一部をA地区に含めて調査を実施した。

調査区ごとに、国家座標系による10m×10mのグリッドを設定し、東西に西からアルファベットで、南北に南からアラビア数字で番号を付した。



第2図　試掘坑配置および本調査範囲図

第4節　調査・整理の経過

1．調査経過

〈試掘調査〉

平成4年

7月2日～7月8日　調査範囲の踏査、樹木伐採・試掘坑設定等の準備作業。

7月9日～7月18日　機械及び人力による自然層掘削作業。

7月19日～7月28日　遺構確認、図面作成、写真撮影作業。

7月29日～8月10日　図面・写真整理作業。

〈本格調査〉

8月11日　A地区よりB地区、E地区の順に、調査区確定作業、樹木伐採作業、表土機械掘削を開始。

8月17日　表土機械掘削が終了した部分より、遺構確認作業を開始。

8月24日　A地区北半より、遺構調査を開始。

9月24日　A地区北半の調査にメドがついたため、G地区の樹木伐採作業、表土機械掘削を開始。

9月29日　A地区南半の表土機械掘削を開始し、G地区での遺構確認作業、遺構調査を開始。

10月1日　A地区南半の遺構確認作業を併行して進めることとなった。

10月10日　A地区南半の遺構調査を開始。

10月16日　遺物の水洗い作業開始。

10月31日　遺跡見学会を実施。約70名の参加があった。

11月4日　写真測量を実施。調査区全景写真撮影も行なう。

11月14日　発掘調査を終了。A地区の埋め戻し作業を開始。

11月30日　すべての作業を終了し、撤収を完了。

〈整理調査〉

平成5年

2月1日　図面・写真整理作業開始。

3月2日　ウォーター・セパレーション作業開始。

3月9日　遺物抽出作業開始。

4月10日　遺物水洗い・分類作業開始。

4月28日　遺物接合作業開始。

5月14日　遺物集計開始。

5月21日　遺構図面と写真測量図面との合成作業開始。

6月22日　拓本作業を開始。

7月5日　遺物実測作業開始。

8月16日　トレース作業開始。

9月21日　図版レイアウト作業開始。

12月20日　図版作成作業・原稿執筆開始。

平成6年

3月20日　報告書印刷・製本終了。

2．調査委員会

本遺跡の調査に関する専門的・技術的事項を協議、調整するために、山梨県教育委員会、長坂町教育委員会、新宿区、区民健康村遺跡調査団が新宿区区民健康村埋蔵文化財調査委員会を設置した。

第5節　試掘調査の概要

1．地区別概要

A地区（第1表）

37ヶ所（追加1ヶ所を含む）の試掘坑を設定した。地区のほぼ全面から194基の遺構と247点の遺物が検出されており、その量は調査地の中で最も多い。遺構は住居跡14軒をはじめとして、溝・土坑等であり、遺物は縄文土器（前期・中期・晩期）、土師器（奈良・平安）、石器等で、上偶1点、瓦3点も検出されている。量的には縄文前期の土器と土師器が多く、住居跡はこの時期に帰属するものと考えられる。

B地区（第2表）

13ヶ所（追加1ヶ所を含む）の試掘坑を設定した。台地部（B1～4・9・11・12）と谷部に分けられる。遺構・遺物は主に北側台地部で検出されており、南側での分布は希薄である。遺構は住居跡1軒と土坑等66基であり、遺物は縄文土器（前期・後期）等27点が検出されている。

C地区（第3表）

26ヶ所の試掘坑を設定した。東側斜面に若干の遺構が見られるものの、全体的に遺構(22基)・遺物(9点)は希薄であった。なお、C15～22は産業廃棄物によって埋め立てられていた。

D地区（第4表）

25ヶ所の試掘坑を設定した。北東台地部に若干の遺構が見られるものの、斜面（D16～25）では殆ど遺構・遺物は検出されなかった。全体的に、遺構8基、遺物5点と、検出状況は希薄であった。

E地区（第5表）

24ヶ所の試掘坑を設定した。周知の埋蔵文化財包蔵地（長坂町No.82遺跡）に隣接する平坦部（E3～7・11・12）において、住居跡4軒と縄文土器（晩期）等が検出されている。この他、斜面の下で若干の遺構・遺物が見られ、全体としては、遺構59基、遺物144点が検出され、A地区に次ぐ量であった。

F地区（第6表）

20ヶ所の試掘坑を設定した。A地区に隣接する部分（F4～6）では、遺構の広がりがつかめたが、その他の部分では、殆ど遺構・遺物は検出されなかった。全体で、遺構5基、遺物11点が検出された。

G地区（第7表）

30ヶ所（追加3ヶ所を含む）の試掘坑を設定した。尾根部北側（G2・4～7）とA地区の南に隣接する部分において若干の遺構・遺物が検出されているが、全体的にその分布は希薄で、遺構28基、遺物75点であった。

2．出土遺物（第9図、第9・10表、図版49・50）

AからGまでの7地区において、518点の遺物が検出されたが、そのうち22点を図示した。

1～10は縄文時代のものである。1～4は諸磯c式土器である。1は燻状の結節浮線文が施されているものである。2・3は結節浮線文が発達するタイプで、渦巻状のモチーフをとるものであり、円形貼付文も施されるものである。4は集合沈線文を地文にもち、結節沈線文と円形貼付文が施されるもので、比較的大型の貼付文も見られる。いずれもA15から出土している。

5・6はA10から出土した中期初頭の土器であり、いずれも沈線文系である。

7～9は曽利II式土器である。7は地文に条線が施された口縁部破片である。8・9は胴部破片で、結節縄文が施されている。7・8はA7、9はA29から出土している。

10～15は晩期終末（氷I式期）の土器である。10～12は浅鉢である。10は内湾気味に立ち上がる器形で、頸部無文帯を有し、体部のモチーフは、沈線部を磨き込み浮線を作り出している。11は沈線による浮線風なモチーフのもので、12は沈線部のみ残存するものである。13・14は甕の口縁部片である。端部に低い山の突起をもち、口縁部モチーフは2条の凹線をやや疎して平行に引いただけで、14は凹線を近接して引き、浮線文を作り出している。15は深鉢の口縁部片で、2条の凹線文をもつ。15はA12から、10・12～14はE6から、11はG9から出土し

第1表　A地区

No.	規模	長×幅×深さ（m）	検出遺構数	ピット	土坑	溝	住居跡	不明	出土遺物数	縄文土器	弥生土器	土師器	陶器	石器	金属製品	礫	その他
1	4	×12×0.3	8	8					2							1	硯 1
2	4	×12×0.6	24	19	4		1		19	15	1				1	2	
3	4	×12×0.5	5	3	1		1		0								
4	4	×12×0.3	3	1	2				5	3				1			キセル 1
5	4	×12×0.6	8		7	1			0								
6	4	×12×0.4	11	9	1	1			0								
7	4	×12×0.4	17	3	13	1			2	2							
8	4	×4×0.4	2		2				4	4							
9	4	×4×0.4	3		3				11	9						1	瓦 1
10	4	×12×0.3	6	1	2	3			14	14							
11	4	×12×0.4	7	4	1	2			9	5			2			2	
12	4	×4×0.4	7	7					8	6	1	1					
13	4	×12×0.3	0						0								
14	4	×12×0.2	10	10					3	1						2	
15	4	×12×0.7	5	3	1	1			65	51				8		6	
16	4	×12×0.6	8	3	2	1	2		30	22		1				7	
17	4	×12×0.5	10	4	3		3		11	1		2				8	
18	4	×12×0.9	2		1	1			13	12						1	
19	4	×12×1.1	0						0								
20	4	×12×0.5	5		5				11	10		1					
21	4	×12×0.3	5	3			2		3							2	瓦 1
22	4	×12×0.2	0						0								
23	4	×12×0.4	0						0								
24	4	×12×0.4	10	2	5	3			0								
25	8	×4×0.5	4		3	1			3	2							瓦 1
26	4	×4×0.9	0						1								十偶 1
27	12	×4×0.5	13	6	4	1	2		2	1						1	
28	4	×4×0.3	2		1	1			1	1							
29	12	×4×0.4	3		1		2		20	14	1					5	
30	4	×8×0.8	3	1	1	1			1	1							
31	12	×4×0.8	5	3	2				1	1							
32	4	×4×0.6	3		3				0								
33	4	×4×0.7	1	1					0								
34	4	×4×0.4	2		1		1		3							3	
35	4	×4×0.3	2	2					0								
36	4	×4×0.3	0						0								
37	4	×12×0.3	0						5					3		2	

第2表　B地区

No.	規模	長×幅×深さ（m）	検出遺構数	ピット	土坑	溝	住居跡	不明	出土遺物数	縄文土器	弥生土器	土師器	陶器	石器	金属製品	礫	その他
1	4	×12×0.2	21	11	9	1			9	8				1			
2	4	×12×0.3	5	1	4				1	1							
3	4	×12×0.5	9	2	2	4	1		11	8	2			1			
4	4	×12×0.3	6	5		1			1								瓦 1
5	4	×12×1.1	8	7	1				0								
6	4	×12×0.9	9	3	1	5			5	5							
7	4	×12×0.8	0						0								
8	4	×12×0.8	0						0								
9	4	×12×0.4	0						0								
10	4	×12×0.4	0						0								
11	4	×12×0.4	0						0								
12	4	×4×0.5	4	3	1				0								
13	12	×4×0.4	4	1	3				0								

第3表　C地区

No.	規模	縦×横×深さ（m）	検出遺構数	ピット	土坑	溝	住居跡	不明	出土遺物数	縄文土器	弥生土器	土師器	陶器	石器	金属製品	礫	その他
1		4×4×0.5	0						1					1			
2		4×4×0.4	0						0								
3		4×4×0.3	0						0								
4		4×4×0.2	0						0								
5		4×4×0.3	0						0								
6		4×4×0.5	0						0								
7		4×4×0.5	0						0								
8		4×4×0.5	0						0								
9		4×4×1.1	0						1							1	
10		4×4×0.5	0						0								
11		4×4×0.4	2			2			0								
12		4×4×0.7	0						1							1	
13		4×4×0.5	8	4	2	2			0								
14		4×4×0.5	8	7		1			1							1	
15									0								
16									0								
17									0								
18									0								
19									0								
20									0								
21									0								
22									0								
23									0								
24		4×12×0.8	4	4					2			1				1	
25		12×4×1.5	0						2							2	
26		12×4×1.6	0						1	1							

第4表　D地区

No.	規模	縦×横×深さ（m）	検出遺構数	ピット	土坑	溝	住居跡	不明	出土遺物数	縄文土器	弥生土器	土師器	陶器	石器	金属製品	礫	その他
1		4×4×0.3	0						0								
2		4×4×0.3	0						0								
3		4×4×0.3	2	2					0								
4		4×4×0.4	0						0								
5		4×4×0.4	0						0								
6		4×4×0.4	2	2					0								
7		4×4×0.3	0						0								
8		4×4×0.4	0						0								
9		4×4×0.2	0						0								
10		4×4×0.4	1		1				0								
11		4×4×0.3	0						0								
12		4×4×0.3	0						0								
13		4×4×0.7	0						0								
14		4×4×0.3	0						0								
15		4×4×0.3	1	1					0								
16		4×4×0.3	2	1	1				1	1							
17		4×4×0.3	0						2	2							
18		4×4×0.2	0						0								
19		4×4×0.2	0						0								
20		4×4×0.2	0						0								
21		4×4×0.3	0						0								
22		4×4×0.4	0						2	1						1	
23		4×4×0.2	0						0								

No.	規模	縦×横×深さ（m）	検出遺構数	ピット	土坑	溝	住居跡	不明	出土遺物数	縄文土器	弥生土器	土師器	陶器	石器	金属製品	礫	その他
24		4×4×0.2	0						0								
25		4×4×0.3	0						0								

第5表　E地区

No.	規模	縦×横×深さ（m）	検出遺構数	ピット	土坑	溝	住居跡	不明	出土遺物数	縄文土器	弥生土器	土師器	陶器	石器	金属製品	礫	その他
1		4×4×0.8	0						4			1				3	
2		4×4×1.4	0						3	3							
3		4×4×0.4	8	7	1				4	3						1	
4		4×4×0.3	5	3			2		23	16				3		1	
5		4×4×0.3	1				1		7	6						1	
6		4×4×0.3	13	12	1				28	26				2			
7		4×4×0.7	3	2	1				2	1						1	
8		4×4×0.6	1					1	20	2						18	
9		4×4×0.4	3	1	1		1		2	1	1						
10		4×4×0.4	0						5		2					3	
11		4×4×0.3	8	5	2		1		4	4							
12		4×4×0.3	4	2	1		1		10	7	2	1					
13		4×4×0.4	2	2					29	22				6		1	
14		4×4×1.3	11	1	10				1							1	
15		4×4×0.3	0						0								
16		4×4×0.2	0						0								
17		4×4×0.3	0						1		1						
18		4×4×0.2	0						1					1			
19		4×4×0.3	0						0								
20		4×4×0.2	0						0								
21		4×4×0.2	0						0								
22		4×4×0.3	0						0								
23		4×4×0.3	0						0								
24		4×4×0.2	0						0								

第6表　F地区

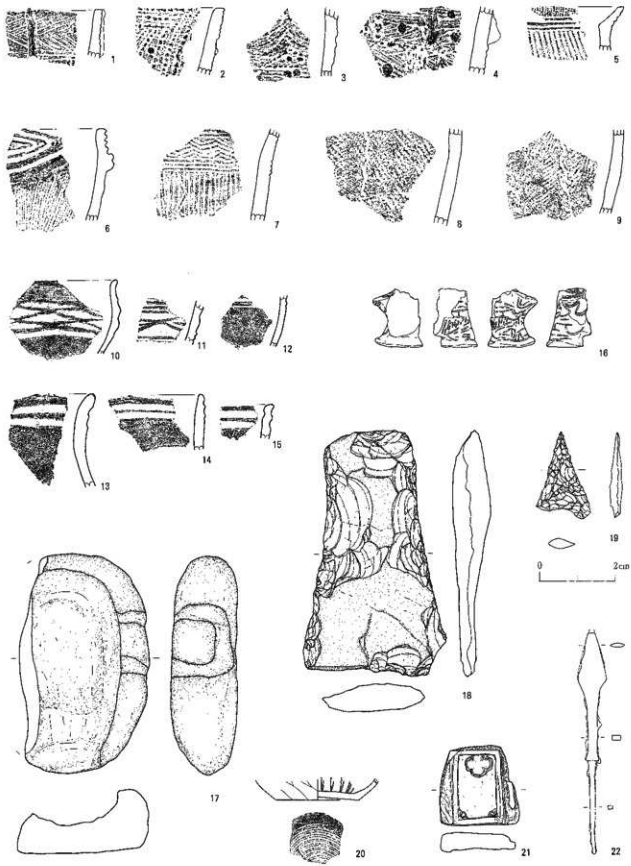
No.	規模	縦×横×深さ（m）	検出遺構数	ピット	土坑	溝	住居跡	不明	出土遺物数	縄文土器	弥生土器	土師器	陶器	石器	金属製品	礫	その他
1		4×4×0.2	0						4		3					1	
2		4×4×0.5	2	1	1				0								
3		4×4×0.9	0						2			1		1			
4		4×4×0.5	2		1	1			0								
5		4×4×0.5	1		1				0								
6		4×4×0.4	0						1								丸 1
7		4×4×0.4	0						1							1	
8		4×4×0.4	0						0								
9		4×4×0.2	0						0								
10		4×4×0.2	0						0								
11		4×4×0.3	0						0								
12		4×4×0.3	0						0								
13		4×4×0.3	0						1	1							
14		4×4×0.2	0						0								
15		4×4×0.4	0						0								
16		4×4×0.2	0						0								
17		4×4×0.3	0						0								
18		4×1×0.2	0						0								
19		4×4×0.3	0						0								
20		4×4×0.3	0						2					1		1	

第７表　Ｇ地区

No.	規模　数×横×深さ（m）	検出遺構数	ピット	土坑	溝	住居跡	不明	出土遺物数	縄文土器	弥生土器	土師器	陶器	石器	金属製品	礫	その他
1	4×4×0.3	0						0								
2	4×4×0.3	5	2	2	1			0								
3	4×4×0.2	0						0								
4	4×4×0.3	2		2				0								
5	4×4×0.3	1	1					2	1						1	
6	4×4×0.3	2	1	1				1							1	
7	4×4×0.3	1			1			0								
8	4×4×0.2	0						2	1						1	
9	4×4×0.3	0						7	6							骨 1
10	4×4×0.3	0						2	2							
11	4×4×0.3	0						1					1			
12	4×4×0.3	0						1					1			
13	4×4×0.2	0						1							1	
14	4×4×0.2	0						0								
15	4×4×0.2	0						1							1	
16	4×4×0.2	0						17	16						1	
17	4×4×0.4	5	1	2	2			9	9							
18	4×4×0.3	1		1				0								
19	4×4×0.5	0						1	1							
20	4×4×0.4	0						6	5						1	
21	4×4×0.4	0						1	1							
22	4×4×0.2	3	1	2				5	5							
23	4×4×0.2	0						1	1							
24	4×4×0.3	0						1							1	
25	4×4×0.3	0						2		1					1	
26	4×4×0.3	0						0								
27	4×4×0.5	5	4		1			3							3	
28	4×4×0.3	0						6		4			1		1	
29	4×4×0.4	3	3					1	1							
30	4×4×0.2	0						4	1				1		2	

第８表　試掘調査における地区別遺構・遺物数

検出遺構数		検出遺物数	
A地区	１９４基（51%）	A地区	２４７点（48%）
B地区	６６基（17%）	B地区	２７点（５%）
C地区	２２基（６%）	C地区	９点（２%）
D地区	８基（２%）	D地区	５点（１%）
E地区	５９基（15%）	E地区	１４４点（28%）
F地区	５基（１%）	F地区	１１点（２%）
G地区	２８基（７%）	G地区	７５点（14%）
計	３８２基	計	５１８点



第3図　試掘調査出土遺物

ている。

16は土偶の左足部分である。いわゆる出尻土偶と呼ばれるもので、晩期に相当するものである。A26から出土している。

17は左側縁部を欠損した石皿であり、E4から出土している。18は撥形の打製石斧であり、比較的大型のもので、形も整っている。G30から出土している。19は黒曜石製の石鏃である。凹基無茎鏃で、基部をわずかに欠損している。A15から出土している。

20・22は平安時代のものである。20は土師器の坏で、体部外面にヘラ削り、内面に放射状暗文が施されており、底部は糸切りの後、外周のみにヘラ削りが施される。A17から出土している。22はA2から出土した鉄鏃である。身部が蛇頭状を呈するもので、残存長17.5cmを測る。

21は砥と思われるもので、作りが粗いことから木製品であると考えられる。A1から出土している。

3．まとめ

調査の結果、遺構382基、遺物518点が検出され、当初の予想以上に埋蔵文化財包蔵地の広がりが確認できた。

当該地一帯は、雑木林と畑地で構成されているが、『包含層』はA地区の一部を除いては検出されず、表土層直下で遺構が検出される場合が多かった。したがって、ここで検出された遺物の大半は、表土中に混在するものであった。また、遺構は、住居跡と考えられたものも柱穴状のピットも同じように1基と数えているため、数量的にはかなり多く感じられる。

遺構は、A・B・E地区において、全体の1割を越える量が検出されており、遺物は、A・E・G地区において、総量の1割を越える状況であった（第8表）。

この結果と、その具体的な内容を検討した上で、A・B・E・G地区を本格調査の対象とすることとなった。

第8表　出土石器・石製品一覧表

図	番号	出土位置	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	状態
第3図	17	E4	石皿	輝石安山岩	350.0	(205.6)	105.4	6,910.0	
	18	G30	打製石斧	ホルンフェルス	194.5	112.0	29.0	575.4	
	19	A15	石鏃	黒曜石	(22.7)	(14.2)	3.4	0.6	
	21	A1	砥	軟板岩	63.0	60.6	15.4	94.7	

第10表　土師器観察表

番号	器種	法量 (cm)	外面特徴	内面特徴	底部	胎土	色調	焼成	備考
第3図 20	杯	— — (6.4)	ヘラ削り	横ナデ 放射状暗文	糸切り→外周ヘラ削り	緻密 雲母を含む	赤褐色	良好	A17出土

第２章　Ａ地区

第１節　概要

１．地区の概要（第５図）

事業地の中央西側に位置する畑地であった部分を中心とした、約18,000㎡がＡ地区である。

調査区北西すみに最高点をもち、北から南及び、西から東への傾斜地となっており、中央南側及び東側はほぼ平坦になっている。標高は746.0～761.5ｍを測る。

斜面地では、自然層がかなり流失しているようで、ローム層（Ⅲａ層）上面において、部分的に礫混じりローム層が露頭している。

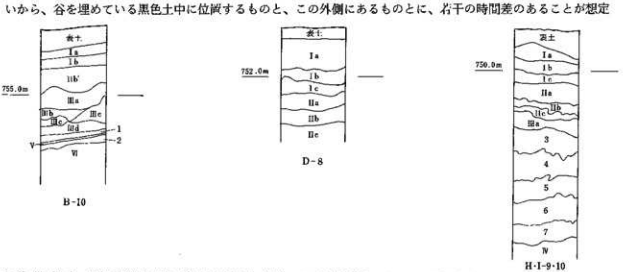
また、調査区南半の平坦面には、東から浅い谷が回り込むように入っているようで、帯状に黒色土が広がる部分が確認されている（第５図点線内）。

２．遺構

遺構は、平安時代のものを中心として、縄文時代、中世のものであり、住居跡16軒、土坑14基、焼土坑２基、埋甕３基、石組土坑６基、竪穴状遺構１基、屋外炉９基などが検出されている。

縄文時代のものは住居跡２軒、土坑12基、埋甕３基などであり、時期的には前期、中期、晩期に比定されるものである。埋甕のうち１基は晩期のもので、土器棺墓として捉えられる。

平安時代のものは住居跡14軒である。　一部の住居跡には、拡張もしくは建て替えの様相が窺えるが、以下の記述では、大きく１軒の住居跡として扱っている。14軒の住居跡はＡ地区の平坦部に営まれている。出土遺物の違いから、谷を埋めている黒色土中に位置するものと、この外側にあるものとに、若干の時間差のあることが想定



Ⅰａ 暗　褐　色　土　　やや黒ちが強く当っぽい。赤色スコリアを中量、灰白色スコリアを多量、黒色スコリア、ローム粒子を少量含む。粘性弱、しまりややあり。
Ⅰｂ 褐　　色　土　Ⅰａ層土にブロック状のローム土を多量、黒色スコリア、灰白色スコリアを少量、炭化物を微量含む。粘性弱、しまりややあり。
Ⅰｃ 暗　褐　色　土　やや白っぽくふみがある暗褐色土を主体にブロック状の黒褐色土粒と、黒色スコリア、ローム等を少量、灰白色スコリアを中量、炭化物を微量含む。粘性弱、しまりふつう。
Ⅱａ 黒　褐　色　土　黒ちが強く、ややべやがある。ブロック状の暗褐色土、黄褐色スコリア、黒色スコリア、ローム粒を少量含む。粘性弱、しまりややあり。
Ⅱｂ 暗　褐　色　土　暗褐色土を１次に黄褐色土粒、黒色スコリアを少量、白色スコリアを微量含む。粘性弱、しまりあり。
Ⅱｃ 暗　褐　色　土　暗褐色１を主体に黄褐色を中量、黒褐色ブロック、黒色スコリアを少量、白色スコリアを微量含む。粘性強、しまりあり。
Ⅲａ 褐　　色　１　黄褐色土を１次に暗褐色土を中量、黒色スコリアを少量、白色スコリアを微量含む。粘性強、しまりややあり。
Ⅲｂ 黄　褐　色　土　ソフトローム中含有物が無い、やや粒色に近い。粘性弱、しまりややなし。
Ⅲｃ 黄　褐　色　土　ソフトローム下Ⅲａ層よりやや黒っぽくしまっている。黒色スコリア、白色スコリア、灰白色スコリアを少量含む。粘性弱、しまりふつう。
Ⅲｄ 黄　褐　色　土　ソフトローム下Ⅲａ層よりやや白っぽく白色スコリアを多量、黒色スコリアを微量含む。粘性なし、しまり強。
Ⅲｅ 灰　白　色　土　軟い層より白色スコリアが多く、層相に火山灰の混在が伺える。
Ⅳ 暗黄褐色粗石質　暗褐土とも呼ばれる、関東第１軽石層（Ho-1）。
Ⅴ 白色粘質土　白色スコリアを多量含みざらざらしている。粘性強、しまり強。
Ⅵ 赤褐色粘質土　赤茶ちゃい層を中量含む。粘性強、しまり強。
1 黄白色　土　Ⅳ層土、Ⅲ層土、Ⅴ層土の混合土で黒色スコリアを少量含む。粘性強、しまりあり。
2 赤褐色粘質土　Ⅵ層土が白っぽく変質したもの。粘性強、しまり強。
3 黄　褐　色　土　粒が小粗く黒色スコリア、白色スコリア、暗灰色スコリア、赤褐色スコリアを含む。粘性強、しまりあり。
4 暗黄褐色土　黒色スコリアを多量、白色スコリアを微量含む。粘性強、しまりあり。
5 褐　　色　土　黒色スコリアを多量、白色スコリアを微量含む。粘性強、しまりあり。
6 黄　褐　色　土　黒色スコリア、白色スコリア、暗灰色スコリア、赤褐色スコリアを含む。粘性強、しまりあり。
7 黄　褐　色　土　にぶい黄色締砂。黒色スコリアを多量、白色スコリア、暗褐灰色スコリアを中量、橙色ﾊﾟﾐｽを少量含む。粘性強、しまりあり。

第４図　Ａ地区基本層序（Ｓ＝1/60）

されている（第7点第4節）。また、カマドが検出されず床面に炉をもつ住居があるが、その性格は確定できなかった。

中世のものは石組土坑6基、土坑2基である。石組土坑は共伴遺物が殆どなく時期決定に苦慮していたが、1基において内耳土鍋が検出されたため、他も同時期のものと判断した。

時期不明のものとして、屋外炉9基と溝1条がある。また、詳細な記述を行なわなかった遺構9基は、非掲出遺構として掲載した（第30表）。

3．遺物

遺物は、全体で8,800点程検出されており、縄文土器、土師器、灰釉陶器、石器、鉄器などがある。

縄文土器は遺構内・外とも前期末のものが圧倒的に多く、ほかは中期初頭、中期後半、後期初頭、晩期末のものがある。

土師器は平安時代のもので、甲斐型土器編年のⅧ期からⅫ期にかけてのものである。

4．基本層序

調査区は斜面地と平坦地に分けられるが、3ヶ所のテストピットで観察された自然層の堆積状況（第4図）も、斜面地（B－10）と平坦地（H・I－9・10）では異なっている。更に、北側の斜面上部では、Ⅰ層の下にすぐⅢ層がくる状況であり、基本的にローム層（Ⅲa層）上面を遺構確認面としたものの、全体的にこの作業面を確定するのに手間取った。特に、平坦地の黒色土で覆われた埋没谷部では、4本のトレンチを設定して谷の土層堆積状況（第4図D－8）の把握を行なうことによって、黒色土中に住居跡が営まれていることが明らかとなった。

最終的には、すべての遺構がⅡa層及びⅢ層上面において検出された。

第2節　縄文時代

1．遺構と遺物

6号住居跡（第6・7図、図版5）

E－13グリッドの斜面に位置し、南東部は斜面の下となるため、明確にしえなかった。

残存する規模は長径5.4m、短径4.8m、深さ50cmを測り、隅丸方形を呈するものである。ただし主軸方向は不明である。

壁はほぼ垂直に立ち上がっており、覆土は10層に分けられるが、その堆積状況には切り合い（立ち上がり）と見られる部分もあり、本来の規模はより小さいものであったことも考えられる。

床は、地形の傾斜に沿って北から南に若干傾いており、多少の凸凹をもっている。しかし、地山面において、ローム層下の白色粘土層が露頭していたりして、正確に床面が認識できていなかったことも考えられる。

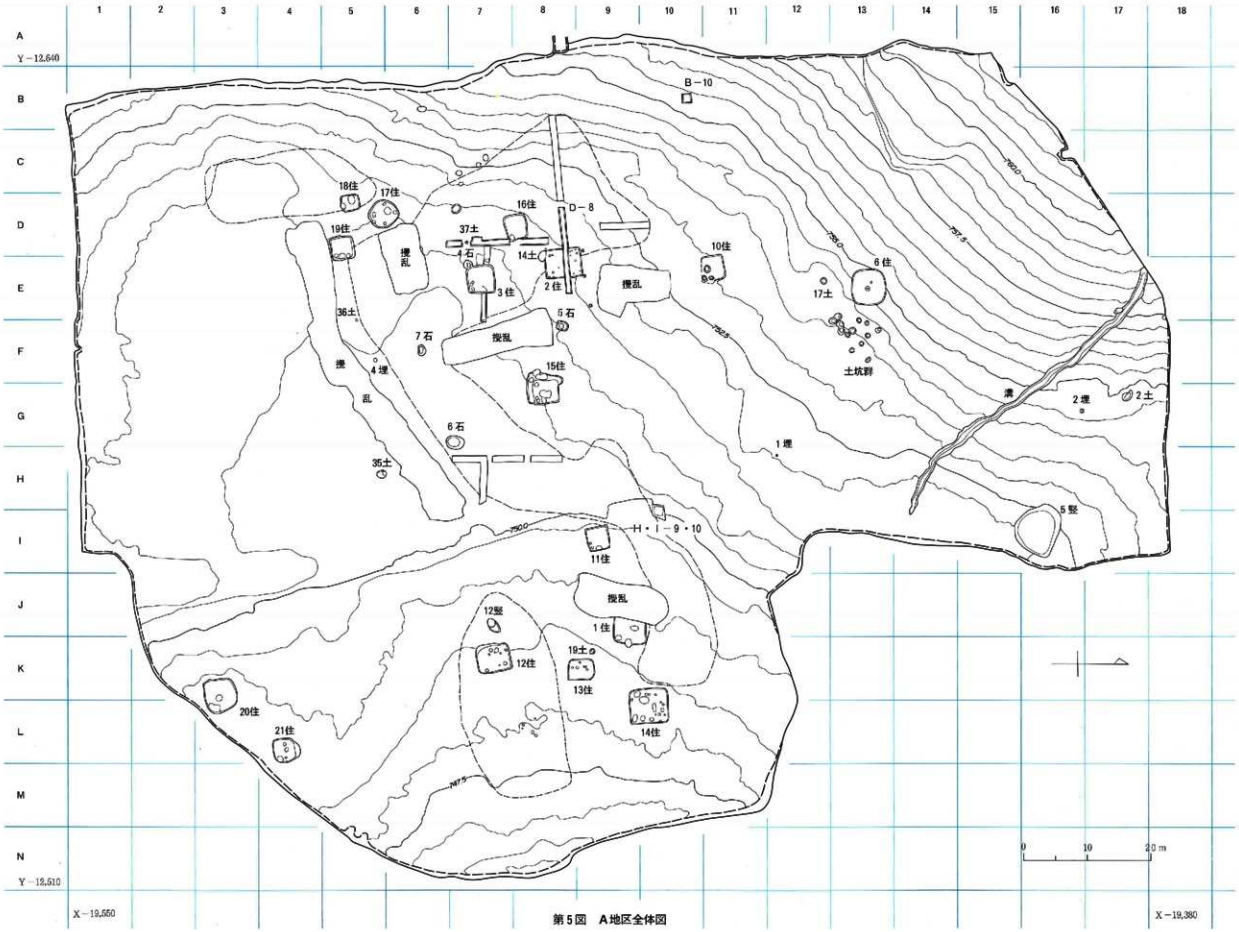
炉跡は住居のほぼ中央に位置し、長径74cm、短径67cm、焼土面までの深さ3cmを測り、不整円形を呈する地床炉である。覆土は3層に分けられ、焼土層の厚さは5cmで、被熱ロームの厚さは7cmを測る。

このほか、炉跡の南北に2箇所の焼土溜まりがあった。北側のものは、長径0.43m、短径0.3m、高さ2cmを測り、不整円形を呈する火皿状のものである。また南側のものは、長径0.9m、短径0.32m、深さ2cmを測る長楕円形の部分に、南北に分かれて焼土がかたまっているものである。いずれも、積極的に炉跡と認定しえなかったものである。

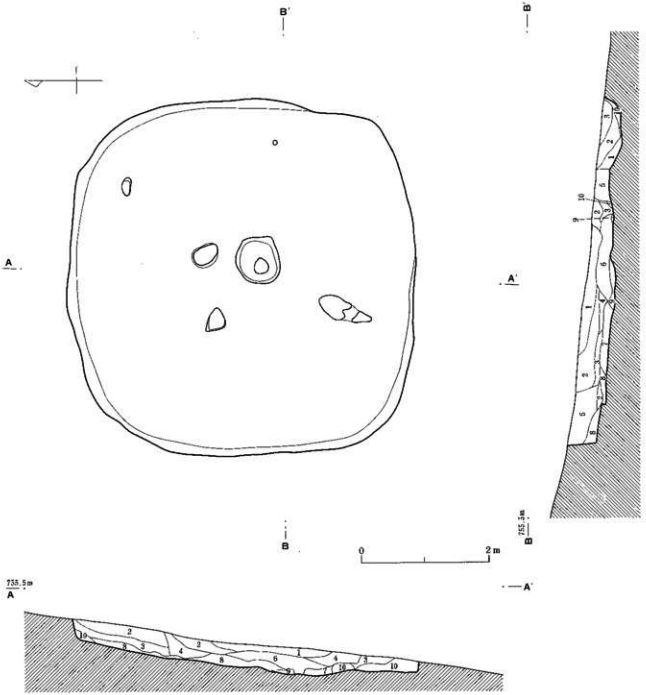
出土遺物（第8・9図、第11表、図版51）

覆土中からは約600点の遺物が出土した。内訳は縄文土器、石器・剥片、礫などからなるが、縄文土器がほぼ半分を占める。次に石器・剥片の出土量が多く、220点程となる。図示したものは土器13点、石器22点である。

縄文土器は諸磯c式を主体としたもので、後述する土坑群出土土器との接合例がいくつかある。1は4単位の波状口縁を有する土器である。波頂部、波底部から棒状の結節浮線文が施されており、2個1組で円形貼付文も配されている。地文は、口縁部文様帯は矢羽状に、頸部は横位に集合沈線文が施されている。2は4単位の波状

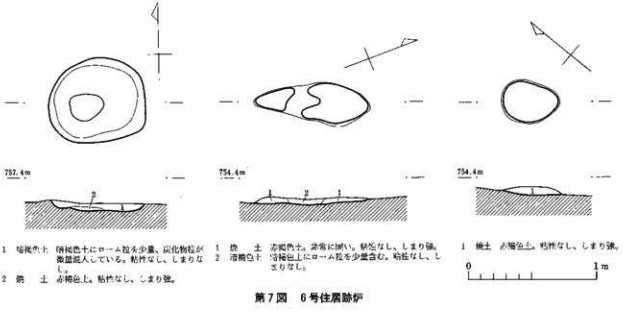

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
Y－12,640
Y－12,510
X－12,550
X－12,380
B－10
D－8
H・I－9・10
18住
17住
19住
16住
37土
4石
14土
3住
2住
5石
7石
15住
36土
4壇
6石
35土
11住
12竪
12住
19土
13住
20住
21住
1住
14住
10住
6住
17土
土坑群
1壇
2壇
2土
5竪
撹乱
壇
乱
溝
0 10 20m

第5図　A地区全体図



1　黒褐色土　黒褐色土を主体に暗褐色上ブロックを少量、白色粘土粒を中量、黄褐色土ブロック、炭化物を微量、赤色スコリアを微量含む。粘性弱、しまりややあり。
2　黄褐色土　1とほぼ同じだが、暗褐色土ブロックを中量含む。粘性弱、しまりやなし。
3　黒褐色土　2とほぼ同じだが、黄褐色上ブロックを中量含む。粘性やや強、しまりややあり。
4　黒褐色土　1とほぼ同じだが、暗褐色土ブロックはより少なく、黄褐色上粒を中量含む。粘性弱、しまりややあり。
5　暗褐色土　1とほぼ同じだが、暗褐色上ブロックを多量に含む。粘性弱、しまりやなし。
6　暗褐色土　暗褐色土を上層に黒褐色土ブロック、黄褐色上粒を中量、黄褐色上ブロック、白色粘土粒、焼土粒を少量、炭化物を微量含む。粘性弱、しまりあり。
7　灰褐色土　6とほぼ同じだが、焼土粒は含まず、黄褐色土ブロックを多量に含む。粘性弱、しまりあり。
8　暗褐色土　3とほぼ同じだが、黄白色土粒を少量、白色粘上粒を3より多く含む。粘性弱、しまりややあり。
9　灰褐色土　黄褐色土を主体に黒褐色上粒が少量混入する。粒粘強、しまりあり。
10　暗褐色土　暗褐色土を主体に黄褐色土粒を小量、白色粘上粒を少量、炭化物を微量、赤色スコリアを微量含む。粘性弱、しまり普通。

第6図　6号住居跡



第7図　6号住居跡炉

口縁を有するもので、結節浮線文により渦巻状のモチーフをとる。波頂下に2個1組の渦巻文を配し、器面は4分割される。円形貼付文は、3個1組で配されている。8・13も2と同様に、結節浮線文により渦巻文が施される上器である。3・4は集合沈線文が施された底部破片で、3は円形貼付文も配されている。5・6は結節浮線文と円形貼付文が、7・12は結節沈線文と円形貼付文が施されている。6の円形貼付文上には半截竹管で刺突が加えられる。有孔浅鉢も出土しているが復元可能なものはなく、2点のみ破片を図示した（9・10）。

石器は37点出土した。1～7は石鏃である。1～5は凹基無茎鏃で、6・7は未製品である。8・9は石錐である。10はスクレイパーである。両側縁に急斜度の調整を加え、刃部としている。11～16は細部調整剥片である。先端が尖るもの（12・13）は石錐とも考えられるが、調整が部分的であることなどから、細部調整剥片とした。17は両極剥片であるが、厚い剥片を分割してから両極剥離を行なっていることから、両極石核とも見ることができる。18は石匙のつまみ部分である。19は撥形の打製石斧で、下部を欠損している。20は凹石、21・22は磨石である。

17号住居跡（第10図、図版6～8）

D－5・6グリッドに位置する。表上機械掘削の際に掘り過ぎたきらいがあり、東側の壁はかなり削られている。

残存する規模は長径4.5m、短径4.2m、最大深22cmを測り、楕円形を呈するものである。主軸方向はN－40°－Wであった。

覆土は10層に分けられ、ほぼ自然堆積の様相を示しているが、全体的に炭化粒を若干含んでいた。

床はほぼ平坦であるが、西壁沿いおよび炉跡の南側に、20cm程の角礫が置かれていた。壁はなだらかに立ち上がっており、幅4～11cm、深さ10～12cmの壁溝が全周していた。

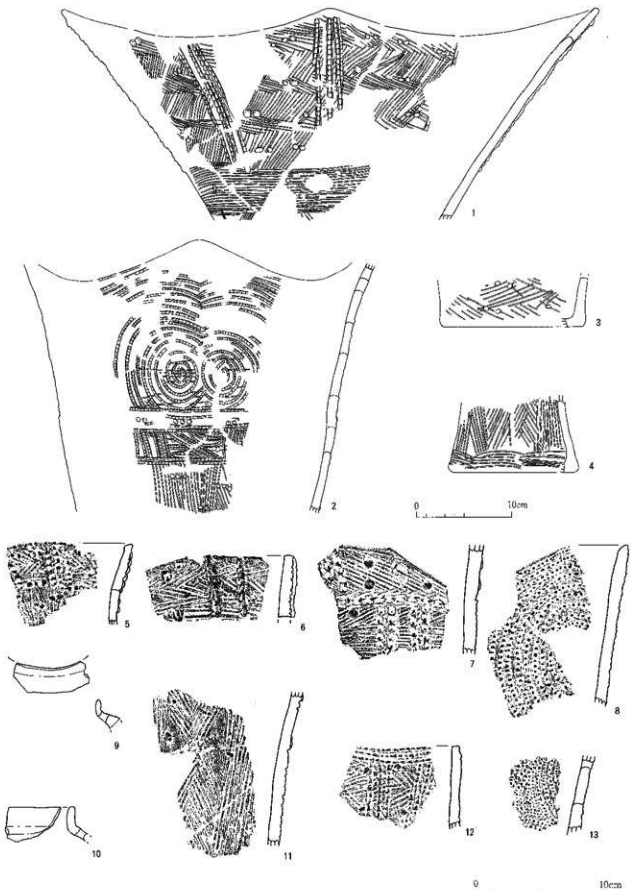
ピットは5基検出され、4基が主柱穴と考えられる。南東壁際のピットには、東西に板状の石が平行に半分埋まった状態で立てられており、入り口部に係わる施設と考えられる。

炉跡は主軸上の中央北寄りに位置し、長径1.1m、短径1.0m、焼上面までの深さ38cmを測り、長方形を呈する石囲い炉である。覆土は8層に分けられ、焼土層の厚さは最高8cmで、被熱ロームの厚さは10cmを測る。

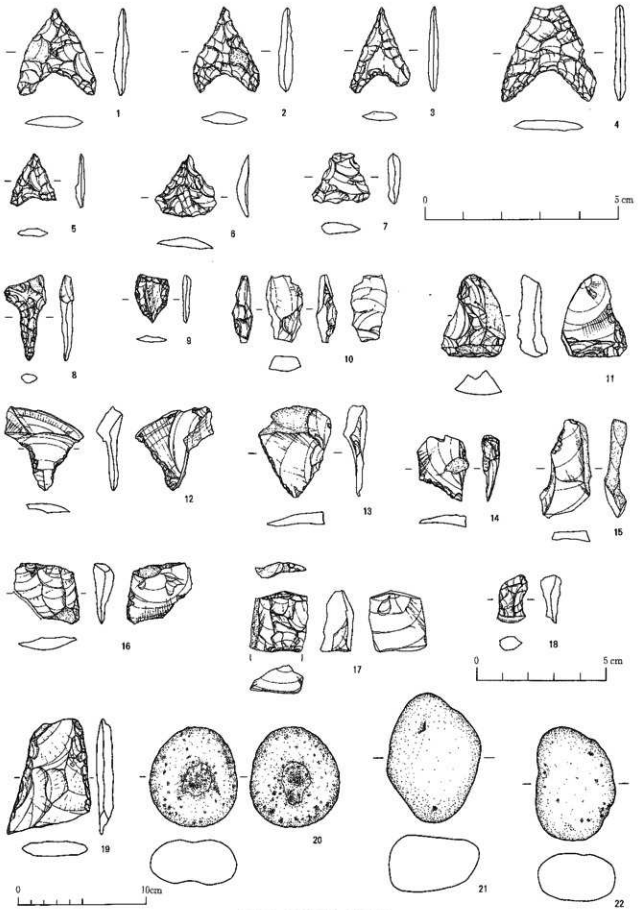
出土遺物（第11・12図、第12表、図版52・53）

覆土中からは約150点の遺物が出土した。図示したものは土器5点、石器4点である。

1は曽利Ⅲ式に比定される土器で、復元してあるが、口縁部～胴下部と、底部破片は接合していない。地文に5条の条線を施し、蛇行沈線文を配すものである。3も条線をもつもので、隆帯と蛇行沈線文が施されている。



第8図　6号住居跡出土土器



第9図　6号住居跡出土石器

第11表　6号住居跡出土石器一覧表

図	番号	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
第9図	1	石鏃	黒曜石	22.6	20.0	3.8	1.0	
	2	石鏃	黒曜石	22.1	17.2	3.4	0.9	
	3	石鏃	黒曜石	22.6	15.3	2.4	0.5	
	4	石鏃	黒曜石	(35.3)	24.2	2.4	1.2	
	5	石鏃	黒曜石	(14.0)	11.6	2.1	0.1	
	6	石鏃	黒曜石	16.1	15.6	2.6	0.5	未成品
	7	石鏃	黒曜石	13.1	14.8	3.7	0.7	未製品
	8	石錐	黒曜石	34.0	(16.7)	5.7	1.8	
	9	石錐	黒曜石	18.2	13.4	2.9	0.8	
	10	スクレイパー	黒曜石	26.5	14.5	8.3	2.6	
	11	細部調整剝片	黒曜石	32.5	24.4	10.4	7.1	
	12	細部調整剝片	黒曜石	31.5	30.4	7.4	3.4	
	13	細部調整剝片	黒曜石	28.4	35.0	9.0	4.9	
	14	細部調整剝片	黒曜石	(20.3)	24.6	3.2	2.5	
	15	細部調整剝片	黒曜石	39.8	18.9	7.7	3.9	
	16	細部調整剝片	黒曜石	21.3	26.7	4.1	3.1	
	17	両極剝片	黒曜石	23.2	22.0	11.3	7.1	
	18	石匙	黒曜石	(18.7)	10.7	7.4	1.2	
	19	打製石斧	粘板岩	(91.7)	65.4	12.6	67.8	
	20	凹石	輝石安山岩	78.2	70.0	35.4	263.0	
	21	磨石	輝石安山岩	102.7	73.5	45.0	493.0	
	22	磨石	輝石安山岩	90.4	61.5	37.7	285.8	

2も沈線文が乗下するが、地文はＬＲ縄文である。4・5は類部にＸ字状把手をもつ大甕の破片である。隆帯による渦巻文と、地文にはＲＬ縄文が施されている。

石器は5点出土し、そのうち4点を図示した。1は下部を欠損しており全体の形状は不明であるが、石鏃と比較して大型であるので、ここでは両面調整石器としてある。2は石核、3・4は打製石斧である。3は撥形、4は短冊形であると思われる。

土坑群（第13・14・16～19図、第13表、図版5・54～61）

Ｆ－13グリッドの、急斜面から緩斜面への変換点付近に位置する11基の土坑と2基の焼土坑である。

当初、竪穴状遺構として調査を行なっていたが、検出されたピットの殆どが柱穴というには大きいことと、配列が不規則であること、そして、焼土を有するピット（炉跡）が壁際に位置することに加えていくつかの土坑の掘り込み面が、竪穴状遺構の覆土面になる点から、全体は自然地形の溜まりとして認識し、ピットを土坑に、焼土を有するピット（炉跡）を焼土坑に、そしてこれらをまとめて土坑群として扱うこととした。

出土土器は殆どが諸磯ｃ式に比定されるものであり、土坑間で、また6号住居跡との接合例がある。

個々の土坑・焼土坑の様相は以下のとおりである。

1号土坑

残存する規模は長径0.98m、短径0.65m、深さ46cmを測り、不整形を呈している。断面形は逆台形である。主軸方向はＮ－50°－Ｗであった。

覆土は6層に分けられ、ほぼ自然堆積の様相を示している。

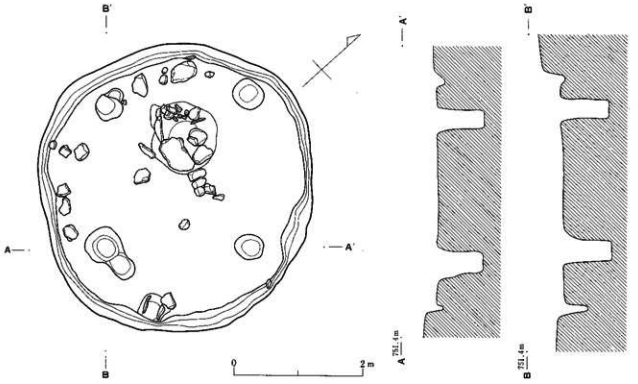
底面はほぼ平坦である。

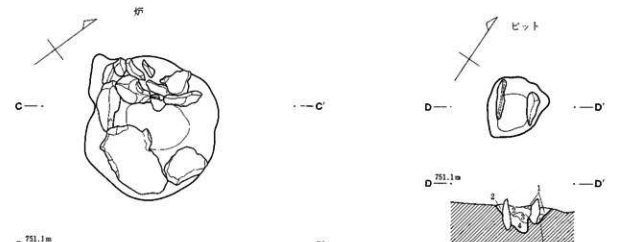
覆土中からは3点の縄文土器が出土した。第16図6は底部破片であり、横位の集合沈線文と円形貼付文が施されている。

3号土坑

残存する規模は長径0.8m、短径0.76m、深さ22cmを測り、不整形を呈している。断面形は逆台形である。主軸方向はＮ－68°－Ｅであった。

覆土は2層に分けられ、自然堆積の様相を示している。

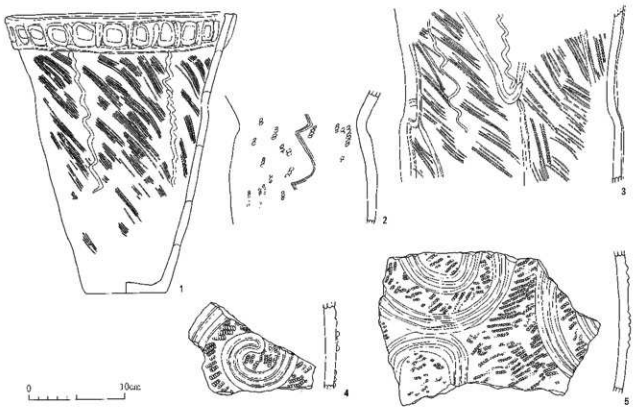




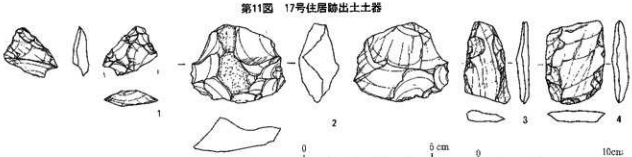
1 暗褐色土　ローム粒微量、ロームブロック微量含む。粘性弱、しまり普通。
2 暗褐色土　ローム粒微量、ロームブロック微量、炭化粒微量、炭化ブロック微量含む。粘性弱、しまり普通。
3 暗褐色土　2よりやや淡い。ローム粒微量、ロームブロック微量、炭化粒微量含む。粘性弱。
4 暗褐色土　ローム粒多量、ロームブロック多量含む。粘性弱、しまり普通。
5 暗黄褐色土　ローム粒多量、ロームブロック多量含む。粘性弱、しまりややない。

1 黒褐色土　ローム粒微量、ロームブロック微量、炭化粒微量、炭化物微量含む。粘性弱、しまり普通。
2 黒褐色土　1よりやや明るい。ローム粒微量、ロームブロック微量、炭化粒微量、炭化物微量含む。粘性弱、しまり普通。
3 黒褐色土　2よりやや明るい。ローム粒微量、ロームブロック微量、焼土粒微量、炭化粒微量含む。粘性弱、しまり普通。
4 暗褐色土　ローム粒微量、ロームブロック微量、炭化粒微量、炭化物微量、焼土粒微量、焼土ブロック微量含む。粘性弱、しまり普通。
5 暗赤褐色土　ローム粒微量、ロームブロック微量、炭化粒微量、焼土粒微量、焼土ブロック微量含む。粘性弱、しまり普通。
6 黒褐色土　1よりやや暗い。ローム粒微量、ロームブロック微量、炭化粒微量、焼土粒微量、炭化ブロック微量含む。粘性弱、しまり普通。
7 黒褐色土　1よりやや暗い。ローム粒微量、ロームブロック微量、炭化粒微量、炭化物微量、焼土粒微量、焼土ブロック微量含む。粘性弱、しまり普通。
8 黒褐色土　地山粒微量、焼土ブロック微量含む。粘性弱、しまり普通。
9 明赤褐色土　炭化粒微量含む。粘性弱、しまりある。
10 黄褐色土　貼床ローム。粘性弱、しまりある。

第10図　17号住居跡



第11図　17号住居跡出土土器



第12図　17号住居跡出土石器

第12表　17号住居跡出土石器一覧表

図	番号	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
第12図	1	両面調整石器	黒曜石	(20.3)	(18.9)	6.5	1.4	
	2	石核	黒曜石	31.2	37.2	14.6	13.1	
	3	打製石斧	砂岩	(63.8)	37.0	10.3	22.8	
	4	打製石斧	角閃岩	65.0	45.9	12.0	41.2	

底面はほぼ平坦である。

覆土中からは約30点の遺物が出土し、土器２点と、石器１点を図示した。第16図１は集合沈線文と円形貼付文が施されている。第18図27はミニチュア土器の底部で、４号土坑と接合したものである。第19図１は細部調整剥片である。下端部に調整が加えられている。

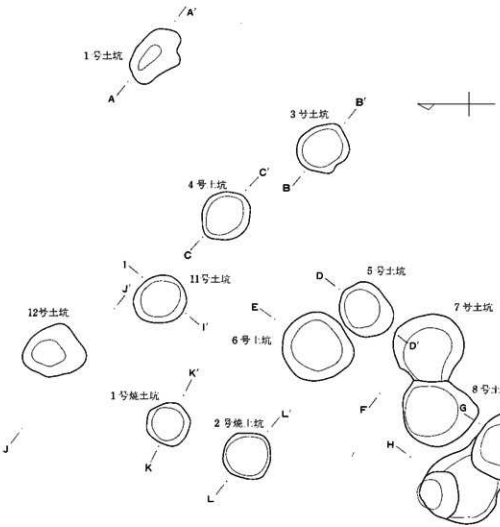
４号土坑

残存する規模は長径0.85ｍ、短径0.74ｍ、深さ16cmを測り、不整円形を呈している。断面形は逆台形である。主軸方向はＮ－45°－Ｅであった。

覆土は３層に分けられ、自然堆積の様相を示している。

底面はほぼ平坦である。

覆土中からは約10点の遺物が出土した。第18図28はミニチュア土器で、沈線文が施されている。



1号土坑

1 暗褐色土　暗褐色土を主体に、黒褐色土、炭化物を少量含む。軟性強、しまり普通。
2 暗褐色土　1とほぼ同じだが、黒褐色土ブロックを多量含む。軟性強、しまり普通。
3 暗褐色土　2層上に基本層序の黒褐土とブロック状に含む。軟性強、しまり普通。
4 褐 色 土　黄褐色土を主体に、暗褐色土を多量、白色スコリアを少量、黒色スコリアを微量含む。軟性弱、しまりやや弱い。
5 暗褐色土　暗褐色土を主体に、黒褐色土、黄褐色土を少量含む。軟性弱、しまりやや弱い。
6 黄褐色土　黄褐色土を主体に、3層土を少量含む。軟性弱、しまりやや弱い。

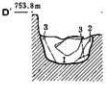
3号土坑

1 暗褐色土　暗褐色土を主体に、褐色土をブロック状に含む。白色スコリア、黒色スコリアを少量、赤色スコリアを微量、ローム粒を中量含む。軟性強、しまりあり。
2 褐 色 土　黄褐色土を主体に、黒褐色土、暗褐色土を少量、白色スコリアを中量含む。軟性弱、しまりやや弱い。

4号土坑

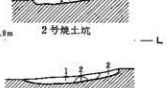
1 暗褐色土　暗褐色土を主体として、黒褐色土、黄褐色土を少量、白色スコリアを中量、赤色スコリアを少量、炭化物を微量含む。軟性弱、しまりややあり。
2 黄褐色土　黄褐色土を主体に、1層土を少量含む。軟性弱、しまりややあり。
3 黄褐色土　黄褐色土を主体に、暗褐色土を多量含む。白色スコリアを少量、黒色スコリアを微量含む。軟性弱、しまり中やあり。

5号土坑



1 暗褐色土　暗褐色土を主体に、ローム粒を多量、ロームブロック中量、炭化物を少量含む。軟性弱、しまりやや弱い。
2 暗褐色土　暗色土を主体に、暗褐色土を多量含む。ローム粒を多量、白色スコリア、黒色スコリア、炭化物を少量、赤色スコリアを微量含む。軟性弱、しまりあり。
3 褐 色 土　暗色土を主体に、黒褐色土、暗褐色土を少量、白色スコリアを中量含む。軟性弱、しまりやや弱い。

1号焼土坑

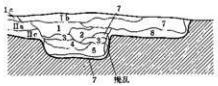


2号焼土坑

1 暗褐色土　暗褐色土にローム粒を微量、焼土粒を少量含む。軟性弱、しまり弱。
2 焼　土　赤褐色土に暗褐色土を少量含む。粘性なし、しまり強。

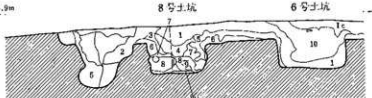
第13図　土坑群(1)

7号土坑



1 暗褐色土　暗褐色土を主体に、褐色土を少量ブロック状に含む。白色スコリア、ローム粒を中量、黒色スコリアを少量含む。粘性弱、しまりややあり。
2 暗褐色土　暗褐色土を主体に、褐色土を少量含む。スコリアが多く含まっている。白色スコリア、赤色スコリアを多量、ローム粒を中量含む。粘性弱、しまりややあり。
3 暗褐色土　2層上に比べローム塊の分量が1/2程、内径スコリアが1/3程である。粘性弱、しまりややあり。
4 暗褐色土　2層に比べロームブロックの分量が2倍強である。粘性弱、しまりややあり。
5 暗褐色土　4層土を主体に、黄内色土、黒褐色土を少量含む。粘性弱、しまりややあり。
6 黄内色土　黄内色土を主体に、黒褐色土を少量含む。粘性強、しまりややあり。
7 褐色土　基本層序の1b層よりロームブロックが多い。粘性弱、しまりややあり。
8 褐色土　基本層序の1b層よりロームブロックが少ない。粘性弱、しまりややあり。

8号土坑



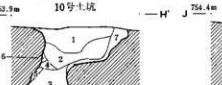
1 暗褐色土　暗褐色土を主体に、暗褐色土を多量に含む。ローム粒を多量、白色スコリア、黒色スコリア、炭化物を少量、赤色スコリアを微量含む。粘性弱、しまりある。
2 暗褐色土　1とほぼ同じだが、黄白色土を少量含む。粘性弱、しまりある。
3 暗褐色土　1とほぼ同じだが、ローム粒を2倍強含む。粘性弱、しまりある。
4 暗褐色土　暗褐色土を主体に、褐色土、黒土ブロック、炭化物、ロームブロックを少量含む。炭化粒のため全体的に黒ずんでみえる。粘性弱、しまり普通。
5 褐色土　褐色土を主体に、黒褐色土、暗褐色土を少量、白色スコリアを中量含む。粘性弱、しまりややあり。
6 暗褐色土　暗褐色土を主体に、黒褐色土、炭化物、ローム粒を少量含む。粘性弱、しまりややあり。
7 暗褐色土　6層上を主体に、微土を多量に含む。粘性弱、しまりややあり。
8 暗褐色土　暗褐色土を主体に、黄白色土、黒褐色土を中量含む。粘性強、しまりややあり。
9 暗褐色土　暗褐色土を主体に、ローム粒を中量、ロームブロック、黄白色土、炭化物を少量含む。粘性弱、しまりややあり。
10 黒褐色土　暗褐色土を主体に、ローム粒を多量、ロームブロック、炭化物を少量含む。粘性弱、しまりややあり。

6号土坑

9号土坑

1 暗褐色土　黒褐色土を主体に、褐色土を少量、白色スコリアを中量、赤色スコリアを少量含む。粘性弱、しまりややあり。
2 暗褐色土　暗褐色土を主体に、褐色土を少量ブロック状に含む。炭化物、赤色スコリアを微量、ローム粒を少量含む。粘性弱、しまりややあり。
3 暗褐色土　2とほぼ同じだが、ローム粒を中量含む。粘性弱、しまりややあり。
4 褐色土　褐色土を主体に、黄褐色土ブロックを多量に含む。粘性強、しまりややあり。
5 暗褐色土　暗褐色土を主体に、ローム粒を多量に、ロームブロックは4層土の1/4程度、白色スコリアを微量含む。粘性強、しまりややあり。
6 暗褐色土　5とほぼ同じだが、黄褐色土を少量含む。粘性強、しまりややあり。
7 暗褐色土　5とほぼ同じだが、3より多くローム粒を含む。粘性弱、しまりややあり。
8 暗褐色土　7層上に黄白色土を少量含む。粘性弱、しまりややあり。
9 暗褐色土　7層土に黄白色土を中量含む。粘性弱、しまりある。

10号土坑

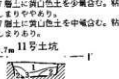


1 暗褐色土　暗褐色土を主体に、褐色土、炭化物を少量、白色スコリアを中量、赤色スコリアを少量含む。粘性弱、しまりある。
2 暗褐色土　1層土とほぼ同じだが、炭化物を含まず、褐褐色土の量が1.5倍程である。粘性弱、しまりある。
3 暗褐色土　2層上に微土を少量含む。粘性弱、しまりある。
4 暗褐色土　1層上とほぼ同じだが、白色スコリアの量が1/4程である。粘性弱、しまりある。
5 暗褐色土　3層土にロームブロックを少量含んでいる。粘性弱、しまりある。
6 暗褐色土　褐色土を主体に、暗褐色土が多量に混入している。ローム粒を多量、炭化物、白色スコリア、黒色スコリアを少量、赤色スコリアを微量含む。粘性弱、しまりある。
7 褐色土　褐色土を主体に、暗褐色土、暗褐色土を少量、白色スコリアを中量含む。粘性弱、しまりややあり。

12号土坑

1 暗褐色土　暗褐色土に褐色土がブロック状で混入している。白色スコリアを少量、黒色スコリアを微量含む。粘性強、しまりある。
2 黄褐色土　炭化粒子を主体に、暗褐色土を多量に含む。白色スコリアを少量、黒色スコリアを微量含む。粘性強、しまりある。
3 暗褐色土　1層土を主体に、黄白色土を少量、炭化物を中量含む。粘性弱、しまりややあり。
4 暗褐色土　1層土を主体に、黄白色土を中量、炭化物を多量含む。粘性弱、しまりややあり。
5 褐色土　褐色土を主体に、白褐色土が中量混入している。粘性なし。しまりなし。
6 黄白色土　黄白色土を主体に、暗褐色土がブロック状に混入している。粘性強、しまりややあり。

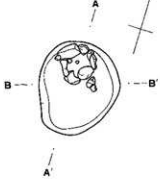
11号土坑

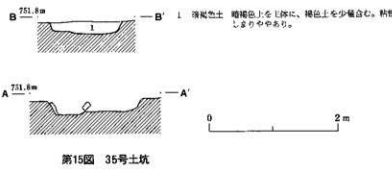


1 暗褐色土　暗褐色土を主体に、褐色土がブロック状に混入している。ローム粒、白色スコリアを中量、黒色スコリアを少量、赤色スコリアを微量含む。粘性強、しまりある。
2 褐色土　褐色土を主体に、黒褐色土、暗褐色土を中量含む。粘性強、しまりややあり。
3 暗褐色土　1層土を主体に、2層土を中量含む。粘性弱、しまりややあり。

0 2m

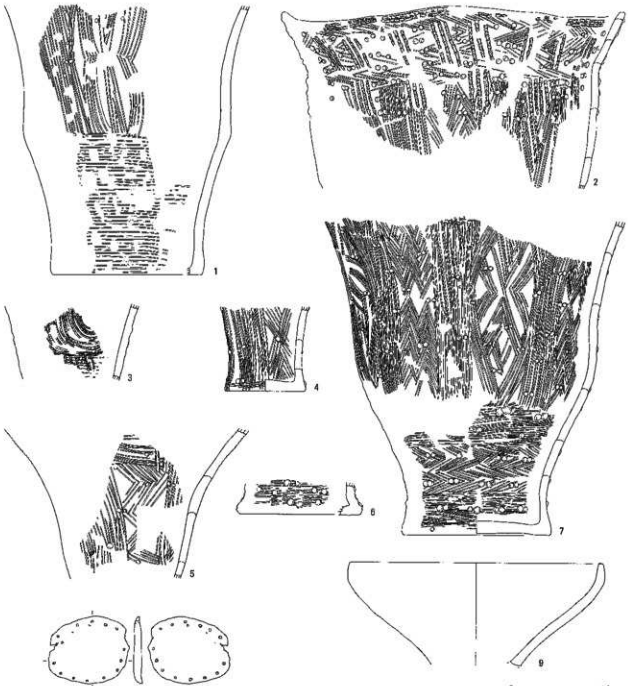
第14図　土坑群(2)





1 褐褐色土　暗褐色土を主体に、褐色土を少量含む。粘性なし。しまりややあり。

第15図　35号土坑



第16図　土坑出土土器(1)

5号土坑

残存する規模は長径0.92m、短径0.76m、最大深43cmを測り、不整円形を呈している。断面形は舟底形である。主軸方向はN－50°－Wであった。

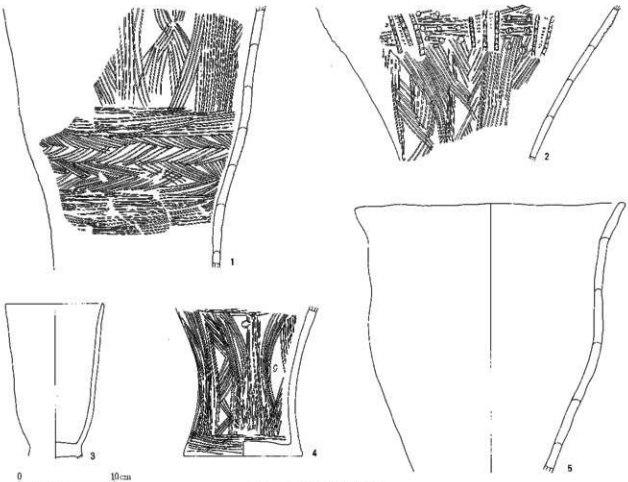
覆土は3層に分けられ、自然堆積の様相を示しているが、上層部に角礫が入っていた。

底面はほぼ平坦である。

覆土中からは約15点の遺物が出土し、4点を図示した。第18図1・2は結節浮線文により渦巻状のモチーフをとる上器である。地文には横位の集合沈線文が施される。3・4は集合沈線文と円形貼付文が施されている。

6号土坑

Ⅰb層下より掘り込まれている。



第17図　土坑出土土器(2)

残存する規模は長径1.06m、短径1.04m、深さ74cmを測り、不整円形を呈している。断面形は方形である。主軸方向はN－33°－Wであった。

覆土は3層に分けられ、自然堆積の様相を示している。

底面はほぼ平坦である。

覆土中からの出土は1点のみである。第16図8は楕円形を呈する土製品である。周縁部は穿孔されているが、貫通していない所もある。両面とも赤色顔料を塗彩した上に粘土をナデつけている。図の表面は比較的丁寧にナデられているが、全体的にはそれほど丁寧な作りではないようであり、周縁には指頭圧痕が残る。

7号土坑

Ⅰb層下より掘り込まれており、8号土坑に接している。

残存する規模は長径1.1m、短径1.05m、深さ58cmを測り、不整形を呈している。断面形は逆台形である。主軸方向はN－5°－Eであった。

覆土は7層に分けられ、自然堆積の様相を示している。

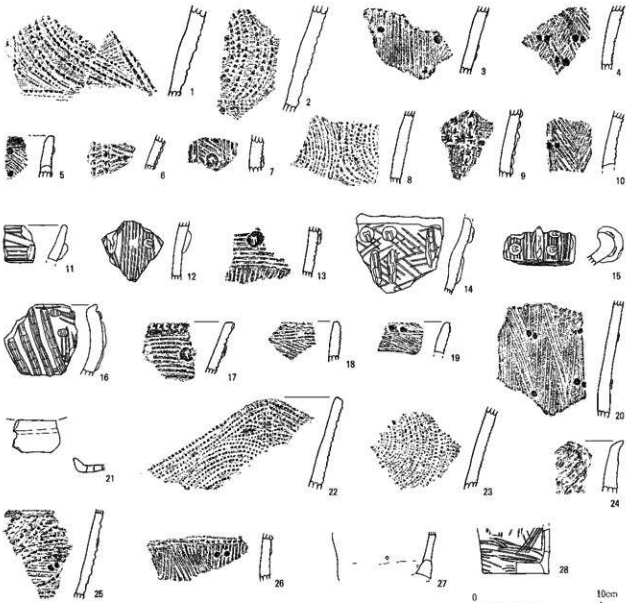
底面はほぼ平坦である。

覆土中からは約20点の遺物が出土した。図示したものは土器4点と石器1点である。第18図5～7は集合沈線文と円形貼付文が施されるものである。6は結節浮線文も施されている。7の円形貼付文上には半截竹管で刺突が加えられている。8は結節浮線文が発達するタイプの土器である。第19図2は石錐の先端部である。

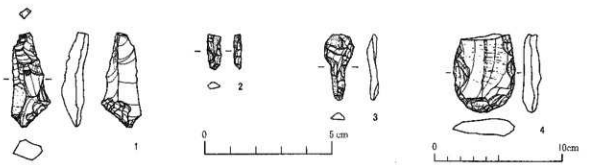
8号土坑

7号土坑に接しており、9号土坑に切られている。

残存する規模は長径1.19m、短径1.03m、最大深74cmを測り、不整形を呈している。断面形は不整形である。



第18図　土坑出土土器(3)



第19図　土坑出土石器

第13表　土坑群出土石器一覧表

図	番号	出土位置	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
第19図	1	3号土坑	細部調整剥片	黒曜石	36.9	15.7	9.5	3.4	
	2	7号土坑	石錐	黒曜石	(13.8)	5.6	2.9	0.3	
	3	10号土坑	石錐	黒曜石	26.2	12.0	3.8	0.9	
	4	10号土坑	打製石斧	ホルンフェルス	(62.1)	48.5	13.5	49.9	

主軸方向はN－87°－Eであった。

覆土は8層に分けられ、自然堆積の様相を示している。

底面はほぼ平坦である。

覆土中からは約20点の遺物が出土しており、上器5点を図示した。第16図3は結節浮線文で淌巻文が施される土器である。4は集合沈線文と円形貼付文が施される。3・4とも比較的小型の深鉢である。第18図9は結節浮線文、10は集合沈線文、円形貼付文が施されている。11は比較的大型の貼付文が施されている。

9号土坑

8号土坑を切っている。

残存する規模は長径1.15m、短径1.1m、最大深92cmを測り、不整円形を呈している。断面形は舟底形である。主軸方向はN－70°－Wであった。

覆土は9層に分けられ、自然堆積の様相を示している。

底面はほぼ平坦である。

覆土中からは約80点の遺物が出土した。上層から出土した深鉢の口縁部～胴上部破片1点と、そのほか3点を図示した。第16図2は4単位のゆるい波状口縁を有する土器である。3条1組の結節浮線文と、2個1組の円形貼付文が施されており、口縁直下には横位に結節沈線文が施されている。第18図12～14は、集合沈線文上に貼付文や結節浮線文が施されている。円形貼付文上には半截竹管で刺突が加えられる。

10号土坑

残存する規模は長径1.16m、短径0.98mを測り、不整形を呈している。断面形は、南側は深さ55cm半均でほぼ平坦で、北側に50cm程の掘り込みをもつ状態になっている。主軸方向はN－40°－Eであった。

覆土は7層に分けられ、自然堆積の様相を示している。

覆土中からは約110点の遺物が出土した。図示したものは上器11点と石器2点である。そのほか、破片が8号土坑出土土器（第16図4）と接合した。第16図5は頸部から胴部にかけての破片であり、集合沈線文上に円形貼付文と結節沈線文が施されている。第18図18～20も同様のタイプの上器である。15～17は円形貼付文上に刺突が加えられたもので、大型の貼付文や結節浮線文が施されている。21は有孔浅鉢の破片である。22・23は結節浮線文による渦巻文が施される土器である。24は結節沈線文が施された波状口縁部の破片である。第19図3は石錐、4は打製石斧である。

11号土坑

残存する規模は長径0.82m、短径0.75m、深さ22cmを測り、不整円形を呈している。断面形は長方形である。主軸方向はN－55°－Eであった。

覆土は3層に分けられ、自然堆積の様相を示している。

底面はほぼ平坦である。

覆土中の遺物は少なく、図示できるものはなかった。

12号土坑

Ⅰb層下より掘り込まれている。

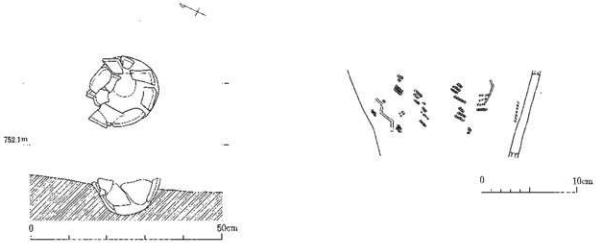
残存する規模は長径0.88m、短径0.8m、深さ80cmを測り、不整形を呈している。断面形は逆台形である。主軸方向はN－64°－Eであった。

覆土は6層に分けられ、自然堆積の様相を示している。

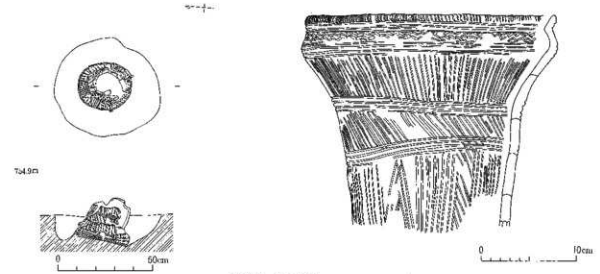
底面はほぼ平坦である。

覆土中層より、口縁部を欠いた半截された状態の深鉢形上器が横位で検出された（第16図7）。

覆土中からは約70点の遺物が出土した。そのうちの殆どが接合しており、ほか2点を図示した。第16図7は口縁部を欠いた深鉢である。集合沈線文を地文にもち、円形貼付文が2個1組で施されている。内面には底部から胴下部にかけて煤が付着しており、脆くなっている。第18図25は結節浮線文が発達するタイプの土器、26



第20図　1号堆積



第21図　2号堆積

は口縁部文様帯下の破片で、文様帯を区画する横位の結節浮線文が見られる。そのほか6号住居跡出土土器と接合したものもある（第8図11）。

1号焼土坑

残存する焼模は長径0.7m、短径0.68m、深さ6cmを測り、円形を呈している。断面形は逆台形である。主軸方向はN－27°－Eであった。

覆土は2層に分けられ、焼土層の厚さは最高3cmで、掘り方の深さは13cmを測る。

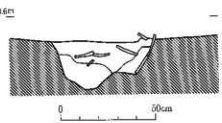
焼土面より上で、深鉢形土器が横位につぶれた状態で検出されている（第17図1）。

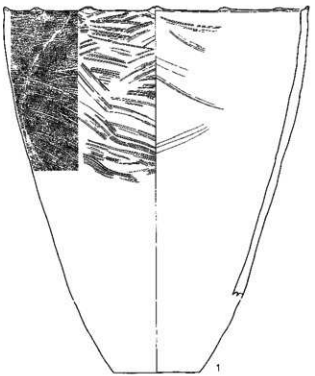
第17図1は集合沈線文が施された胴部破片であり、貼付文は施されていない。2は口縁部付近から胴部にかけての破片である。集合沈線文を地文にもち、結節沈線文、円形貼付文が施されている。円形貼付文には刺突が加えられるものと加えられないものとがある。3はコップ形を呈する無文土器である。底部は高台状に突出しているが、全体の形状は不明である。外面下半部は横位のナデ、上半部は横位・斜位にミガキが施されている。胎土に雲母、石英、赤色粒子を含み、色調は黄白色を呈する。

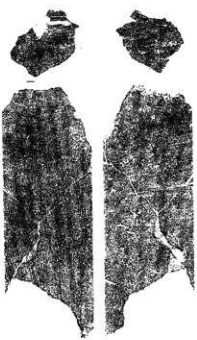
2号焼土坑

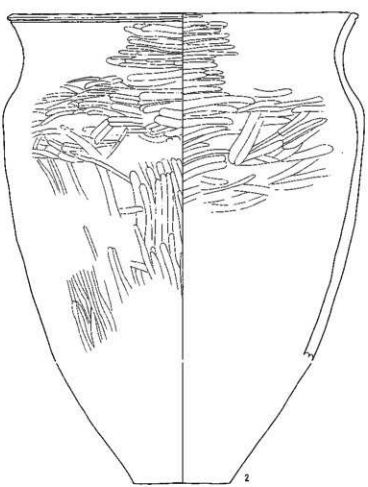
残存する堤模は長径0.75m、短径0.7m、深さ4cmを測り、不整円形を呈している。断面形は皿状を呈している。主軸方向はN－65°－Wであった。

覆土は2層に分けられ、焼土層の厚さは最高3cmで、掘り方の深さは8cmを測る。

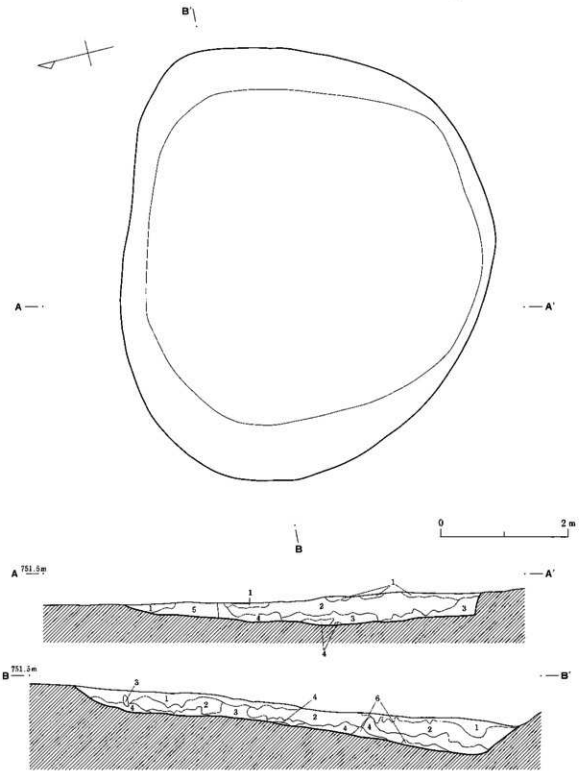








第22図　4号墳墓



1　暗褐色土　5層褐色土を主体にローム土がブロック状に中量混入している。黒色スコリアを少量、赤色スコリア、白色スコリアを微量含む。粘性なし、しまり普通。
2　黒褐色土　黒褐色1を主体に暗褐色土をブロック状に中量、ロームブロック少量含む。黒色スコリアを微量含む。ところどころ壁の中間辺りに硬質ブロックを含む。粘性弱、しまりややあり。
3　暗褐色土　黒褐色1と暗褐色1の混合土とロームブロックを中量含む。黒色スコリアを少量含む。粘性弱、しまりややなし。
4　明褐色土　暗褐色土とローム小ブロックの混合土を主体に黒褐色土のブロックを多量含む。黒色スコリアを少量、炭化物を微量含む。4cm前後のロームブロックが点在する。粘性弱、しまりややあり。
5　明褐色土　3に類似するが、やや多く黒褐色土を含み、層の中間辺りに硬質ブロックを含む。粘性弱、しまりややあり。
6　褐色土　黄褐色土を主体に暗褐色土、黒褐色土粒を少量、黒色スコリアを中量含む。粘性弱、しまりややあり。

第23図　5号竪穴状遺構

焼土面より上で、深鉢形土器がつぶれた状態で検出されている（第17図５）。

第17図５は口縁部を欠いた深鉢であり、集合沈線文と円形粘付文が施されている。６は底部を欠いた無文の深鉢である。器面は粗く横ナデが施されており、輪積み痕が明瞭に観察される。胎土に多量の砂粒を含み、非常に脆い。

35号土坑（第15図、第16図９、図版12・62）

Ｈ－５グリッドに位置し、遺存状態は良好である。

残存する規模は長径1.45ｍ、短径1.28ｍ、最大深21cmを測り、不整形を呈している。断面形は舟底形である。主軸方向はＮ－10°－Ｗであった。

覆土は、ロームブロックを含む暗褐色土の単一層である。

底面はほぼ平坦であるが、北半分の石組み部分が周囲より多少ﾄがっている。

石組みは、土坑北半分の長軸0.6ｍ、短軸0.55ｍの範囲に方形に設けられており、その中心部には、若干火を受けていると考えられる部分が確認された。

石組み外の覆土から、底部を欠いた無文の浅鉢が出土した（第16図９）。

１号埋甕（第20図、図版９・63）

Ｈ－12グリッドに位置する。遺構確認の段階で土器が現れていたので、上部の様子は不明である。

平面形は不整円形を呈し、長径17cm、短径16cm、最大深10cmの掘り方内に密着した状態で埋設されていた。

覆土は１層のみで、焼土粒を若干含んでいる暗褐色土である。

埋設土器は底のない胴下半部のみで、正位の状態で埋設されていた。土器は残存器高９cmを測る深鉢形土器で、曽利Ⅱ式に比定されるものと考えられる。部分的にＬＲ縄文が見られ、垂下する沈線文が施されている。

２号埋甕（第21図、図版10・64）

Ｇ－16グリッドに位置する。

平面形は不整円形を呈し、長径57cm、短径53cm、最大深22cmの土坑を伴うものである。

覆土は１層のみで、炭化粒を若干含む暗褐色土である。

埋設土器は、胴上半部から口縁部にかけてがほぼ完存しているもので、逆位でやや傾いた状態で埋設されていた。

土器は残存器高22cmを測る深鉢形土器で、中期初頭のものである。口唇部に連続爪形文を施し、以下は平行沈線文が施される。

４号埋甕（第22図、図版11・65・66）

Ｆ－５グリッドに位置する。

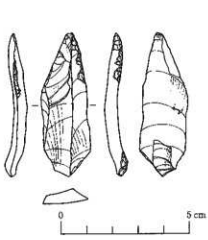
平面形は不整円形を呈し、長径64cm、短径57cm、最大深25cmの掘り方内に、部分的に密着した状態で埋設されていたが、大半の土器は壊れて掘り方内に散っていた。

覆土は２層のみで、焼土粒を若干含んでいる暗褐色土である。

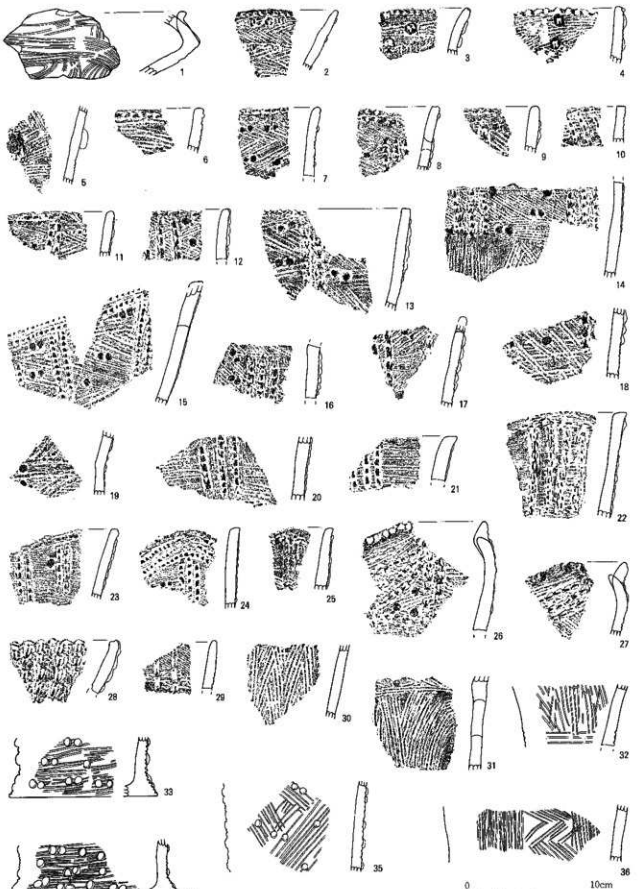
掘り方内に密着し、やや直立気味の土器（２）は、正位の状態で埋設されていた。

この埋甕は、土器（２）を棺身とし、破片で散っていた土器（１）を蓋として利用した土器棺墓と考えられるが、再葬墓か小児埋葬かは判断できなかった。

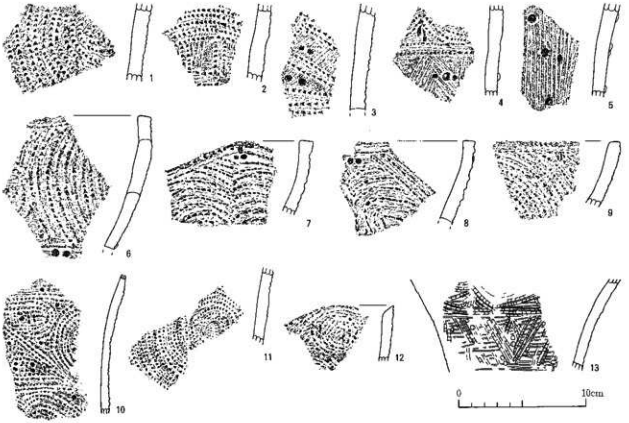
１は深鉢である。口縁端部に刻みをもつ山状の突起を有し、体部には斜め方向にかすれの激しい粗い細密条痕文を施している。内面はヘラナデを施している。胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好である。体部中位内外に



第24図　ナイフ形石器



第25図　遺構外出土土器 (1)



第26図　遺構外出土土器(2)

は炭化物の付着が認められる。口径約31.5cm。

2は頸部のくびれる甕である。口縁部に1条の凹線部を有する。内外面にナデを施した後、外面にはやや太めのミガキを、内面には部分的にミガキ、下位になるほどヘラナデを施す。胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好である。口径約35cm。これらの上器の時期は、氷Ⅰ式期のなかでも最も新しい段階に相当する。

5号竪穴状遺構（第23図）

H・Ⅰ－15・16グリッドの、斜面から平坦面への変換点付近に位置する。

残存する規模は長径6.8m、短径5.7m、最大深56cmを測り、不整形を呈するものである。断面形は皿状を呈している。主軸方向はN－60°－Wであった。

覆土は6層に分けられるが、自然堆積とは言い難い。

床面は西から東へ傾斜しており、多少凸凹している。

北壁はほぼ垂直であるが、ほかの壁はなだらかに立ち上がっている。

覆土中の遺物は少なく、図示できるものはなかった。

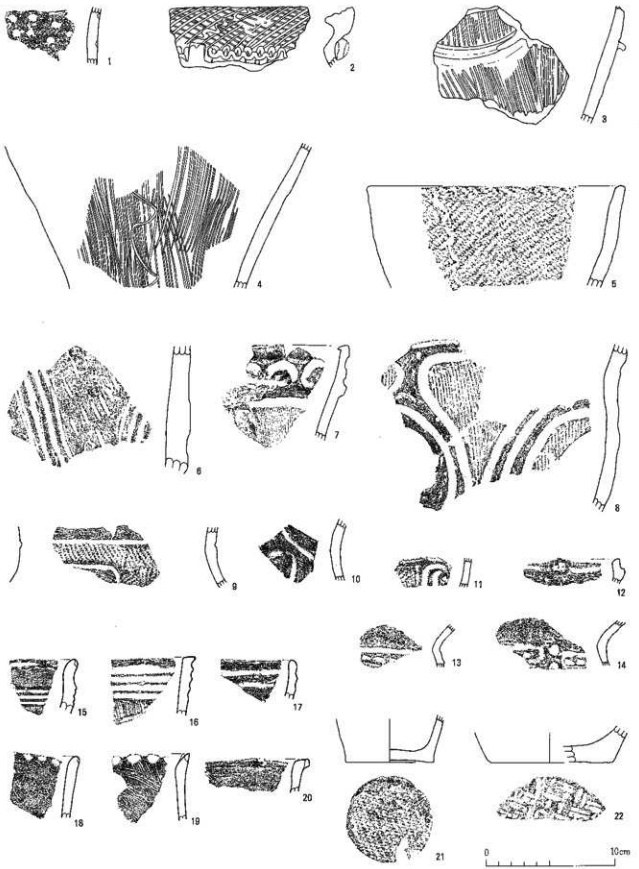
2　遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は土器が2,340点程、石器・剥片が470点程となっている。特にE・F－13グリッドに集中しており、上器・石器類の全体に占める比率はそれぞれ30%・60%である。E・F－13グリッド出土土器は殆ど諸磯c式に比定されるもので、同位置の6号住居跡・土坑群との接合例が多い。

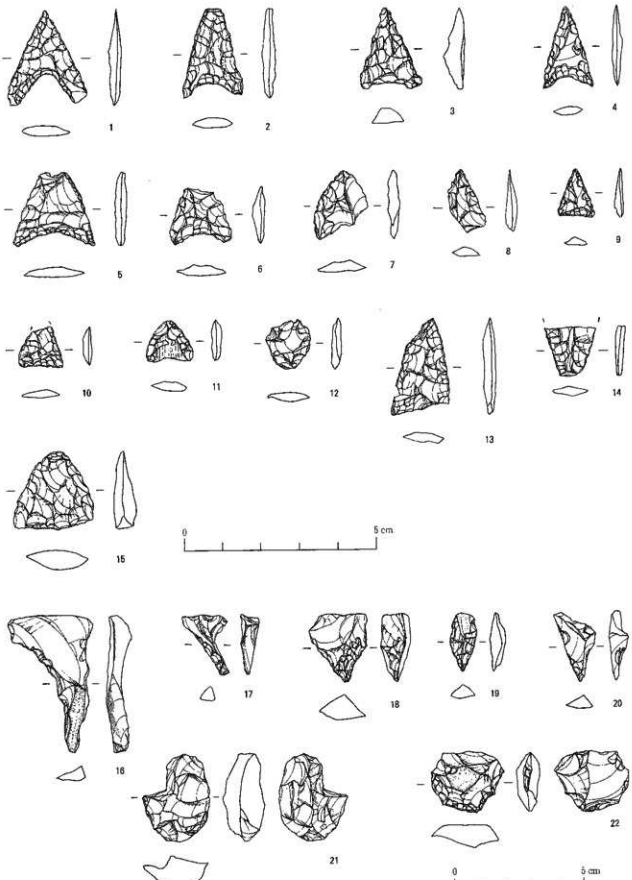
旧石器時代の遺物も出土している。第24図は黒曜石製のナイフ形石器である。石刃を素材とし、基部と先端部に調整を加えている。長さ56.3mm、幅19.1mm、厚さ6.0mm、C－4グリッド表土出土である。

土器（第25～27図）

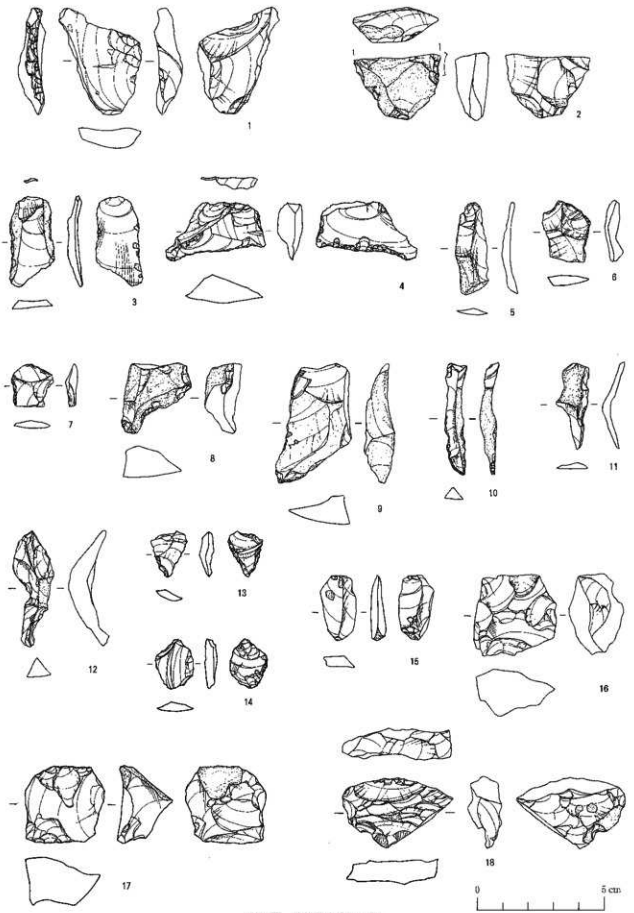
第25・26図は、第25図1を除きすべて諸磯c式に比定される上器である。1は沈線文が施された浅鉢の口縁部破片であり、諸磯b式に比定される。2～4は刺突が加えられた円形貼付文をもつ土器である。5は大型の貼付文が施されている。6・10・29は結節沈線文が施された土器である。7～9・11～28は結節浮線文、円形貼付文



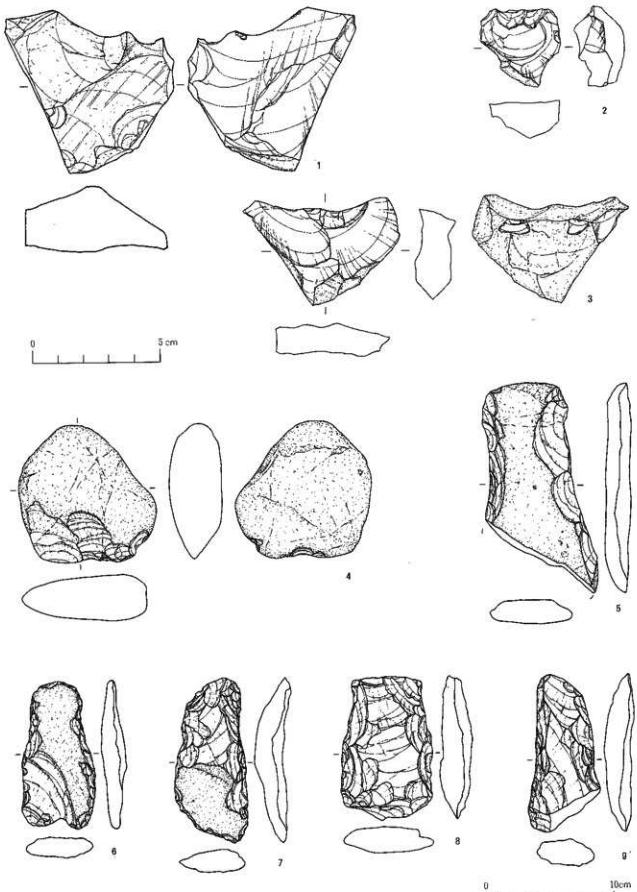
第27図　遺構外出土土器(3)



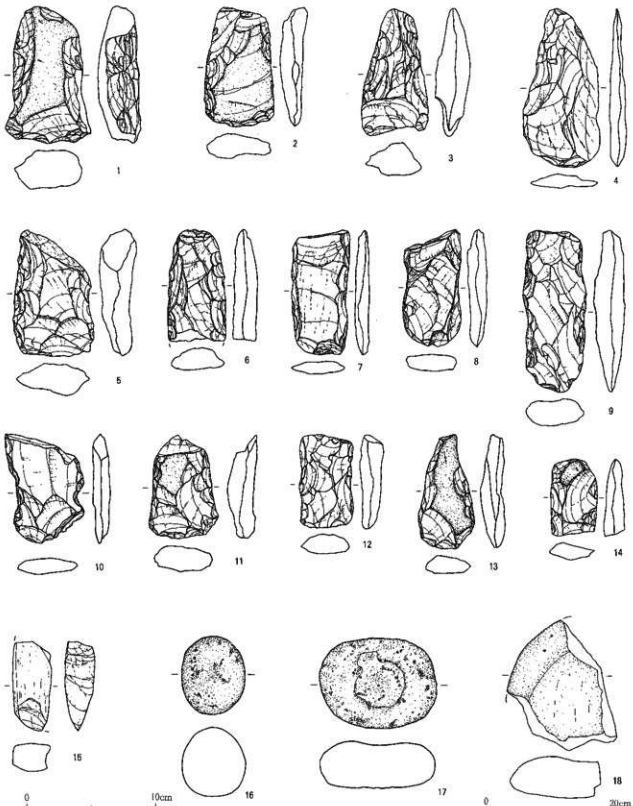
第28図　遺構外出土石器 (1)



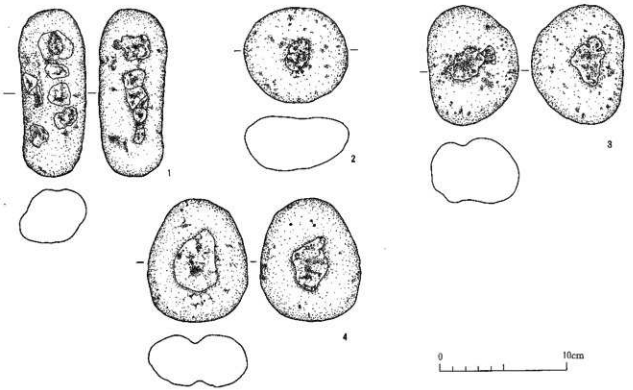
第29図　遺構外出土石器(2)



第30図　遺構外出土石器(3)



第31図　遺構外出土石器(4)



第32図　遺構外出土石器(5)

第14表　遺構外出土石器一覧表

図	番号	出土位置	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
第28図	1	E－13	石鏃	黒曜石	(24.6)	20.4	3.4	0.9	
	2	F－13	石鏃	黒曜石	(22.7)	15.7	3.7	1.0	
	3	E－13	石鏃	黒曜石	21.6	15.9	4.7	1.0	
	4	20号住	石鏃	黒曜石	20.9	12.3	2.7	0.5	
	5	D－9	石鏃	黒曜石	(19.2)	20.9	3.2	1.0	
	6	F－13	石鏃	黒曜石	(14.7)	16.3	3.4	0.6	
	7	I－16	石鏃	黒曜石	17.9	(14.2)	3.5	0.7	
	8	G－8	石鏃	黒曜石	(16.5)	(9.7)	2.9	0.4	
	9	拡張部	石鏃	黒曜石	12.6	9.4	2.1	0.2	
	10	E－7	石鏃	黒曜石	(11.0)	11.7	2.4	0.3	
	11	16号住	石鏃	黒曜石	10.7	12.4	2.9	0.3	
	12	D－8	石鏃	黒曜石	13.4	11.2	2.7	0.4	未製品
	13	D－12	尖頭器	黒曜石	(26.2)	(14.5)	3.6	1.2	
	14	F－13	尖頭器	黒曜石	(12.8)	12.7	2.7	0.4	
	15	拡張部	尖頭器	黒曜石	(20.4)	20.5	6.8	2.7	
	16	D－12	石錐	黒曜石	54.4	33.2	7.1	7.6	
	17	21号住	石錐	黒曜石	27.1	16.8	7.9	1.4	
	18	F－13	石錐	黒曜石	26.8	22.9	11.4	6.1	
	19	F－13	石錐	黒曜石	23.0	10.6	6.1	1.2	
	20	G－12	石錐	黒曜石	27.3	15.6	6.7	1.5	
	21	G－7	両面調整石器	黒曜石	34.7	26.7	14.9	10.3	
	22	E－13	両面調整石器	黒曜石	23.7	28.6	9.2	5.7	
第29図	1	L－8	スクレイパー	黒曜石	44.1	31.4	10.4	9.5	
	2	F－15	スクレイパー	黒曜石	(24.4)	33.6	13.4	9.3	
	3	E－13	縁部調整剥片	黒曜石	35.2	17.6	4.0	2.1	
	4	F－13	縁部調整剥片	黒曜石	21.8	39.3	10.6	6.0	
	5	表採	縁部調整剥片	黒曜石	36.3	12.9	3.6	1.4	

図	番号	出土位置	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
第29図	6	14号住	細部調整剥片	黒曜石	(23.2)	18.8	5.9	2.2	
	7	E－13	細部調整剥片	黒曜石	(17.2)	16.6	4.6	1.0	
	8	F－12	細部調整剥片	黒曜石	27.7	25.8	13.1	8.1	
	9	E－13	細部調整剥片	黒曜石	44.3	30.6	11.7	11.3	
	10	13号住	細部調整剥片	黒曜石	44.2	7.9	5.4	1.4	
	11	F－13	細部調整剥片	黒曜石	31.3	12.7	3.3	0.9	
	12	表採	細部調整剥片	黒曜石	45.3	18.0	8.4	3.6	
	13	K－7	細部調整剥片	黒曜石	17.6	13.8	5.6	0.9	
	14	I 15	細部調整剥片	黒曜石	19.3	14.9	4.4	1.1	
	15	D－8	ピエス・エスキュ	黒曜石	25.8	13.6	6.2	2.0	
	16	G－8	石核	黒曜石	31.8	32.8	21.0	19.8	
	17	F－13	石核	黒曜石	30.2	31.6	19.9	16.9	
	18	F－12	石核	黒曜石	28.2	44.0	12.3	12.4	
第30図	1	F－13	石核	黒曜石	64.2	66.4	39.0	113.0	
	2	L－8	石核	黒曜石	31.3	32.2	16.8	15.1	
	3	G－12	石核	黒曜石	43.1	60.1	15.6	33.5	
	4	D－8	磨器	緑色岩	108.0	107.3	41.0	631.4	
	5	C－2	打製石斧	砂岩	(165.0)	89.5	19.5	331.7	
	6	7号石槨	打製石斧	砂岩	117.5	58.7	18.5	108.5	
	7	C 13	打製石斧	砂岩	131.5	57.0	22.0	177.3	
	8	D－7	打製石斧	砂岩	112.3	71.5	23.5	248.1	
	9	1号住	打製石斧	砂岩	(123.4)	57.3	20.5	147.2	
第31図	1	F－7	打製石斧	砂岩	108.5	67.2	32.5	279.2	
	2	表採	打製石斧	砂岩	94.0	54.5	18.0	117.3	
	3	F 13	打製石斧	砂岩	100.5	53.5	26.5	137.6	
	4	F－13	打製石斧	粘板岩	124.5	60.0	12.5	92.7	
	5	表採	打製石斧	砂岩	(99.0)	62.4	28.0	184.3	
	6	20号住	打製石斧	砂岩	(87.8)	45.2	18.5	114.0	
	7	F－13	打製石斧	粘板岩	98.0	44.5	10.5	65.3	
	8	D 8	打製石斧	千枚岩	(92.8)	46.0	15.5	79.5	
	9	M－10	打製石斧	砂岩	128.5	49.0	23.5	177.0	
	10	E－6	打製石斧	シルト岩	(86.5)	61.7	13.3	82.4	
	11	表採	打製石斧	砂岩	81.5	54.8	21.0	105.7	
	12	H－5	打製石斧	ホルンフェルス	74.0	41.3	13.0	72.0	
	13	表採	打製石斧	砂岩	90.5	43.6	12.5	69.7	
	14	21号住	打製石斧	砂岩	(61.3)	35.0	16.5	40.4	
	15	F 7	磨製石斧	タルク	(70.6)	(30.8)	22.2	85.5	
	16	F－13	敲石	輝石安山岩	62.0	50.8	54.5	170.7	
	17	表採	石皿	輝石安山岩	71.5	91.3	36.6	378.1	
	18	D－2	石皿	輝石安山岩	(205.2)	(169.7)	65.0	2,400.0	
第32図	1	表採	凹石	輝石安山岩	133.5	52.3	42.3	381.9	
	2	F－13	凹石	輝石安山岩	75.8	80.5	44.0	358.0	
	3	20号住	凹石	輝石安山岩	95.5	70.5	52.3	425.1	
	4	表採	凹石	輝石安山岩	98.0	78.9	41.3	383.8	

が施されるものであり、このタイプが一番多い。30～32・36は集合沈線文が施されたもの、33～35は集合沈線文上に円形貼付文が配されるものである。第26図は結節浮線文により渦巻文を施す土器であり、出土数も比較的多い。第27図1は前期末の土器である。刺突文が施されている。2～6は曽利II式に比定されるものである。2は斜格子目文土器の口縁部、3・4は縦位の条線文が施される。5は結節縄文が施される口縁部破片である。6の地文には刺切文が施される。7・8は曽利II式に比定されるものである。

9は後期初頭、10～14は堀ノ内式に相当するものである。

15～20は晩期終末の土器である。15は頸部無文帯をもち外反する口縁部の浅鉢である。頸部と体部に沈線による文様を有する。16・17は凹線を有する深鉢の口縁部破片である。16は凹線で浮線文を作り出している。16は体部に細密条痕を施し、17は無文である。18・19は口唇部に押圧文を有する深鉢である。18は押圧が小さく浅い。19は押圧が強くジグザグを呈する。ともに体部に細密条痕を施す。20は端部に前方に突出する突起を有する深鉢である。体部は無文である。いずれの土器も、晩期終末氷I式の新相の範疇に収まる土器群である。

21・22は網代底をもつ底部破片である。

石器（第28～32図、第14表、図版69）

遺構外からは133点の石器が出土した。内訳は、石鏃13点、尖頭器3点、石錐5点、石匙2点、両面調整石器1点、スクレイパー3点、細部調整剥片30点、ピエス・エスキーユ4点、石核12点、打製石斧37点、磨製石斧1点、礫石器18点、その他4点である。平安時代・中世の遺構から出土した石器も混入遺物と捉え、この中に含めた。また、旧石器も出土しているので、すべて縄文時代の石器とはいいきれない。今回出土した剥片石器・石核はすべて黒曜石製で、磨石・石皿・凹石など礫石器は輝石安山岩に限られるようである。

第28図1～12は石鏃である。殆どが凹基無茎鏃であり、平基無茎鏃も見られる。11は小型で、基部の抉りの部分から中心部にかけて擦（磨）痕が見られる。12は未製品である。13～16はいずれも破損しているが、尖頭器と思われる。16～20は石錐である。調整が粗いものが多く、18・19の先端部の調整は比較的細かい。21は両面調整石器、22・第29図1・2はスクレイパー、3～14は細部調整剥片である。15はピエス・エスキーユ、17・18・第30図1～3は石核である。石核は原石に近い1のような大型のものも見られる。第30図4は片刃の礫器である。5～9・第31図1～14は打製石斧である。殆どが短冊形、撥形であり、分銅形と思われるものは1点のみである（第31図10）。石材は砂岩が多く、粘板岩がこれに次ぐ。第31図15は定角式磨製石斧である。16は敲石、17・18は石皿、第32図1～4は凹石であり、石材はすべて輝石安山岩が用いられている。

第3節　平安時代

1．遺構と遺物

1号住居跡（第33図、図版13・14）

J・K－9・10グリッドの西から東への緩やかな斜面に位置する。西側約1/3は大きく撹乱を受けており、また東壁中央は1号石組土坑によって切られている。なお、東壁は斜面の下になるためか、明瞭にできなかった。

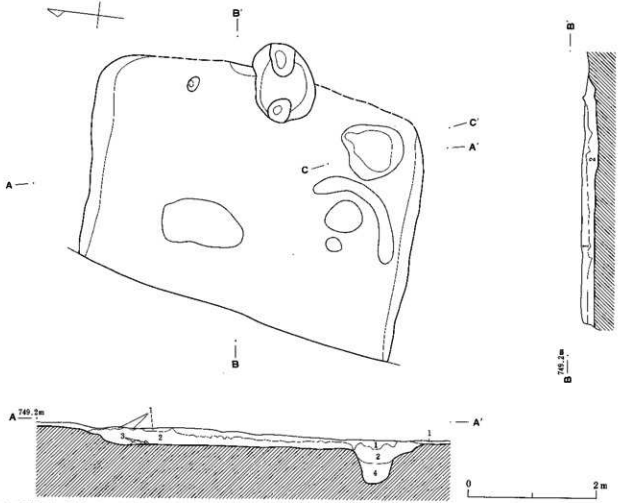
残存する規模は長軸5.2m、短軸3.8m、深さ27cmを測り、隅丸方形を呈するものと考えられる。主軸方向は不明である。

覆土は3層に分けられ、ほぼ自然堆積の様相を呈している。

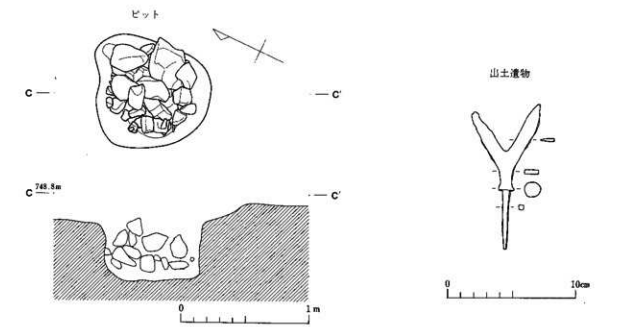
床はほぼ平坦であり、全体的に固くしまっていた。また、壁は緩やかに立ち上がっている。

住居の中央北よりと南よりの2箇所において、焼土の広がる部分が検出されたが、炉跡とは認定しえなかった。南側のものは直径0.6mを測るもので、幅20cmの帯状に堆積した白色灰が、直径約1mの半円を描くように廻っていた。また、北側のものは長径1.3m、短径0.7mの楕円形を呈する範囲であった。

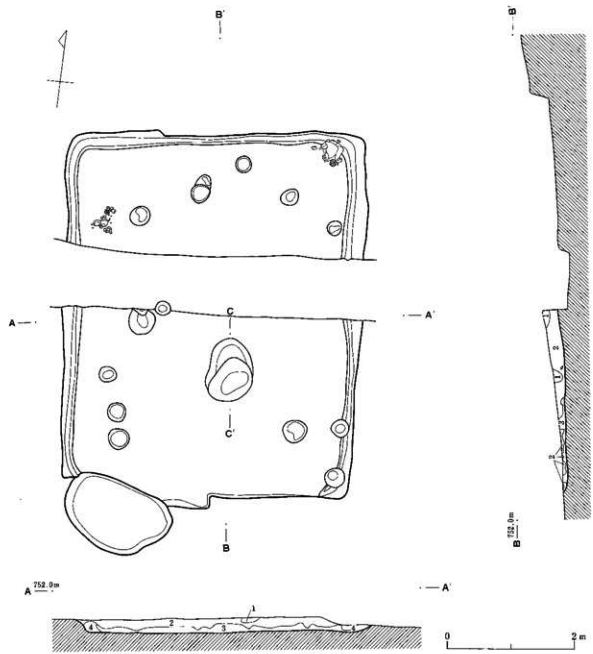
南東コーナー部に、長径1.0m、短径0.92m、深さ45cmを測り、不整形を呈するピットがある。覆土は灰白色土と黒褐色土との混合土であり、約50点の石が詰まっていた。ピット内からは、底面で板状炭化材が、底面から



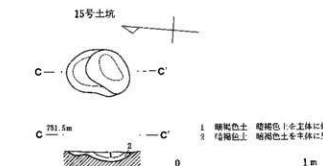
1 暗褐色土　黄色土ブロックを微量含む。赤色スコリアを微量、白色スコリアを中量含む。粘性弱、しまり弱。
2 暗黄褐色土　経化物を少量、黄色土ブロックを微量含む。赤色スコリアを微量、白色スコリアを少量含む。粘性弱、しまり弱。
3 暗黄褐色土　黒色土ブロックを少量含む。赤色スコリアを微量、白色スコリアを微量含む。粘性弱、しまり弱。
4 黄褐色土　赤色スコリアを微量、白色スコリアを微量含む。粘性弱、しまり弱。



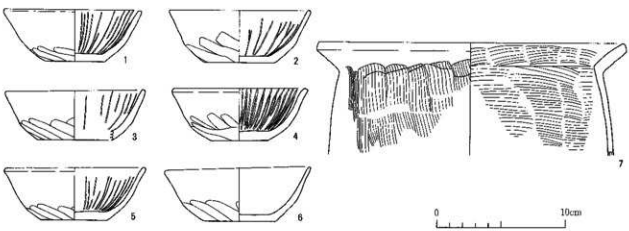
第33図　1号住居跡



15号土坑



第34図　2号住居跡



第35図　2号住居跡出土土器

第15表　2号住居跡出土土師器観察表

番号	器種	法量(cm)	外面特徴	内面特徴	底部	胎土	色調	焼成	備考
1	坏	10.7 4.1 4.6	横ナデ 体部下半ヘラ削り	横ナデ→放射状暗文	糸切り	緻密 赤色粒子・雲母を含む	外　明褐色 内　赤褐色	良好	内外面とも一部剥落
2	坏	(11.0) 4.1 5.3	横ナデ 体部下半ヘラ削り	横ナデ→放射状暗文	ヘラ切り	緻密 赤色粒子・雲母を含む	褐色	良好	
3	坏	10.9 4.0 5.7	横ナデ 体部下半ヘラ削り	横ナデ→放射状暗文	ヘラ削り	緻密 赤色粒子・雲母を含む	褐色	良好	内面かなり剥落
4	坏	10.7 4.1 4.4	横ナデ 体部下半ヘラ削り	横ナデ→放射状暗文	糸切り→ヘラ削り	緻密 赤色粒子・雲母を含む	褐色 一部暗褐色	良好	内外面とも一部剥落
5	坏	11.0 4.2 5.1	横ナデ 体部下半ヘラ削り	横ナデ→放射状暗文	糸切り→ヘラ削り	緻密 赤色粒子・雲母を含む	赤褐色	良好	
6	坏	11.3 4.3 5.5	横ナデ 体部下半ヘラ削り	横ナデ	ヘラ削り	緻密 赤色粒子・雲母を含む	赤褐色	良好	光彩
7	甕	(24.3) － －	縦ヘケ目 口縁部横ナデ	横ヘケ目		石英・長石・金雲母・砂粒を含む	外　暗赤褐色 内　暗褐色	良好	

10cm程上の石の間からカワシンジュガイが検出されている。

出土遺物（第33図）

覆土中からは、縄文土器や土師器、黒曜石片、石剥片、炭化物が約500点、また、鉄鏃1点、鉄滓及び鉄片11点が検出されているが、いずれも小破片で図示できたものは、長さ11.5cmの雁股形の鉄鏃のみである。

2号住居跡（第34図、図版15・16）

D・E－8・9グリッドに位置する。遺構確認段階に設定したトレンチによって、住居中央を東西に切られており、北東コーナー付近は試掘調査によって壁を削られている。また、南西コーナー部を14号土坑が切っている。

残存する規模は長軸5.8m、短軸4.6m、深さ25cmを測り、長方形を呈するものである。主軸方向はN－3°－Wであった。

覆土は4層に分けられ、ほぼ自然堆積の様相を呈している。

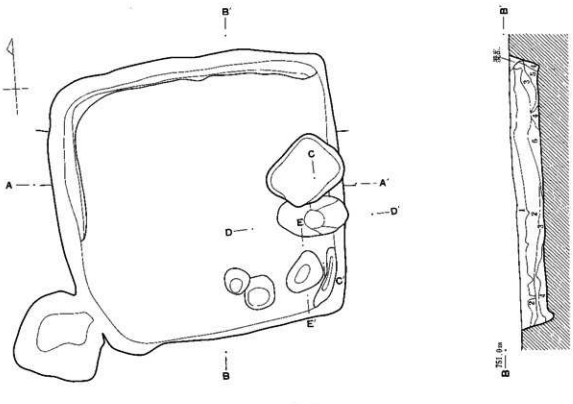
床はほぼ平坦であり、壁はなだらかに立ち上がっている。

ピットは13本検出されたが、柱穴と考えられるものは4本である。

壁溝は、南壁下を除いた部分で確認されており、幅4～12cm、深さ3～6cmを測る。

北東コーナー部において、焼土を被った角礫と炭化物が検出されたが、カマドとはしえなかった。

住居中央南側において15号土坑が検出された。その残存する規模は長径1.0m、短径0.7m、深さ15cmを測り、不整形を呈するものであるが、住居との新旧関係は不明である。



1 暗褐色土　基本層序におけるⅠ a 層の流れ込み。粘性弱、しまりややなし。
2 暗褐色土　暗褐色土を主体に褐色土が少量混入する。炭化物を少量、焼土を微量、赤色スコリアを中量含む。粘性弱、しまり普通。
3 暗褐色土　暗褐色土を主体に黒褐色土が少量混入する。粘性弱、しまり普通。
4 暗褐色土　暗褐色土を主体に黄褐色土粒、黄褐色ブロックを微量、赤色スコリアを少量含む。粘性弱、しまり普通。
5 黒褐色土　黒褐色土を主体に暗褐色土ブロックを少量含む。粘性弱、しまりややなし。
6 暗褐色土　暗褐色土を下位に黒褐色土ブロックが多量に混入する。粘性弱、しまりややあり。
7 暗褐色土　暗褐色土を主体に褐色土ブロックを中量含む。粘性弱、しまり普通。
8 褐灰色土　暗褐色土を主体に黒褐色土を中量含む。粘性弱、しまりややあり。
9 褐灰色土　褐色土を主体に暗褐色土が中量混入する。ローム粒、ロームブロックを中量含む。粘性弱、しまりややあり。
10 暗褐色土　9とほぼ同じだが、ローム粒は微量含み、ロームブロックは含まない。ややオリーブ褐を帯びている。粘性弱、しまりややあり。
11 暗褐色土　褐色土を主体に暗褐色土が少量混入する。炭化物、赤色スコリアを微量含む。粘性弱、しまりややあり。
12 暗褐色土　10とほぼ同じだが、やや黒味があり、しまりがややある。粒子粒を少量含む。粘性弱、しまりあり。
13 黒褐色土　黒褐色土を主体に暗褐色土を中量、焼土粒、炭土ブロックを微量含む。粘性ややあり、しまり普通。
14 黒褐色土　11とほぼ同じだが、焼土を含まない。粘性ややあり、しまり普通。
15 褐 色 土　褐色土を主体に暗褐色土、ローム粒を含む。粘性弱、しまり普通。

1 黒褐色土　ローム粒を少量、暗褐色土ブロックを中量含む。粘性弱、しまりややなし。
2 暗褐色土　褐色土を中量、炭化物、ローム粒、ロームブロック、赤色スコリアを少量含む。粘性弱、しまり普通。
3 暗褐色土　暗褐色土を下位に褐色土を少量、粘土を多量に含む。粘性ややあり、しまり弱。

第36図　3号住居跡

北西コーナー付近において、6点の土師器の坏がまとまって検出されている。

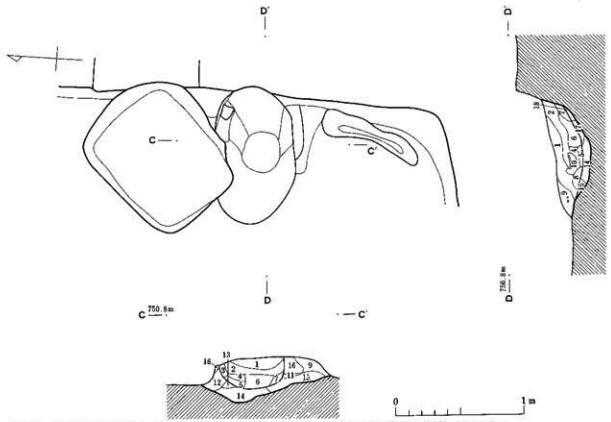
出土遺物（第35図、第15表、図版73）

覆土中の遺物は約320点あるが、図示できたものは7点である。

1～6はいわゆる甲斐型坏で、1～5には内面に放射状暗文が施されている。

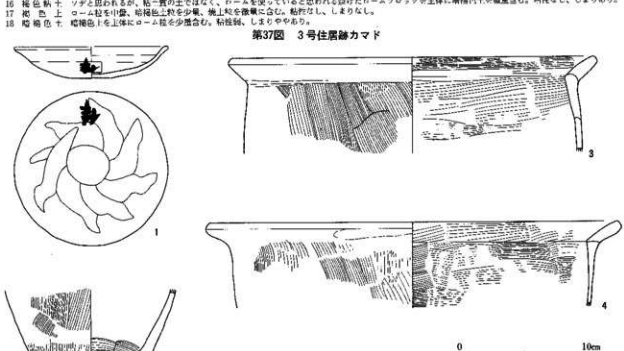
3号住居跡（第36・37図、図版17）

D・E－7グリッドに位置する。南西コーナー部は4号石組土坑に接しており、東壁中央部は21号土坑によって切られている。



1 暗褐色土 暗褐色十を主体に焼土粒、焼土ブロックを少量、ロームブロックを中量、赤色スコリアを微量含む。粘性弱、しまりやや弱。
2 暗褐掲色土 暗褐色土、燃したロームブロックを少量、焼土粒を中量、黒褐色土ブロック、赤色スコリアを微量含む。粘性弱、しまり普通。
3 黒褐色土 黒褐色十を主体に黒十粒、赤色スコリア、黒色スコリアを微量含む。粘性弱、しまり普通。
4 灰黄褐色土 粘土粒を多量、焼土粒を少量含む。粘性弱、しまりやや弱。
5 褐褐色土 焼土粒、焼土ブロックを含み、ほとんど混ざりなし。粘性弱、しまりややあり。
6 暗褐掲色土 含土を主体に暗褐色土、粘土粒を少量、ロームブロック、炭化物を微量含む。粘性弱、しまり普通。
7 淡褐色土 暗褐色十を主体に焼十粒を微量、ローム粒を少量含む。粘性弱、しまり普通。
8 暗褐色土 暗褐色土、粘土中塊、焼土粒を少量、炭化物を微量含む。粘性弱、しまり普通。
9 暗褐色土 暗褐色土を主体をロームブロック、炭化物を少量、赤色スコリアを微量含む。粘性弱、しまり普通。
10 黒褐色土 暗褐掲色土を土体にロームブロック、焼土粒を微量含む。粘性強、しまりやや弱。
11 黒灰色土 ロームブロックを中量、黒褐色土、焼土粒を微量含む。粘性弱、しまりやや弱。
12 褐 全 土 ローム粒を中量、焼土、灰色粘土を少量含む。粘性弱、しまりやや弱。
13 灰褐色土 灰褐色土を中塊、褐色土、焼土粒を少量、黒褐色十粒を微量含む。粘性弱、しまり普通。
14 暗褐色土 暗褐色土を土体に灰色粘十を少量、関十粒を微量含む。粘性弱、しまりやや弱。
15 明褐色土 1はかりサラサラしている。粘性なし、しまりやや弱。
16 褐色粘土 ツボと思われるが、粘一質の土ではなく、ロームを使っていると思われる焼けたロームブロックを主体に暗褐色十を微量含む。粘性なし、しまりあり。
17 褐 色 土 ローム粒を中量、暗褐色土粒を少量、焼土粒を微量に含む。粘性なし、しまりなし。
18 暗褐色十 暗褐色土を土体にローム粒を少量含む。粘性弱、しまりややあり。

第37図　3号住居跡カマド



第38図　3号住居跡出土土器

第16表　3号住居跡出土土師器観察表

番号	器種	法量(cm)	外面特徴	内面特徴	底部	胎土	色調	焼成	備考
1	皿	12.2 2.4 3.2	横ナデ 下半部ヘラ削り	横ナデ	ヘラ切り	緻密 雲母・赤色粒子を含む	赤褐色	良好	外面に「伴」の墨書
2	甕	－ － (9.1)	縦ハケ目	部横ハケ目	木葉痕	石英・長石・金雲母・砂粒を含む	外 暗褐色 内 褐色	良好	
3	甕	(29.0) － －	縦ハケ目 口縁部横ナデ	横ハケ目		石英・長石・金雲母・砂粒を含む	赤褐色	良好	
4	甕	(31.6) － －	縦ハケ目 口縁部横ナデ	横ハケ目		石英・長石・金雲母・砂粒を含む	黒褐色	良好	

残存する規模は長軸4.5m、短軸4.4m、深さ45cmを測り、ほぼ方形を呈している。主軸方向はN－86°－Eであった。

覆土は15層に分けられ、ほぼ自然堆積の様相を呈している。

床は平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

ピットは2本検出されたが、柱穴と考えられるものはなかった。

壁溝は、北壁から西壁にかけてと、南東コーナー部で確認されており、幅6～20cm、深さ8cmを測る。

カマドは東壁中央に位置し、幅0.6m、奥行き1.1mを測る。袖は地山のロームによって構築されており、かなり被熱している。

貯蔵穴は南東コーナー部にあり、その残存する規模は長径0.7m、短径0.45m、深さ14cmを測り、不整形を呈するものであった。

出土遺物（第38図、第16表、図版74・90）

覆土中の遺物は約360点であるが、図示できたものは4点であった。

1は土師器の皿であり、体部に墨書がある。平川　南氏によれば、この文字は「伴」と読めるもので、大伴氏が伴氏に氏名変更する（823年）ことに関係する可能性を示された。土器そのものは、9世紀中頃の所産と考えられるため、時間的齟齬はなく、今後の研究における一視点となるものと考えられる。

10号住居跡（第39図、図版18）

D・E－10・11グリッドの斜面から平坦面への変換点近くに位置する。南側約2/3は試掘調査の際に掘っているため、南壁は明確にできなかった。

残存する規模は長軸4.0m、短軸3.7m、深さ15cmを測り、ほぼ方形を呈するものと考えられる。主軸方向はN－86°－Eであった。

覆土は6層に分けられ、ほぼ自然堆積の様相を呈している。

床は北から南へ緩やかに傾斜しており、壁は緩やかに立ち上がる。

壁溝は多少とぎれるものの、北壁と西壁際において確認されており、幅4～8cm、深さ6cmを測る。

カマドは東壁に位置するが、煙道部の張り出しと火床面とが確認されただけであった。火床面は長径0.82m、短径0.6m、深さ10cmを測り、不整形を呈するものである。

南東コーナー部に、長径0.95m、短径0.6m、深さ9cmを測り、不整形を呈するピットがあり、貯蔵穴とも考えられる。

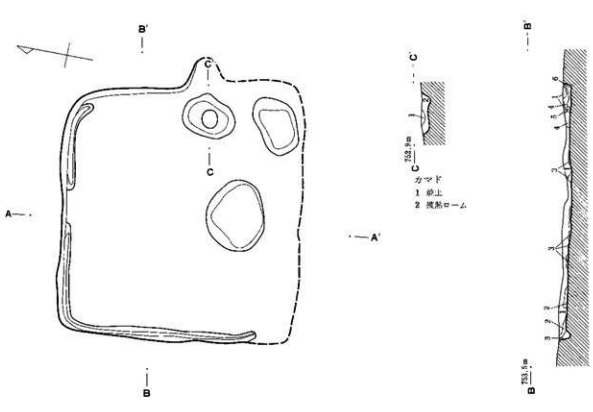
住居中央南側において13号土坑が検出された。その残存する規模は長径1.1m、短径0.9m、深さ17cmを測り、不整形を呈するものであるが、住居との新旧関係は不明である。

覆土中からの遺物は少なく、図示できるものはなかった。

11号住居跡（第40図、図版19）

Ⅰ－9グリッドに位置する。Ⅱ層中に構築されていた様で、遺構確認の段階で覆土をとばしているため、Ⅲ層に掘り込まれている部分しか検出できなかった。

残存する規模は長軸3.7m、短軸3.6mを測り、方形を呈するものと考えられる。主軸方向はN－80°－Eであった。



1 黒褐色土　黒褐色土を主体に黄褐色上粒を中量、黄褐色上と褐褐色土の混合上のブロックを中量、焼色スコリアを少量含む。粘性なし、しまりあり。
2 黒褐色土　黒褐色土を主体に黄褐色土粒を中量、焼色スコリアを少量含む。粘性なし、しまりあり。
3 褐 色 土　黄褐色土を主体に黒褐色土が中量混入し、焼色スコリアを微量含む。粘性強、しまりあり。
4 褐 色 土　黄褐色土を主体に黒褐色土が中量混入し、焼土ブロック、焼色スコリアを微量含む。粘性強、しまりあり。
5 褐 色 土　褐色土を主体に黄褐色上ブロック、黄褐色上ブロック、黒褐色上を中量、焼土ブロックを少量含む。粘性強、しまり非常にあり。
6 黄褐色土　当年耕作の撹乱層。粘性弱、しまりやや弱い。

13号土坑
1 褐 色 土　黄褐色土を主体に黒土、褐褐色土、黄褐色土ブロックを中量、焼土ブロック、炭化物を少量含む。粘性なし、しまり普通。
2 褐 色 土　褐色土を主体に黄褐色土ブロック、炭化物、白色粘土粒を少量、焼土粒を微量含む。粘性弱、しまり普通。
3 褐 色 土　褐色土の混入層。粘性強、しまりやや弱い。
4 黄褐色土　黄褐色土を主体に黄褐色土ブロックを多量、白色粘質土粒を少量含む。粘性弱、しまり普通。

第39図　10号住居跡

床はほぼ平坦である。

ピットは1本検出されたが、柱穴とは考えられない。

壁溝は、東壁を除いた部分で確認されており、幅4cm、深さ5cmを測る。

カマドは東壁中央に位置するが、火床面が確認されただけであった。火床面は長径0.88m、短径0.65m、深さ15cmを測り、長楕円形を呈するものである。

南東コーナー部に、長径42cm、短径35cm、深さ15cmを測り、不整円形を呈するピットがあり、貯蔵穴とも考えられる。

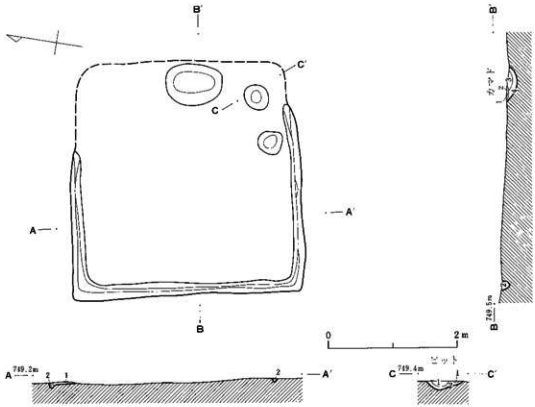
出土遺物（第41図、第17表）

覆土中の遺物は少なく、図示できたものは放射状の暗文をもつ土師器の坏1点のみである。これはいわゆる甲斐型土器で、2号住居跡のものとほぼ同時期であると考えられる。

12号住居跡（第42・43図、図版20）

K－7グリッドに位置する。南東コーナー付近は試掘調査によって一部削られている。

深さ35cmを測る覆土は12層に分けられ、ほぼ自然堆積の様相を呈しているが、中層において部分的に固くしまっ



第40図　11号住居跡

第41図　11号住居跡出土土器

第17表　11号住居跡出土土師器観察表

番号	器種	法量(cm)	外面特徴	内面特徴	底部	胎土	色調	焼成	備考
1	坏	(10.5) 4.2 (5.0)	横ナデ 体部下半ヘラ削り	横ナデ→放射状暗文　糸切り		緻密 赤色粒子・雲母一部黒褐色を含む	赤褐色	良好	

た部分があることと、その上下において、住居構造が若干異なる状況が把握された。この構造差は、貼床面と掘り方面との違いとも考えられるが、ここでは上部住居と下部住居として扱うこととする。

なお、覆土中の遺物は少なく、図示できるものはなかった。

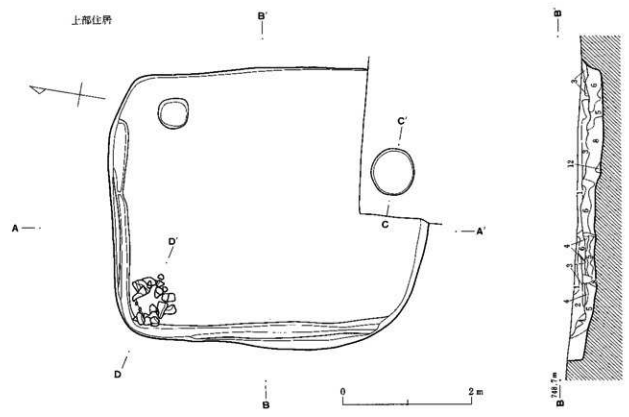
上部住居：残存する規模は長径4.9m、短径4.4mを測り、ほぼ方形を呈している。主軸方向はN－11°－Wであった。

床は多少凸凹があり、壁は緩やかに立ち上がっている。

ピットは1本検出されたが、柱穴とは考えられなかった。

壁溝は、北壁から西壁にかけて確認されており、幅5～17cm、深さ3～7cmを測る。

北西コーナー部に、長径0.8m、短径0.68mの範囲に、円を描く様な状態で石が検出されている部分



第42図　12号住居跡(1)

があり、右の内側の覆土は、焼土粒、焼土ブロックを含む暗褐色土が主体であった。しかし、火床面が確認できなかったため、その性格を明らかにすることはできなかった。

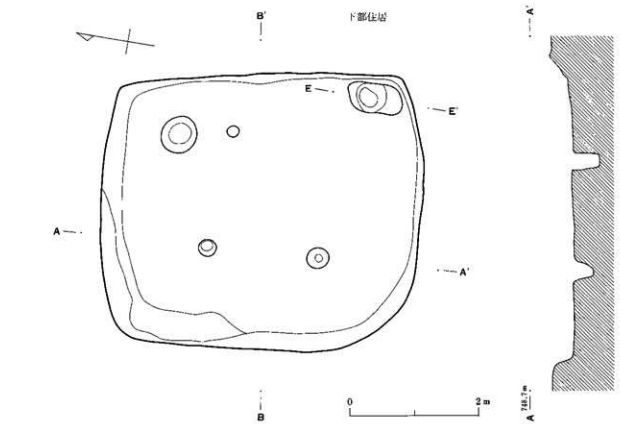
住居中央南側において16号土坑が検出された。その残存する規模は長径0.74m、短径0.66m、深さ8cmを測り、不整円形を呈するものであるが、住居との新旧関係は不明である。

下部住居：残存する規模は長径5.0m、短径4.4mを測り、ほぼ方形を呈している。主軸方向はN－9°－Wであった。

床は多少凸凹があり、壁は急に立ち上がっている。

ピットは4本検出されたが、2本が柱穴と考えられる。

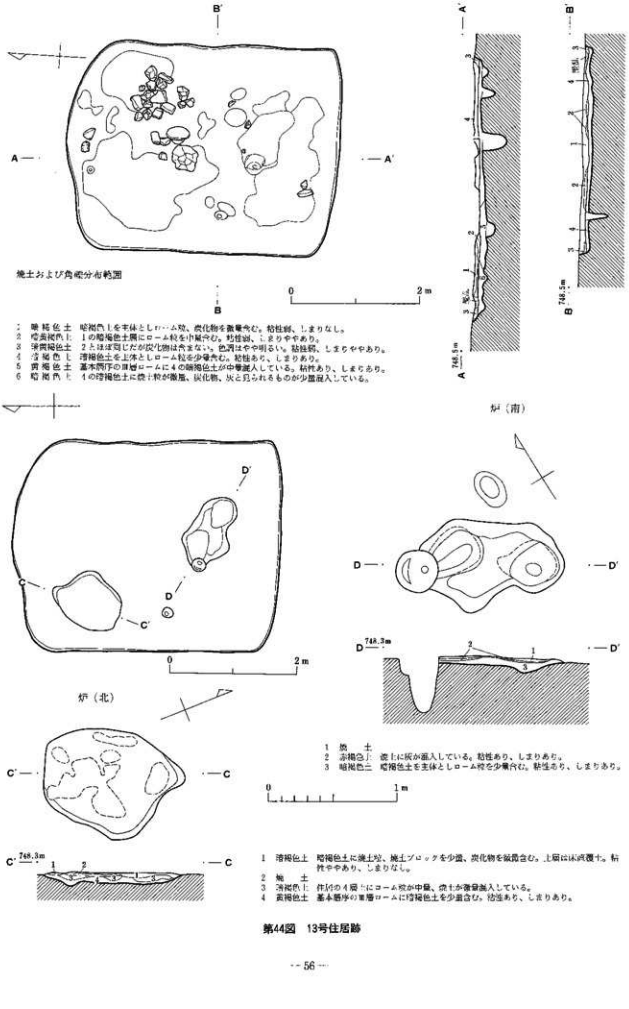
南東コーナー部において20号土坑が検出された。その残存する規模は長径0.82m、短径0.48m、深さ46cmを測り、長楕円形を呈するものである。覆土は焼土、炭化物、灰白色土を含む暗褐色土で、上層に角礫が置かれていた。この土坑は、下部住居が廃絶され、上部住居が構築されるまでの間に造ら



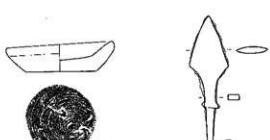
1 暗褐色土　焼土粒を少量、地山ブロックを微量、炭化物を被覆含む。粘性なし、しまり普通。
2 暗褐色土　地山粒を微量、褐色土を微量含む。粘性なし、しまり普通。
3 黒褐色土　炭化物を多量含む。粘性なし、しまり普通。
4 褐 色 土　暗褐色土を含み、全体にやや明い。粘性なし、しまり普通。
5 暗褐色土　ローム粒を少量、赤色スコリア、炭化物を微量含む。粘性弱、しまりややあり。

1 暗褐色土　ローム粒及び同ブロックを少量、軟土、炭化物、焼土を微量含む。粘性弱、しまりややあり。
2 暗褐色土　ローム粒及び同ブロックを少量、粘土、炭化物、焼土を微量含む。粘性弱、しまり普通。
3 暗褐色土　2に比べ炭化物が多い。粘性弱、しまり普通。
4 暗褐色土　2に比べ焼土が多い。均性弱、しまり普通。
5 暗褐色土　白っぽい。4に灰が混ったもの。粘性弱、しまり普通。
6 暗褐色土　白っぽい。4に比べ焼土が少ない。粘性弱、しまり普通。
7 暗褐色土　ローム粒及び同ブロックを少量、炭化物、灰を微量含む。粘性弱、しまり普通。
8 暗褐色土　7に比べ灰が多い。粘性弱、しまり普通。
9 褐 色 土　暗褐色土粒を少量、ローム粒及び同ブロックを少量、炭化物、灰を微量含む。粘性弱、しまり普通。

第43図　12号住居跡(2)


B'
A
A'
B
焼土および炭化分布範囲
0
2 m
1 暗褐色土 暗褐色土を主体としローム粒、炭化物を微量含む。粘性弱、しまりなし。
2 暗褐褐色土 1の暗褐色土層にローム粒を小量含む。粘性弱、しまりやや弱い。
3 褐黄褐色土 2とほぼ同じだが炭化物は含まない。色調はやや明るい。粘性弱、しまりやや弱い。
4 淡褐色土 暗褐色土を主体としローム粒を少量含む。粘性あり、しまりあり。
5 黄褐色土 基本西洋の黒褐ローム4の暗褐色土が中層混入している。粘性あり、しまりあり。
6 暗褐色土 1の暗褐色土に焼土粒が微量、炭化物、灰と見られるものが少量混入している。
A'
B'
748.3m
炉（南）
D
D'
C
C'
炉（北）
1 焼 土
2 赤褐色土 焼土に灰が混入している。粘性あり、しまりあり。
3 暗褐色土 暗褐色土を主体とローム粒を少量含む。粘性あり、しまりあり。
0
1 m
1 暗褐色土 暗褐色土に焼土粒、焼土ブロックを少量、炭化物を微量含む。上層には床貼覆土。粘性やあり、しまりなし。
2 焼 土
3 茶褐色土 住居の4層にローム粒が中量、焼土が微量混入している。
4 黄褐色土 基本層序の第3層ローム中に暗褐色土を少量含む。粘性あり、しまりあり。

第44図 13号住居跡



第45図　13号住居跡出土遺物

第18表　13号住居跡出土土師器観察表

番号	器種	法量(cm)	外面特徴	内面特徴	底部	胎土	色調	焼成	備考
1	皿	8.2 2.4 5.4	横ナデ	横ナデ	糸切り	石英・長石・砂粒を含む	赤褐色	良好	11C末～12C初

れていると考えられ、それぞれを分ける根拠ともしているが、下部住居との具体的な関係や、その性格は明確にしえなかった。

13号住居跡（第44図、図版21）

K－8・9グリッドの平坦面に位置する。試掘の際に、A－2において一部確認されていたものの、遺構確認の段階で、覆土上部をとばしてしまっている。

残存する規模は長軸4.2m、短軸3.3m、深さ14cmを測り、ほぼ長方形を呈している。主軸方向は不明である。

覆土は6層に分けられ、ほぼ自然堆積の様相を呈している。4～6層は貼床下になる。

床はほぼ平坦であり、大半の部分に焼土が広がっている。また、北東コーナー付近に、20数個の角礫が点在している。壁はやや急に立ち上がる。

北西コーナー部に、長径1.1m、短径0.78m、焼土面までの深さ2cmを測り、不整円形を呈するピットがあり、炉跡とも考えられる。

住居中央南側において長径1.32m、短径0.72m、焼土面までの深さ3cmを測り、不整形を呈するもので、炉跡とも考えられる。

出土遺物（第45図、第18表）

覆土中からの遺物は少なく、図示できたものは2点のみであった。

1は土師器の坏であるが、平安時代でもかなり新しい時期（12世紀代）に比定されるものと考えられる。

2は主頭式の鉄鏃であるが、試掘の際にも、身部が蛇頭状を呈する鉄鏃（第3図－22）が検出されている。

14号住居跡（第46図、図版22）

K・L－9・10グリッドの平坦面に位置する。遺構確認の段階で、ほとんど覆土をとばしてしまっているため、東壁北半から北壁にかけてが明確にしえなかった。

残存する規模は長軸6.0m、短軸5.5m、深さ8cmを測り、ほぼ方形を呈するものと考えられる。主軸方向はN－88°－Eであった。

覆土は3層に分けられ、自然堆積の様相を呈している。

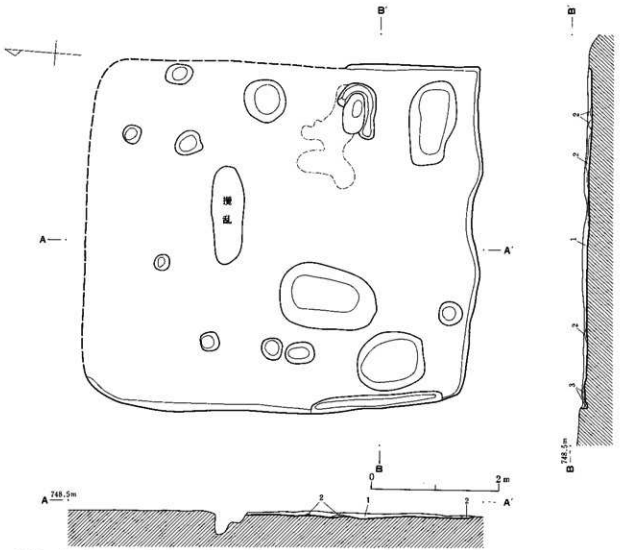
床はほぼ平坦である。

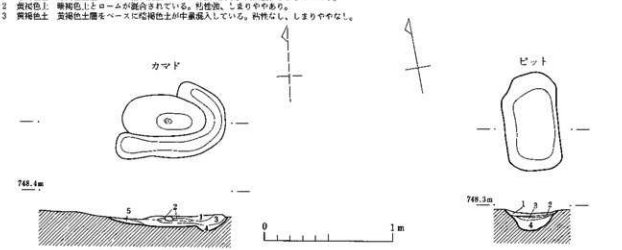
ピットは11本検出されたが、柱穴とは考えられない。

壁溝は、西壁南半部で2m程確認されており、幅10cm、深さ10cmを測る。

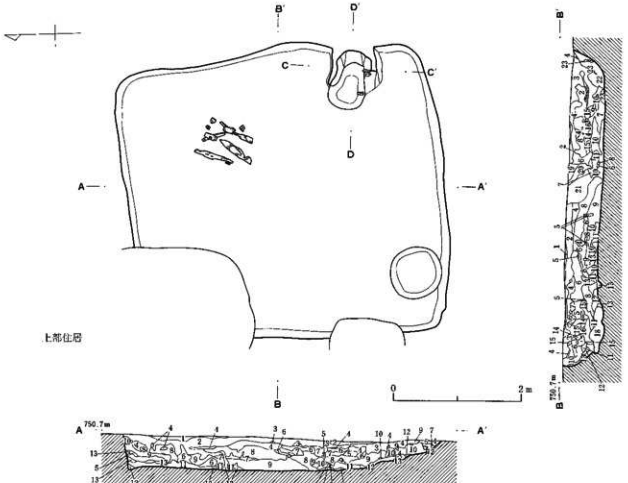
カマドは東壁中央南寄りに位置するが、火床面と若干の袖が確認されただけであった。火床面は長径0.66m、短径0.33m、深さ8cmを測り、長楕円形を呈するものである。なお、周辺に焼土、灰が多く散っていた。

中央西寄りに長径1.55m、短径0.88m、深さ26cmを測り、長方形を呈するピットがある。覆土は4層に分けられ、焼土層の厚さは1cmで、被熱ロームの厚さは10cmを測るものだが、その用途は不明である。


B'
B
A
A'
撹乱
748.5m
0
2m
1 灰褐色土 暗褐色土塊にローム粒、焼土ブロックを微量含む。粘性強、しまりややあり。
2 黄褐色土 暗褐色土とロームが混合されている。粘性強、しまりややあり。
3 黄褐色土 黄褐色土塊をベースに暗褐色土が斑状に混入している。粘性なし、しまりややなし。


カマド
ピット
748.4m
748.3m
0
1m
1 黄褐色土 黒色土に炭化物が少量混入している。粘性なし、しまり弱。
2 焼 土 赤土に暗褐色土が少量混入している。粘性ややあり、しまりあり。
3 暗褐色土 暗褐色土塊にローム粒が中量、淡色焼土と思われるものが少量混入している。粘性あり、しまりあり。
4 暗褐色土 暗褐色土にローム粒が中量、ロームブロックが少量混入している。粘性ややあり、しまりあり。
5 黄褐色土 黄褐色土に暗褐色土粒が中量混入している。粘性あり、しまりあり。
1 暗褐色土 暗褐色土塊に焼土粒、ロームブロック、炭化物を少量含む。粘性あり、しまりなし。
2 焼 土
3 黄褐色土 黄褐色土塊に灰と思われるものが混じり、やや黒ずんでいる。粘性なし、しまりなし。
4 黄褐色土 被熱ローム。粘性なし、しまりあり。

第46図　14号住居跡



1 暗褐色土 基本層序の1c層。粘性帯遺、しまり弱。
2 明褐色土 褐色上ブロックを微量含む。粘性強、しまりややあり。
3 暗褐色土 暗褐色土に黒褐色土が中量混入し、ローム粒子がやや多い。粘性弱、しまりややあり。
4 黒褐色土 黒褐色土を主体に暗褐色土が少量混入している。粘性弱、しまりややあり。
5 黒褐色土 黒褐色土を主体に暗褐色土が中量混入している。粘性弱、しまりややあり。
6 黒褐色土 黒褐色土を主体に暗褐色土が多量混入している。粘性弱、しまりややあり。
7 黒褐色土 黒褐色土を主体に暗褐色土が多量混入し、ローム粒子を多量含む。粘性強、しまりややあり。
8 明褐色土 暗褐色土を主体に黒褐色土を微量含む。粘性強、しまり弱遺。
9 暗褐色土 暗褐色土を主体に黒褐色土を微量、ローム粒子を少量含む。粘性弱、しまりややなし。
10 明褐色土 暗褐色土を主体に黒褐色土を極遺、ローム粒子、褐色土を少量含む。粘性弱、しまり普遺。
11 褐 色 土 褐色土を主体に暗褐色土を少量含む。粘性弱、しまり普遺。
12 粕 色 土 黄褐色土を主体に暗褐色土を中量含む。粘性強、しまり弱遺。
13 褐 色 土 黄褐色土を主体に暗褐色土を少量含む。粘性弱、しまり普遺。
14 暗褐色土 暗褐色土を主体に赤褐色土ブロック、赤色スコリア、ローム粒、炭化粒を微量含む。粘性強、しまりややあり。
15 暗褐色土 暗褐色土を主体に赤褐色土ブロック、赤色スコリア、炭化粒を微遺、ローム粒を少量含む。粘性弱、しまりややあり。
16 赤褐色土 赤褐色土を主体に暗褐色土ブロックを少量含む。粘化弱、しまりあり。
17 赤褐色土 14より赤褐色土粒を多量含む。粘性弱、しまりあり。
18 暗褐色土 暗褐色土を主体にローム粒、ロームブロックを多量、赤色スコリアを微量含む。粘性強、しまりややなし。
19 暗褐色土 暗褐色土を主体にローム粒を多量、ロームブロックを少量含む。粘性弱、しまりややあり。
20 明褐色土 19よりもローム粒を多量に含む。粘性弱、しまりややあり。
21 暗褐色土 19よりもロームブロックを多量含む。粘性弱、しまりややあり。
22 明褐色土 暗褐色土が混ざっている層。ローム粒、焼土粒を多量含む。粘性弱、しまりややあり。
23 暗褐色土 22よりもローム粒を多量含む。粘性弱、しまりややあり。

第47図　15号住居跡(1)

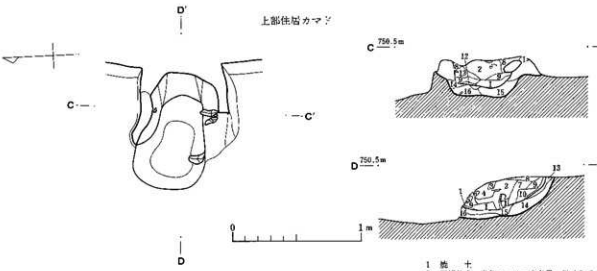
覆土中の遺物は少なく、図示できるものはなかった。

15号住居跡（第47・48図、図版23）

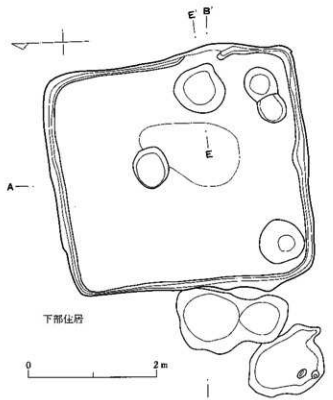
E・G－8グリッドに位置する。南西部において34号土坑を切っており、北西コーナー部と西壁の一部は、攪乱によって削られている。

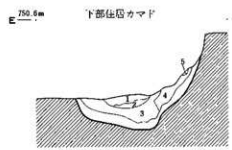
深さ52cmを測る覆土は23層に分けられ、ほぼ自然堆積の様相を呈しているが、下層に一部人為的な埋め戻しを想定させる部分がある。

中層に炭化材が数本含まれていたことと、カマドが2基あり、且つ住居構造が若干異なる状況が把握されたので、2軒の住居が重複していたことも考えられるが、ここでは上部住居と下部住居として扱うこととする。



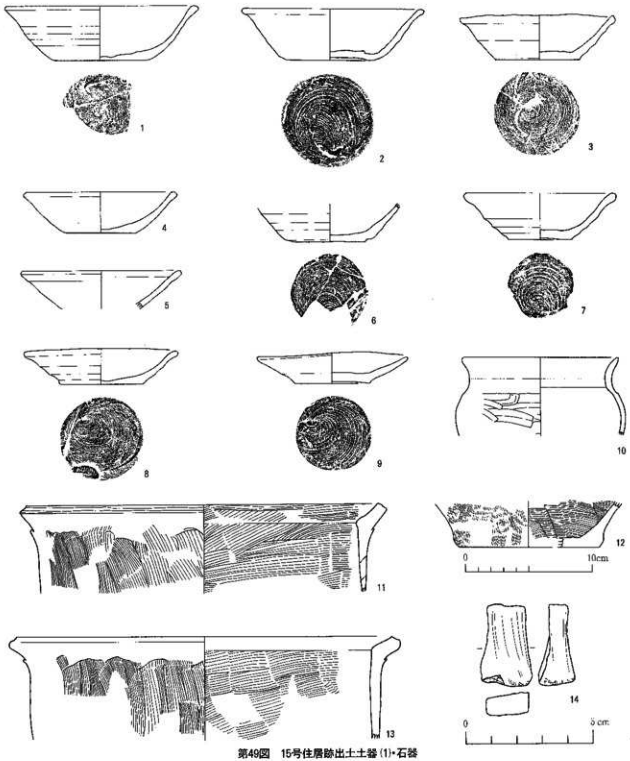
1 黒　土
2 暗褐色土　赤色スコリアを多量、粘土粒を少量、地土粒、ローム粒、地土ブロック、粘土ブロックを微量含む。粘性ややあり、しまりやや強。
3 暗褐色土　5よりも地土ブロック、粘土ブロックを多量含む。粘性ややあり、しまりやや強。
4 暗褐色土　赤色スコリア、ローム粒、粘土粒、地土粒、粘土ブロックを微量含む。粘性ややあり、しまり弱。
5 暗褐色土　赤色スコリア、ローム粒、粘土粒を微量、地土粒を多量含む。粘性ややあり、しまり弱。
6 暗褐色土　5よりも地土粒を少量含む。粘性ややあり、しまり弱。
7 暗褐色土　赤色スコリア、地土粒、粘土粒、ローム粒、粘土ブロック、地土ブロックを微量含む。粘性なし、しまり普通。
8 暗褐色土　赤色スコリア、微小粒を微量、粘土粒を多量、粘土ブロックを少量含む。粘性なし、しまり弱。
9 暗褐色土　地土粒を多量、粘土粒、地土ブロックを微量含む。粘性ややなし、しまり普通。
10 暗褐色土　9よりも地土ブロックを多量含む。粘性ややなし、しまり普通。
11 暗褐色土　地土粒、粘土粒、ローム粒、赤色スコリアを微量含む。粘性なし、しまり普通。
12 暗褐色土　赤色スコリアを微量含む。粘性ややあり、しまり弱。
13 赤褐色土　赤色スコリア、ローム粒、地土粒を微量含む。粘性ややあり、しまりなし。
14 暗褐色土　地土粒、ローム粒、粘土粒、赤色スコリアを微量含む。粘性ややあり、しまりなし。
15 黒褐色土　暗褐色土を主体に白色粘土粒を40%、地土ブロックを少量含む。粘性ややなし、しまりなし。
16 暗褐色土　地土粒、赤色スコリア、ローム粒を微量含む。粘性ややなし、しまりなし。





1 暗褐色土　地土粒を少量、ローム粒を微量含む。粘性ややあり、しまり弱。
2 赤褐色土　地土ブロックを多量含む。粘性なし、しまり強。
3 褐 色 土　ローム ブロックを多量、被熱ローム ブロックを中量含む。粘性なし、しまり普。
4 黒褐色土　暗褐色土を主体に焼土粒を中量、赤色スコリア、ローム粒を微量含む。粘性ややあり、しまり弱。
5 黒褐色土　4よりも焼土粒を少量含む。粘性ややあり、しまり弱。

第48図　15号住居跡(2)



第49図　15号住居跡出土土器(1)・石器

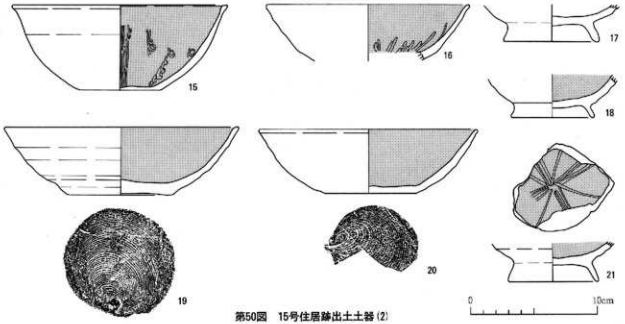
上部住居：残存する規模は長径5.0m、短径4.6mを測り、ほぼ方形を呈している。主軸方向はN－85°－Eであった。

床は多少凸凹があり、壁は緩やかに立ち上がっている。

ピットは1本検出されたが、柱穴とは考えられなかった。

カマドは東壁南寄りに位置し、幅0.56m、奥行き0.92mを測る。袖は地山のロームによって構築されていた。

なお、炭化材は同定作業を実施している（第6章第1節）。



第50図　15号住居跡出土土器(2)

下部住居：残存する規模は長径4.0m、短径3.9mを測り、方形を呈している。主軸方向はN－85°－Eであった。

床はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がっている。

ピットは4本検出されたが、柱穴と考えられるものはなかった。

壁溝は、カマド部分を除いた全周した状態で確認されており、幅3～6㎝、深さ5㎝を測る。

カマドは東壁中央南寄りに位置するが、煙道部の張り出しと火床面が確認されただけであった。火床面は直径0.8m、深さ8㎝を測り、円形を呈するものである。

出土遺物（第49～51図、第19・20表、図版75～77）

覆土中の遺物は全体で約490点である。

上部住居では、土師器の坏及び皿が16点、甕3点などが図示できた（第49・50図）。

1～9は土師器の坏と皿であり、8・9は完形で検出された。1・6～8は明瞭にロクロ痕を残すもので、6は底部が高台状に突出している。

15・16・18～21は内面黒色処理（いわゆる内黒土器）の坏である。15～17・21には暗文が施されており、17・18・21は高台を有している。15は胎土及び外面調整法から甲斐型土器の範疇に入るものであるが、16・18・19・21は「長野系黒色土器」と言われるものと考えられる。

14は砥石と考えられるものである。

下部住居では坏6点、甕4点が図示できた（第51図）。

1～3・5・6はいわゆる甲斐型の坏であり、放射状の暗文が施されている。このうち、2は体部下半のヘラケズリの方向が、一般的に見られるものとは逆で、正位に置いた時、右上から左下へと削られている。

8は生焼け状態の須恵器である。

16号住居跡（第52・54図、図版24・25）

D－7・8グリッドに位置する。南東コーナー部は、遺構確認段階に設定したトレンチによって切られており、中央東側の覆土上層には3号石組土坑が営まれている。

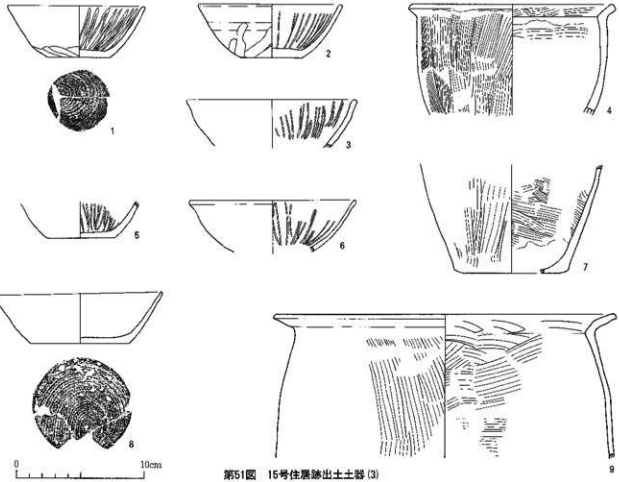
残存する規模は長軸4.0m、短軸3.6m、深さ45cmを測り、ほぼ方形を呈している。主軸方向はN－87°－Eであった。

覆土は17層に分けられ、ほぼ自然堆積の様相を呈している。

床は黒色土中に構築されており、一部明確にしえなかったが、ほぼ平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がって

第19表　15号住居跡出土土師器観察表（1）

番号	器種	法量(cm)	外面特徴	内面特徴	底部	胎土	色調	焼成	備考
1	坏	(15.0) 4.3 (7.1)	横ナデ ロクロ痕	横ナデ	糸切り	細砂 雲母・赤色粒子を含む	褐色	良好	
2	坏	(14.9) 5.1 6.8	横ナデ	横ナデ	糸切り	石英・長石・雲母・赤色粒子を含む	赤褐色	良好	
3	坏	12.2 3.5 6.5	横ナデ	横ナデ	糸切り	赤色粒子・雲母を含む	暗褐色 一部赤褐色	良好	
4	坏	(12.0) 3.2 (5.2)	横ナデ	横ナデ	糸切り→ヘラ削り	石英・長石・砂粒・赤色粒子を含む	褐色	良好	カマド内出土
5	坏	(12.6) — —	横ナデ	横ナデ		石英・長石・砂粒・雲母・赤色粒子を含む	褐色	良好	
6	坏	— 5.5	横ナデ	横ナデ	糸切り	雲母・赤色粒子を含む	赤褐色	良好	
7	坏	(12.0) 3.6 (5.1)	横ナデ	横ナデ	糸切り	雲母・赤色粒子を含む	赤褐色	良好	
8	皿	12.2 3.8 6.4	横ナデ ロクロ痕	横ナデ	糸切り	長石・雲母・赤色粒子を含む	赤褐色	良好	完形
9	皿	11.9 2.5 6.0	横ナデ	横ナデ	糸切り 十字状の線刻	赤色粒子・雲母を含む	褐色	良好	完形
10	甕	(12.0) — —	横ナデ 横位ヘラ削り	横ナデ		石英・黒雲母を含む	褐色	良好	内面一部剥落
11	甕	(38.0) — —	縦ハケ目 口縁部横ナデ	横ハケ目		石英・長石・金雲母・砂粒を含む	暗褐色 外面一部褐色	良好	
12	甕	— — (10.8)	縦ハケ目	横ハケ目	木葉痕	石英・長石・雲母・砂粒を含む	暗褐色	良好	
13	甕	(31.0) — —	縦ハケ目	横ハケ目		石英・長石・金雲母・砂粒を含む	赤褐色	良好	
15	坏 (黒色)	(17.0) 6.7 6.4	横ナデ ヘラ削り	横ナデ→放射状・螺旋状暗文	ヘラ削り	長石・赤色粒子を含む	外　赤褐色 内　黒色	良好	
16	坏 (黒色)	(16.0) — —	横ナデ ロクロ痕	横ナデ→放射状暗文		石英・長石・極粒子・雲母・砂粒を含む	外　褐色 内　黒色	良好	
17	高台付坏	— — 6.0	横ナデ	ミガキ（放射状）	糸切り	石英・長石・砂粒・雲母を含む	暗赤褐色 内面一部暗褐色	良好	
18	高台付坏 (黒色)	— — 6.0	横ナデ	ミガキ	糸切り→付け高台のちナデ	石英・長石・極粒子・雲母・砂粒を含む	外　褐色 内　黒色	良好	
19	坏 (黒色)	18.4 5.4 8.0	横ナデ ロクロ痕	ミガキ（口縁部横位、以下放射状）	糸切り	石英・長石・砂粒を含む	外　褐色 内　黒色	良好	
20	坏 (黒色)	(17.3) 5.1 6.8	横ナデ	横ミガキ	糸切り	石英・長石・砂粒・雲母を含む	外　褐色 内　黒色	良好	
21	高台付坏 (黒色)	— — 6.4	横ナデ	横ナデ→放射状暗文	糸切り→付け高台のちナデ	石英・長石・極粒子・雲母・砂粒を含む	外　褐色 内　黒色	良好	



第51図　15号住居跡出土土器(3)

第20表　15号住居跡出土土師器観察表(2)

番号	器種	法量(cm)	外面特徴	内面特徴	底部	胎土	色調	焼成	備考
1	坏	10.8 4.1 4.8	横ナデ 底部付近ヘラ削り	横ナデ→放射状暗文	糸切り	緻密 赤色粒子・雲母を含む	赤褐色	良好	
2	坏	11.2 4.3 4.8	横ナデ 底部付近ヘラ削り	横ナデ→放射状暗文	糸切り→ヘラ削り	緻密 雲母を含む	明褐色	良好	
3	坏	(13.2) － －	横ナデ	横ナデ→放射状暗文		緻密 赤色粒子を含む	明褐色	良好	
4	甕	(16.2) － －	縦ハケ口 － －	横ハケ口 口縁部横ナデ		石英・長石・雲母・砂粒を含む	茶褐色	良好	カマド内出土
5	坏	－ － (5.2)	横ナデ	横ナデ→放射状暗文	糸切り→ヘラ削り	緻密 赤色粒子を含む	赤褐色	良好	
6	坏	(13.0) － －	横ナデ	横ナデ→放射状暗文		赤色粒子・砂粒・雲母を含む	外 黒褐色 内 暗赤褐色	良好	
7	甕	－ － (8.8)	縦ハケ目	横ハケ目	木葉痕	小石・金雲母を含む	外 暗褐色 内 黒褐色	良好	
8	須恵器 坏	13.2 4.1 7.6	横ナデ	横ナデ	糸切り	石英・長石・褐粒子を含む	黄褐色	酸化焔	
9	甕	(26.6) － －	縦ハケ目 口縁部横ナデ	横ハケ目 口縁部横ナデ		石英・長石・金雲母を含む	赤褐色	良好	

いる。

ピットは検出されなかった。

壁溝は北壁際で確認されており、幅6～10cm、深さ4cmを測る。

カマドは東壁中央南寄りに位置し、幅95cm、奥行き102cmを測る石組みのものであり、石の遺存状態は調査区内で最も良好であった。

出土遺物（第53図、第21表、図版78）

覆土中の遺物は約200点であるが、図示できたものは土師器の甕3点である。

1は内面に輪積み痕を明瞭に残すものである。

18号住居跡（第55図、図版26）

D－5グリッドに位置する。南壁中央を31号土坑に切られている。

残存する規模は長軸2.8m、短軸2.5m、深さ20cmを測り、ほぼ方形を呈するものである。主軸方向はN－85°－Eであった。

覆土は11層に分けられ、ほぼ自然堆積の様相を呈している。

床は多少凸凹しており、壁は急に立ち上がっている。

ピットは6本検出されたが、柱穴と考えられるものはなかった。

壁溝は、東壁から北壁にかけての部分で確認されており、幅2～7cm、深さ5cmを測る。

カマドは東壁中央南寄りに位置するが、火床面が確認されただけであった。火床面は長径0.38m、短径0.3m、深さ8cmを測り、不整円形を呈するものである。なお、火床面の周囲に10点程の礫が点在しており、もとは石組みカマドであったと考えられる。

南東コーナー部に、長径0.5m、短径0.4m、深さ16cmを測り、不整形を呈するピットがあり、貯蔵穴とも考えられる。

出土遺物（第56図、第22表）

覆土中の遺物は少なく、図示できたものは土師器の甕1点のみである。

19号住居跡（第57・58図、図版27）

D・E－5グリッドに位置する。

残存する規模は一辺3.6m、深さ48cmを測り、正方形を呈している。主軸方向はN－84°－Eであった。

覆土は11層に分けられ、ほぼ自然堆積の様相を呈している。

床はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。

カマドは東壁中央に位置し、幅1.17m、奥行き1.35mを測る石組みのものであり、角礫による支脚が残存していた。

南東コーナー部に、長径0.96m、短径0.6m、深さ40cmを測り、不整形を呈するピットがあり、貯蔵穴とも考えられる。

出土遺物（第59図、第23表、図版79）

覆土中からの遺物は約180点で、図示できたものは9点であった。

1・2は土師器の坏で、1は内面黒色処理のものである。3・4は小形の甕で、5・6・9は大形の甕であるが、6は5・9とは異なる調整技法である。

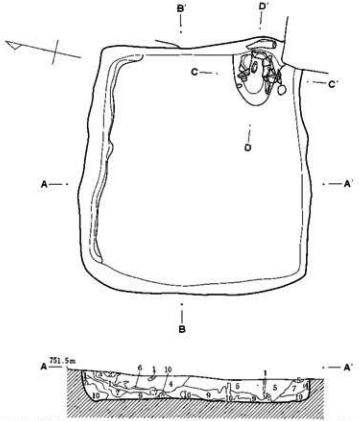
7・8は鉄製品で、7は刀子の茎、8は刀子の身と考えられる。

20号住居跡（第60・61図、図版28・29）

K・L－3グリッドに位置する。

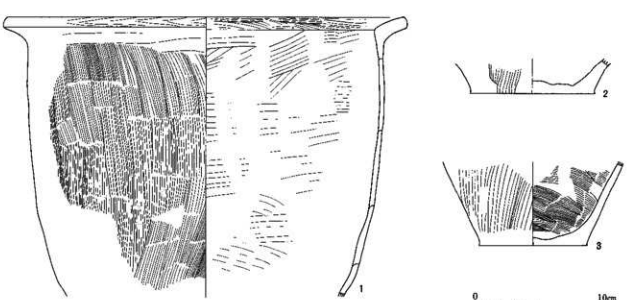
残存する規模は一辺4.9m、深さ36cmを測り、隅丸方形を呈している。主軸方向はN－88°－Eであった。

覆土は9層に分けられ、ほぼ自然堆積の様相を呈している。中層部において、炭化材、焼土が多く検出された。この面が貼床という生活面として利用されている可能性もあるが、明瞭な硬質面などは検出できなかった。

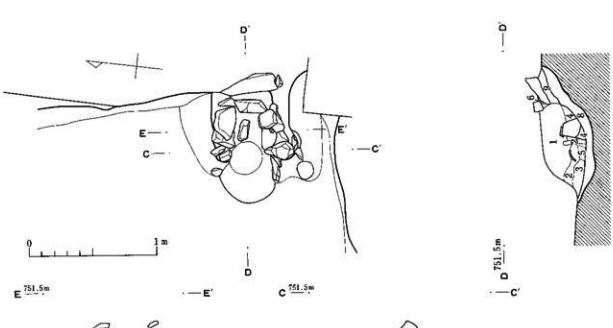


1 暗褐色土　暗褐色土を主体に褐色土が少量混入する。炭化スコリア、黒色スコリアを微量含む。粘性弱、しまり普通。
2 暗褐色土　暗褐色土を上体に褐色土、黒色スコリアを少量、ローム粒を中量、赤色スコリアを微量含む。粘性弱、しまりややあり。
3 暗褐色土　2層上よりも褐色土が少ない。粘性弱、しまりややあり。
4 暗褐色土　暗褐色土を上体に褐色土、炭化物を少量、赤色スコリア、黒色スコリアを微量含む。粘性弱、しまりややあり。
5 暗褐色土　4層上よりやや黒みがある。混入スコリア、炭化物、褐土を微量含む。粘性弱、しまりややあり。
6 暗褐色土　淡褐色土を上体に褐色土をブロック状に含み、やや硬化している。褐土、炭化物を微量含む。粘性弱、しまりあり。
7 暗褐色土　暗褐色土を主体に褐色土がブロック状に中程混入する。赤色スコリアを多量、炭化物を少量含む。粘性弱、しまりややあり。
8 暗褐色土　7層よりも上体に褐色土を中心色む。粘性弱、しまり普通。
9 暗褐色土　暗褐色土を主体に褐色土、下部に焼土を少量含む。粘性弱、しまり普通。
10 暗褐色土　褐褐色土を上体に黒褐色土、ローム粒を少量、褐土、炭化物を微量含む。粘性弱、しまりややあり。
11 暗褐色土　10層土の硬化ブロックを含む。10よりやや明瞭がある。粘性弱、しまりあり。
12 淡褐色土　10層土に炭化物を少量含む。粘性弱、しまりやや甘し。
13 暗褐色土　暗褐色土を主体に黒褐色土を中程、炭化物、ローム粒を少量含む。粘性弱、しまり普通。
14 黒褐色土　焼土層序の最下層。粘性弱、しまり普通。

第52図　16号住居跡



第53図　16号住居跡出土土器



1 暗褐色土　暗褐色土を主体に褐色土を少量、赤色スコリア、黒色スコリアを微量含む。粘性弱、しまり普通。
2 暗褐色土　暗褐色土を主体に褐色土ブロックを中量、焼土を少量、炭化物、赤色スコリアを微量含む。粘性弱、しまりややなし。
3 暗褐色土　暗褐色土を主体に褐色土を少量、焼土を中量、炭化物を少量含む。粘性弱、しまりややなし。
4 暗褐色土　暗褐色土を主体に黒褐色土を少量含む。粘性弱、しまり普通。
5 黒褐色土　暗褐色土を主体に褐色土を少量、地土粒を多量含む。粘性弱、しまりややあり。
6 暗褐色土　暗褐色土を主体に褐色土を微量、焼土粒を少量、まばらに混けたローム・ブロックを含む。粘性弱、しまりややあり。
7 暗褐色土　6とほぼ同じだが、焼土粒を中量含む。粘性弱、しまりややなし。
8 黒褐色土　黒褐色土を主体に暗褐色土を少量含む。粘性弱、しまり普通。
9 暗褐色土　暗褐色土を主体に黒褐色土、褐色土粒を少量含む。粘性弱、しまり普通。

第54図　16号住居跡カマド

第21表　16号住居跡出土土師器観察表

番号	器種	法量(cm)	外面特徴	内面特徴	底部	胎土	色調	焼成	備考
1	甕	(31.7) － －	縦ハケ目 口縁部横ナデ	横ハケ目 輪積み痕が残る		石英・長石・金雲母・砂粒を含む	黒褐色 口縁部赤褐色	良好	カマド内出上
2	甕	－ － 9.8	一部縦ハケ目	ヘラ削り	木葉痕	石英・長石・雲母・砂粒を含む	黒褐色	良好	カマド内出土
3	甕	－ － 8.4	縦ハケ目	横ハケ目	木葉痕	石英・長石・小石・砂粒・金雲母を含む	黒褐色	良好	カマド内出土

床は多少凸凹があり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

カマドは南西コーナー部に位置し、幅1.06m、奥行き1.02mを測るものであり、礫による支脚が残存していた。

南壁中央において長径0.44m、短径0.4m、深さ18cmを測り、不整円形を呈するピットがある。

南東コーナー部において長径1.38m、短径0.5m、深さ22cmを測り、長楕円形を呈するものが検出された。覆土は7層に分けられ、焼土を含んでおり、炉跡とも考えられる。

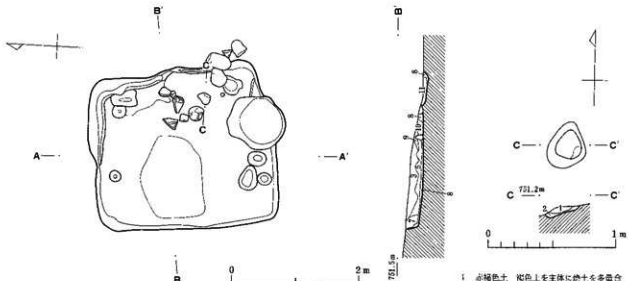
なお、炭化材は同定作業を実施している（第6章第1節）。

出土遺物（第62・63図、第24・25表、図版81～83）

覆土中からの遺物は約660点で、平安時代のものとしては最も多かったが、図示できたものも多く40点である。

第62図－1は小形の壺であり、内外面とも横方向のミガキが施されている。

第62図－2～6は暗文を有する高台付きの椀であり、3・6は内面黒色処理されている。また、2・4・5は調整技法の共通性から黒色処理前のものと考えられる。なお、3には、外面の体部下半及び高台部に線刻と考え



1 暗褐色土 基本堆積のIa層土の流れ込み。スコリアなし。粘性弱、しまりややあり。
2 暗褐色土 暗褐色土を主体に褐色土を少量含む。スコリアなし。粘性弱、しまりややあり。
3 褐 色 土 褐色土を主体に暗褐色土を少量、黒色スコリアを微量含む。粘性弱、しまり普通。
4 褐 色 土 3よりローム土を中量含む。粘性弱、しまり普通。
5 暗褐色土 暗褐色土を主体に褐色土、黒褐色土を少量含む。スコリアなし。粘性弱、しまりあり。
6 暗褐色土 黒色スコリアを微量含む。粘性弱、しまり普通。
7 暗褐色土 6にローム粒を少量含む。粘性弱、しまり普通。
8 褐 色 土 褐色土を主体に暗褐色ナブロックを少量含む。スコリアなし。粘性強、しまりあり。
9 褐 色 土 褐色土を主体にローム粒を中量含む。粘性弱、しまり普通。
10 褐 色 土 褐色土を主体にローム粒を中量含む。粘性弱、しまり普通。
11 暗褐色土 暗褐色土を主体に褐色土を中量含む。粘性強、しまりあり。

第55図　18号住居跡

第56図　18号住居跡出土土器

第22表　18号住居跡出土土師器観察表

番号	器種	法量(cm)	外面特徴	内面特徴	底部	胎土	色調	焼成	備考
1	甕	－ － (10.0)	縦ハケ目	横ハケ目	木葉痕	石英・長石・金雲母を含む	茶褐色	良好	内外面ともに一部剥落

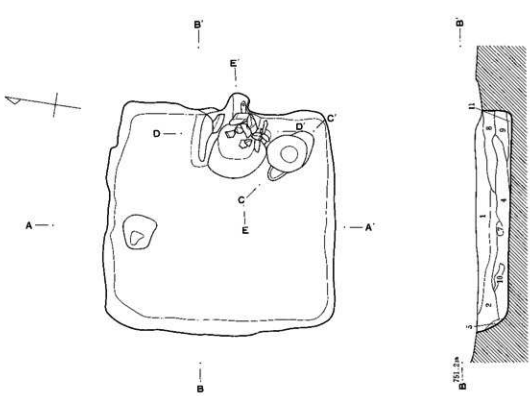
られるものがなされている。

第62図－7～18は杯と皿であるが、いわゆる甲斐型のものとは異なる調整技法である。

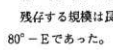
第63図－20は羽釜であり、第63図－19・21・22は甕である。22は内外面ともナデ調整のもので、19・21とはその技法が異なるものである。

第63図－23～34は坏であり、27～34は内面黒色処理がなされており、30・31・34は高台付きのものである。なお、27～30・32には暗文が施されている。

第63図－35～40は灰釉陶器である。35の釉調はほぼ透明で、37・39の釉調は白色であり、36・38・40の釉調は薄緑である。39は輪化の技法が施されており、みこみ部が硯に転用されている。これらの灰釉陶器は、美濃窯虎渓山1号窯式のものと考えられる。



1 暗褐色土 暗褐色土に褐色土、炭化物を少量、赤色スコリアを微量含む。粘性弱、しまりややあり。
2 暗褐色土 暗褐色土を主体に褐色土、ローム粒を中量、ロームブロック、炭化物、赤色スコリアを少量含む。粘性強、しまりややあり。
3 暗褐色土 2層土に4層土を若干含む。粘性強、しまりややあり。
4 暗褐色土 暗褐色土を主体に褐色土を多量、炭化物、ローム粒、ロームブロックを中量、焼土を少量含む。粘性強、しまりややあり。
5 褐 色 土 暗褐色土を主体に黄褐色土を多量含む。粘性強、しまり普通。
6 暗褐色土 焼土を主体に暗褐色土を中量、炭化物を少量含む。粘性なし、しまりあり。
7 暗褐色土 暗褐色土を主体に褐色土を中量、炭化物を地床的に多量、焼土を微量、ロームブロックを少量含む。粘性あり、しまり強。
8 褐 色 土 褐色土に暗褐色土、炭化物、焼土、ロームブロック、黒色スコリアを中量、ローム粒を多量含む。粘性弱、しまりややあり。
9 暗褐色土 暗褐色土を主体に褐色土、炭化物、ロームブロック、黒色スコリアを中量、焼土を微量、ローム粒を多量含む。粘性弱、しまりややあり。
10 ピット
11 褐 色 土 黄褐色土を主体に褐色土、被熱したブロック状のロームを黄色味土を少量、上面に炭化物の薄層を含む。粘性強、しまりあり。



1 暗褐色土 暗褐色土に褐色土、炭化物、焼土を少量、ロームブロック、ローム粒を中量含む。粘性弱、しまりややあり。
2 暗褐色土 暗褐色土に褐色土、炭化物、ロームブロック、ローム粒を少量、焼土を中量、黒色スコリアを微量含む。粘性弱、しまり弱。
3 褐 色 土 黄褐色土に1層土、炭化物を少量含む。粘性あり、しまり弱。
4 暗褐色土 黄褐色土に3層土を中量、炭化物粒を2層土よりもやや少ない傾斜的に多く含む。粘性あり、しまり弱。

第57図　19号住居跡 (1)

21号住居跡（第64・65図、図版30）

L－4グリッドに位置する。北壁付近には、樹木の根があったため、北壁は明確にできなかった。

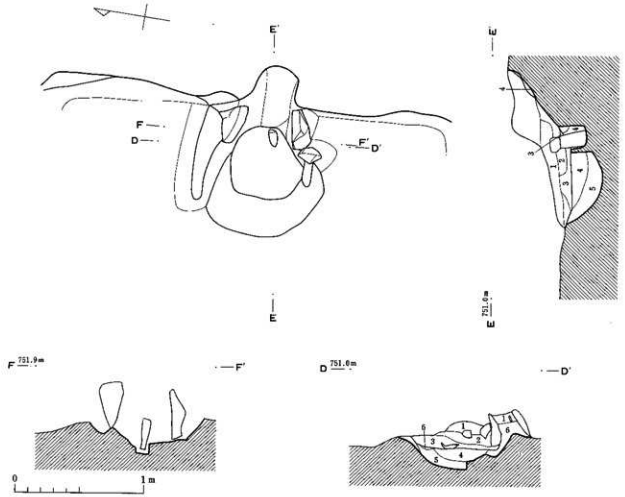
残存する規模は長軸3.9m、短軸3.3m、深さ34cmを測り、ほぼ方形を呈するものと考えられる。主軸方向はN－80°－Eであった。

覆土は6層に分けられ、ほぼ自然堆積の様相を呈している。

床は西から東にかけて緩やかに傾斜しており、壁は急に立ち上がる。

カマドは東壁中央南寄りに位置し、幅1.02m、奥行き0.89mを測る石組みのものであり、礫による支脚が残存していた。袖は角礫によって構築されていた。

東壁中央部に、カマドの北側を切る状態で、長径0.7m、短径0.48m、深さ15cmを測り、楕円形を呈するピットがある。覆土は3層に分けられ、焼土を含んでおり、カマドとも考えられるが、住居との関係は不明である。



1 暗褐色土　住居覆土6と同じ。地土、炭化物を地部内に多量含む。粘性弱、しまりややあり。
2 褐 色 土　暗褐色土に褐色土を少量、地土粒、炭化物粒を中量、ロームブロックを微量含む。粘性なし、しまり弱。
3 褐 色 土　黄褐色土に2層上、地土、炭化物を少量、ロームブロックを多量、焼土スコリアを微量含む。粘性ややあり、しまり強。
4 赤褐色土　焼熱ロームを主体に、若干のロームブロックを含む。粘性弱、しまり強。
5 赤褐色土　焼熱ローム。粘性弱、しまりややなし。
6 暗褐色土　暗褐色土を基体に褐色土を中量、ロームブロック、地土粒を少量含む。粘性弱、しまりややなし。

第58図　19号住居跡カマド

カマドの北側の壁際から、灰釉陶器が検出された。

出土遺物（第66図、第26表、図版80）

覆土中からの遺物は約250点であったが、図示できたものは6点である。

1・2は土師器の坏で、3は須恵器の坏である。4は灰釉陶器の皿であり、釉調は薄緑で、底部は現に転用されている。この灰釉陶器は、尾北窯の藤岡4号窯式2型式のものと考えられる。

6は置きカマド片と考えられ、本遺跡唯一のものである。

2．遺構外出土遺物（第67図、第27表、図版84）

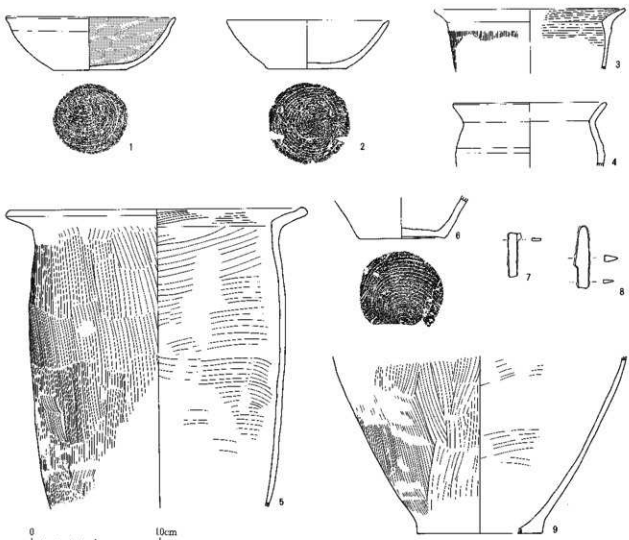
遺構外出土遺物として、14点を図示した。

1・2・4～6・8は土師器の坏で、1は甲斐型と考えられるが、他は胎土・調整技法が異なるものである。

9～11は土師器の皿で、9・10は13号住居跡のものに似ており、かなり新しいものと考えられる。

3は小形の甕と考えられるが、外面ヨコハケ調整という点で、全体の中でもかなり特殊なものである。

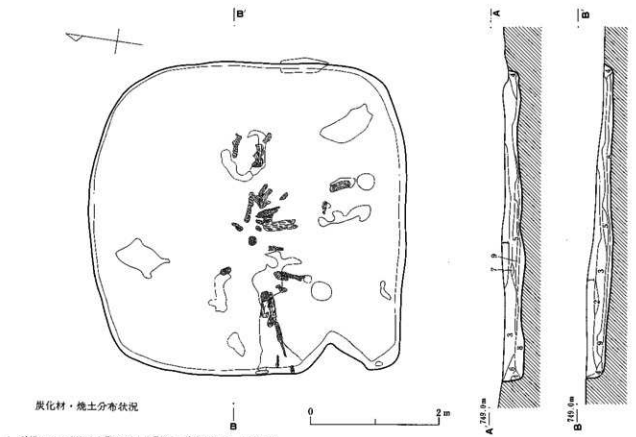
12は鉄製品であり、コテ状の工具と考えられる。13・14は砥石である。



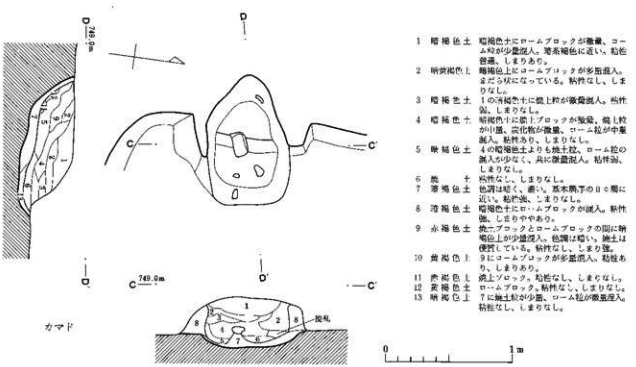
第59図　19号住居跡出土遺物

第23表　19号住居跡出土土師器観察表

番号	器種	法量(cm)	外面特徴	内面特徴	底部	胎土	色調	焼成	備考
1	坏（黒色）	13.2 4.3 5.7	横ナデ ロクロ痕	ミガキ	糸切り	石英・長石・砂粒を含む	外　褐色 内　黒色	良好	カマド内出土
2	坏	12.7 3.9 6.2	横ナデ	ミガキ	糸切り	石英・長石・砂粒を含む	外　暗褐色 内　暗赤褐色	良好	
3	甕	(14.8) － －	横ハケ目 口縁部横ナデ	横ハケ目		石英・長石・金雲母・砂粒を含む	暗赤褐色	良好	
4	甕	(11.0) － －	横ナデ 胴部にロクロ痕を残す	横ナデ 口縁部スス付着		石英・長石・雲母・砂粒を含む	暗褐色	良好	
5	甕	(23.6) － －	縦ハケ目 口縁部横ナデ	横ハケ目		石英・長石・金雲母・砂粒を含む	暗褐色 一部赤褐色	良好	カマド内出上 内面剥落
6	甕	－ － (6.7)	横ナデ	横ナデ	糸切り	石英・長石・雲母・砂粒を含む	外　暗褐色 内　黒褐色	良好	
9	甕	－ － (9.8)	縦ハケ目	横ハケ目		石英・長石・金雲母・砂粒を含む	外　赤褐色 内　暗褐色	良好	カマド内出土 内面剥落

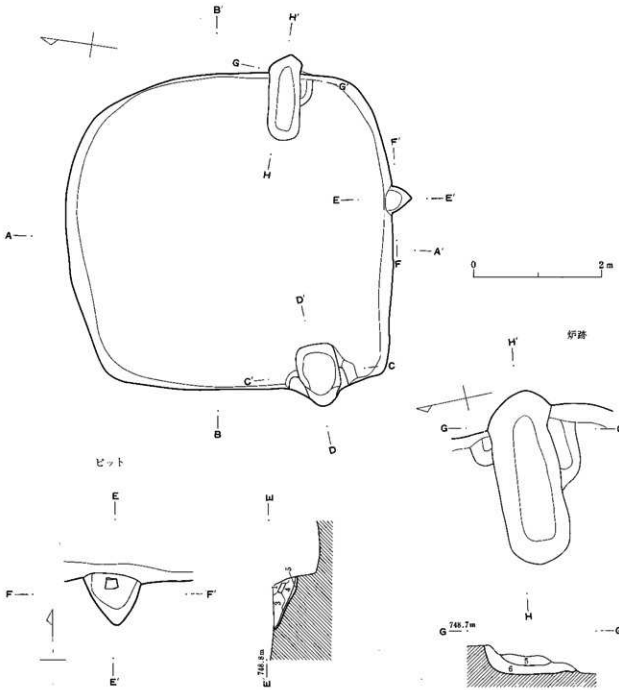


1 暗褐色土　暗褐色土に黒褐色土が中量混入。粘性ややあり、しまりなし。
2 黒褐色土　4層土にロームブロック、ローム粒が多量に混じり、焼土粒が微量に混入。粘性ややあり、しまりややあり。
3 暗褐色土　暗褐色土に炭化物が中量、焼土粒が微量混入。粘性ややあり、しまりなし。
4 黒褐色土　暗褐色土にローム粒が中量混入。炭ー少し、炭化物が微量混入。粘性なし、しまりなし。
5 暗褐色土　3と同じ。粘性なし、しまりなし。
6 黒褐色土　3層上に堆積するが、焼土、炭化物が混入していない。粘性ややあり、しまりなし。
7 焼　土　灰十に暗褐色土が中量混入。
8 黒褐色土　焼土粒、焼土ブロック、粘土粒、粘土ブロックを少量、炭化物を微量混入。
9 暗褐色土　8と同じ。粘性ややあり、しまり強。



1 暗褐色土　暗褐色土にロームブロックが微量、ローム粒が少量混入。茶系褐色に近い。粘性普通。しまりあり。
2 明黄褐色土　暗褐色土にロームブロックが多量混入。まだら状になっている。粘性なし、しまりなし。
3 暗褐色土　1の茶褐色土に焼土粒が微量混入。粘性強。しまりなし。
4 暗褐色土　暗褐色土に粘土ブロックが微量、焼土粒が中量、炭化物が微量、ローム粒が中量混入。粘性あり、しまりなし。
5 暗褐色土　4の暗褐色土よりも焼土粒、ローム粒の混入が少なく、共に微量混入。粘性弱、しまりなし。
6 焼　土　粘性なし、しまりなし。
7 暗褐色土　色調は暗く、濃い。基本層序のII c層に近い。粘性強、しまりなし。
8 暗褐色土　暗褐色土にロームブロックが混入。粘性強、しまりややあり。
9 赤褐色土　焼土ブロックとロームブロックの間に暗褐色土が少量混入。色調は暗い。焼土は硬質している。粘性なし、しまり強。
10 黄褐色土　9にロームブロックが多量混入。粘性あり、しまりあり。
11 赤褐色土　焼土ブロック。粘性なし、しまりなし。
12 黄褐色土　ロームブロック。粘性なし、しまりなし。
13 暗褐色土　7に焼土粒が少量、ローム粒が微量混入。粘性なし、しまりなし。

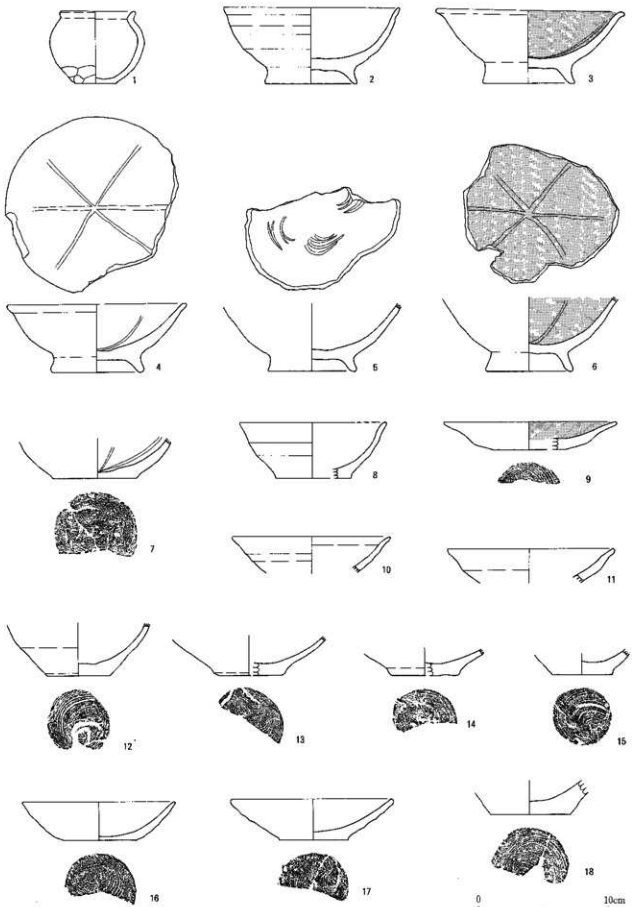
第60図　20号住居跡 (1)



1 黒褐色土　赤色スコリア、粘土粒が微量混入。粘性ややあり、しまり弱。
2 黒褐色土　1.よりも赤色スコリア、粘土粒の量が少ない。粘性ややあり、しまり弱。
3 暗褐色土　粘土ブロック、焼土ブロックを多量混入。粘性ややなし、しまり強。
4 赤褐色土　焼土粒が多量混入。粘性ややなし、しまり弱。
5 暗褐色土　粘土ブロック、焼土ブロックの混合土が混入。粘性なし、しまり普通。

1 暗褐色土　赤褐色土、黒褐色土が少量、焼土粒が微量混入。粘性あり、しまりややあり。
2 赤褐色土　暗褐色土に黄褐色土が少量混入。1よりも明るい。焼土ブロックが微量混入。粘土あり、しまりなし。
3 黄褐色土　黄褐色土に暗褐色土が少量混入。焼土粒が中量混入。粘性あり、しまりなし。
4 焼　土　焼土が硬質し、ピンク色になっている。粘性なし、しまりあり。
5 暗褐色土　赤褐色土に暗褐色土が少量混入。粘性なし、しまりあり。
6 暗赤褐色土　焼土と粘土の混合。粘性あり、しまりややあり。
7 黒褐色土　焼土粒が微量混入。粘性ややなし、しまりなし。

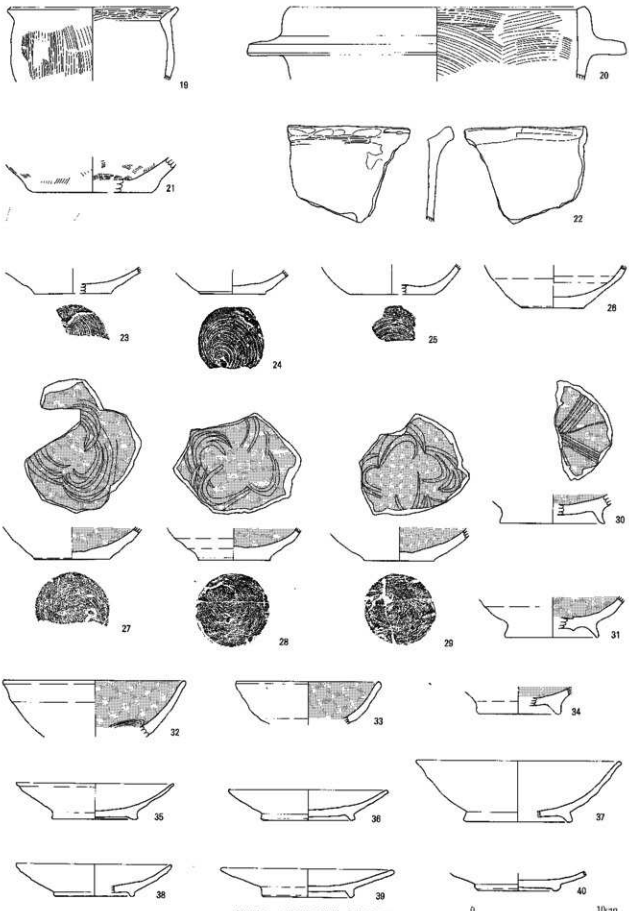
第61図　20号住居跡(2)



第62図　20号住居跡出土土器 (1)

第24表　20号住居跡出土土師器観察表（1）

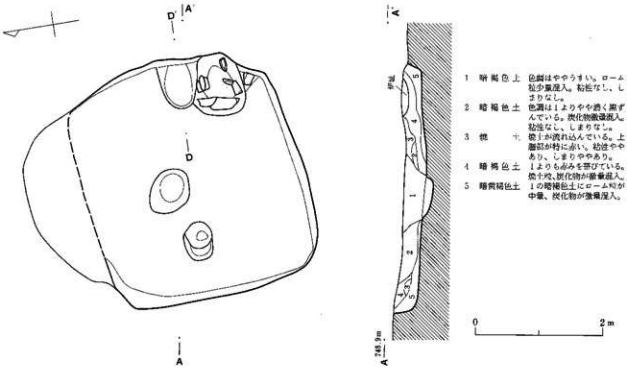
番号	器種	法量(cm)	外面特徴	内面特徴	底部	胎土	色調	焼成	備考
1	坩	5.8 5.7 5.0	横ミガキ 底部付近ヘラ削り	横ミガキ	ヘラ削り	石英・長石・金雲母・黒雲母を含む		良好	完形
2	椀	(13.8) 6.0 6.8	横ナデ	横ナデ→十字状暗文 口縁部横位ミガキ	付け高台のちナデ	石英・長石・金雲母・黒雲母を含む	褐色	良好	
3	椀 (黒色)	14.7 6.0 6.8	横ナデ 輪刻？	横ナデ→十字状暗文 口縁部横位ミガキ	付け高台のちナデ	石英・長石・黒雲母を含む	外　褐色 内　黒色	良好	
4	椀	14.0 5.4 6.7	横ナデ	横ナデ→放射状暗文 口縁部横位ミガキ	付け高台のちナデ	石英・長石・金雲母・黒雲母を含む	褐色	良好	
5	椀	－ － 6.5	横ナデ	横ナデ→花弁状暗文	付け高台のちナデ	石英・長石・金雲母・黒雲母を含む	明褐色	良好	
6	椀 (黒色)	－ － (6.0)	横ナデ ロクロ痕	横ナデ・放射状暗文 体部上半横ミガキ	付け高台のちナデ	石英・長石・金雲母・黒雲母を含む	外　褐色 内　黒色	良好	
7	坏	… … 6.5	横ナデ	横ナデ 十字状暗文	糸切り	金雲母・黒雲母・砂粒を含む	暗褐色	良好	
8	坏	－ － (5.9)	横ナデ	横ナデ	糸切り	金雲母・黒雲母・砂粒を含む	暗褐色	良好	
9	皿 (黒色)	(13.5) 2.2 (5.6)	横ナデ	横ナデ	糸切り	石英・長石・金雲母・砂粒を含む	黒色	良好	
10	坏	(10.3) － －	横ナデ ロクロ痕	横ナデ		長石・金雲母・黒雲母・砂粒を含む	暗褐色	良好	
11	坏	(13.0) － －	横ナデ	横ナデ		石英・長石・黒雲母・砂粒を含む	明褐色	良好	
12	坏	－ － 4.8	横ナデ ロクロ痕	横ナデ	糸切り	石英・金雲母・砂粒を含む	暗褐色	良好	
13	坏	－ － (5.8)	横ナデ	横ナデ	糸切り	黒雲母・長石を含む	明褐色	良好	
14	坏	－ － (5.4)	横ナデ	横ナデ	糸切り	石英・長石・金雲母・砂粒を含む	明褐色	良好	
15	坏	… … 4.6	横ナデ	横ナデ	糸切り	石英・長石・金雲母・砂粒を含む	暗褐色	良好	
16	坏	(11.9) 3.1 5.6	横ナデ	横ナデ 輪積み痕	糸切り	石英・長石・金雲母・砂粒を含む	外　暗褐色 内　黒褐色	良好	
17	坏	(12.8) 3.2 5.4	横ナデ	横ナデ	糸切り	石英・長石・金雲母・砂粒を含む	褐色	良好	
18	坏	－ － 6.2	横ナデ	横ナデ	糸切り	石英・長石・砂粒を含む	暗褐色	良好	



第63図　20号住居跡出土土器 (2)

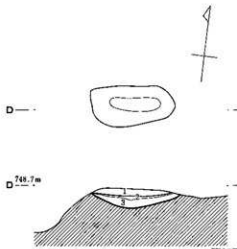
第25表　20号住居跡出土土師器（2）・灰釉陶器観察表

番号	器種	法量(cm)	外面特徴	内面特徴	底部	胎土	色調	焼成	備考
19	甕	(13.4) － －	縦ハケ目	口縁部横ハケ目 胴部横ナデ		石英・長石・金雲母・黒雲母・砂粒を含む	赤褐色	良好	
20	鉢鉢	(23.0) － －	横ナデ	横ハケ目		石英・長石・金雲母・黒雲母・砂粒を含む	暗褐色 外面一部赤褐色	良好	
21	甕	－ － (9.2)	一部縦ハケ目	一部横ハケ目	木葉痕	石英・長石・金雲母・砂粒を含む	暗褐色	良好	
22	壺	－ － －	口縁部横ナデ ナデ	口縁部横ナデ ナデ		長石・雲母・砂粒を含む	赤褐色	良好	
23	坏	－ － (5.2)	磨ナデ	横ナデ	糸切り	緻密 赤色粒子・雲母を含む	明褐色	良好	
24	坏	－ － 5.1	横ナデ	横ナデ	糸切り	緻密 赤色粒子・雲母を含む	赤褐色 一部暗褐色	良好	
25	坏	－ － (6.8)	横ナデ	横ナデ	糸切り	緻密 赤色粒子・雲母・長石を含む	赤褐色	良好	
26	坏	－ － 4.8	横ナデ	横ナデ	糸切り	赤色粒子・石英・長石・雲母を含む	黄褐色	良好	底部厚威
27	坏 （黒色）	－ － 5.9	横ナデ	横ナデ→花弁状暗文	糸切り	砂粒・金雲母・長石・石英を含む	外 暗褐色 内 黒色	良好	
28	坏 （黒色）	－ － 5.6	横ナデ	横ナデ→花弁状暗文	糸切り	砂粒・黒雲母・石英を含む	外 暗褐色 内 黒色	良好	
29	坏 （黒色）	－ － 5.5	横ナデ	横ナデ→花弁状暗文	糸切り	金雲母・黒雲母を含む	外 明褐色 内 黒色	良好	
30	高台付坏 （黒色）	－ － 7.8	横ナデ	横ミガキ→放射状暗文	糸切り→付け高台	小石・赤色粒子を含む	外 褐色 内 黒色	良好	
31	高台付坏 （黒色）	－ － 6.8	横ナデ ロクロ痕	横ナデ	付け高台のちナデ	石英・長石・金雲母を含む	外 暗褐色 内 黒色	良好	
32	坏 （黒色）	(14.3) － －	横ナデ ロクロ痕	横ナデ→暗文 体部上半横ミガキ		石英・長石・金雲母・黒雲母を含む	外 褐色 内 黒色	良好	
33	坏 （黒色）	(11.4) － －	横ナデ	横位ミガキ 体部縦位ミガキ		赤色粒子・石英・雲母を含む	外 褐色 内 黒色	良好	
34	高台付坏 （黒色）	－ － 6.5	横ナデ	横ナデ	付け高台のちナデ	石英・長石・金雲母を含む	外 褐色 内 黒色	良好	
35	灰釉陶器 皿	(12.5) 2.8 (6.6)	横ナデ ロクロ痕	横ナデ	糸切り→付け高台のちナデ	緻密	灰色	良好	施釉内外面漬け掛け？
36	灰釉陶器 皿	12.6 2.4 7.1	横ナデ	横ナデ	削り出し高台	緻密	灰色	良好	施釉内外面漬け掛け
37	灰釉陶器 椀	(16.0) 4.8 (8.0)	横ナデ ロクロ痕 軸のハケ塗り	横ナデ	付け高台のちナデ	緻密	灰白色	良好	
38	灰釉陶器 皿	(12.3) 2.5 6.4	横ナデ	横ナデ	糸切り→付け高台のちナデ	緻密 砂粒を含む	灰褐色	良好	施釉内外面漬け掛け
39	灰釉陶器 皿	(13.6) 2.3 (7.3)	横ナデ	横ナデ	削り出し高台	緻密	灰白色	良好	施釉内外面漬け掛け 転用硯（内）
40	灰釉陶器 皿	－ － 6.6	横ナデ	横ナデ	糸切り→付け高台のちナデ	緻密 砂粒を含む	灰色	良好	施釉内面漬け掛け

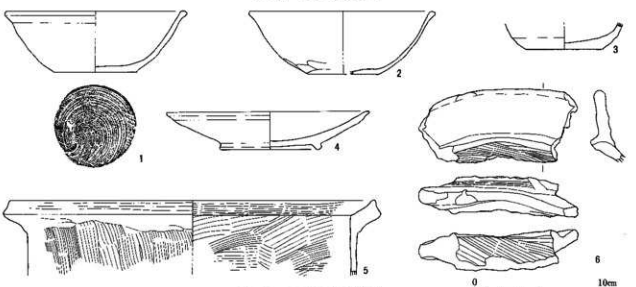


1 暗褐色土 暗褐色土に黄褐色土が中量、焼土粒が少量混入している。粘性なし、しまりなし。
2 淡褐色土 1の層に炭上、炭化物が中量混入している。粘性1よりややあり、しまりなし。
3 暗褐色土 1の層に焼土が少量、炭化物が微量混入している。粘性なし、しまりなし。
4 暗褐色土 赤褐色土に暗褐色土が中量混入している。粘性なし、しまりなし。
5 暗褐色土 暗褐色土に灰と思われる成分が中量、焼土が少量混入している。色調は暗い。粘性なし、しまりなし。
6 赤褐色土 焼土に暗褐色土が少量混入している。火床Ⅰし、焼土ブロック少量あり。粘性なし、しまり普通。
7 暗褐色土 淡褐色土に焼土粒が微量混入している。粘性弱、しまりなし。
8 暗褐色土 暗褐色土にローム粒が少量混入している。やや灰色がかっている。粘性弱、しまり普通。
9 暗褐色土 暗褐色土に炭化粒を多量含む。粘性やあり、しまりなし。
10 暗褐色土 暗褐色土に炭化粒が中量、炭化物を微量含む。粘性やあり、しまりなし。
11 暗褐色土 暗褐色土に焼土ブロックが少量混入している。粘性なし、しまりなし。
12 暗褐色土 暗褐色土に炭化粒が少量、焼土粒が微量混入している。粘性なし、しまりあり。
13 暗褐色土 12にほとんど同じ。粘性やあり、しまりあり。
14 暗褐色土 13層土に黄褐色土、炭化物が微量混入している。粘性やあり、しまりあり。
15 暗褐色土 14層土に黄褐色土が中量混入している。粘性あり、しまりなし。
16 暗褐色土 暗褐色土にローム粒が少量混入している。粘性なし、しまりなし。

第64図　21号住居跡



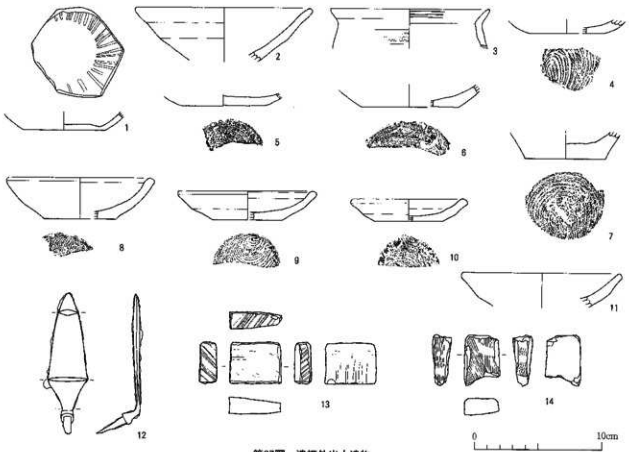
第65図　21号住居跡ピット



第66図　21号住居跡出土遺物

第26表　21号住居跡出土土師器・灰釉陶器観察表

番号	器種	法量(cm)	外面特徴	内面特徴	底部	胎土	色調	焼成	備考
1	坏	14.8 4.8 6.5	横ナデ 部分的に輪積み痕が残る	横ナデ ミガキ	糸切り	長石・雲母を含む	明褐色	良好	
2	坏	(14.7) － －	横ナデ 体部下半ヘラ削り	横ナデ	ヘラ削り	石英・長石を含む	暗褐色 一部黒褐色	良好	外面一部剥落
3	須恵器 坏	－ － 6.0	横ナデ	横ナデ	糸切り	長石・雲母・砂粒を含む	黄褐色	良好	
4	灰釉陶器 皿	15.8 3.0 7.8	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ削り→付け高台	緻密	灰褐色 一部灰釉色 底部黒色	良好	転用硯（底部に墨付着）
5	甕	29.6 － －	縦ハケ目 口縁部横ナデ	横ハケ目		石英・長石・金雲母を含む	外　暗褐色 内　赤褐色	良好	
6	置きカマド		横ナデ	ハケ目		長石・金雲母を含む	赤褐色 一部暗褐色	良好	



第67図　遺構外出土遺物

第27表　遺構外出土土師器観察表

番号	器種	法量 (cm)	外面特徴	内面特徴	底部	胎土	色調	焼成	備考
1	坏	– – 6.4	ヘラ削り	横ナデ→放射状暗文	糸切り→ヘラ削り	緻密 赤色粒子・雲母を含む	赤褐色	良好	内面一部剥落
2	坏	(13.6) – –	横ナデ	横ナデ		石英・長石・雲母を含む	褐色	良好	
3	甕	(12.3) – –	横ハケ 口縁部横ナデ	口縁部横ハケ 横ナデ		長石・雲母を含む	赤褐色	良好	
4	坏	– – (6.0)	横ナデ	横ナデ	糸切り	砂粒・雲母を含む	外　暗褐色 内　赤褐色	良好	
5	坏	– – (6.1)	横ナデ	横ナデ	糸切り	砂粒・金雲母を含む	褐色	良好	
6	坏	– – (7.6)	横ナデ	横ナデ	糸切り	砂粒・金雲母を含む	褐色	良好	内面かなり剥落
7	甕	– – 6.3	横ハケ口	横ナデ	糸切り	石英・長石・雲母・砂粒を含む	褐色	良好	
8	Ⅲ	(11.6) 3.3 (5.6)	横ナデ	横ナデ	糸切り	石英・長石・雲母・赤色粒子・砂粒を含む	明褐色	良好	
9	壺	(10.9) 2.3 (5.2)	横ナデ	横ナデ	糸切り	石英・長石・金雲母・砂粒を含む	褐色	良好	
10	Ⅲ	(9.0) 1.8 (5.0)	横ナデ	横ナデ	糸切り	石英・長石・金雲母・砂粒を含む	明褐色 一部黒褐色	良好	
11	Ⅲ	(12.6) – –	横ナデ	横ナデ		石英・長石・雲母・砂粒を含む	赤褐色	良好	

第4節　中世

1．遺構と遺物

1号石組土坑（第68図、図版31）

K－9グリッドに位置し、1号住居跡の覆土中に構築されている。主軸方向はN－10°－Wである。

長径1.26m、短径1.1m、深さ24cmを測り、不整形を呈する掘り方に、積石が築かれている。

積石には長さ14～70cm、厚さ2～20cmの角礫が使用されており、積石の上面から下面までは40cmを測る。積石の遺存状態は良好である。

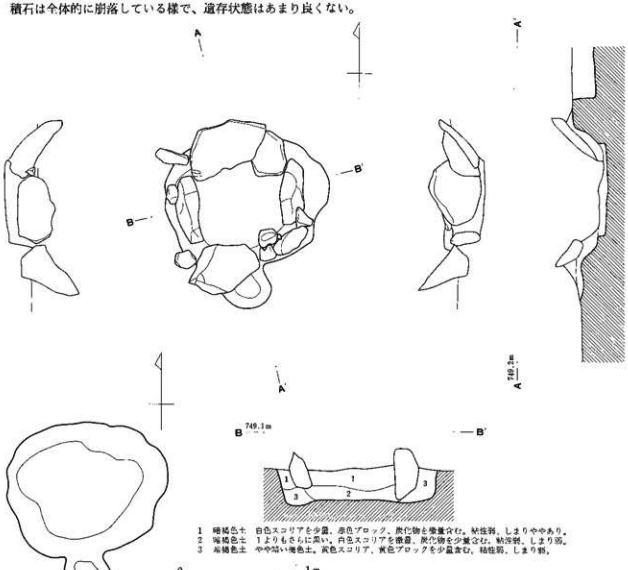
覆土は3層であり、暗褐色土を主体としている。

3号石組土坑（第69図、図版32）

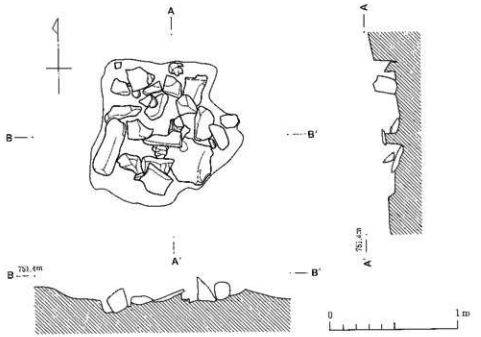
D－8グリッドに位置し、16号住居跡の覆土中に構築されている。主軸方向はN－20°－Eである。

長径1.34m、短径1.2m、深さ20cmを測り、不整形を呈する掘り方に、積石が築かれている。

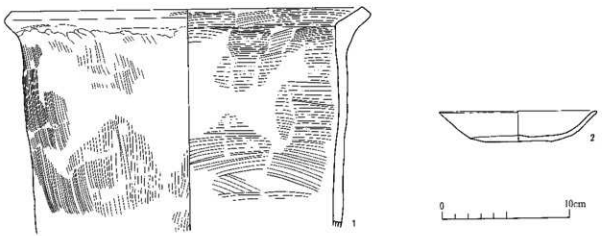
積石には長さ8～46cm、厚さ6～30cmの自然礫が使用されており、積石の上面から下面までは28cmを測る。積石は全体的に崩落している様で、遺存状態はあまり良くない。



第68図　1号石組土坑



第69図　3号石組土坑



第70図　3号石組土坑出土土器

第28表　3号石組土坑出土土師器観察表

番号	器種	法量(cm)	外面特徴	内面特徴	底部	胎土	色調	焼成	備考
1	甕	28.6 — —	縦ハケ[] 口縁部横ナデ	横ハケ目		石英・長石・金雲母・砂粒を含む	褐色	良好	
2	皿	12.4 2.4 4.9	横ナデ	横ナデ 爪状圧痕	手持ちヘラ削り 外周回転ヘラ削り	緻密 赤色粒子・雲母を含む	外　黒褐色 内　暗褐色	良好	

出土遺物（第70図、第28表、図版85）

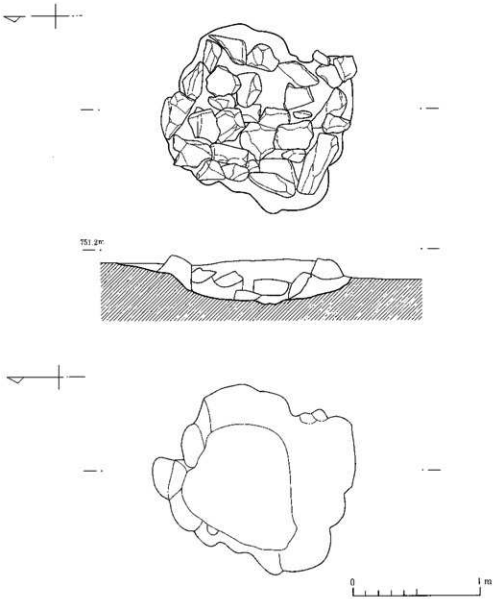
2点を図示したが、16号住居跡のものと同時期の所産と考えられるもので、本遺構に確実に共伴したものか否かは、明確にしえなかった。

4号石組土坑（第71図、図版33）

E－7グリッドに位置する。主軸方向はN－20°－Eである。

長径1.4m、短径1.3m、深さ34cmを測り、不整形を呈する掘り方に、積石が築かれている。

積石には長さ14～52cm、厚さ6～30cmの自然礫が使用されており、積石の上面から下面までは36cmを測る。



第71図　4号石組土坑

積石の遺存状態は良好である。

覆土は黒褐色土の単一層であるが、積石の内側には殆ど全体的に礫が入っていた。

5号石組土坑（第72図、図版34）

F－8グリッドに位置する。主軸方向はN－19°－Eである。

長径1.89m、短径1.5m、深さ70cmを測り、隅丸長方形を呈する掘り方に、積石が築かれている。

積石には長さ8～56cm、厚さ8～30cmの自然礫が使用されており、積石の上面から下面までは38cmを測る。積石は東側が失われているが、遺存状態は比較的良好である。

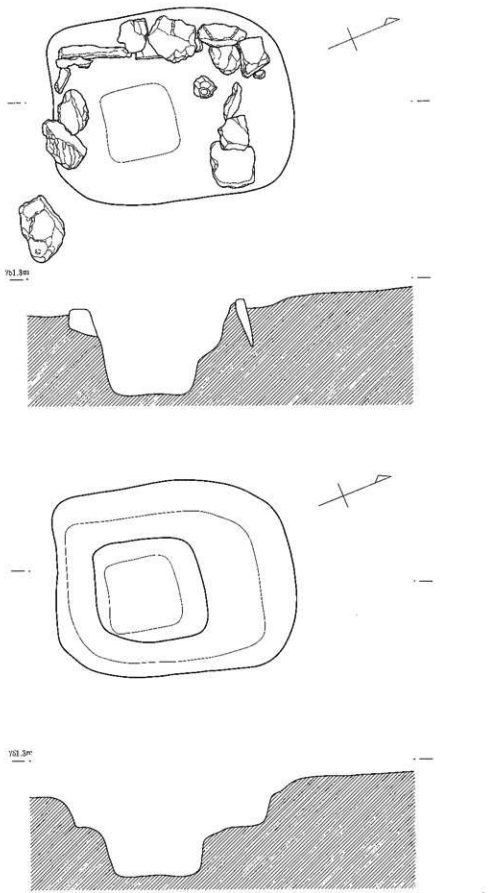
6号石組土坑（第73図、図版35）

F－6～7グリッドに位置する。主軸方向はN－16°－Eである。

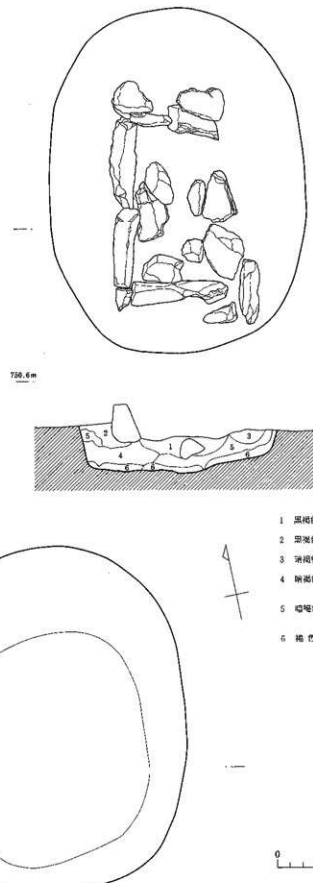
長径2.7m、短径2.0m、深さ40cmを測り、楕円形を呈する掘り方に、積石が築かれている。

積石には長さ18～76cm、厚さ8～30cmの角礫が使用されており、積石の上面から下面までは30cmを測る。積石は東側の一部が崩落しているが、全体的に遺存状態は良好である。

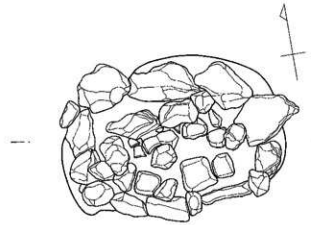
覆土は6層であり、暗褐色土を主体としているが、上層部に礫が散っているため、本来は2段積みであった可能性もある。

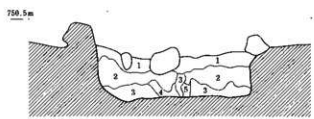


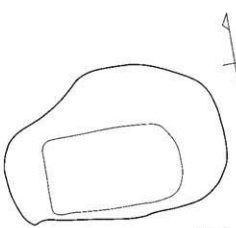
第72図　5号石組土坑


750.6m
1 黒褐色土 炭化粒、炭化ブロック、ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性なし、しまり普通。
2 黒褐色土 1よりやや明るい色調。炭化ブロック、ローム粒を微量含む。粘性なし、しまり普通。
3 褐褐色土 ローム粒、炭化粒、ロームブロックを微量含む。粘性なし、しまり普通。
4 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックを少量、炭化粒、炭化ブロックを微量含む。粘性なし、しまり普通。
5 暗褐色土 4よりやや明るい色調。ローム粒を中量、ロームブロックを少量、焼土ブロックを微量含む。粘性なし、しまり普通。
6 褐色土 ローム粒を多量、ロームブロックを小量含む。粘性なし、しまり普通。
0
1m

第73図　6号石組土坑





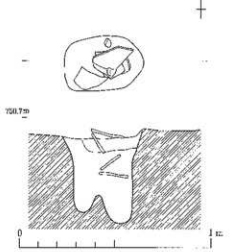


1 黒褐色土　ローム粒、炭化粒、炭化ブロック、焼土粒、焼土ブロックを微量含む。粘性弱、しまりややなし。
2 黒褐色土　1よりやや薄い。ローム粒、ロームブロック、炭化粒、炭化ブロック、焼土粒、焼土ブロックを微量含む。粘性弱、しまり普通。
3 暗褐色土　ローム粒、ロームブロックを中量、炭化粒、炭化ブロックを微量含む。粘性弱、しまりややあり。
4 暗黄褐色土　3よりやや明るい。ローム粒を多量、ロームブロックを中量、炭化粒を微量含む。粘性弱、しまり普通。
5 黄褐色土　暗褐色土ブロックを微量含む。粘性弱、しまりややなし。

0　1m

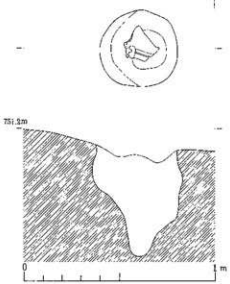
第74図　7号石組土坑

第75図　7号石組土坑出土土器

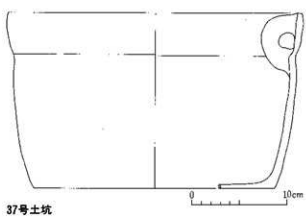


出土土器

第76図　36号土坑



出土土器



第77図　37号土坑

7号石組土坑（第74図、図版36）

F－6グリッドに位置する。主軸方向はN－80°－Wである。

長径1.74m、短径1.2m、深さ40cmを測り、不整形を呈する掘り方に、積石が築かれている。

積石には長さ8～60cm、厚さ8～34cmの自然礫が使用されており、積石の上面から下面までは8cmを測る。積石の遺存状態は良好である。

覆土は5層であり、黒褐色土を主体としている。1層中に礫が散在しており、本来は2段積みであった可能性もある。

出土遺物（第75図、図版87）

残存器高約17cmを測る。内耳土鍋の口縁から底部にかけての破片である。この遺物の検出によって、石組土坑が中世の所産によるものであると判断した。

36号土坑（第76図、図版37・86）

F－5グリッドに位置する。

平面形は不整円形を呈し、長径41cm、短径29cm、最大深45cmの土坑である。

覆土は2層のみで、ローム粒を若干含む暗褐色土である。

出土土器は2個体の内耳土鍋で、破砕された状態で検出された。

出土土器のうち1個体は、底部が抜けているものの、ほぼ完形に復元できたもので、残存器高約15cmを測る。

37号土坑（第77図、図版38・88）

D－7グリッドに位置する。遺構確認の段階で土器が現れていたので、上部の様子は不明である。

平面形は円形を呈し、直径40cm、最大深54cmの土坑を伴うものである。

覆土は暗褐色土の単純層である。

出土土器は内耳土鍋1個体で、覆土上面に置かれている様な状態で検出された。

土器は残存器高約18cmを測るもので、口縁から底部にかけての破片である。

第5節　その他

時期不明の遺構としては、10基の屋外炉と溝があげられる。また、非掘出遺構が10基ある（第30表）。

屋外炉（第78・79図、第29表）

遺構確認の際に、小さな円形の範囲に焼土が広がる部分が検出された。これらは、単独で存在する1号、2号住居跡の周囲に点在する2～4号、L－8グリッド内の3m四方の範囲にまとまる6～10号である。

いずれも、覆土上層は焼土層で、厚さは3～20cmを測るものである。

第29表　屋外炉遺構観察表　（規模の単位はcm）

	規模（長径×短径×深さ）	形態
1	60×56×15	不整円形
2	48×42×23	楕円形
3	40×36×11	不整円形
4	60×18×22	半円形
6	44×42×5	不整形
7	40×40×7	隅丸方形
8	36×20×4	楕円形
9	33×31×7	隅丸方形
10	30×23×3	不整円形

溝（第5図）

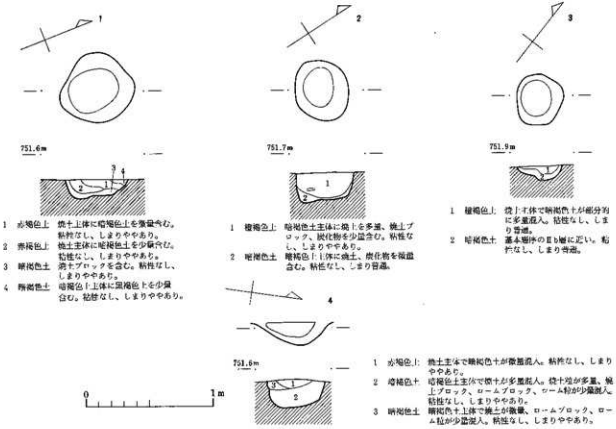
E～I－14～17グリッドの北西から南東への斜面に位置する。

幅60～180cm、深さ18～60cmで、延長51mが検出された。

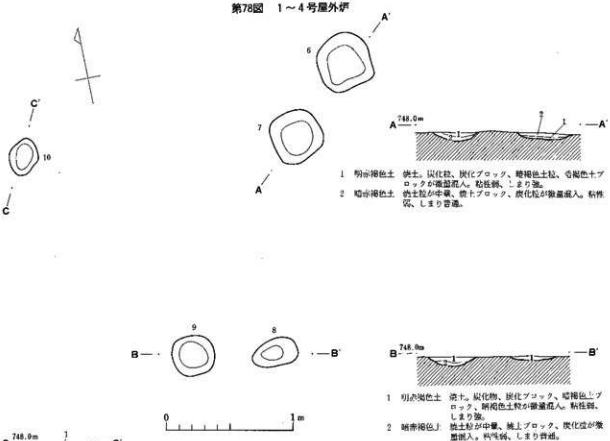
覆土は暗褐色上が主体であり、最上層は黒褐色上である。

第30表　非掘出遺構（規模の単位はcm）

遺構名	グリッド	平面形	断面形	長径	短径	深さ	備考
2号土坑	G－17	不整形	舟底形	56	43	22	
14号土坑	D－8	不整形	舟底形	86	54	32	
17号土坑	E－12	不整円形	舟底形	100	98	20	
19号土坑	K－9	隅丸方形	舟底形	80	72	10	
21号土坑	E－7	隅丸方形	台形	112	88	60	3号住居跡を切る
31号土坑	D－5	円形	台形	90	84	30	18号住居跡を切る
32号土坑	F－8	不整形	台形	120	102	44	33号土坑に切られる
33・34号土坑	F－8	不整形	舟底形	172	98	32	32号土坑を切り、15号住居跡（新）に切られる
12号竪穴状遺構	J－7	楕円形	舟底形	264	152	44	



第78図　1～4号屋外炉



第79図　6～10号屋外炉

第3章　B地区

第1節　概要

1．地区の概要

事業地の北西端に位置する畑地で、約2,300㎡がB地区として調査された（第80図）。

北から南への傾斜地であり、標高771.5～777.0mを測る。

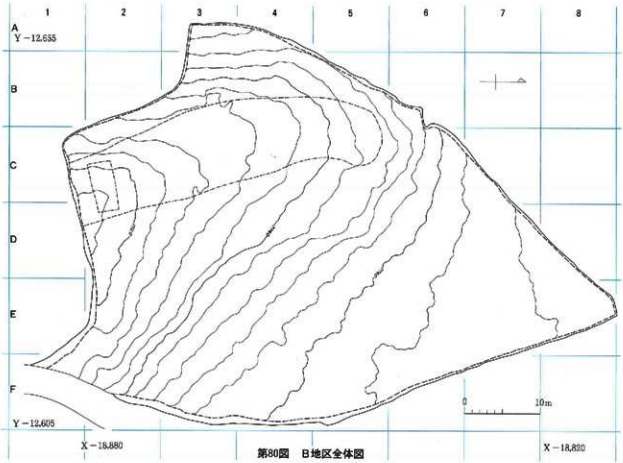
試掘調査において遺構の存在が予想されていたものの、実際に地区全体を精査したところ、明確な遺構は検出できなかった。遺構と考えられていたものは、急斜面から緩斜面へといったわずかな地形変化のある部分に、自然層がたまったものであった。

2．埋没谷

遺構確認作業の際に、調査区西側において幅10m、長さ40mの帯状の範囲に黒色土が広がる部分があることが明らかとなった（第80図点線内）。この範囲内には、近年まで使用されていたと考えられる井戸があり、また、試掘の際にも、この付近の2箇所で自然層の落ち込みが確認されていたため、埋没谷の存在が想定された。そこで、黒色土分布範囲の南側において、横断トレンチを設定して、埋没谷の確認を行なった。

埋没谷は、上部幅7.0m、下部幅2.6m、深さ1.8mを測るもので、断面形は舟底状を呈している。覆土は黒色土を主体としているが、下層には灰色粘土層があり、これが不浸透層となっているためか、断面から水が湧き出す状態であった。この水は、トレンチ内において一定の深さ以上増えることはなかったが、水をポンプアップすれば湧き続ける状態であった。

この谷が、事業地中央東側に隣接してある湧水地への水みちになっていることも考えられたため、調査によっ



第80図　B地区全体図

て水みちを切ることから発生しうる環境への影響や、水が湧き続けている状態も考慮し、埋没谷の全体を掘り返すような調査を実施することを断念することとなった。

3．基本層序

調査区は斜面地であるため、全体的に表土から遺構確認面までが浅い状態であり、僅かな地形変換点において、他より土層の堆積が厚くなる状況が観察された。

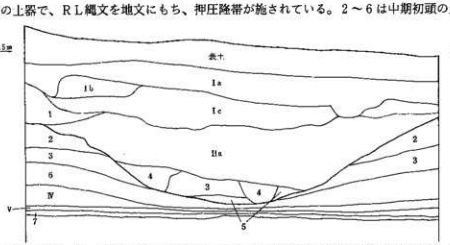
ここでは、横断トレンチにおける土層堆積状況を示し（第81図）、本調査区の基本層序とするが、ローマ数字で表されているものは、A地区における基本層序とほぼ一致する。なお、遺構確認は、Ⅱa層、Ⅲ層、2層を面として捉えて実施した。

第2節　出土遺物

出土遺物数は260点弱で、そのうち約3/4を縄文土器が占める。そのほか、陶磁器・石器・剥片・礫が出土した。

1　土器（第82図）

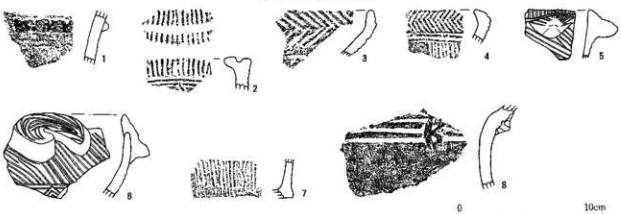
1は前期末の上器で、ＲＬ縄文を地文にもち、押庇隆帯が施されている。2～6は中期初頭の土器で、いずれ



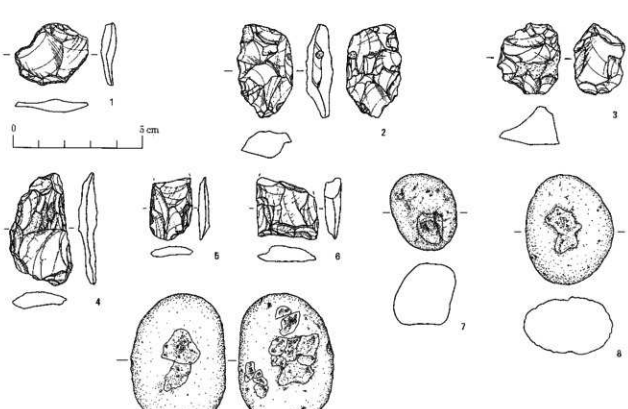
Ⅰa 暗 褐 色 土　やや黒みが強く当っぽい。赤色スコリアを中量、黒色スコリア、ローム粒子を少量、灰白色スコリアを多量含む。粘性弱、しまりややあり。
Ⅰb 褐　色　土　Ⅰa層土にブロック状のローム上を多量、黒色スコリア、灰白色スコリアを少量、炭化物を微量含む。粘性弱、しまりややあり。
Ⅰc 暗 褐 色 土　やや色っぽく赤みがある明褐色土を主体にブロック状の黒褐色上粒と、黒色スコリア、ローム粒を少量、灰白色スコリアを中量、炭化物を微量含む。粘性弱、しまりふつう。
Ⅱa 黒 褐 色 土　黒みが強く、ややつやがある。ブロック状の明褐色土、黄褐色スコリア、黒色スコリア、ローム粒を少量含む。粘性弱、しまりややあり。
Ⅳ　明黄褐色礫石　礫層ととも呼ばれる。径広場1都石間（1m　1）。
Ⅴ　白色粘質土　Ⅰ d色スコリアを多量に含みざらざらしている。粘性強、しまり強。
1　褐 灰 色 土　Ⅰc・Ⅱaの混合上。粘性弱、しまりふつう。
2　褐　色　上　褐色土を主体に暗褐色土を中量、黒褐色上を少量、赤色スコリアを微量含む。粘性ふつう、しまりややなし。
3　埋黄褐色土　黄褐色上を主体に灰色粘土を多量、暗褐色土、灰色スコリアを中量、黒色スコリアを微量含む。粘性強、しまりややあり。
4　黒 褐 色 上　Ⅱa上層褐色上を少量、白色粘土を微量、黄褐色スコリアを中量含む。粘性弱、しまりややなし。
5　灰色粘質土　灰色粘土を上体に暗褐色土を少量、白色スコリアを多量含む。
6　淡黄褐色粘質土　上部には黄褐色粘質土がありその下部には黄色上がある。粘性強、しまり普通。
7　黄褐色粘質土

0　2m

第81図　B地区基本層序



第82図　出土土器



第83図　出土石器

第31表　出土石器一覧表

図	番号	出土位置	器種	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
第83図	1	C－6	細部調整剥片	黒曜石	26.0	27.9	5.0	2.8	
	2	F－7	両面調整石器	黒曜石	37.4	22.4	10.4	7.3	
	3	E－6	石核	黒曜石	24.0	28.3	20.0	12.5	
	4	D－6	打製石斧	粘板岩	89.9	48.0	14.0	56.5	
	5	C－5	打製石斧	粘板岩	(48.7)	33.5	7.7	16.3	
	6	C－2	打製石斧	ホルンフェルス	(47.9)	48.5	14.3	40.3	
	7	B－5	磨石	輝石安山岩	60.3	52.0	49.7	153.3	
	8	C－5	凹石	輝石安山岩	87.5	67.0	45.2	316.1	
	9	D－7	凹石	輝石安山岩	106.5	74.5	48.5	474.4	

も口縁部破片である。2は口縁部に粘土紐を貼付し、以下は平行沈線文が施される。口唇上には粘土紐貼付後、凹線文が加えられている。3・4は口縁部に矢羽状の沈線文が施されている。5・6は口縁部に突起を設けたもので、5の口唇部には粘土紐が貼付されている。7は平行沈線文が施された底部破片である。8は堀ノ内1式土器で、頸部がくびれる深鉢の破片である。頸部に横位の区画が見られる。

2　石器（第83図、第31表）

石器は11点出土し、そのうち9点を図示した。1は細部調整剥片で、素材の周縁に調整が加えられている。2は両面調整石器である。3は小型の石核である。4～6は打製石斧である。4は完形で撥形を呈するが、5・6は欠損しているため、形状は不明である。7は磨石であるが、敲打痕も見られることから、叩く、磨る両方に使用されたものと思われる。8・9は凹石である。

第4章　E　地　区

第1節　概　要

1．地区の概要

事業地の中央東側に位置する雑木林であった部分、約3,000㎡がE地区である（第84図）。

調査区北西すみに最高点をもち、西半分はほぼ平坦であるが、東半分は西から東への傾斜地となっている。標高は771.7～774.2mを測る。

2．遺構

遺構はすべて東側の斜面地において検出されており、縄文時代晩期のものを中心とした、土坑8基が検出されている。

3．遺物

出土遺物数は約4,000点である。その大半を縄文土器と石器・剥片が占め、そのほか陶磁器、礫が出土した。遺物の分布を見てみると、22・23・26・28～30号土坑の位置するE－2・3グリッドに集中しており、全遺物数の約40%を占める。次に、C・D－5・6グリッドにも遺物が集中している。このように大きく見ると、土坑が位置する南東部と、北西部とに2つのまとまりが認められるようである。

4．基本層序

調査区は雑木林であったためか、攪乱がひどく、また、斜面地は自然層が流失していることによって堆積が少なく、10～20cmの表土を除去するとすぐにローム層（A地区におけるⅢa層）上面が現れるという状況であった。

第2節　遺構と遺物

1．縄文中期

23号土坑（第85図、図版40）

E－3グリッドの斜面地に位置する。

残存する規模は長径0.69m、短径0.55m、深さ15cmを測り、不整円形を呈している。断面形はほぼ舟底形である。主軸方向はN－23°－Wであった。

覆土は暗褐色土の単一層であった。

底面はゆるい弧を描いている。

出土遺物（第86図、第88図4・5、第32表、図版67）

覆土中からは約60点の遺物が出土した。図示したものは中期初頭の土器6点と石器2点である。

1～4は深鉢の口縁部破片である。いずれも半行沈線文により、横位、縦位、斜格子目文が施される。1の口縁部文様下には、地文にLR縄文がわずかに観察される。3、4の口唇上には連続爪形文が施されている。5は1～4と同じ形状の深鉢の胴部破片である。6は波状口縁で、橋状把手を持つ土器である。

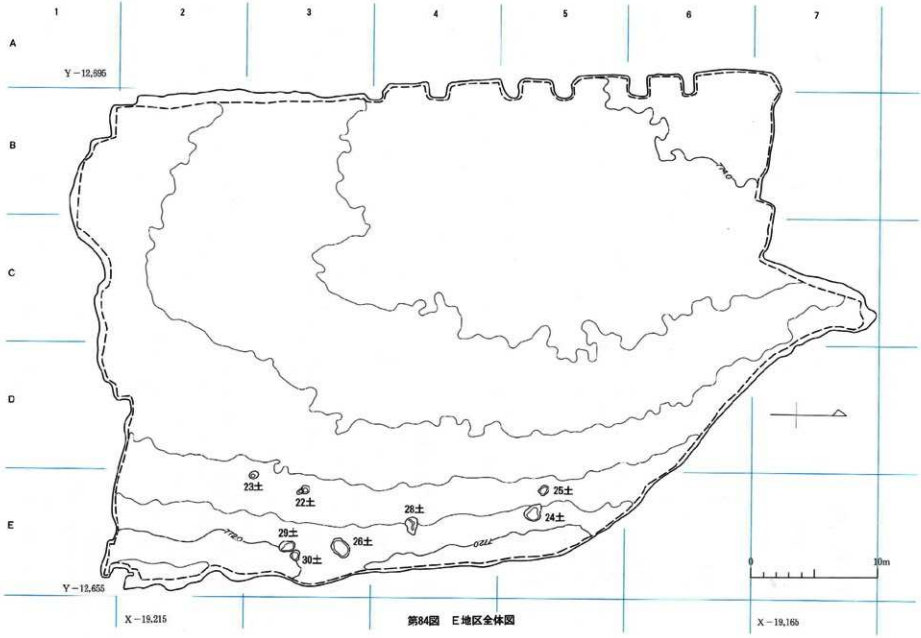
第88図4は敲石、5は完形の打製石斧である。

2．縄文晩期

22号土坑（第85図、図版39）

E－3グリッドの斜面地に位置する。

残存する規模は長径1.02m、短径0.68m、深さ40cmを測り、不整形を呈している。断面形は不整形である。主軸方向はN－21°－Wであった。


1
2
3
4
5
6
7
A
B
C
D
E
Y－12,995
Y－12,655
X－19,215
X－19,165
23土
22土
28土
25土
24土
29土
26土
30土
0
10m

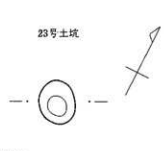
第84図　E地区全体図

22号土坑

1 暗褐色土　褐色土ブロックを微量、褐色土粒を微量含む。粘性なし、しまり普通。

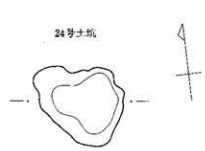
2 明褐色土　明褐色土主体で褐色土が微量混入し、1よりややかみが強い。粘性なし、しまり普通。

23号土坑



1 暗褐色土　粘性なし、しまり普通。

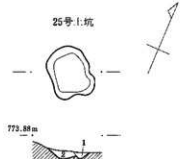
24号土坑



1 暗褐色土　暗褐色土主体で褐色土が微量混入している。粘性なし、しまり普通。

2 褐色土　褐色土主体で暗褐色土を微量含む。粘性なし、しまり普通。

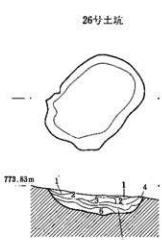
25号土坑



1 暗褐色土　暗褐色土主体で褐色土を少量含む。粘性なし、しまり普通。

2 明褐色土　暗褐色土主体で褐色土を微量含み、1より黒みが強い。粘性なし、しまり普通。

26号土坑



1 暗褐色土　暗褐色土が主体で褐色土が少量混入している。粘性なし、しまり普通。

2 暗褐色土　暗褐色土が主体で褐色土が少量混入し、1よりやや赤みが強い。粘性なし、しまり普通。

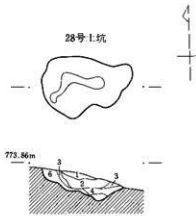
3 暗褐色土　暗褐色土が主体で褐色土が微量混入し、1より黒みが強い。粘性なし、しまり普通。

4 暗褐色土　暗褐色土が主体で褐色土が少量混入し、1より黒みが強いが3より弱い。粘性なし、しまり普通。

5 暗褐色土　暗褐色土が主体で褐色土が中量混入し、2より赤みが強い。粘性なし、しまりややなし。

6 暗褐色土　暗褐色土が主体で褐色土が少量混入し、4より黒みが強く3より弱い。粘性なし、しまり普通。

28号土坑



1 暗褐色土　暗褐色土が主体で褐色土が少量部分的に混入し、2に比べやや黒みが強い。粘性なし、しまり普通。

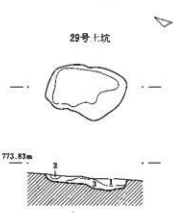
2 暗褐色土　暗褐色土が上体で褐色土が部分的に混入している。粘性なし、しまり普通。

3 暗褐色土　暗褐色土が上体で褐色土をやや含む。2より黒みは強いが1ほどではない。粘性なし、しまり普通。

4 暗褐色土　暗褐色土が主体で褐色土が多量部分的に混入している。粘性なし、しまり普通。

5 暗褐色土　混じり物はない。4より黒みが強いが3ほどではない。粘性なし、しまり普通。

29号土坑

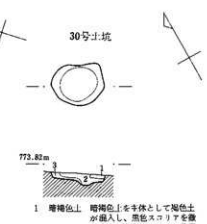


1 暗褐色土　暗褐色土が上体で褐色土が少量混入している。粘性なし、しまり普通。

2 明褐色土　1よりも黒みが強い。粘性なし、しまり普通。

3 褐色土　褐色土が主体で暗褐色土を少量含む。粘性なし、しまり普通。

30号土坑

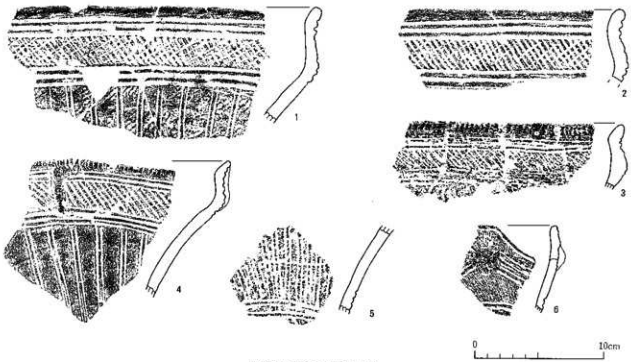


1 暗褐色土　暗褐色土を主体として褐色土が混入し、黒色スコリアを微量含む。粘性なし、しまり普通。

2 暗褐色土　暗褐色土を主体として褐色土が微量混入し、黒色スコリアを微量含む。1よりも黒みが強い。粘性なし、しまり普通。

3 明褐色土　明褐色土を主体に褐色土が少量混入している。1よりもやや明るい。粘性なし、しまり普通。

第85図　22～26・28～30号土坑



第86図　23号土坑出土土器

覆土は2層に分けられ、ほぼ自然堆積の様相を示している。

底面は段をもっている。

出土遺物（第87図1～15、第88図1、第32表）

覆土中からは約70点の遺物が出土した。図示したものは晩期終末の土器15点と石器1点である。

第87図2は浅鉢の体部片である。沈線文を磨き込み浮線文を作り出している。5は壺の口縁部片である。端部に眼鏡状のモチーフをもち、頸部にわずかに段を有する。6は甕の口縁部である。凹線を引き、下部に細い隆帯状のヤガを作り出している。1・3・4は甕の体部片である。体部のモチーフは、いずれも沈線部を磨き込み浮線文を作り出しているが、3は磨き込みがやや足りない。横方向の細密条痕を施している。7～9は凹線をもつ深鉢の口縁部片で、9は斜位に細密条痕を施している。10は雷状ジグザグ文を有する細密条痕文深鉢の体部片である。11・12は素口縁の細密条痕文深鉢で、11は口縁部が内湾し、12は外反する。13は細密条痕文深鉢の体部片である。14・15は網代圧痕をもつ底部片である。

第88図1は細部調整剥片である。腹面左側縁に調整を加えており、下部を欠損している。

26号土坑（第85図、図版43）

E－3グリッドの斜面地に位置する。

残存する規模は長径1.64m、短径1.15m、深さ31cmを測り、長楕円形を呈している。断面形はほぼ逆台形である。主軸方向はN－41°－Eであった。

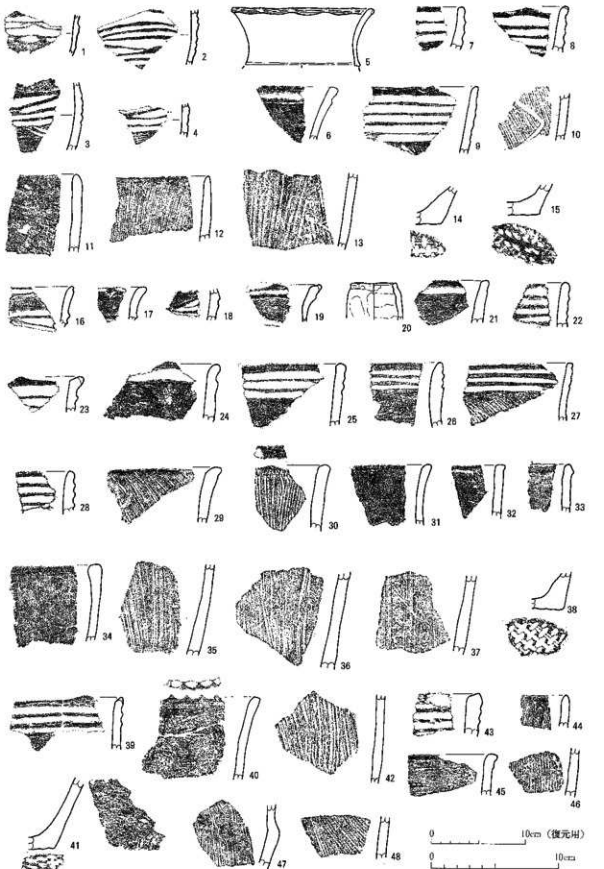
覆土は6層に分けられ、自然堆積の様相を示している。

底面はほぼ平坦である。

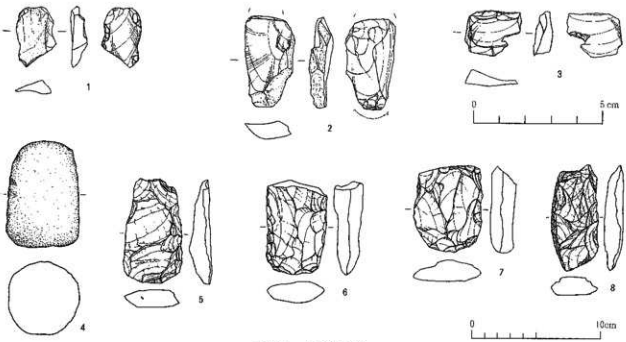
出土遺物（第87図16～38、第88図2、第32表）

覆土中からは約160点の遺物が出土した。図示したものは晩期終末の土器23点と石器1点である。

第87図16～19は浅鉢である。器形は16は外反、17・19は屈折する。16・17・19は端部に沈線による眼鏡状のモチーフを有し、頸部が無文帯をなす。20は小形の直口壺である。口縁部で少しすぼまる。内外面に指頭痕が明瞭に残る。21・22・24～26は凹線を有する甕の口縁部片である。21・24は単線、他は多条の凹線を施す。25は浮線文を作り出し、他は凹線のみである。いずれも体部は無文である。23・27・28は細密条痕文深鉢である。いずれも口縁部に凹線を有する。27の凹線は鋭角的な沈線による。29・30は外反する細密条痕文深鉢である。ともに素



第87図　22・26・28～30号土坑出土土器



第88図　土坑出土石器

第32表　土坑出土石器一覧表

図	番号	出土位置	器種	石材	長さ（m）	幅（m）	厚さ（m）	重量（g）	備考
第88図	1	22号土坑	細部調整剥片	黒曜石	(24.3)	15.1	5.5	5.5	
	2	26号土坑	細部調整剥片	黒曜石	25.6	36.2	6.6	5.4	
	3	29号土坑	細部調整剥片	黒曜石	18.7	22.2	5.9	2.1	
	4	23号土坑	敲石	輝石安山岩	85.3	56.7	57.8	398.8	
	5	23号土坑	打製石斧	ホルンフェルズ	82.0	46.5	18.5	77.3	
	6	28号土坑	打製石斧	砂岩	(73.5)	46.6	22.5	96.0	
	7	28号土坑	打製石斧	シルト岩	(68.8)	53.4	19.0	105.1	
	8	29号土坑	打製石斧	シルト岩	83.2	36.5	15.0	58.0	

口縁であるが、29の端部はわずかに外側に折れている。31～34は無文の深鉢の口縁部片である。31は外反するもの、34は端部が肥厚し内湾するもの、32・33は端部が外側に軽くはみ出す特徴をもつ。この特徴の土器は愛知県樫王貝塚などに類似するものがあり、東海系土器の可能性がある。35～37は細密条痕文深鉢の体部片である。38は網代圧痕をもつ底部片である。

第88図２は細部調整剥片である。腹面下端部に調整が見られる。

28号土坑（第85図、図版44）

Ｅ－４グリッドの斜面地に位置する。

残存する規模は長径1.44ｍ、短径0.99ｍ、深さ49cmを測り、不整形を呈している。断面形は舟底形である。主軸方向はＮ－78°－Ｅであった。

覆土は５層に分けられ、ほぼ自然堆積の様相を示している。

底面は段をもっている。

出土遺物（第87図39～41、第88図６・７、第32表）

覆土中からは約70点の遺物が出土した。図示したものは晩期終末の土器３点と石器２点である。

第87図39は回線文の壺で、体部は無文である。40は無文の深鉢で、口縁部に上部から連続した押圧文を施す。41は網代圧痕をもつ底部片である。

第88図６・７は打製石斧である。いずれも上部を欠損している。

29号土坑（第85図、図版45）

Ｅ－３グリッドの斜面地に位置する。

残存する規模は長径1.28m、短径0.84m、深さ18cmを測り、不整形を呈している。断面形はほぼ逆台形である。主軸方向はN－25°－Wであった。

覆土は3層に分けられ、ほぼ自然堆積の様相を示している。

底面はほぼ平坦である。

出土遺物（第87図42、第88図3・8、第32表）

覆土中からは約25点の遺物が出土した。図示したものは晩期終末の土器1点と石器2点である。

第87図42は細密条痕文深鉢の体部片である。

第88図3は腹面左側縁に抉りを入れた細部調整剝片である。8は完形の打製石斧である。

30号土坑（第85図、図版46）

E－3グリッドの斜面地に位置する。

残存する規模は長径0.8m、短径0.64m、深さ18cmを測り、不整円形を呈している。断面形はほぼ逆台形である。主軸方向はN－57°－Wであった。

覆土は3層に分けられ、ほぼ自然堆積の様相を示している。

底面は段をもっている。

出土遺物（第87図43～48）

覆土中からは35点の遺物が出土した。図示したものは晩期終末の土器6点である。

第87図43は凹線文を有する深鉢の口縁部片、44は素口縁の細密条痕文深鉢である。45は端部が外側に軽くはみ出す深鉢の口縁部片である。47は屈折する細密条痕文甕の体部片、46・48は細密条痕文深鉢の体部片である。

3．時期不明

24号土坑（第85図、図版41）

E－5グリッドの斜面地に位置する。

残存する規模は長径1.48m、短径1.25m、深さ30cmを測り、不整形を呈している。断面形は不整形である。主軸方向はN－53°－Wであった。

覆土は2層に分けられ、ほぼ自然堆積の様相を示している。

底面は段をもっている。

覆土中の遺物は少なく、図示できるものはなかった。

25号土坑（第85図、図版42）

E－5グリッドの斜面地に位置する。

残存する規模は長径0.78m、短径0.6m、深さ13cmを測り、不整形を呈している。断面形は不整形である。主軸方向はN－40°－Wであった。

覆土は2層に分けられ、ほぼ自然堆積の様相を示している。

底面は段をもっている。

覆土中の遺物は少なく、図示できるものはなかった。

第89図　遺構外出土土器(1)

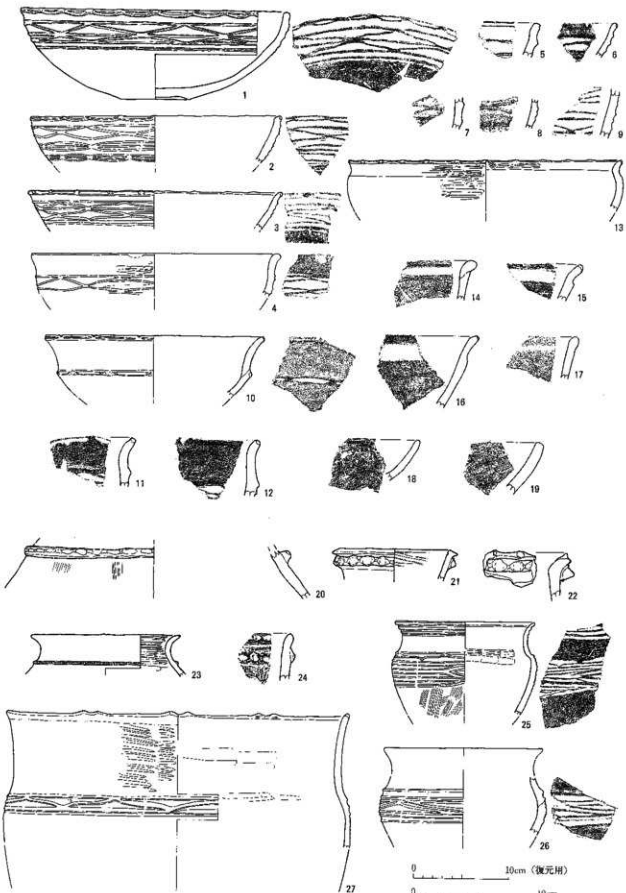
第90図　遺構外出土土器(2)

第3節　遺構外出土遺物

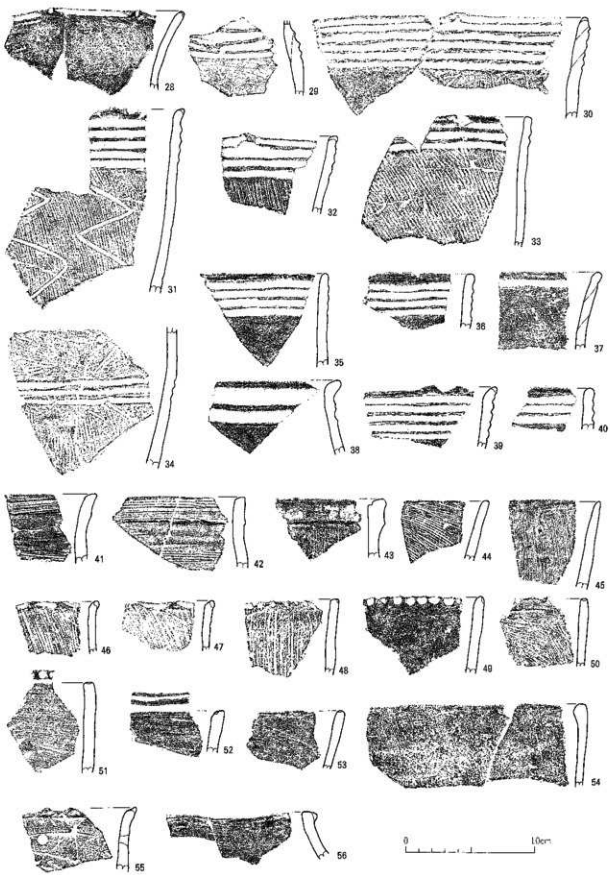
遺構外出土遺物は、土器が3,000点弱、石器・剥片が540点程となっている。土器は縄文前期末～中期初頭と、晩期終末のものが出土しており、出土数はほぼ同じである。前期末～中期初頭の土器はC・D－5・6グリッドに、晩期終末の土器はE－2・3グリッドに集中して出土している。

1．土器（第89～93図、図版68）

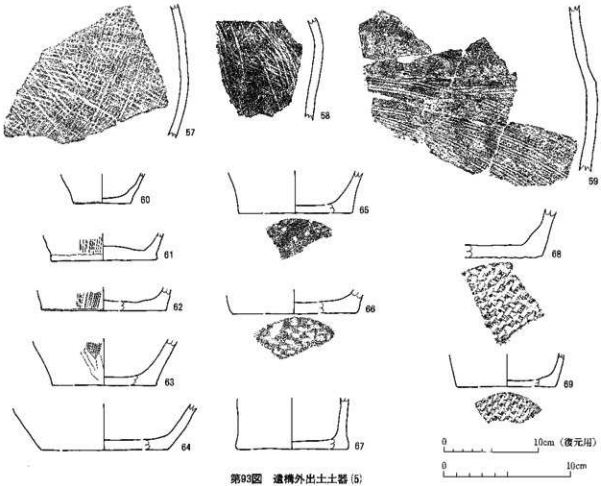
第89図1～7は縄文前期末の土器である。1は沈線文、2・3は結節沈線・浮線文、押圧隆帯文が施されている。4・5は隆帯を有するもの。6は関西系、7は北陸系の土器と思われる。8～52は中期初頭の土器である。21～23・37に縄文が施されるほかは、殆どが沈線文系の土器である。8～16は古いタイプの土器で、連続爪形文、



第91図　道構外出土土器(3)



第92図　遺構外出土土器(4)

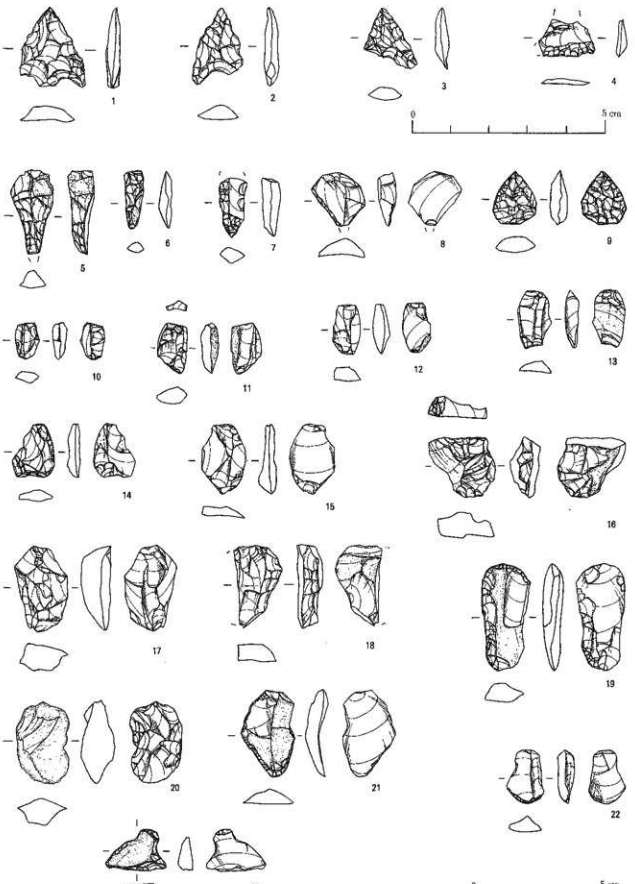


第93図　遺構外出土土器(5)

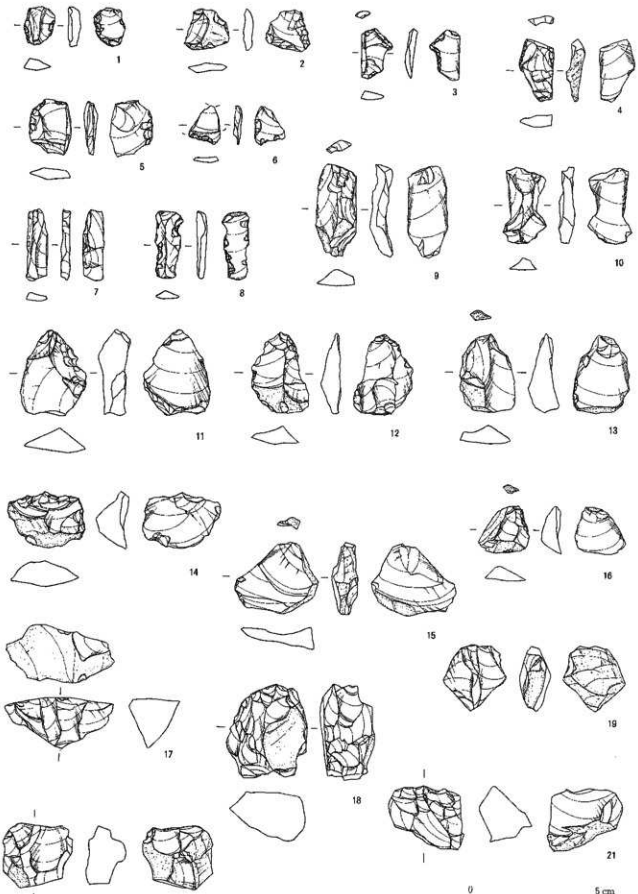
陰刻文、沈線文が施されている。13のように把手状のものも見られる。17・18は沈線文により渦巻文を描くもの。19は橋状把手をもつものである。20は隆帯上に連続爪形文を施す。21・22は縄文を地文にもち、沈線文が施される。23～25は口唇部下に押し引き文が施されるもので、23はその上部に縄文が、24は刺突文が、25は沈線文が施されている。26～29は半行沈線文が施されるもので、26・27の口唇上には結節沈線文が施されている。31・32は結節沈線文が施され、口唇上には沈線文、刺突文が施される。33～37は刺突文、結節浮線・沈線文が施される土器。38～52は半行沈線文により、縦位、横位、波状、格子目状のモチーフを描くものである。47は斜位に半行沈線文を施した後、ソウメン状貼付文を施している。

第91～93図は、縄文晩期終末の土器群である。いずれも典型的な氷1式段階に相当する。

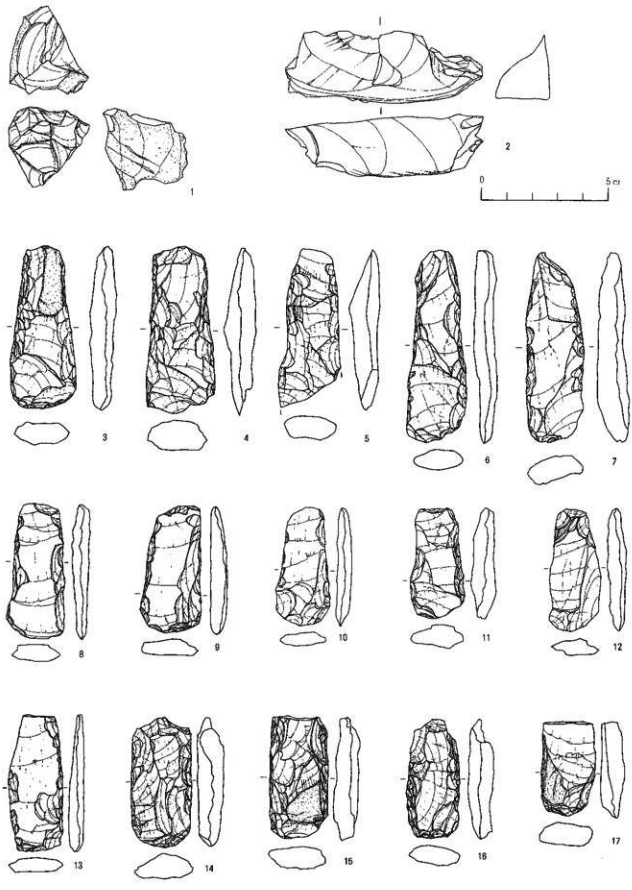
1～19は浅鉢である。1・2・3・6は口縁部がやや内湾気味に立ち上がる器形、3は外反する器形、11～14・16・17は屈折する器形である。1～3は端部に眼鏡状のモチーフを有し、体部に沈線部を磨き込んだ浮線文を有する。モチーフは直線的な菱形が基本だが、わずかにレンズ状にふくらむ部分がみられる。4は頸部無文帯を有するが、体部のモチーフの描き方や構成は1・2とあまりかわらない。11～13は頸部が無文で、屈折部に眼鏡状のモチーフを展開するもの。14～18は口外帯をもち、体部が無文のもの。体部にミガキを施すことが多い。屈曲の明瞭なもの・不明瞭なもの・ないもの等がある。18・19は素口縁の無文のもの。口縁部は内湾気味に開く。



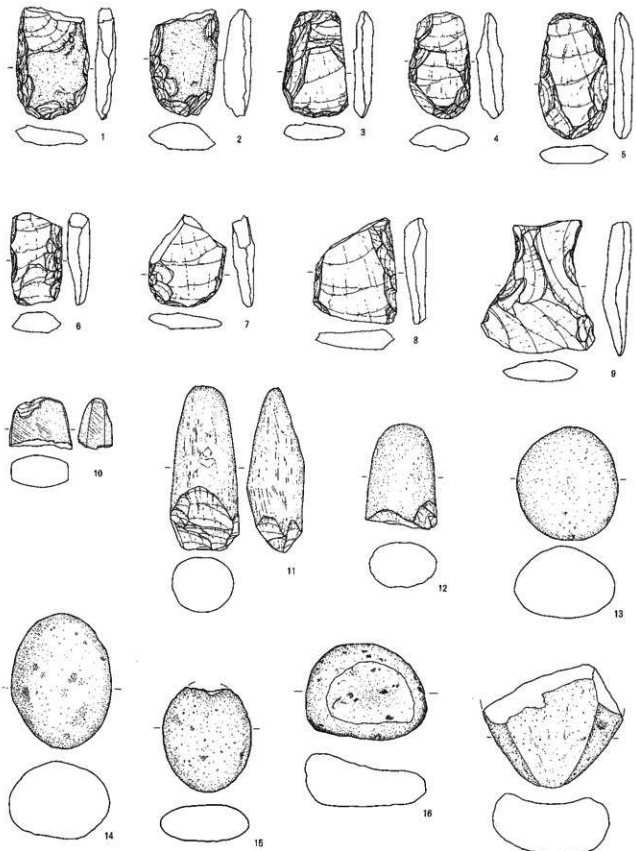
第94図　遺構外出土石器 (1)



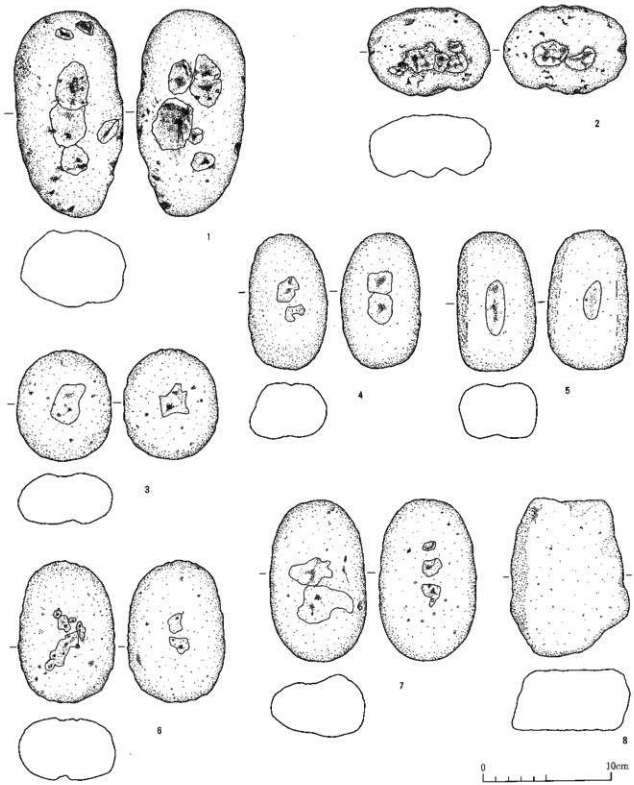
第95図　遺構外出土石器(2)



第96図　遺構外出土石器(3)



第97図　遺構外出土石器 (4)



第98図　遺構外出土石器(5)

第33表　遺構外出土石器一覧表

図	番号	出土位置	器種	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
第91図	1	D－3	石鏃	黒曜石	(20.9)	(17.2)	4.3	1.2	
	2	C－7	石鏃	黒曜石	20.0	13.9	4.3	0.7	
	3	E　2	石鏃	黒曜石	(16.1)	(13.2)	4.0	0.5	
	4	E－3	石鏃	黒曜石	(14.0)	(12.3)	2.6	0.4	
	5	B－3	石錐	黒曜石	(32.4)	16.7	10.4	4.7	
	6	E－3	石錐	黒曜石	22.8	8.1	6.1	1.0	
	7	C－6	石錐	黒曜石	(23.5)	10.7	7.4	1.7	
	8	E－2	石錐	黒曜石	(21.0)	20.9	8.7	2.6	
	9	D－5	両面調整石器	黒曜石	21.1	16.9	6.9	2.2	
	10	E－2	ピエス・エスキュ	黒曜石	14.5	9.6	4.9	0.6	
	11	D－3	ピエス・エスキュ	黒曜石	18.6	11.7	6.8	1.5	
	12	E－3	ピエス・エスキュ	黒曜石	19.4	11.2	5.9	1.3	
	13	B－4	ピエス・エスキュ	黒曜石	22.5	13.1	5.0	1.3	
	14	C－3	ピエス・エスキュ	黒曜石	21.1	16.3	3.9	1.3	
	15	E－2	ピエス・エスキュ	黒曜石	27.4	17.1	6.6	2.2	
	16	C－7	ピエス・エスキュ	黒曜石	15.4	21.7	11.4	2.9	
	17	B－5	ピエス・エスキュ	黒曜石	33.3	20.1	11.3	6.8	
	18	C－5	ピエス・エスキュ	黒曜石	(18.0)	32.0	10.1	6.0	
	19	表採	スクレイパー	黒曜石	42.0	18.9	6.7	5.9	
	20	E－6	スクレイパー	黒曜石	31.9	20.1	13.1	7.4	
	21	C－6	スクレイパー	黒曜石	31.9	24.6	7.3	4.0	
	22	D－2	スクレイパー	黒曜石	20.8	14.1	5.5	1.5	
	23	D－2	石匙	黒曜石	16.3	23.6	5.0	1.7	
第95図	1	E－3	細部調整剥片	黒曜石	15.4	12.0	4.8	0.9	
	2	C－3	細部調整剥片	黒曜石	17.8	17.7	3.7	1.1	
	3	E－3	細部調整剥片	黒曜石	18.2	14.5	2.9	0.6	
	4	D－3	細部調整剥片	黒曜石	13.1	24.3	4.8	1.7	
	5	D－2	細部調整剥片	黒曜石	20.8	(17.6)	4.6	1.6	
	6	C－2	細部調整剥片	黒曜石	14.5	12.3	2.2	0.5	
	7	B－5	細部調整剥片	黒曜石	(28.3)	8.9	3.2	1.0	
	8	E－3	細部調整剥片	黒曜石	26.4	10.5	4.0	1.1	
	9	C－6	細部調整剥片	黒曜石	35.2	21.9	6.5	3.9	
	10	D－5	細部調整剥片	黒曜石	(30.3)	17.1	5.2	2.3	
	11	E－2	細部調整剥片	黒曜石	34.2	25.7	8.6	6.0	
	12	C－5	細部調整剥片	黒曜石	30.7	25.7	7.5	3.7	
	13	D－3	細部調整剥片	黒曜石	30.8	21.4	8.0	4.8	
	14	E－3	細部調整剥片	黒曜石	21.3	31.6	10.8	5.9	
	15	B－1	細部調整剥片	黒曜石	28.3	33.8	8.6	6.3	
	16	C－5	細部調整剥片	黒曜石	18.7	19.0	6.8	2.1	
	17	表採	石核	黒曜石	20.1	43.2	24.7	16.1	
	18	B　7	石核	黒曜石	32.5	36.4	21.0	30.4	
	19	D－2	石核	黒曜石	24.3	24.8	12.0	5.3	
	20	E－2	石核	黒曜石	24.8	28.5	17.3	10.2	
	21	D－5	石核	黒曜石	24.8	30.7	24.6	12.9	
第96図	1	南東部	石核	黒曜石	27.3	39.6	32.4	36.8	
	2	B－6	石核	黒曜石	30.2	78.0	26.1	58.6	
	3	D－5	打製石斧	砂岩	128.3	51.5	21.0	153.2	
	4	D－5	打製石斧	砂岩	132.0	53.0	25.0	163.7	
	5	B－4	打製石斧	砂岩	(126.8)	49.0	23.5	140.7	
	6	D－2	打製石斧	シルト岩	152.8	46.0	16.5	146.4	
	7	B－7	打製石斧	ホルンフェルス	150.5	46.5	25.0	195.0	

図	番号	出土位置	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
第96図	8	D－5	打製石斧	シルト岩	105.5	45.0	14.5	77.9	
	9	南東部	打製石斧	砂岩	99.8	47.0	15.0	80.2	
	10	E－2	打製石斧	シルト岩	93.5	42.5	12.5	53.4	
	11	南東部	打製石斧	シルト岩	87.5	41.8	20.0	82.9	
	12	D－6	打製石斧	シルト岩	96.7	41.0	15.0	58.9	
	13	D－2	打製石斧	輝石安山岩	(107.0)	42.5	12.0	71.5	
	14	C－6	打製石斧	砂岩	102.0	45.7	20.8	121.6	
	15	C－3	打製石斧	砂岩	(98.0)	45.5	19.2	115.2	
	16	B－5	打製石斧	ホルンフェルス	94.2	42.0	19.0	89.4	
	17	C　5	打製石斧	砂岩	(74.8)	42.5	19.5	79.4	
第97図	1	C－6	打製石斧	砂岩	(87.5)	57.0	16.0	107.7	
	2	C－5	打製石斧	タルク	(85.0)	52.5	21.3	117.2	
	3	C－6	打製石斧	砂岩	83.7	50.0	14.5	70.2	
	4	C－3	打製石斧	シルト岩	83.5	48.7	21.2	86.9	
	5	C－6	打製石斧	砂岩	98.8	52.8	15.0	114.9	
	6	南東部	打製石斧	砂岩	(73.5)	40.0	17.0	65.9	
	7	南東部	打製石斧	砂岩	(72.0)	59.5	17.5	69.6	
	8	B－4	打製石斧	砂岩	(83.0)	64.0	18.3	107.8	
	9	D－4	打製石斧	ホルンフェルス	106.8	87.8	18.2	184.6	
	10	D－2	磨製石斧	石灰岩	(40.5)	(48.5)	26.6	75.7	
	11	D－2	磨製石斧	輝石安山岩	130.0	53.9	43.5	429.4	
	12	D－2	敲石	砂岩	83.0	56.2	35.5	241.5	
	13	D－2	磨石	輝石安山岩	89.3	78.0	56.5	542.4	
	14	D－2	磨石	輝石安山岩	106.5	77.5	61.0	608.5	
	15	B－7	磨石	輝石安山岩	(82.0)	70.0	29.0	204.9	
	16	E－3	石皿	輝石安山岩	82.5	94.0	42.3	372.2	
	17	D－3	石皿	輝石安山岩	(195.5)	(216.5)	95.5	4,056.0	
第98図	1	北東部	凹石	砂岩	164.5	81.5	61.8	1,057.9	
	2	B－4	凹石	輝石安山岩	70.3	95.0	49.3	460.9	
	3	D－2	凹石	輝石安山岩	87.0	73.5	39.5	293.0	
	4	C－5	凹石	輝石安山岩	106.5	61.5	44.0	339.4	
	5	南東部	凹石	輝石安山岩	109.5	61.5	43.0	463.4	
	6	C－4	凹石	輝石安山岩	111.5	76.0	48.7	675.0	
	7	D－2	凹石	輝石安山岩	127.0	75.5	49.0	618.4	
	8	表採	凹石	輝石安山岩	127.0	90.8	48.3	1,067.5	

20～24は壺である。23は口縁部がくの字に外反する小形壺である。端部に小さい突起と頸部に一条のやや細い隆帯をもつ。隆帯には刻みを施す。内面に横方向のミガキを施す。遠賀川式の壺の影響を受けて作ったものであろうか。20は大形壺体部片で、肩部にやや太めの隆帯をもつ。隆帯には押圧を施している。体部外面に一部細密条痕が残存する。21・22は東海地方の樫上式の壺を在地で模倣した壺、いわゆる「在地型突帯文壺」である。ともに口縁部の突帯文に、縦方向に工具を押し当てている特徴は、樫王式のやや古い段階のテクニックを踏襲していることを示す。21の内面の条痕などは東海ではあまりみられず、在地で付加したテクニックであろうか。

25～28は甕である。25・26は中形の甕で口縁部と体部に文様を有する。体部のモチーフは文様帯に斜線のはいるもので、25は沈線化している。25の体部中位以下には細密条痕を施している。27は、口縁端部と体部に文様を有する大形の甕である。27は端部に2山の突起を、28は沈線で眼鏡状風なモチーフをもつ。体部のモチーフは太めの沈線により浮線風に作り出している。体部は無文である。35～38は口縁部に凹線をもつ甕である。35・38のように口縁部の内湾するものもある。体部は無文である。57～59は細密条痕文甕の体部片である。59は体部が屈折し、屈折以下に斜位に細密条痕文を施し、57・58は不定方向に施す。

30～34・39・40は凹線をもつ深鉢である。口縁端部に山状突起を有し、32のように凹線を施すときに上下の浮線を結合し声字文状に作り出すものもある。体部には細密条痕文を施し、多くは31のように雷状ジグザグ文を体部に施文するが、33のようにないものもある。14～16は口縁部の肥厚する細密条痕文深鉢で、口縁部に細い隆帯状のケバをもつ特徴がある。14・15は頸部に無文帯を有し、細密条痕文は横方向に施文している。43は端部内面に沈線を有し、ケバ以下に縦方向の細密条痕文を施す。44・45は外反する素口縁の細密条痕文深鉢。54は端部が肥厚し口縁部の内湾する細密条痕文深鉢。46～53・55・56は口縁端部及び口唇部に加飾を施した深鉢である。46・47は端部に沈線による眼鏡状風のモチーフをもつもの、48・49は端部の斜上に押圧文をもつもの、50・51は口唇部上に押圧文をもつもの、52・53は口唇部に沈線をもつもの、55は端部に強い押圧文をもつもの、56は端部に前方に突出した突起をもつものである。49・52～56は無文で、他は細密条痕文を施す。

60～69は底部である。60～64・67は底部外面が無文でナデを施している。体部に細密条痕文が残る。65は底部外面に木葉痕をもつ。66・68・69は底部外面に網代痕をもつ。

2．石器（第94～98図、第33表、図版70～72）

遺構外からは合計168点の石器が出土した。内訳は、石鏃5点、石錐4点、両面調整石器1点、スクレイパー5点、細部調整剝片25点、ピエス・エスキーユ14点、石核12点、打製石斧72点、磨製石斧2点、凹石15点、磨石9点、敲石2点、石皿1点、砥石1点、その他1点である。用いられる石材については、A・B地区と同様に、剝片石器・石核は黒曜石のみ、礫石器は殆どが輝石安山岩である。

第94図1～4は石鏃である。1は凹基有茎鏃、2・3は凹基無茎鏃、4は未製品と思われる。5～8は石錐である。6が完形のほかは、いずれも端部を欠損する。9は両面調整石器、10～18はピエス・エスキーユである。19～22はスクレイパーである。19はピエス・エスキーユを素材としている。23は石匙である。第95図1～16は細部調整剝片である。2は石鏃未製品とも考えられる。9～16は側縁に使用痕と思われる微細な剝離痕が見られる。17～21・第96図1・2は石核である。3～17・第97図1～9は打製石斧である。短冊形が殆どで、分銅形は1点のみである（第97図9）。打製石斧に用いられる石材は、砂岩が多いが、そのほかシルト岩・ホルンフェルスなど、ほかの器種に比べ石材の選択性が見られないようである。10・11は磨製石斧で、10は定角式、11は乳棒状である。12は敲石、13～15は磨石、16・17は石皿である。第98図1～7は凹石、8は砥石であり、殆どが輝石安山岩製である。

第5章　G地区

第1節　概要

1．地区の概要

事業地の南部東側に位置する雑木林であった部分、約1,500㎡がG地区である（第99図）。

調査区北側に最高点をもち、東と南に緩やかに傾斜している。標高は780.0～781.3mを測る。

2．遺構

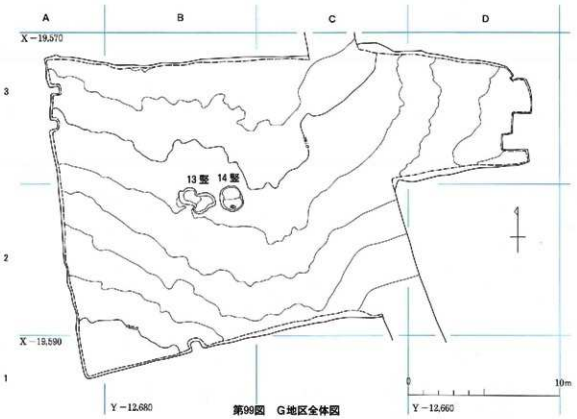
遺構は緩やかな斜面地において検出されており、縄文時代の竪穴状遺構2基が検出されている。

3．遺物

出土遺物は少なく、40点弱である。すべて縄文時代と思われるもので、土器は諸磯c式と氷I式に限られるようである。石器・剥片はすべて黒曜石で、図示していないが両面調整石器2点が出土している。

4．基本層序

調査区は雑木林であったためか、攪乱がひどく、また、斜面地は自然層が流失していることによって堆積が少なく、20cmほどの表土を除去するとすぐにローム層（A地区におけるⅢa層）上面が現れるという状況であった。



第99図　G地区全体図

第2節　遺構と遺物

1．遺構内

13号竪穴状遺構（第100図、図版47）

Ｂ－２グリッドに位置する。

残存する規模は長径2.5m、短径1.2m、深さ30cmを測り、不整形を呈するものである。断面形はほぼ皿状を呈している。主軸方向はＮ－70°－Ｗであった。

覆土は２層に分けられるが、ほぼ自然堆積を呈している。

底面には段差がみられた。

出土遺物（第102図）

覆土中の遺物は少なく、図示できたものは１点のみである。

１は縄文晩期のもので、細密条痕文を有する鉢の体部片であり、横方向に細密条痕文を施している。

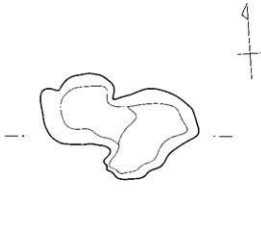
14号竪穴状遺構（第101図、図版48）

Ｂ－２グリッドに位置する。

残存する規模は長径1.7m、短径1.5m、深さ27cmを測り、不整円形を呈するものである。断面形はほぼ皿状を呈している。主軸方向はＮ－18°－Ｗであった。

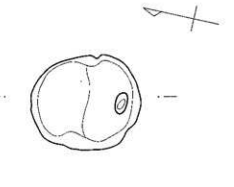
覆上は３層に分けられるが、ほぼ自然堆積を呈している。

底面には段差がみられた。



1　暗褐色土　ローム粒を多量、ロームブロックを少量、炭化粒、炭化ブロックを微量含む。粘性弱、しまりややあり。
2　暗褐色土　ローム粒を多量、ロームブロックを少量、炭化粒を微量含む。粘性弱、しまりややあり。

第100図　13号竪穴状遺構



1　暗褐色土　ローム粒を多量、ロームブロックを少量、炭化粒、炭化ブロックを微量含む。粘性弱、しまりややあり。
2　暗褐色土　ローム粒を多量、ロームブロックを少量、炭化粒を微量含む。粘性弱、しまりややあり。
3　暗褐色土　ローム粒を多量、ロームブロックを微量含む。粘性弱、しまりあり。

第101図　14号竪穴状遺構

第102図　13・14号竪穴状遺構出土土器

第103図　遺構外出土土器

出土遺物（第102図）

覆土中の遺物は少なく、図示できたものは3点であった。

2は口縁部の外反する浅鉢であり、沈線化した多条の凹線文を有する。3は体部で屈曲する甕であり、屈曲以下に横方向の細密条痕文を施している。4は細密条痕文甕の体部片である。いずれも縄文晩期終末の氷Ⅰ式の最も新しい段階に相当するものである。

2．遺構外出土遺物（第103図）

1・2は縄文前期の諸磯c式土器であり、集合沈線文を地文にもつ口縁部破片である。1は結節浮線文と円形貼付文が施されており、円形貼付文上には半截竹管で刺突が加えられる。2は結節沈線文と円形貼付文が施されている。

3～6は縄文晩期終末の氷Ⅰ式土器である。3・4は浅鉢であり、3は口外帯と頸部無文帯を有し、体部でやや屈曲するもので、4は体部に沈線化したモチーフを有するものである。5・6は細密条痕文の深鉢であり、5は外反する素口縁、6は体部片である。

第６章　自然科学分析

第１節　健康村遺跡自然科学分析調査報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

健康村遺跡（山梨県北巨摩郡長坂町大字中丸字新代1622番地ほか所在）は、八ヶ岳の南麓斜面にあたり、標高は750ｍを測る。本遺跡は、平成４年度に調査を行った結果、縄文時代および平安時代・中世の遺構・遺物が数多く検出された。本稿は、新宿区区民健康村遺跡調査団からの依頼により、各遺構から検出された遺物や土壌中に含まれる微化石について調査した結果をまとめたものである。

各遺構から検出された遺物については、材および種実遺体を対象にした。材については当時の用材選択について、種実については可食植物を中心とした当時の植物利用について考えることとした。植物遺体を対象にした古環境解析を行う場合、花粉分析等が一般的であるが、これらは遺体の保存上の問題から調査対象が主に水成堆積物に限られる。ただし、植物珪酸体では台地上に存在する風成堆積物にも適用対象となることから、直接生活の場となっていた台地上についての考察が可能になる。そこで自然堆積層であるソフトローム～黒ボク土にかけての植物珪酸体分析を行い、台地上のイネ科植物相の変遷に関して検討を行った。

１．試料

材同定の試料は、平安時代の住居址である15号住居跡と20号住居跡から採取されたもの35点である（No.１～30，No.978 SI-20フク上，SI-15）。このうち、通し番号が付いていなかったNo.978 SI-20フク土は便宜上No.31とし、SI-15の４袋の試料にはNo.32～35の番号を付した。なお、炭化材が検出された住居址は、いずれも平安時代に属し、これらは住居址の構築材と考えられる。

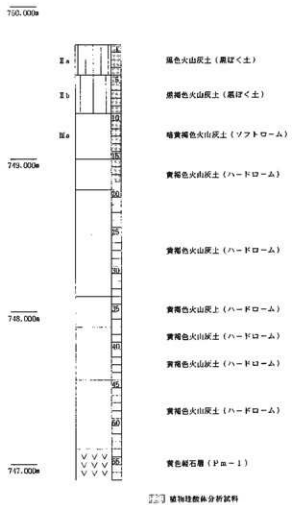
種実同定用試料は、各遺構（住居址・土坑・石組土坑・炉跡など）の覆土中からサンプリングされ、ウォーターセパレーションを利用して採取されたもの266袋について行った。これらの試料についての詳細は、各同定結果と併せて記した。

植物珪酸体分析については、II・Ｉ－９・10グリッドにおけるテストピット南北セクションから5cm間隔で採取された試料中からソフトローム～黒ボク土に相当する層を中心に18点を選択して分析を行った。分析地点の柱状図および試料採取位置については、第104図に示す。

２．材同定

１）方法

試料を乾燥させたのち、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の剥断面を作製し、走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）で観察・同



第104図　試料採取層位

定した。

2）結果

同定結果を第34表に示す。35点の試料の内、No.31には2種類の材が認められたため、a，bに分けて記載した。試料には、スギ（近似種を含む）、ヒノキ属近似種、コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種、コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種、ハリギリの5種類が認められた。各種類の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質を以下に記す。なお、和名・学名等は、「原色日本植物図鑑木本編〈Ⅰ・Ⅱ〉」（北村・村田，1971,1979）に従い、一般的性質などについては「木の辞典　第1巻～第6巻」（平井，1979-1980）も参考にした。

・スギ（*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don）　スギ科

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、細胞壁は滑らか、分野壁孔はスギ型で2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

スギは、本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では植林面積第一位の重要樹種であり、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。樹皮は屋根葺用とされ、葉は線香・抹香の原料にもなる。

・ヒノキ属の一種（*Chamaecyparis* sp.）　ヒノキ科

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、細胞壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で1～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

ヒノキ属には、ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher）とサワラ（*C. pisifera* (Sieb. et Zucc.) Endlicher）の2種がある。ヒノキは本州（福島県以南）・四国・九州に分布し、また各地で植栽される常緑高木で、国内ではスギに次ぐ植林面積を持つ重要樹種である。材はやや軽軟で加工は容易、割裂性は大きいが、強度・保存性は高い。建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州（岩手県以南）・九州に自生し、また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが耐水性が高いため、樽や桶にするほか各種の用途がある。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris* sp.）　ブナ科

環孔材で孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。年輪界は明瞭。

クヌギ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が2年目に熟するグループで、クヌギ（*Quercus acutissima* Carruthers）とアベマキ（*Q. variabilis* Blume）の2種がある。クヌギは本州（岩手・山形県以南）・四国・九州に、アベマキは本州（山形・静岡県以西）・四国・九州（北部）に分布するが、中国地方に多い。クヌギは樹高15mになる高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多く、薪炭材としては国産材中第一の重要材である。このほかに器具・杭材、樽木などの用途が知られる。樹皮・果実はタンニン原料となり、果実は染料・飼料ともなった。アベマキはクヌギによく似た高木で、樹皮のコルク層が発達して厚くなる。材質はクヌギに似るが、さらに重い。用途もクヌギと同様であるが、樹皮が厚いため薪材にはむかず、炭材としてもクヌギ・コナラより劣るとされる。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.）　ブナ科

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が1年目に熟するグループで、モンゴリナラ（*Quercus mongolica* Fischer ex Turcz.）とその変種ミズナラ（*Q. mongolica* Fischer ex Turcz.

var. *grosseserrata* (Bl.) Rehder et Wilson)、コナラ（*Q. serrata* Murray)、ナラガシワ（*Q. aliena* Blume)、カシワ（*Q. dentata* Thunberg）といくつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州（丹波地方以北）に、ミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ（*Q. acutissima* Carruthers）に次ぐ優良材である。

・ハリギリ（*kalopanax pictus* (Thunb.) Nakai)　　ウコギ科

環孔材で孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状または対列状に配列する。放射組織は異性Ⅲ～同性、1～5細胞幅、1～30細胞高。柔組織はターミナル状および周囲状。年輪界は明瞭。

ハリギリは、北海道から九州の肥沃な適潤地に生育する落葉高木で、大きいものは高さ25m，直径1m程になる。材の硬さは中程度で、加工は容易であるが耐朽性は高くない。比較的欠点の少ない材で、木理が鮮明であるため家具材として古くから利用されてきた。また、材が白色に近く板目面で年輪が明瞭な模様になって現れるため装飾材として用いられる。その他にも器具材，下駄材，彫刻材等幅広い用途に用いられる。

第34表　炭化材同定結果

番号	遺構	用途	樹種名
1		構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
2		構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
3	No. 972 K㉓ SI-20 フク上	構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
4		構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
5		構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
6		構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
7		構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
8		構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
9	No. 973 K㉓ SI-20 フク上	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
10		構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
11		構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
12		構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
13		構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
14	No. 974 K㉓ SI-20 フク十	構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
15	No. 975 K㉓ SI-20 フク上	構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
16		構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
17	No. 976 K㉓ SI-20 フク土	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
18		構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
19		構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
20		構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
21		構築材	スギ近似種
22	No. 977 K㉓ SI-20 フク上	構築材	スギ
23		構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
24		構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
25		構築材	モノキ属近似種
26		構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
27		構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
28	No. 978 K㉓ SI-20 フク上	構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
29		構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
30		構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
31a	No. 826 K㉓ SI-20 フク土	構築材	ハリギリ
31b		構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
32		構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
33	SI-15	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
34		構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
35		構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種

3）考察

平安時代の住居構築材は、クヌギ節・コナラ節を中心としたものであった。両種とも強度が高く、住居構築材として多くの遺跡から出土報告例がある。とくに、弥生時代以降はこれらの樹種が多用される傾向にあることが指摘されている（千野，1991)。本遺跡周辺では、韮崎市堂の前遺跡において弥生時代後期後半の住居址から検出された構築材の樹種同定が知られているが（高橋，1987)、他に報告例は知られていない。しかし、堂の前遺跡の結果を見ると、今回と同様にクヌギ節・コナラ節が多用される傾向にあり、このような用材選択が古くから行われていたことが示唆される。

本地域では、過去の用材選択に関する資料が蓄積段階にあるため、いつの時代にどのような用材選択が行われていたのかは明確ではない。そのため、今後も遺跡から出土する様々な木質遺物について樹種同定を行い、用材選択に関する資料を蓄積していく必要がある。

3．種実同定

1）方法

肉眼あるいは双眼実体顕微鏡を用いて、その形態的特徴から種類を同定した。

2）結果

結果を第35表に示す。全体的に保存状態が悪く、同定できない個体が多かった。以下に検出された種類の形態的特徴について記す。

コナラ属　*Quercus* sp.　ブナ科

子葉の破片が検出された。大きさは1.5cm程度。半球形で球面の表面には維管束の筋がみられる。

モモ　*Prunus parsica* Batsch　バラ科サクラ属

核（内果皮）が検出された。褐色、核の形はほぼ円形で、やや偏平である。大きさは２cm程度。丸く大きな腹点がありへこむ。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は、不規則な線状のくぼみがあり、全体としてあらいしわ状に見える。

ウメ　*Prunus mume* (Sieb.) Sieb. et Zucc.　バラ科サクラ属

核（内果皮）の破片が検出された。黒色で大きさは１cm程度。表面は、丸いくぼみが不規則にある。

サンショウ　*Zanthoxylum piperitum* DC.　ミカン科サンショウ属

果実が検出された。黒褐色。大きさは４mm程度。楕円形。表面には浅い不規則な網目模様がみられる。

イネ　*Oryza sativa* L.　イネ科イネ属

胚乳が検出された。炭化しており、大きさは５mm程度。胚が位置する部分は欠如し大きく窪んでいる。表面には縦に平行な隆起構造が数本認められる。

アワ　*Setaria itarica* (L.) P.Beauv.　イネ科エノコログサ属

胚乳が検出された。円形で炭化しており、大きさは１mm程度。

オオムギ　*Hordeum valgale* L.　イネ科オオムギ属

炭化した穎が検出された。炭化しており、大きさは６mm程度。紡錘形で中央に１本のすじが走る。

タデ科　Polygonaceae sp.

果実が検出された。大きさは１mm程度。偏平で側面観は先端がややとがった円形。果皮は薄く堅い。

アカザ科　Cenopodiaceae sp.

種子が検出された。黒色。側面観は円形で、上面観は凸レンズ形を呈している。大きさは１mm程度。側面に「へそ」がある。表面は細胞が亀甲状に配列している構造がみられる。

3）考察

今回検出された種実遺体のうち、種類が判明したもののほとんどは、平安時代の住居址と中世の石組土坑から検出されたものであった。検出された種類のうち食用となる植物は、イネ・オオムギ・アワ・ウメ・モモ・コナラ属であるが、このうちコナラ属をのぞく種類はみな栽培種である。これらは当時栽培され、利用されていたことが伺われる。なお、栽培種のほとんどは石組土坑から検出されている。この理由として、石組土坑の方が時代が新しいということも考えられるが、遺構の性格との関係に起因する可能性もある。詳細については文献などの調査と併せて多角的に行っていく必要があろう。

今回の同定結果では、アカザ科の種実が非常に多く、各遺構から普遍的に検出されている。アカザ科の中には今日雑草として普通にみられる種類が多いことなどから、当時の周辺植生に由来しているのであろう。

第35表　種実遺体同定結果

No.	遺構名	採取地点	サイズ	種名
10	SI-15	東西セクション No.139	S	同定不能
11	SI-15	東西セクション No.148	S	不明
12	SZ-1	掘り方一括	T	カヤツリグサ科？
14	SI-15	東西セクション No.155	S	アカザ科 (3)
20	SI-15	東西セクション No.89	S	アカザ科 (1)、同定不能
55	SZ-4	I－A　No. 22	S	不明
27	SI-15	東西セクション No.169	S	アカザ科 (1)
28	SI-15	東西セクション No.86	S	不能
37	SZ-1	N区覆土一括4/4	S	アカザ科 (1)
42	SZ-1	S区－7	S	アカザ科 (1)
46	SI-15	南北セクション No.243	S	アカザ科 (2)、他は不明
48	SI-15	竪土セクション No.256	T	同定不能
48	SI-15	竪土セクション No.256	S	空
49	SI-15	東西セクション No.147	S	不明
50	SI-15	東西セクション No.31	S	不明
64	SI-15	東西セクション No.126	S	アカザ科 (1)、他は不明
66	SK-12	土器く	A	不能
69	SI-15	東西セクション No.163	S	アカザ科 (1)
70	SI-15	東西セクション No.152	S	不明
71	FD-8	L-3グリッド	S	アカザ科 (2)
77	SK-4	I－3　No. 29	S	タデ科 (1)、不明
78	SI-15	東西セクション No.110	A	モモ (1)
78	SI-15	東西セクション No.110	S	不明
80	FP-7	L-3グリッド	S	アカザ科 (4)、タデ科 (1)
82	SI-15	東西セクション No.119	S	アカザ科 (1)、他は不明
84	SI-13	東西セクション No.168	S	不明
86	SI-15	東西セクション No.127	S	不明
87	SI-15	東西セクション No.131	S	不明
93	SI-15	東西セクション No.36	S	空
98	SZ-6	竪土完掘　No. 6	S	不明
101	SZ-6	完掘　No.24	S	アカザ科 (5)
102	SZ-6	完掘　No.60	S	アカザ科 (4)、他は不明
106	SZ-6	竪土　No.72	S	アカザ科 (1)
107	SI-15	東西セクション No.99	S	アカザ科 (1)、不明
108	SI-15	東西セクション No.100	T	不明
112	SI-15	東西セクション No.123	S	不明
120	SI-15	東西セクション No.80	S	不明
121	SZ-6	完掘　No.44	S	アカザ科 (5)、不明
125	SZ-6	完掘　No.38	S	アカザ科 (2)
124	SI-14	竪土土坑　竪土	S	アカザ科 (1)
126	SI-15	東西セクション No.166	S	アカザ科 (4)
127	SK-2	竪土　半截　No. 1	S	不明
128	SZ-6	半截	S	アカザ科 (2)、不明
129	SZ-6	完掘　No.3	S	アカザ科 (10)、不明
131	SZ-6	覆土完掘　No.66	S	アカザ科 (1)、不明
133	SZ-6	覆土完掘　No.39	S	アカザ科 (2)、不明
139	SZ-6	覆土完掘　No.39	S	アカザ科 (2)、不明
140	SZ-6	半截　No.12	S	不明
142	SZ-6	完掘　No.43	S	不明
143	SZ-6	完掘　No.20	T	不明
143	SZ-6	完掘　No.36	S	アカザ科 (4)
145	SZ-6	半截　No.15	S	アカザ科 (1)、不明
146	SZ-6	半截　No.23	S	アカザ科 (2)
147	SZ-6	下敷　No. 1	S	アカザ科 (22)、不明
148	SZ-5	覆土完掘　No.11	S	アカザ科 (1)、不明
149	SZ-4	II－4　No.13	T	不明
149	SZ-4	II　4　No.13	S	アカザ科 (1)、不明
150	SI-15	東西セクション No.161	S	アカザ科 (3)
151	SZ-6	覆土完掘　No.62	S	アカザ科 (3)
152	SZ-6	半截　No. 28	S	不明
153	SI-15	東西セクション No.116	S	アカザ科 (2)、不明
154	SZ-6	完掘　No.19	T	不明
157	SZ-6	完掘　No.47	S	不明
158	SZ-6	半截　No.11	T	オオムギ？ (2)
159	SZ-6	下敷　No.11	S	アワ (1)、不明
161	SZ-6	半截　No.18	S	不明
162	SZ-6	竪土完掘　No.32	S	不明
164	SZ-6	完掘　No.39	T	オオムギ？ (1)
164	SZ-6	完掘　No.39	S	アワ(3)、アカザ科 (2)
165	SZ-6	半截　No.27	S	アカザ科 (5)、不明
166	SZ-6	下敷　No.25	S	不能
167	SZ-6	下敷　No.4	S	不明
168	SZ-6	完掘　No.36	S	アカザ科 (3)

No.	遺構名	採取地点	サイズ	種名
171	SZ-6	竪土完掘　No.68	S	アカザ科 (5)
174	SZ-6	半截　No. 6	T	不明
174	SZ-6	半截　No. 8	S	アカザ科 (1)
175	SZ-6	下敷　No.20	S	アカザ科 (8)
176	SZ-6	半截　No.22	S	空
177	SZ-6	半截　No.14	T	不明
177	SZ-6	半截　No.14	S	不明
178	SI-15	東西セクション No.106	T	不能
179	SZ-6	下敷　No.5	S	不明
180	SZ-6	覆土　No.37	S	アカザ科 (2)
182	SI-15	東西セクション No.140	S	不明
185	SI-6	覆土　No.10	S	不能
186	SZ-6	覆土完掘　No.60	T	オオムギ (1)
188	SZ-4	II－C　No.19	T	オオムギ (4)
188	SZ-4	II－C　No.19	S	アカザ科 (1)
189	SZ-6	竪土完掘　No.67	T	不能
191	SZ-5	覆土　No.20	T	オオムギ (3)
192	SZ-6	完掘　No.42	S	空
193	SZ-6	下敷　No.29	S	アカザ科 (1)
194	SZ-6	完掘　No.21	S	アカザ科 (5)、不明
195	SZ-6	完掘　No.35	T	空
196	SZ-6	完掘　No.35	S	不明
196	SZ-4	I－A　No.26	S	不能
197	SZ-6	完掘　No.33	S	アカザ科 (2)
198	SZ-6	完掘　No.55	S	アカザ科 (3)
200	SZ-6	下敷　No. 9	S	アカザ科 (6)、不明
201	SI-17	覆土　No.2	S	不能
202	SZ-6	完掘　No.48	S	アカザ科 (4)
203	SZ-6	完掘　No.32	S	アカザ科 (1)、不明
204	SZ-6	半截　No.13	S	不明
205	SZ-6	完掘　No.45	S	アカザ科 (5)
206	SZ-6	下敷　No.10	S	不明
208	SZ-6	完掘　No.11	S	不明
213	SZ-5	竪土　No.18	S	不明
214	SZ-6	完掘　No.33	S	アカザ科 (4)、不明
215	SZ-6	完掘　No.13	S	アカザ科 (3)、不明
216	SZ-6	完掘　No.47	S	不明
217	SZ-5	完掘　No.10	T	不能
217	SZ-5	完掘　No.10	S	不能
219	SZ-6	半截　No.17	S	不能
222	SZ-6	完掘　No.49	S	アカザ科 (3)、不明
223	SZ-5	覆土　No.19	S	不明
223	SZ-5	覆土　No.19	S	不明
224	SZ-6	完掘　No.43	S	不能
227	SZ-6	完掘　No.3	S	不明
228	SZ-6	完掘　No.34	S	不明
230	SZ-6	完掘　No.12	S	アカザ科 (2)、アワ (1)
234	SZ-4	I－A　No.8	S	アカザ科 (1)
235	SZ-4	I－B　No.4	S	不明
237	SZ-6	完掘　No.8	T	不明
238	SZ-5	竪土　No.3	S	アカザ科 (2)、不明
240	SZ-5	完掘　No.25	S	アカザ科 (3)
241	SZ-4	II－C　No.21	S	不能
242	SZ-6	完掘　No.16	S	不明
244	SZ-6	完掘　No.10	S	アカザ科 (1)、不明
248	SZ-6	完掘　No.30	S	アカザ科 (1)
249	SZ-3	完掘　No.3	S	不明
250	SZ-5	覆土　No.12	T	不能
251	SZ-6	完掘　No.18	S	アカザ科 (2)、不明
252	SZ-6	完掘　No.44	S	アカザ科 (1)、不明
253	SZ-6	完掘　No.30	S	アカザ科 (4)、アワ (1)、不明
254	SZ-6	完掘　No.2	S	不明
256	SZ-6	完掘　No.15	S	アカザ科 (3)、不明
257	SZ-6	完掘　No.4	S	不能
258	SZ-5	完掘　No.12	S	アカザ科 (2)、不明
259	SZ-5	竪土　No.9	S	アカザ科 (2)
260	SZ-6	完掘　No.1	S	アカザ科 (1)、不明
261	SZ-5	覆土　No.18	S	アカザ科 (3)、不明
262	SZ-6	完掘　No.41	S	アカザ科 (3)、アワ (1)、不明
263	SZ-5	完掘　No.23	S	アカザ科 (2)
265	SZ-5	覆土　No.5	S	アカザ科 (1)、不明
267	SZ-6	完掘　No.22	T	不能
269	SZ-5	完掘　No.7	S	不明
272	SZ-5	完掘　No.19	S	不明
275	SZ-5	完掘　No.3	S	アカザ科 (5)、不能

No.	遺構名	採取地点	サイズ	種名
277	SZ-5	覆土　No.48	S	アカザ科 (1)
278	SZ-5	完掘　No.25	S	アカザ科 (3)
279	SZ-5	完掘　No.13	S	アカザ科 (1)
282	SZ-6	完掘　No.46	S	アカザ科 (3)、不明
284	SZ-6	完掘　No.6	S	不明
285	SZ-6	完掘　No.31	S	アカザ科 (1)、不明
286	SZ-6	完掘　No.46	S	不明
291	SZ-5	覆土　No.25	A	ウメ (1)
291	SZ-5	覆土　No.25	T	イネ (1)
291	SZ-5	覆土　No.25	S	不明
294	SZ-4	覆土　No.28	S	不明
295	SZ-5	完掘　No.8	S	不明
299	SZ-5	完掘　No.15	S	不明
301	SZ-5	No.41	S	不明
306	SZ-5	No.23	S	不明
308	SZ-5	No.2	T	オオムギ (1)
308	SZ-5	No.2	S	不明
310	SZ-6	完掘　No.37	S	アカザ科 (2)、不明
313	SZ-5	No.31	S	不明
316	SZ-3	No.2	S	アカザ科 (1)、不明
318	SZ-5	完掘　No.30	S	不明
320	SZ-5	No.9	S	アカザ科 (2)、不明
321	SZ-5	完掘　No.27	S	アカザ科 (1)、不明
324	SZ-5	完掘　No.4	S	不明
325	SZ-5	完掘　No.20	S	不明
326	SZ-5	完掘　No.29	S	アカザ科 (5)
328	SZ-5	完掘　No.26	T	不能
329	SZ-5	No.37	S	不明
330	SZ-5	完掘　No.21	S	アカザ科 (4)、不明
333	SZ-5	完掘　No.5	S	不明
345	SZ-7	No.9	S	不明
348	SZ-7	No.8	A	不明
348	SZ-7	No.8	T	不明
348	SZ-7	No.8	S	アワ (7)、アカザ科 (1)、不能
352	SZ-5	No.16	S	不明
354	SZ-5	完掘　No.2	T	不明
355	SZ-5	No.6	S	アカザ科
356	SZ-7	No.21	T	不明
358	SZ-5	No.16	T	不明
359	SZ-5	No.14	S	アカザ科 (1)
363	SZ-5	完掘　No.17	S	マメ科 (1)、不明
367	SZ-6	完掘　No.59	S	アカザ科 (3)、不明
368	SZ-7	No.22	S	サンショウ (1)、アカザ科 (2)
372	SZ-7	No.14	S	不明
375	SZ-5	No.15	S	アカザ科 (1)
377	SZ-7	No.24	T	不明
380	SZ-7	No.28	S	不明
382	SZ-7	No.6	S	不明
386	SZ-7	No.26	S	不能
390	SZ-7	No.10	S	アワ (1)、不明
391	SZ-7	No.3	A	オオムギ (2)
391	SZ-7	No.3	S	アカザ科 (2)、アワ (1)、不明
400	SI-15	東西セクション　No.131	S	アカザ科 (5)
403	SI-15	南北セクション　No.235	S	アカザ科 (1)
409	SI-15	南北セクション　No.289	S	アカザ科 (2)
410	SI-15	東西セクション　No.130	S	不明
412	SI-15	東西セクション　No.95	S	アカザ科 (1)、不明
413	SI-15	東西セクション　No.3	S	不明
414	SI-15	南北セクション　No.282	A	コナラ属 (1)
414	SI-15	南北セクション　No.282	S	アカザ科 (1)
418	SI-15	南北セクション　No.231	S	アカザ科 (2)
428	SI-15	東西セクション　No.159	S	不明
429	SI-15	南北セクション　No.291	S	不明
437	SI-15	東西セクション　No.24	S	アワ (1)
439	SI-15	東西セクション　No.125	S	不明
454	SI-15	東西セクション　No.114	S	アカザ科 (3)
458	SI-15	東西セクション　No.165	S	アカザ科 (2)
462	SI-15	東西セクション　No.92	T	不明
471	SI-15	南北セクション　No.285	S	アカザ科 (1)
493	SI-15	東西セクション　No.52	S	不明
497	SI-15	南北セクション　No.199	S	不能
502	SI-15	東西セクション　No.4	S	不明
508	SI-15	東西セクション　No.120	S	不明
510	SI-15	東西セクション　No.46	S	不明
518	SI-15	東西セクション　No.13	S	アカザ科 (1)
523	SI-15	東西セクション　No.151	S	不明
528	SI-15	南北セクション　No.212	S	不明
530	SI-15	南北セクション　No.241	S	不明
532	SI-15	南北セクション　No.278	S	アカザ科 (4)
541	SZ-1	S区1	S	アカザ科 (4)、不明
543	SZ-1	N区一括	S	アカザ科 (2)、不明
555	SZ-1	S区2	S	アカザ科 (6)、不明
565	SI-15	南北セクション　No.262	S	アカザ科 (1)
567	SZ-1	S区9	T	不明
575	SI-15	南北セクション　No.250	S	アカザ科 (1)
588	SZ-1	石どめ土一括	S	アカザ科 (6)、不明
592	SI-15	南北セクション　No.251	S	アカザ科 (1)
596	SI-15	南北セクション　No.181	A	不明
598	SZ-1	S区5	S	アワ (1)、不明
599	SZ-4	Ⅰ－C　No.7	T	オオムギ (1)
601	SZ-4	Ⅱ　C　No.20	S	アワ (1)
606	SZ-1	N区一括	A	オオムギ (1)
606	SZ-1	N区一括	T	オオムギ (1)
606	SZ-1	N区一括	S	アカザ科 (3)
607	SZ-4	Ⅰ－A　No.1	T	不明
611	SZ-4	Ⅱ－B　No.15	S	アワ (2)
612	SZ-4	Ⅰ－A　No.24	T	不明
612	SZ-4	Ⅰ－A　No.24	S	アワ (1)
614	SI-15	東西セクション　No.11	S	アカザ科 (1)
616	SZ-4	Ⅱ－B　No.16	S	不明
618	SI-15	南北セクション　No.219	S	アカザ科 (1)
619	SI-15	東西セクション　No.109	S	アカザ科 (3)
620	SI-19	カマド	T	不明
622	SI-20	焼土	T	不明
625	SI-20		S	不明
625	SI-20		T	不明
625	SI-20		S	不明
630	SK-2	焼土半截	S	タデ科 (1)
638	FP-9		S	不明
643	不明	不明	S	不明
644	SZ-2	完掘　No.58	S	アカザ科 (3)
645	不明	不明	S	不明
646	不明	不明	S	不明
649	不明	不明	S	不能
A	SI-21	No.928		クリ (3)
B	F-8	SI-7　No.373		不明
C	D-3	南北　No.12		モモ

4．植物珪酸体

1）方法

試料約5 gについて、過酸化水素水と塩酸による有機物と鉄分の除去、超音波処理による試料の分散、沈降法による粘土分の除去、重液分離（臭化亜鉛：比重2.3）を順に行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡し易い濃度に希釈した後、カバーガラスに滴下し、乾燥させる。これを、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

検鏡は光学顕微鏡下でプレパラートを全面走査し、出現する植物珪酸体を、近藤・佐瀬（1986）の分類を参考にする。そのなかで、イネ科植物の葉部（葉身と葉鞘）の短細胞に由来する植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身の機動細胞に由来する植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、同定・計数する。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数を一覧表で示す。また、各種類の出現傾向から、生育していたイネ科植物を検討するために、植物珪酸体組成図を作成する。出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数として百分率で算出する。

2）結果

結果については、第36表・第105図に示す。ハードローム～ソフトロームにあたる試料番号18～13では、イネ科起源の植物珪酸体の短細胞珪酸体が良好であるが、機動細胞珪酸体で表面に多くの了孔（浴食痕）が生じるものが多く認められる。植物珪酸体組成は、短細胞珪酸体でネザサ節やヤダケ属を含むタケ亜科が多く、その中でもネザサ節の割合が高い。その他にヨシ属・イチゴツナギ亜科が検出される。機動細胞珪酸体でタケ亜科が多く、その中にクマザサ属が少数含まれる。その他にソフトローム中（試料番号14・13）でウシクサ属が検出される。

ソフトロームの上部（試料番号12～10）では、イネ科起源の植物珪酸体の検出が少ない。検出される種類構成は、下位とほぼ同様である。

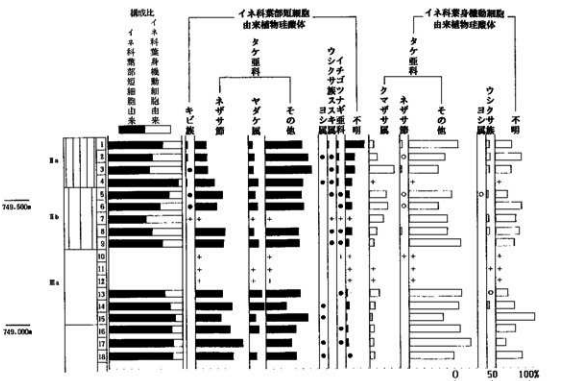
黒ボクにあたる試料番号9～1では、イネ科起源の植物珪酸体が試料番号7・3を除いて、良好に検出される。短細胞珪酸体では、ネザサ節・ヤダケ属のタケ亜科が多産するが、上位にかけてネザサ節・ヤダケ属が減少傾向を示す。その他、機動細胞珪酸体でもクマザサ属・ネザサ節を含むタケ亜科が多産し、その中でもクマザサ属が試料番号3まで増加傾向を示す。表層部（試料番号2・1）では減少する。その他にウシクサ属が検出される。

3）考察

今回は、台地上の植生を直接反映していると考えられる植物珪酸体を中心として、遺跡周辺の古植生について考えてみたい。黒ボクおよびロームの成因についての研究は、土壌学や地形学・地質学などで多く行われている。地質学的にみた最近の成因論は、黒ボクとロームは土の粒子が風によって舞い上がったものが継続的に堆積したものであるという説が一般的である（早川，1990：1991など）。一方、土壌学の立場では、黒ボクの黒色は腐植含量が高いことに起因しているといわれており、ササやススキなどをはじめとするイネ科植物が腐植の形成に関与して形成されたといわれている（松井，1988）。このようにロームと黒ボクに関する成因については、いくつかの説が知られている。ロームと黒ボクは腐植含量の違いがその色調の違いに大きく関与しているが、これが経年変化によるものなのか、あるいは植生変化によるものなのかについてはいまだはっきりとわかっていない。

今回の結果からいえば、ローム層から黒ボク土にかけて、ササ類を主とするタケ亜科からなる植生が成立していたと考えられ、極端な変化はなかったものと思われる。ただし、同じタケ亜科でも、短細胞珪酸体ではネザサ節の減少、機動細胞珪酸体ではクマザサ属の増加とネザサ節の検出という変化がある。また、黒ボク土中では、キビ属やススキ属もみられるようになる。ローム層から黒ボク土にかけての植物珪酸体組成の変化を、イネ科植生の変化に結び付けた考察は、過去にいくつか報告されている。赤城山南麓の頭無遺跡では、ローム層と黒ボク上層を境にして、クマザサ属からネザサ節への急激なイネ科植生の変化が認められる（杉山ほか，1992）。また、十和田火山を給源とするテフラ分布域では、黒ボクの生成が始まると、ササ類を林床にもつ落葉広葉樹林からササ類を主要構成種とする草原やキビ亜科を主要構成要素とする草原に変化したといわれている（細野ほか，1992：佐瀬ほか，1993）。なお、今回の結果では、黒ボク土とロームでは植物珪酸体の保存状態が明らかに異なり、ロー

ムのほうが悪い。また、ソフトローム上部では植物珪酸体があまり検出されていない。タケ亜科の機動細胞珪酸体は生産量も多く土壌中では過大評価されやすい（杉山・藤原，1986）ことなどから、黒ボク土とローム層の組成の違いは植物珪酸体の保存状態の差による可能性も考えられる。今回ロームと黒ボクにみられた植物珪酸体組成の変化は、何らかの環境変化に起因している可能性はある。しかし、植物珪酸体組成の変化が明瞭でなく、保存状態の差による影響も考えられるため、これが黒ボクとロームでの植生の違いや、更新世から完新世にかけての急激な温暖化による植生変化につながるかどうかは現段階でははっきりせず、今後の事例を待って判断したい。



第105図　植物珪酸体層位分布図

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体・イネ科葉身機動細胞珪酸体ともにそれぞれの総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、＋はイネ科葉身機動細胞珪酸体については総数が100個未満、イネ科葉部短細胞珪酸体については総数が500個未満の試料において検出された種類を示す。

第36表　植物珪酸体分析結果

種　類（Taxa）	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
イネ科葉部短細胞珪酸体																		
キビ族	6	5	2	4	3	1	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
タケ亜科ネザサ節	44	38	36	85	186	72	60	81	107	1	38	15	120	219	304	268	439	314
タケ亜科ヤダケ属	16	16	12	39	12	26	8	13	35	·	18	3	52	90	73	71	·	54
タケ亜科（その他）	142	123	136	160	238	126	103	88	126	3	52	14	152	138	493	235	237	251
ヨシ属	—	1	—	1	—	·	—	—	—	—	—	—	—	1	3	—	3	1
ウシクサ族ススキ属	3	2	1	1	3	—	1	1	1	—	—	—	1	—	·	·	·	·
イチゴツナギ亜科	7	7	5	5	1	1	1	1	2	1	—	·	3	—	—	1	2	·
不明キビ型	26	11	13	7	10	2	6	7	4	·	—	—	1	—	2	2	1	1
不明ヒゲシバ型	—	·	1	1	·	1	—	1	—	1	—	—	1	2	—	1	1	—
不明ダンチク型	48	15	12	19	17	17	8	9	8	1	2	2	4	20	10	7	18	4
イネ科葉身機動細胞珪酸体																		
タケ亜科クマザサ属	6	16	58	1	25	26	35	14	6	—	6	4	13	7	3	6	6	6
タケ亜科ネザサ節	3	1	4	—	1	1	—	3	—	3	—	—	—	—	3	—	—	—
タケ亜科（その他）	67	69	67	9	61	40	94	71	71	6	22	7	73	67	46	66	85	60
ヨシ属	—	—	—	—	1	·	—	—	—	—	·	—	—	—	·	—	—	—
ウシクサ族	1	7	7	—	2	—	6	6	—	—	1	·	1	3	—	—	·	·
不明	22	50	36	8	17	36	50	44	26	6	19	8	17	93	53	26	14	36
合　計																		
イネ科葉部短細胞珪酸体	292	215	218	322	500	346	191	201	283	7	110	34	333	506	885	585	701	625
イネ科葉身機動細胞珪酸体	102	143	172	18	107	103	185	138	103	15	48	19	104	102	102	101	104	102
検　出　個　数	394	358	390	340	607	449	376	339	386	22	158	53	437	608	987	686	805	727

なお、試料番号1・2ではクマザサ属の減少が顕著であり、何らかの植生変化を反映している可能性がある。歴史時代における植生変化は人為的な干渉によるもの多いが、この変化が人為的なものか否か、この結果のみでは判断が難しい。しかし、種実遺体の結果から示唆される栽培植物や木材利用を考えれば、遺跡周辺の植生変化の一つに人為的要因が加わっていることは充分考えられる。

5．まとめ

平安時代の住居構築材は、クヌギ節・コナラ節を中心としたものであった。これらは強度が高く、住居構築材として多くの遺跡から出土報告があることから、このような用材選択が古くから行われていたことが示唆された。

種実遺体では、イネ・オオムギ・アワ・ウメ・モモなどの栽培植物が検出され、中世における栽培植物の利用が示唆された。

ロームから黒ボクにかけてのイネ科植生は、ササ類を中心としたタケ亜科が多いという傾向がみられた。ロームから黒ボクとの違いについてははっきりと見いだすことはできなかったが、黒ボク土上部（Ⅱa層上部）付近では、畑作や森林伐採などによる植生干渉が考えられる。

<引用文献>

早川由紀夫（1990）堆積物から知る過去の火山噴火．火山　34，火山学の基礎研究特集号，p.121-132.

早川由紀夫（1991）テフラとレスからみた火山の噴火と噴火史．第四紀研究　30，p.391-398.

細野　衛・佐瀬　隆・青木謙行（1992）示標テフラによる黒ボク土の生成開始時期の推定　－十和田火山テフラ分布域湯ノ台地区を例にして－．地球科学　46，p.121-132.

平井信二（1979-1980）木の事典　第1巻～第6巻．かなえ書房．

北村四郎・村田　源（1971,1979）原色日本植物図鑑　木本編〈Ⅰ・Ⅱ〉，453p.,545p.，保育社．

松井　健（1988）上壌地理学序説．316p.,築地書館．

佐瀬　隆・細野　衛・青木謙行・木村　幸（1992）示標テフラによる黒ボク土の生成開始時期の推定と火山灰土壌生成に関する一考察　－十和田火山テフラ分布域川向，赤坂地区を例にして－．地球科学　47，p.391-408.

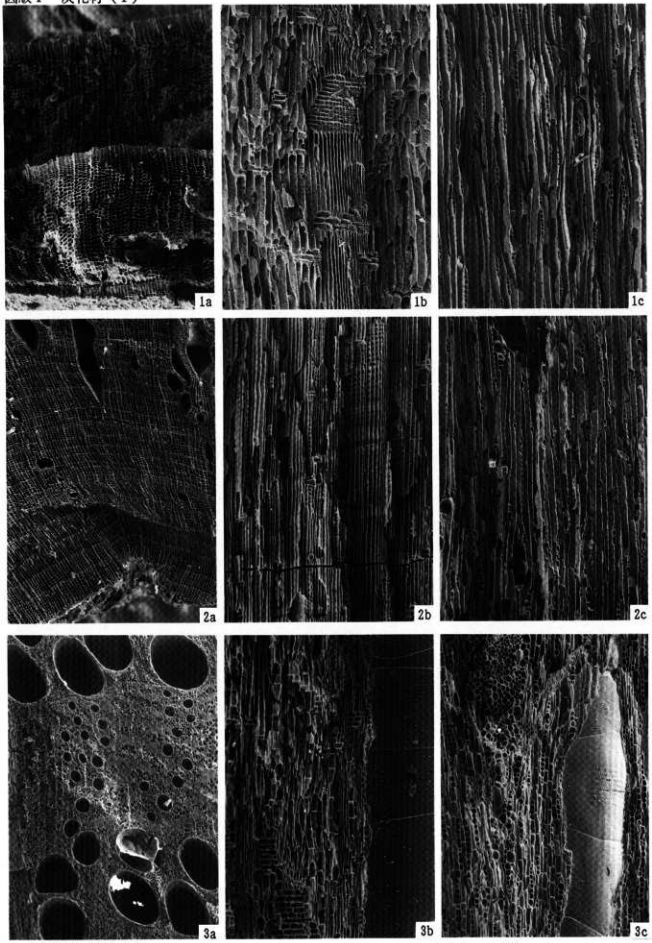
杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定　－古環境推定の基礎試料として－．考古学と自然科学　19，p.69-84.

杉山真二・前原　豊・大工原　豊（1992）植物珪酸体分析による遺跡周辺の古環境推定．日本文化財科学会第9回大会研究発表要旨集，p.14-15.

高橋利彦（1987）炭化材について．「山梨県韮崎市　中本田遺跡・堂の前遺跡　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」，p.56-59，韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所．

千野裕道（1991）縄文時代に二次林はあったか　－遺跡出土の植物性遺物からの検討－．東京都埋蔵文化財センター研究論集X，p.215-249.

図版1　炭化材（1）

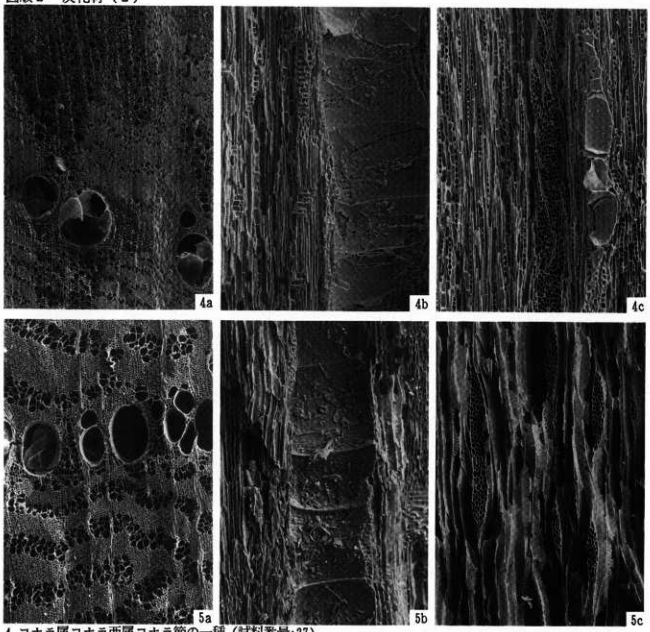


1. スギ（試料番号;22）
2. ヒノキ属近似種（試料番号;25）
3. コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種（試料番号; 3）

a：木口，b：柾目，c：板目

200 μm：a
200 μm：b, c

図版2　炭化材（2）



4. コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種（試料番号;27）
5. ハリギリ（試料番号;31）
a：木口，b：柾目，c：板目

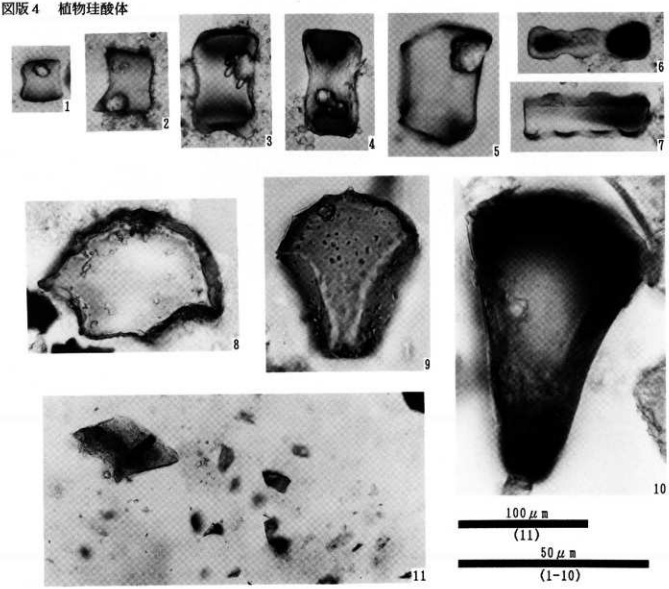
200μm：a
200μm：b, c

図版3　種実遺体

1mm (1, 2, 5-8)　1cm (3, 4)

1. オオムギ（試料番号;188）
2. イネ（試料番号;291）
3. モモ
4. コナラ属
5. アワ（試料番号;164）
6. ウメ（試料番号;291）
7. アカザ科（試料番号;14）
8. タデ科（試料番号;77）

図版４　植物珪酸体



1. ネザサ節葉部短細胞珪酸体（試料番号;15）
2. ネザサ節葉部短細胞珪酸体（試料番号; 4）
3. ヤダケ属葉部短細胞珪酸体（試料番号; 4）
4. ヤダケ属葉部短細胞珪酸体（試料番号; 4）
5. タケ亜科葉部短細胞珪酸体（試料番号;15）
6. イチゴツナギ亜科葉部短細胞珪酸体（試料番号; 3）
7. イチゴツナギ亜科葉部短細胞珪酸体（試料番号; 3）
8. クマザサ属葉身機動細胞珪酸体（試料番号; 7）
9. タケ亜科葉身機動細胞珪酸体（試料番号; 2）
10. ウシクサ族葉身機動細胞珪酸体（試料番号; 3）
11. 状況写真（試料番号;10）

第２節　健康村遺跡出土の信州系土師器の蛍光Ｘ線分析

奈良教育大学　三辻　利一

１）はじめに

古代・中世の土器の胎土分析をする主要な目的はその産地を知ることである。それを可能にするにはまず、産地推定法を開発しなければならない。産地推定法を開発すれば、土器の伝播・流通の研究を展開することができる。その結果、遺跡から大量に出土する土器を歴史研究の材料とすることができるようになる。

胎土分析により土器の産地推定法を開発するためには、はじめに、産地が明確にわかっている土器が必要である。この点で、全国各地に生産地である窯跡が残っており、しかも、そこから大量の破片が出土する古代土器、須恵器が絶好の研究対象となる。こうして、須恵器から蛍光Ｘ線分析が開始された。既に、須恵器の産地推定法の骨組は出来上っており、試験的に伝播・流通の研究も進められている。

ところが、窯跡が残っていない土器も多い。土師器、瓦器、埴輪、弥生土器などがその例である。これらの土器の産地を推定することはそう簡単ではない。しかし、胎土分析のデータを土器形式などの考古学的情報と組合わせることによって、考古学に役立つ有意な情報を引き出すことができる。このような考え方から、筆者は縄文土器から瓦器に至るまでの種々の土器を分析している。

本報告では健康村遺跡から出土した信州系土師器の形式から予想されるように信州側からの搬入品なのか、それとも、形式だけが伝播した、在地産の土師器なのかを判別するために蛍光Ｘ線分析を行った。典型的な信州系土師器と在地系土師器の胎土を比較するため、長野県松本市の小原遺跡、長野県南安曇郡豊科町の上ノ山遺跡、山梨県北巨摩郡須玉町の大小久保遺跡出土土師器も併せて分析した。

２）分析方法

試料片はすべて研磨して表面付着物を除去したのち、100メッシュ以下に粉砕された。粉末試料は塩化ビニール製リングを枠にして、約13トンの圧力を加えてプレスし、内径20㎜、厚さ３～５㎜の錠剤試料を作成して蛍光Ｘ線分析を行った。波長分散型の全自動式の蛍光Ｘ線分析装置（理学電機製、3270型機）を使用して、Na、K、Ca、Fe、Rb、Srの６元素を分析した。定量分析のための標準試料として、岩石標準試料ＪＧ－１を使用した。その結果、分析値はＪＧ－１による標準化値で表示することになった。

３）分析結果

第37表には分析値がまとめられている。

はじめに、典型的な地元、山梨県の土師器の代表として大小久保４号、および、７号住居跡から出土した土師器のRb－Sr分布図を第106・107図に、また、典型的な信州系土師器の代表として、長野県松本市の小原遺跡８期(2)の土師器のRb－Sr分布図を第108図に示す。いずれの図においても、殆どの試料を包含するようにして、山梨領域と信州領域を描いてある。勿論、これらの領域は定性的な意味しかもたないが、それでも、化学特性を比較する上には役に立つ。第106～108図を比較すれば、信州型土師器の胎土と山梨型土師器の胎土には相違があることがわかる。

Rb－Sr分布図を描くことには次のような根拠がある。本来はK－Ca分布図を描くところである。K、Caはともに岩石、粘土中の主成分元素であり、土成分鉱物である長石類中に主として含有されている。Kはカリ長石に、また、Caは斜長石中に含有されているものと考えられる。一方、Rb、Srは微量元素である。しかし、RbはKと、また、SrはCaと正の相関性をもつところから、Rbは主としてカリ長石中に、また、Srは斜長石中に存在するものと思われる。したがって、Rb－Sr分布図のRb軸はカリ長石の軸であり、Srの軸は斜長石の軸と考えることができる。現在のところ、Ｘ線回析分析で含有鉱物の定量分析をすることは困難である。その代わりに、元素分析

のデータを活用している訳である。そして、どういう訳か、K－Ca分布図に比べてRb－Sr分布図の方が大きく広がって分布し、見易いところから、Rb－Sr分布図を使用しているのである。

第106～108図からわかるように、典型的な信州型土師器と山梨型土師器はそれぞれ、よくまとまって集団を形成しているところから、小原群、大小久保群とし、2群間判別分析を行って、より定量的な相互識別を試みてみた。その結果は第109図に示されている。両軸にとった$D^2_{(1)}$、$D^2_{(2)}$はそれぞれ、小原群（信州型）、大小久保群（山梨型）の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値である。マハラノビスの汎距離とは統計学上の距離であり、HotellingのT^2検定をかけて両群の領界を決める上に必要な因子である。ここではK、Ca、Rb、Srの長石系の因子を使ってD^2位を計算した。

母集団の資料数、使用因子の数、それにマハラノビスの汎距離の二乗値を使い、5％の危険率をかけたHotellingのT^2検定を行った結果、$D^2_{(k)} \leqq 10$を領界線としてもよいことがわかった。第109図をみると、$D^2_{(1)} \leqq 10$の領域に小原群の試料の殆どが、また$D^2_{(2)} \leqq 10$の領域に大小久保群の殆どの試料が分布していることが確認される。そして、両群の相互識別は完全であることがわかる。

第110図にはFe因子を比較してある。Feは雲母、角閃石、かんらん石などの有色鉱物中に主として含有されている。第110図をみると、信州型土師器と山梨型土師器の間にはFe因子でも相違があることがわかる。

このようにして、典型的な信州系土師器と山梨系土師器は蛍光X線分析法による胎土分析によって、相互識別が可能であることがわかった。この結果を使って、遺跡から出土する土師器の胎土は信州型か山梨型かの判断ができることになる。以下に、その結果について説明する。

第111図には大小久保1号住居跡から出土した土師器のRb－Sr分布図を示す。大小久保4、7号住居跡出土土師器と同様、殆どが山梨領域に分布する。しかし、少数の試料は信州領域に分布するので、これらが本当に信州型といえるかを判別分析で調べた。その結果は第112図に示されている。小原領域（信州型）に分布するのはNo.5だけであることがわかる。第111図で信州領域に分布したものは、第112図では不明領域（$D^2_{(1)} > 10$，$D^2_{(2)} > 10$）に分布した。つまり、これらの試料はRb、Srでは信州型に類似しているが、K、Caでは類似していないことを示す。大小久保領域に分布した土師器は大小久保住居跡周辺で作られた土師器だとすれば、不明領域に分布した土師器は別の場所で作られたものと解釈せざるを得ない。No.5は信州型の胎土をもつ土師器とみられる。No.5はFe因子でも特異的であることは第110図でも示されている。そして、大小久保1号住居跡出土土師器の胎土は大小久保4、7号住居跡出土土師器に比べて複雑であることはFe因子にも反映されている。第110図では大小久保1号住居跡の土師器はいくつかのグループに分かれている。このように、No.5は信州側から大小久保1号住居跡へ持ちこまれたものである可能性をもつが、全体からみたとき、その比率はきわめて少ないことがわかる。大小久保住居跡群の殆どの土師器は住居跡群の周辺で作られたものであると考えてもよさそうである。

次に、信州側の遺跡出土土師器をみてみよう。第113図には小原遺跡8期(1)出土土師器のRb－Sr分布図を、また、第114図には信州群、山梨群の2群判別図上にプロットした結果を示してある。殆どが小原領域に分布し、小原遺跡8期(2)の土師器胎土と同じであることを明示している。同様に、小原遺跡10～12期(1)、(2)の土師器のRb－Sr分布図を第115・116図に、また、判別分析図を第117図に示す。ここでも、地元、信州型の胎土は検出されるが、山梨型の胎土は検出されないことがわかる。つまり、山梨側からの搬入品はないということである。ただ、不明領域に分布するものが数点あり、これらは小原遺跡以外の近隣の遺跡からの持ち込み品である可能性はある。とくに、第116図で信州領域の右下に分布する5点の土師器はそうである。

長野県南安曇郡穂科町の上ノ山遺跡出土土師器のRb－Sr分布図を第118図に、また、判別分析図を第119図に示す。いずれも信州型の胎土をもつ土師器であることがわかる。ただし、小原遺跡の土師器の胎土と全く同質という訳ではなく類似しているが少し異なることはRb－Sr分布図、判別分析図のそれぞれについて、その分布領域を小原遺跡の土師器と比較してみればよくわかる。このことは上ノ山遺跡と小原遺跡の周辺にある粘土は似てはいるが全く同じではないことを示す。そして、小原遺跡では小原遺跡内で、また、上ノ山遺跡では上ノ山遺跡内で、それぞれ、日常生活用具として使う土師器を作っていたと解釈する方が妥当である。なお、上ノ山遺跡内で採集

された粘土は今回了で土師器と対応しており、この粘土が上ノ山遺跡の土師器の素材であったことを示している。

さて、ここで、健康村遺跡（山梨県北巨摩郡長坂町）出土土師器の分析結果について述べる。15号住居跡、19号住居跡、20号住居跡－a、20号住居跡－b、20号住居跡－c出土土師器のRb－Sr分布図を第120～124図に示す。大部分のものは信州領域に分布し、地元、山梨領域に分布するのは第122図の20号住居跡－a出土のものだけである。このように定性的にも地元産の土師器が少ないことが予想されるが、その判別分析の結果は第125図に示されている。大小久保領域に分布するものは1点もなく、同時に、少数ではあるが信州型の胎土があることが確認される。そして、大部分は不明領域に分布した。これらの不明領域に分布した土師器胎土は信州型か、山梨型かのいずれにより類似するかをみてみた。第125図には理想的境界線として斜線を引いてある。これは母集団が大小久保群と小原群の2群しかないとして、しかも、両母集団の統計量が等価であるとしたときの境界線である。そうすると、不明領域に分布した試料の大部分はこの境界線を境に小原領域側に分布していることがわかる。つまり、山梨型よりも信州型に近い胎土をもつことを示している。この結果、健康村遺跡出土の土師器はすべて、信州側からの搬入品である可能性がでてきたことになる。

それでは同じ山梨県北巨摩郡内の他の遺跡出土土師器の胎土は、どうなのだろうか。武川村の宮田遺跡出土土師器のRb－Sr分布図を第126図に、また、判別分析図を第127図に示す。明らかに、地元、山梨型とみられる土師器があることがわかる。これに対して、小原領域に分布するものは1点もなく、信州型の胎土をもつ土師器は含まれていないことがわかる。しかし、ここでも、不明領域に分布するものが過半数を占める。大小久保領域に分布した7点の土師器は大小久保住居跡から持ち込まれた可能性もある。不明領域に入った土師器の胎土は一色ではないことは第126図のRb－Sr分布図や第110図のFe因子からも予想される。つまり、いくつかの場所からの持ち込み品があることがわかる。その中に信州側からのものもあるのかもしれないが、それを明らかにするには第3の母集団を選出することが必要であろう。ただ、目下のところ、第3の母集団とする遺跡がみつからない。

北巨摩郡小淵沢町の前田遺跡出土土師器のRb－Sr分布図を第128図に、また、判別分析図を第129図に示す。Rb－Sr分布図ではかなりばらついて分布しており、いくつもの場所からの持ち込み品が混じっていることを示している。第129図では小原領域に入るものが1点あるが、地元、大小久保領域に分布するものは1点もなく、あとはすべて不明領域に分布した。そして、それらの多くは境界線よりも小原領域側に分布した。健康村遺跡と同じように、前田遺跡にも信州側から土師器を持ち込んだ可能性は十分ある。

以上にみてきたように、山梨県側では大小久保住居跡群、長野県側では小原住居跡群、上ノ山遺跡でそれぞれ、遺跡内で製作されたとみられる土師器が殆どであった。この結果から、山梨型胎土と信州型胎土の特性が明らかになった。このデータから山梨県北巨摩郡長坂町の健康村遺跡から出土した土師器胎土をみると、地元、山梨型ではなく、信州型か若しくはそれに近い特性をもつことが明らかになった。このことは健康村遺跡出土土師器は胎土分析から、信州側からの搬入品であることを裏付けたことになる。同様なことは同じ北巨摩郡小淵沢町の前田遺跡出土土師器についても認められた。これが本報告の結論である。

第37表　蛍光X線分析値

遺跡名	試料No.	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
大小久保　1号住居跡	5−4920	0.357	0.372	1.80	0.459	1.02	0.301
（山梨型）	4921	0.299	0.306	1.42	0.485	0.960	0.265
	4922	0.369	0.309	1.47	0.487	0.952	0.321
	4923	0.324	0.346	1.95	0.451	0.988	0.268
	4924	0.359	0.269	5.34	0.400	0.553	0.207
	4925	0.427	0.266	2.55	0.403	0.698	0.298
	4926	0.374	0.252	2.47	0.453	0.677	0.297
	4927	0.305	0.395	1.47	0.437	1.22	0.246
	4928	0.305	0.389	1.48	0.422	1.18	0.279
	4929	0.319	0.294	1.40	0.420	0.970	0.243
	4930	0.395	0.319	2.48	0.492	0.796	0.280
	4931	0.243	0.405	1.76	0.322	1.18	0.231
	4932	0.336	0.349	1.87	0.457	0.993	0.271
	4933	0.310	0.287	1.43	0.416	0.961	0.248
	4934	0.328	0.293	1.58	0.453	0.876	0.275
	4935	0.318	0.294	1.56	0.493	0.896	0.273
	4936	0.307	0.310	1.60	0.385	0.973	0.249
	4937	0.329	0.393	1.49	0.409	1.26	0.205
	4938	0.355	0.262	2.54	0.417	0.691	0.296
	4939	0.312	0.394	1.50	0.396	1.27	0.208
	4940	0.343	0.422	2.77	0.428	0.961	0.280
	4941	0.292	0.336	1.90	0.430	0.880	0.260
	4942	0.296	0.296	1.40	0.456	0.990	0.254
	4943	0.295	0.325	3.69	0.301	0.835	0.199
	4944	0.318	0.351	1.35	0.476	1.18	0.274
	4945	0.318	0.354	1.43	0.429	1.17	0.267
	4946	0.366	0.306	2.35	0.455	0.994	0.293
	4947	0.386	0.289	1.50	0.431	0.922	0.311
	4948	0.350	0.294	2.50	0.543	0.765	0.259
	4949	0.312	0.313	1.40	0.433	1.00	0.254
	4950	0.328	0.287	1.62	0.459	0.872	0.267
	4951	0.369	0.342	1.52	0.445	1.05	0.207
	4952	0.320	0.307	1.53	0.493	0.924	0.274
	4953	0.285	0.290	3.64	0.329	0.619	0.200
	5−4954	0.377	0.256	2.54	0.434	0.676	0.279
	4955	0.357	0.330	1.34	0.427	1.06	0.262
	4956	0.295	0.326	1.41	0.489	1.01	0.257
	4957	0.307	0.354	1.51	0.436	1.12	0.266
	4958	0.437	0.332	1.43	0.568	1.11	0.234
	4959	0.298	0.295	1.93	0.406	0.837	0.272
	4960	0.426	0.330	3.59	0.590	0.752	0.298
	4961	0.376	0.263	2.58	0.366	0.690	0.272
	4962	0.459	0.251	1.51	0.539	0.859	0.257
	4963	0.392	0.287	1.95	0.608	0.871	0.297
	4964	0.296	0.382	2.74	0.336	0.792	0.213
	4965	0.310	0.354	1.57	0.450	1.08	0.262
大小久保　4号住居跡	5−4967	0.298	0.292	1.63	0.410	0.838	0.255
（山梨型）	4968	0.294	0.263	1.56	0.432	0.912	0.240
	4969	0.311	0.257	1.50	0.385	0.848	0.247
	4970	0.321	0.285	1.51	0.478	1.07	0.248
	4971	0.364	0.292	1.58	0.542	0.831	0.264
	4972	0.391	0.297	1.57	0.661	1.02	0.272
	4973	0.330	0.340	1.55	0.485	1.06	0.262
	4974	0.346	0.320	1.54	0.518	1.17	0.225
	4975	0.338	0.311	1.64	0.466	0.853	0.248
	4976	0.294	0.327	1.58	0.442	1.13	0.253
	4977	0.311	0.292	1.72	0.454	0.827	0.239

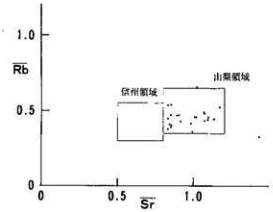
遺跡名	試料No.	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
	4978	0.324	0.259	1.53	0.472	0.886	0.274
	4979	0.360	0.310	1.56	0.544	0.852	0.266
	4980	0.335	0.320	1.54	0.460	1.02	0.249
	4981	0.316	0.277	1.53	0.470	0.897	0.273
	4982	0.257	0.283	2.25	0.381	0.832	0.216
	4983	0.322	0.320	1.51	0.461	1.01	0.265
	4984	0.315	0.293	1.52	0.463	1.09	0.246
	4985	0.277	0.464	1.66	0.331	1.43	0.252
	4986	0.257	0.296	2.25	0.402	0.849	0.218
	4987	0.327	0.386	1.72	0.422	0.984	0.213
	4988	0.264	0.378	2.11	0.359	0.988	0.193
	4989	0.333	0.359	1.55	0.443	1.09	0.241
	4990	0.315	0.379	1.69	0.435	1.07	0.244
大小久保 7号土坑	1層 5－4991	0.267	0.330	1.75	0.452	0.960	0.255
（山梨型）							
7号土坑	7層 5－4992	0.272	0.309	1.74	0.458	0.992	0.240
21号土坑	5－4993	0.283	0.379	2.14	0.369	1.12	0.266
長野 小原 8期(1)	5－4994	0.511	0.236	2.15	0.469	0.546	0.379
（長野型）	4995	0.505	0.255	2.46	0.622	0.505	0.282
	4996	0.361	0.379	2.87	0.328	0.665	0.329
	4997	0.417	0.387	2.68	0.438	0.711	0.382
	4998	0.394	0.374	3.31	0.393	0.637	0.325
	4999	0.490	0.368	3.19	0.375	0.596	0.313
	5000	0.481	0.333	2.16	0.505	0.609	0.294
	5001	0.393	0.376	3.26	0.314	0.596	0.337
	5002	0.303	0.394	3.27	0.293	0.600	0.308
	5003	0.314	0.482	4.43	0.222	0.786	0.340
	5004	0.421	0.423	2.95	0.407	0.702	0.376
	5005	0.323	0.480	4.38	0.219	0.746	0.361
	5006	0.451	0.331	3.10	0.410	0.573	0.305
	5007	0.578	0.492	2.96	0.420	0.734	0.424
	5008	0.424	0.307	2.32	0.449	0.574	0.291
	5009	0.395	0.313	2.43	0.325	0.622	0.368
	5010	0.411	0.421	2.83	0.362	0.672	0.332
	5011	0.528	0.368	1.85	0.451	0.665	0.255
	5012	0.296	0.469	4.27	0.212	0.604	0.306
	5013	0.280	0.359	3.38	0.237	0.530	0.320
	5014	0.432	0.340	3.20	0.362	0.897	0.296
	5015	0.430	0.344	2.81	0.420	0.588	0.265
	5016	0.412	0.308	2.13	0.454	0.574	0.225
	5017	0.436	0.550	2.71	0.368	0.779	0.404
	5018	0.406	0.296	2.19	0.435	0.557	0.327
	5019	0.383	0.397	2.07	0.391	0.706	0.356
	5020	0.453	0.319	2.50	0.382	0.593	0.384
	5021	0.397	0.483	3.05	0.346	0.752	0.382
	5022	0.472	0.442	2.60	0.469	0.692	0.438
	5023	0.400	0.490	2.43	0.353	0.736	0.448
	5024	0.469	0.339	2.72	0.425	0.572	0.305
	5025	0.376	0.434	2.34	0.441	0.697	0.321
	5026	0.369	0.506	3.09	0.331	0.708	0.354
	5027	0.373	0.467	2.72	0.321	0.700	0.394
	5028	0.349	0.344	3.20	0.340	0.562	0.291
	5029	0.438	0.508	2.85	0.317	0.696	0.371
小原 8期(2)	5－5030	0.460	0.332	2.03	0.526	0.578	0.250
（長野型）	5031	0.429	0.346	2.51	0.466	0.650	0.237

遺跡名	試料No.	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
小原 8期 (2)	5032	0.468	0.368	2.89	0.416	0.577	0.397
(長野型)	5033	0.370	0.448	3.19	0.352	0.658	0.311
	5034	0.381	0.392	3.25	0.316	0.596	0.309
	5035	0.434	0.416	2.89	0.461	0.673	0.356
	5036	0.319	0.387	3.26	0.306	0.600	0.309
	5037	0.387	0.408	2.07	0.400	0.702	0.366
	5038	0.373	0.387	2.94	0.329	0.598	0.345
	5039	0.440	0.292	2.19	0.490	0.549	0.274
	5040	0.387	0.330	2.26	0.460	0.573	0.227
	5041	0.444	0.280	2.14	0.499	0.595	0.280
	5042	0.368	0.367	3.23	0.316	0.576	0.347
	5043	0.429	0.345	2.29	0.480	0.596	0.227
	5044	0.464	0.377	2.99	0.420	0.591	0.394
	5045	0.386	0.455	3.10	0.339	0.736	0.366
	5046	0.341	0.270	2.48	0.420	0.524	0.182
	5047	0.381	0.352	2.78	0.332	0.578	0.352
	5048	0.431	0.345	2.19	0.463	0.650	0.242
	5049	0.434	0.446	2.85	0.445	0.686	0.364
	5050	0.470	0.321	2.17	0.524	0.683	0.275
	5051	0.452	0.217	3.57	0.358	0.434	0.279
	5052	0.388	0.356	2.96	0.347	0.577	0.418
	5053	0.419	0.370	2.62	0.430	0.725	0.372
	5054	0.388	0.404	2.93	0.315	0.676	0.359
	5055	0.382	0.378	2.61	0.405	0.708	0.358
	5056	0.339	0.279	2.56	0.426	0.516	0.183
	5057	0.354	0.344	2.33	0.419	0.595	0.209
	5058	0.429	0.480	2.95	0.327	0.799	0.377
	5059	0.340	0.271	2.49	0.423	0.540	0.185
	5060	0.475	0.314	2.16	0.508	0.600	0.273
小原 10～12期 (1)	5－5061	0.423	0.190	2.86	0.438	0.430	0.232
(長野型)	5062	0.364	0.394	3.48	0.412	0.665	0.298
	5063	0.418	0.182	2.98	0.426	0.420	0.215
	5064	0.421	0.191	2.87	0.424	0.426	0.222
	5065	0.449	0.193	2.93	0.495	0.438	0.231
	5066	0.467	0.418	2.92	0.497	0.860	0.313
小原 10～12期 (2)	5－5067	0.292	0.634	3.40	0.329	0.941	0.240
(長野型)	5068	0.426	0.196	2.86	0.428	0.439	0.224
	5069	0.422	0.186	2.87	0.436	0.431	0.232
	5070	0.422	0.206	2.92	0.434	0.436	0.222
	5071	0.421	0.183	2.96	0.426	0.420	0.228
	5072	0.323	0.543	2.79	0.295	0.992	0.323
	5073	0.345	0.354	2.92	0.282	0.635	0.334
	5074	0.296	0.651	3.34	0.327	0.992	0.243
	5075	0.261	0.464	2.98	0.260	1.02	0.259
	5076	0.268	0.725	3.17	0.272	0.931	0.239
	5077	0.560	0.309	2.89	0.473	0.653	0.311
健康村 15号住居跡	5－5078	0.214	0.534	2.98	0.317	0.960	0.273
山梨県	5079	0.198	0.522	3.04	0.178	0.961	0.282
	5080	0.403	0.290	3.36	0.550	0.560	0.213
	5081	0.219	0.578	2.93	0.229	1.06	0.292
	5082	0.233	0.546	3.14	0.186	0.939	0.258
19号遺跡跡	5－5083	0.243	0.337	3.37	0.280	0.680	0.240
	5084	0.436	0.319	2.83	0.396	0.612	0.337
	5085	0.429	0.316	2.81	0.414	0.615	0.324
	5086	0.442	0.308	3.00	0.374	0.580	0.320
	5087	0.247	0.325	3.31	0.385	0.719	0.236

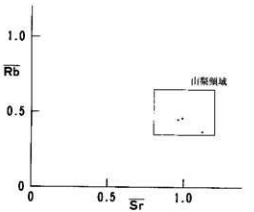
遺跡名	試料No.	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
20号住居跡－a	5 －5088	0.277	0.384	2.53	0.467	0.780	0.318
	5089	0.303	0.411	2.70	0.465	0.781	0.308
	5090	0.293	0.483	2.58	0.385	0.792	0.338
	5091	0.262	0.515	2.45	0.396	0.934	0.262
	5092	0.231	0.611	2.89	0.388	1.05	0.324
	5093	0.284	0.459	2.58	0.485	0.853	0.321
	5094	0.287	0.470	2.46	0.469	0.848	0.298
	5095	0.305	0.408	2.46	0.423	0.778	0.360
	5096	0.283	0.418	2.68	0.369	0.724	0.316
	5097	0.275	0.451	2.59	0.472	0.839	0.321
	5098	0.235	0.602	2.90	0.379	0.985	0.311
	5099	0.219	0.747	3.15	0.290	1.02	0.289
	5100	0.270	0.384	2.52	0.495	0.791	0.304
	5101	0.310	0.470	2.56	0.468	0.813	0.366
	5102	0.267	0.470	2.56	0.483	0.778	0.314
	5103	0.281	0.389	2.45	0.412	0.886	0.262
	5104	0.312	0.496	2.42	0.571	0.833	0.307
	5105	0.311	0.416	2.46	0.427	0.821	0.387
	5106	0.283	0.490	2.48	0.470	0.857	0.328
29号住居跡－b	5 －5107	0.284	0.422	2.66	0.439	0.742	0.281
	5108	0.270	0.408	2.62	0.364	0.724	0.278
	5109	0.267	0.382	3.33	0.303	0.662	0.296
	5110	0.222	0.509	2.94	0.306	0.984	0.315
	5111	0.277	0.603	2.66	0.416	0.689	0.283
	5112	0.253	0.408	2.85	0.351	0.788	0.287
	5113	0.280	0.386	2.62	0.458	0.801	0.320
	5114	0.373	0.419	3.32	0.459	0.543	0.233
	5115	0.261	0.244	3.34	0.291	0.622	0.281
	5116	0.253	0.440	3.36	0.339	0.609	0.268
	5117	0.285	0.416	2.44	0.450	0.781	0.327
	5118	0.270	0.421	2.51	0.435	0.797	0.339
	5119	0.242	0.419	3.33	0.305	0.618	0.247
	5120	0.406	0.434	3.08	0.506	0.749	0.278
29号住居跡－c	5 －5121	0.453	0.378	3.08	0.447	0.623	0.276
	5122	0.451	0.289	3.06	0.449	0.606	0.267
	5123	0.220	0.372	3.52	0.308	0.566	0.220
	5124	0.431	0.319	3.27	0.464	0.636	0.282
	5125	0.405	0.300	3.49	0.438	0.579	0.237
	5126	0.273	0.398	2.76	0.455	0.734	0.302
	5127	0.265	0.448	2.79	0.374	0.770	0.302
	5128	0.221	0.416	3.60	0.288	0.606	0.225
上ノ山	UE11 5 －5129	0.366	0.292	2.40	0.465	0.596	0.205
（長野県）	5130	0.413	0.164	3.45	0.445	0.412	0.236
	5131	0.402	0.360	2.44	0.478	0.602	0.230
	5132	0.300	0.189	2.04	0.344	0.485	0.211
	5133	0.393	0.207	2.96	0.388	0.507	0.263
	5134	0.400	0.296	2.45	0.478	0.602	0.208
	5135	0.404	0.243	2.62	0.413	0.574	0.265
	5136	0.426	0.171	2.97	0.420	0.419	0.233
	5137	0.388	0.187	2.87	0.424	0.508	0.259
	5138	0.385	0.279	2.33	0.473	0.568	0.219
	5139	0.403	0.244	1.94	0.463	0.528	0.178
	5140	0.442	0.287	2.00	0.491	0.586	0.247
	5141	0.401	0.211	2.64	0.363	0.518	0.261
	5142	0.373	0.288	2.42	0.491	0.661	0.210
	5143	0.423	0.297	2.87	0.531	0.457	0.253
	5144	0.371	0.238	2.12	0.436	0.559	0.215

遺跡名	試料No.	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
上ノ山	5145	0.410	0.225	2.39	0.548	0.531	0.225
（長野型）	5146	0.372	0.217	2.65	0.391	0.544	0.230
	5147	0.441	0.366	2.01	0.499	0.784	0.343
	5148	0.431	0.321	1.88	0.547	0.686	0.234
	5149	0.457	0.210	2.45	0.429	0.488	0.212
	5150	0.352	0.291	2.58	0.408	0.625	0.183
	5151	0.399	0.233	2.42	0.504	0.562	0.218
	5152	0.338	0.166	3.19	0.327	0.435	0.156
	5153	0.418	0.319	1.75	0.527	0.665	0.211
	5154	0.400	0.284	1.69	0.546	0.644	0.192
	5155	0.259	0.196	2.23	0.331	0.493	0.189
	5156	0.339	0.240	2.95	0.358	0.616	0.193
	5157	0.408	0.273	2.24	0.439	0.514	0.225
	5158	0.407	0.225	3.09	0.367	0.488	0.247
	5159	0.295	0.189	2.04	0.331	0.495	0.197
	5160	0.396	0.258	2.66	0.391	0.540	0.266
	5161	0.334	0.265	2.65	0.417	0.658	0.225
	5162	0.401	0.300	1.87	0.537	0.658	0.203
	5163	0.339	0.238	2.57	0.388	0.545	0.220
	5164	0.406	0.182	2.66	0.180	0.466	0.236
	5165	0.399	0.229	2.76	0.379	0.545	0.266
	5166	0.452	0.250	2.74	0.475	0.506	0.237
	5167	0.403	0.181	3.14	0.385	0.404	0.237
	5168	0.375	0.295	2.09	0.439	0.638	0.223
	5169	0.401	0.242	2.23	0.450	0.539	0.204
	5170	0.344	0.285	2.67	0.408	0.606	0.176
	5171	0.429	0.300	1.82	0.482	0.645	0.226
	5172	0.417	0.233	2.65	0.397	0.556	0.270
	5173	0.394	0.241	2.64	0.378	0.599	0.265
	5174	0.350	0.249	2.03	0.437	0.506	0.171
	5175	0.436	0.246	1.71	0.526	0.528	0.222
	5176	0.363	0.293	2.09	0.443	0.573	0.204
	5177	0.395	0.316	2.29	0.469	0.666	0.220
	5178	0.393	0.304	2.42	0.464	0.511	0.250
	5179	0.374	0.188	2.71	0.418	0.523	0.227
	5180	0.387	0.234	2.22	0.479	0.518	0.203
	5181	0.346	0.210	2.14	0.427	0.496	0.170
	5182	0.423	0.224	1.96	0.467	0.536	0.215
	5183	0.405	0.284	2.74	0.373	0.623	0.261
	5184	0.398	0.274	2.96	0.515	0.615	0.229
	5185	0.405	0.303	1.92	0.463	0.609	0.223
	5186	0.429	0.221	2.81	0.440	0.484	0.250
	5187	0.388	0.288	2.25	0.521	0.680	0.193
	5188	0.353	0.336	2.39	0.476	0.884	0.187
	UK 10 5－5189(粘土)	0.316	0.246	2.05	0.395	0.578	0.160
	5190 〃	0.340	0.221	2.15	0.421	0.526	0.159
	5191 〃	0.323	0.234	1.99	0.437	0.556	0.138
前田 1号住居	5－5192	0.246	0.471	3.43	0.280	0.868	0.238
（山梨型） 1号炉跡	5－5193	0.294	0.612	4.84	0.173	0.669	0.256
2号住居	5－5194	0.292	0.389	2.73	0.348	0.674	0.203
3号住居	5－5195	0.335	0.215	4.34	0.368	0.330	0.136
	5196	0.267	0.480	2.74	0.198	0.530	0.464
	5197	0.237	0.523	3.05	0.220	1.19	0.237
4号住居	5－5198	0.397	0.424	2.73	0.549	0.886	0.380
	5199	0.380	0.426	2.71	0.538	0.913	0.275
6号住居	5 5200	0.256	0.471	3.10	0.286	0.922	0.239
7号住居	5 5201	0.324	0.347	2.73	0.247	0.607	0.193
	5202	0.365	0.561	3.62	0.301	0.492	0.220

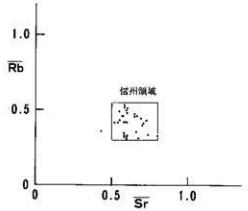
遺跡名	試料 No.	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
	5203	0.217	0.289	2.81	0.365	0.610	0.193
10号住居	5 −5204	0.327	0.351	2.83	0.464	0.549	0.192
宮間田 19号住居	5 −5205	0.266	0.329	3.88	0.340	0.701	0.230
(山梨県)	5206	0.205	0.303	2.82	0.219	0.770	0.212
	5207	0.277	0.334	3.50	0.307	0.702	0.240
	5208	0.309	0.650	2.70	0.309	1.15	0.222
	5209	0.217	0.291	2.88	0.211	0.747	0.216
	5210	0.323	0.312	2.41	0.455	0.968	0.251
	5211	0.265	0.320	2.86	0.208	0.778	0.201
50号住居	5 −5212	0.311	0.356	1.51	0.428	1.03	0.265
	5213	0.344	0.282	1.48	0.502	0.950	0.263
	5214	0.304	0.341	1.50	0.381	1.07	0.235
	5215	0.309	0.335	1.48	0.420	1.03	0.240
	5216	0.316	0.596	3.00	0.250	0.500	0.496
	5217	0.341	0.303	1.49	0.498	0.976	0.259
	5218	0.350	0.361	1.51	0.478	0.935	0.250
72号住居	5 −5219	0.306	0.686	1.72	0.443	1.37	0.269
	5220	0.218	0.361	2.67	0.264	0.753	0.219
	5221	0.295	0.742	1.76	0.477	1.27	0.219
	5222	0.290	0.695	1.76	0.461	1.24	0.236
	5223	0.193	0.709	3.21	0.309	0.832	0.204
	5224	0.332	0.313	2.44	0.545	0.527	0.219
	5225	0.334	0.338	2.67	0.475	0.522	0.230
	5226	0.335	0.303	2.55	0.498	0.534	0.229
	5227	0.288	0.722	1.88	0.390	1.24	0.222
	5228	0.339	0.331	2.42	0.505	0.530	0.222



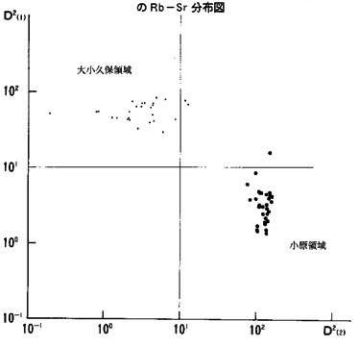
第106図　大小久保4号住居跡出土土師器の Rb－Sr 分布図



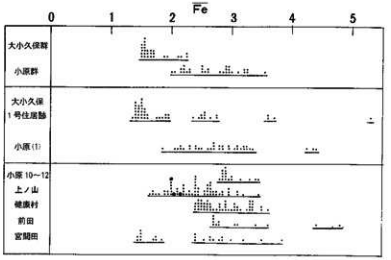
第107図　大小久保7号住居跡、土坑出土土師器の Rb－Sr 分布図



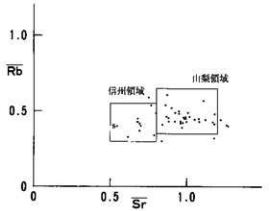
第108図　小原遺跡8期(2)出土土師器の Rb－Sr 分布図



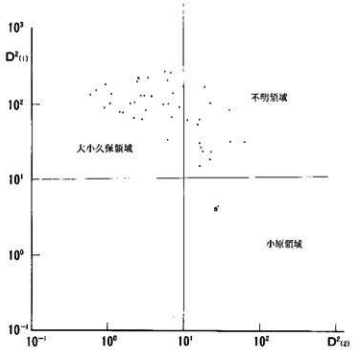
第109図　大小久保群と小原群の相互識別（K、Ca、Rb、Sr 因子の使用）



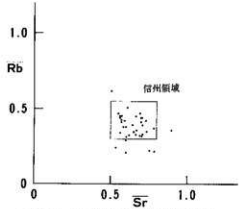
第110図　Fe 因子の比較



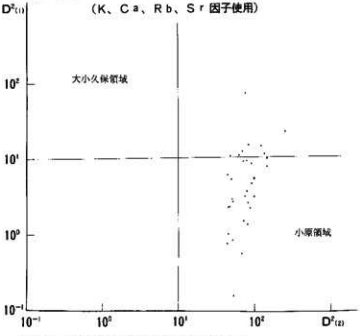
第111図　大小久保1号住居跡出土土師器の Rb－Sr 分布図



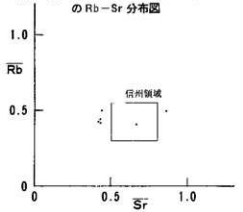
第112図　大小久保1号住居跡出土土師器胎土の分類（K、Ca、Rb、Sr 因子使用）



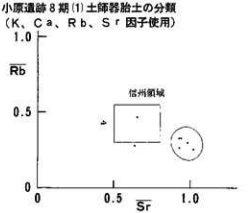
第113図　小原遺跡8期(1)出土土師器の Rb－Sr 分布図



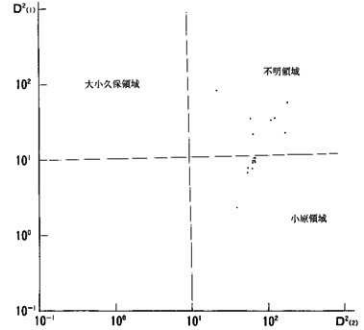
第114図　小原遺跡8期(1)土師器胎土の分類（K、Ca、Rb、Sr 因子使用）



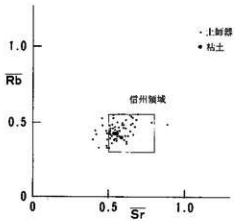
第115図　小原遺跡10～12期(1)出土土師器の Rb－Sr 分布図



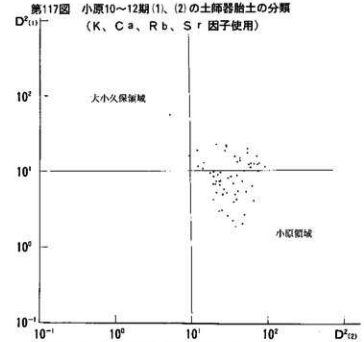
第116図　小原遺跡10～12期(2)出土土師器の Rb－Sr 分布図



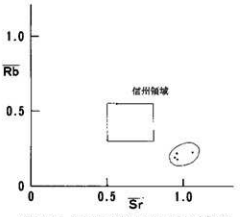
第117図　小原10～12期(1)、(2)の土師器胎土の分類
（K、Ca、Rb、Sr 因子使用）



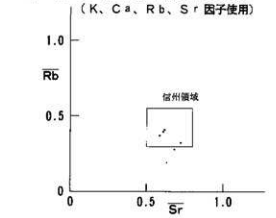
第118図　上ノ山遺跡出土土師器、
粘土の Rb－Sr 分布図



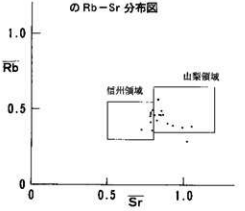
第119図　上ノ山遺跡出土土師器胎土の分類
（K、Ca、Rb、Sr 因子使用）



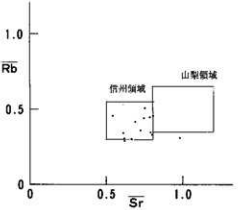
第120図　健康村遺跡15号住居跡の土師器
の Rb－Sr 分布図



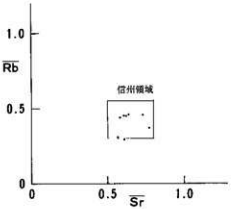
第121図　健康村遺跡19号住居跡出土土器の Rb－Sr 分布図



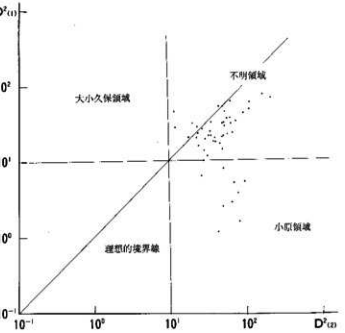
第122図　健康村遺跡20号住居跡－a出土土器の Rb－Sr 分布図



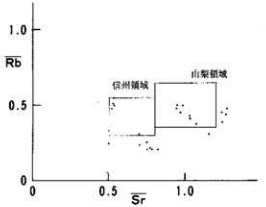
第123図　健康村遺跡20号住居跡－b
出土土器のRb－Sr分布図



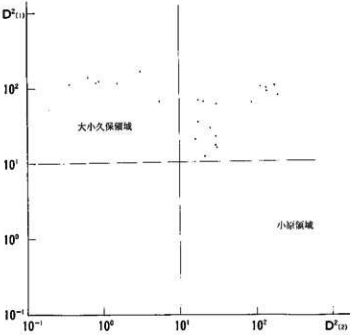
第124図　健康村遺跡20号住居跡－c
出土土器のRb－Sr分布図



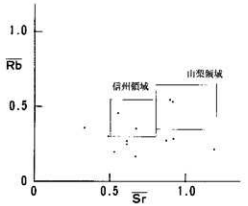
第125図　健康村遺跡出土土師器胎土の分類
（K、Ca、Rb、Sr因子使用）



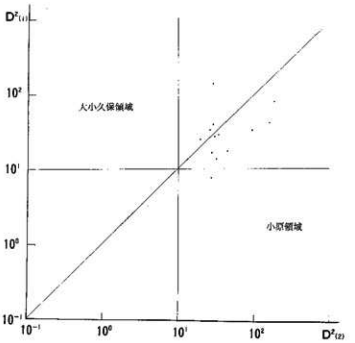
第126図　宮間田遺跡出土土師器のRb－Sr分布図



第127図　宮間田遺跡出土土師器胎土の分類
（K、Ca、Rb、Sr因子使用）



第128図　前田遺跡出土土師器の Rb－Sr 分布図



第129図　前田遺跡出土土師器胎土の分類
（K、Ｃａ、Ｒｂ、Ｓｒ因子使用）

第3節　健康村遺跡出土の動物遺存体について

石川　郁

本遺跡においてA・G調査区より少量の動物遺存体が検出された(註1)。1号住居跡より検出された1点を除いてはすべて遺構外出土である。

1．1号住居跡出土の動物遺存体

軟体動物門　Phylum Mollusca
　斧足綱　Class Pelecypoda
　　古異歯目　Order Paleoheterdonta
　　　カワシンジュガイ科　Family Margaritiferidae
　　　　カワシンジュガイ　*Margaritifera laevis*

1号住居跡の遺構内土坑より検出された。片殻の殻頂部付近が残存しているのみで、殻長、殻高は計測し得なかった。

カワシンジュガイは主に北海道及び本州日本海側に生息する淡水産の貝である。現在は食用とされることはほとんどないが、アイヌでは身を食べ、殻はナイフとして用いていた。北海道の貝塚において報告例はあるものの、主体をなすということはなく、また、本州において報告例は少ない。

2．遺構外出土の動物遺存体

脊椎動物門　Phyium Vertebrate
　哺乳綱　Class Mammalia
　　奇蹄目　Order Perissodactyla
　　　ウマ科　Family Equidae
　　　　ウマ　*Equecs caballus*
　　ウサギ目　Order Lagomorpha
　　　ウサギ科　Family Lepuridae
　　　　ノウサギ　*Lepus brachyurus*

遺構外から検出された資料は、以下の2種3点である。いずれも破損しており、詳細な計測はし得なかった。

第38表　遺構外出土動物遺存体一覧表

検出地点	種名	部位	計測値	備考
A区B－11グリッド	ウマ	下顎骨		やや小さめ
A区D－8グリッド	ノウサギ	右側大腿骨	残存部最大長54.91mm	近位端欠損，表土一括
G区	ウマ	右側距骨	最大幅62.09mm	底側欠損，試掘資料

謝辞

動物遺存体の同定にあたって、国立歴史民俗博物館考古研究部助教授　西本豊弘氏に御教示を賜わりました。記して感謝申し上げます。

（註1）　本節で記載したほかに水洗選別により、8遺構からあわせて77点の貝片が検出されたが、いずれも細片であり、種の同定はし得なかった。また、2遺構から1点ずつ、鱗が検出された。

参考文献

加藤嘉太郎　『家畜比較解剖図説（上）』〈第二次増訂改版〉　養賢堂，1979
波部忠重監修『学研中高生図鑑　貝Ⅱ』　学習研究社，1975

第7章　考　　察

第1節　山梨県における縄文時代前期末から中期初頭の様相

野代幸和

はじめに

土器編年にはじまる該期の研究は、隣接する長野県を中心に研究されてはきたが、未だにその実態を掴むことができず、遅れている分野の一つである。

山梨県においてもまた例外ではない。しかし近年、該期に属する遺跡の発見が増加しつつあり、空白地帯に近かった様相が、徐々に明らかになってきたように思われる。従来指摘されているように、関東地方では、土器が数点しか出土しないといった、キャンプサイト的な遺跡が多い。本県においても、小林達雄氏によるセトルメント・システムのDないしFパターンに該当する遺跡も多く発見されているが、それとは別に定住を示すしっかりした住居を伴い、規模・内容的にもかなり充実した遺跡が存在する。また、これらに加えて遺物についても、極めて中部高地的な色彩が強いことがわかってきている。ここでは、県内における遺跡の分布、土器の分類に基づく時間的な位置づけとその変遷を中心にふれることにする。

遺跡の分布

第130図（第39表）は山梨県内における前期末から中期初頭段階（諸磯c、鍋屋町系・十三菩提、五領ヶ台Ⅰ・Ⅱないしその併行式期）に位置づけられる土器出土遺跡分布図である。該期の遺跡は、現在79カ所（報告書化されているものを中心）で発見されているが、この他には昨年リニア関連で調査を行った中満遺跡や九鬼遺跡でも発見されているようである。その分布については、前述で指摘したとおり、中部高地との関係を示すような在り方を示している。八ヶ岳南麓の釜無川流域と甲府盆地の笛吹川流域において濃密な分布を示しているのがわかる。しかし静岡方面に抜ける富士川流域では今く発見されていないのである。この分布の差は実に対称的である。笛子峠を越え郡内地方に目を向けてみると桂川流域においてやや集中して分布していることがわかる。次に後述する土器の変遷に基づいて作成した分類図の第7類の99については、関東方面との関係をを色濃く残すものである。この遺跡分布図が示すように、中部・北陸地方や関東地方との交流を裏づけるような分布状況を示し、やや異なる文化が各方面から流入しあい、互いに影響しあうとともに、中継地点としての重要な位置を占めていたことがわかる。

土器の変遷に基づく分類（第131～133図）

ここでは、土器の変遷に基づいて分類する。第39表は遺跡一覧表であり、後述の分類を基に継続性を示したものである。分類上、特に土器様相に激しい変化を持つ中期に転換する直前段階の土器群、つまり前期末葉段階（4～6）のものについては、山口　明氏[1][2]の分類を参考にしたことを記しておく。

第1類（第131図1～3）；今村啓爾氏[3]による（古）段階に位置づけられる一群。口縁部に沿って多数の耳状突起などの大型貼付文やボタン状・棒状貼付文が発達しているものである。本県においては長沢宏昌氏[4]によっても指摘されているが、群馬県がその分布の中心と考えられる耳状突起などの大型貼付文を施す一群は、皆無に等しい状態なのである。しかし、分類図のほうには未報告であるため掲載しなかったのであるが、八ヶ岳南麓に存在する天神遺跡をはじめ、甲ッ原遺跡などでは発見されている。しかしその数はとても少ない。本遺跡においても同様の状況が伺える。本県ではボタン状・棒状貼付文を口縁部に施すものが、主体を占めているようである。

なお、耳状突起などの大型貼付文を施す一群については、長野県で下島式[66]と称されているものである。

第2類（第131図4～6）；今村氏による（新）段階に位置づけられる一群。貼付文に結節浮線文が発達するもの。本遺跡からは、この時期に主体をなす集落が存在していることがわかる。

第3類（第131図7～13）；山口氏による第一段階に位置づけられる一群。半行集合沈線文によって弧状・渦巻状の文様が施されているもの。扇平Ⅱ類[69]、山向Ⅱ式[70]、桜沢式[71]などに該当する。口縁部が肥厚するものについては、鍋屋町Ⅰ式の影響を受けているとされるものである。14についても極めてこの段階に近いものと考えられる。

第4類（第131図14～44）；山口氏による第二段階に位置づけられる一群。弧状・渦巻状の平行沈線文に沿って凹線文が加えられているもの（15～16）。半行沈線文を主体として弧状や曲線的な文様構成に、三角印刻文が組み込まれたもの（17～44）。これらのものについては、鍋屋町Ⅱ式の影響が見られるものとされている。また扇平Ⅱ・Ⅲ類、籠畑Ⅱ式[72]に該当するものである。

第5類（第131・132図45～65）；山口氏による第二段階に位置づけられる一群。まずはじめに外来系（畿内）の土器として、大歳山式ないしこの模倣土器（45～49）を紹介しておく。次に、太めの粘土紐の貼付による押圧隆帯文が施されているもの（50～57）。口辺部に刺突文が施されているもの（58～61）。これらのものは扇平Ⅴ類、室ノ木Ⅱ群D類[67]、晴ヶ峰式[73]に該当する。また縄文地や無文地に粘土紐を貼付して、結節浮線文や無節浮線文によって文様を構成するもの（62～65）。これらのものは十三菩提式に該当する。

ここからは中期初頭段階に位置づけられるものである。五領ヶ台式ないし梨久保式については、今村氏[68]、三上徹也氏[74]の論文を参考にしている。

第6類（第132・133図45～65）；大きく縄文系（68～71・80）のものと沈線文系（72～79・81）のものとに分けることができる。縄文系の特徴は、口縁部に細線文、三角印刻文、瓦状押し引き文、三角列点文が施される。胴上部には横方向に「Y」ないし「V」字状文の連続配置するものが多く、その下部には結節を作り羽状縄文が間隔をもって施されている。沈線文系は、口唇部に連続爪形文が施されている。口縁部には沈線文によって格子目、羽状、斜めなどの文様が、また一単位の渦巻状突起がつくものがある。いわゆる五領ヶ台Ⅰ式ないしその併行期に該当するものである。

第7類（第133図45～65）；縄文系（83～88）については、まず口縁部に無文帯が存在するもの（83）が出てくる。また第6類に見られた「Y」ないし「V」字状文が連続的につながって、小型の半円弧文が施されるようになる（84）。次の段階として、沈線による半円弧文（87）が大型化して口縁部で発達し、玉抱き三叉文を持つものが多くなる。やがてこの半円弧文ないし波状文が隆帯によって表現されるようになり、重三角文となるものがあるようで、この三角区画内に玉抱き三叉文を持つもの（85）が出現するようである。また、図版内では扱わなかったが、今村氏によって提唱された口縁部に「T」字状文が連続して施される大石式についても共伴関係にあることが知られている。沈線文系（82～100）については、第6類よりも胴部に構成される文様帯が縮少して簡略化される。次の段階としては、前段階まで用いられていた沈線による斜格子目文が無くなり、交互刺突文が用いられるようになる。胴部には4単位の垂線が入ってくるのが特徴である。

以上のような変遷過程を辿ることが指摘されている。これらのものは、五領ヶ台Ⅱ式ないしその併行期に該当するものである。

健康村遺跡における概要

前述のような変遷過程を辿るなかで、健康村遺跡において出土した土器の位置づけを行ってみる。第131～133図を参考にして作成したものが第134図である。第1類では県内ではほとんど出土例の無い耳状突起を持った口縁部破片や人型のボタン状貼付文を持つものが第9号土坑より若干出土している。第2類では、住居址が伴ったこともあって、かなり充実した資料が得られている。口辺部の文様構成が異なるので分けておいた。これは貼付

文に結節浮線文がかなり発達する一群で、渦巻や同心円状に文様を構成するものは、より十二菩提式に近いとする認識のもとに分類した。次はやや途切れて第5類が認められる。全て遺構外からの出土であり、極めてその数は少ない。最初に載せたものは、縄文地や無文地に粘土紐を貼付して、結節浮線文によって文様を構成するものである。つづけて掲載したものは、押圧隆帯文が施されているものとその系統にある胴部破片である（23～26）。一番右にあるもの（27）は、北陸地方の影響が強いものと考えられるものである。第6類は全て遺構外からの出土であり、破片資料しか認められなかった。第23号土坑より出土したものについては、第6類から第7類へ移行する過渡期の段階のものと考えられる。第7類の埋甕（40）については、胴部の文様帯が減少しており、万領ヶ台Ⅱ式の併行期にあたる。第6・7類については、沈線文系が主体であり、まさしく中部高地的な色彩が強いようである。

全体をとおして見てみると、第3～4類に属するものが全く出土していないことに気がつく。つまり、今村[20]・山口[21]両氏による鍋屋町系土器群とされるものが皆無の状態なのである。時間的な流れとしては、前期末の諸磯c段階でピークを迎えたのち、その直後段階では全く痕跡すらなくなってしまうのである。再び現れるのは十二菩提式併行期の第5類からであるが、未定住状態である。五領ヶ台1式併行期の第6類においても同様の状態が続き、五領ヶ台Ⅱ式併行期において再び若干の定住化の傾向が伺えるようになる。これらのことからも、該期における本遺跡の規模はとても小規模なものと考えられる。

問題点の再認識

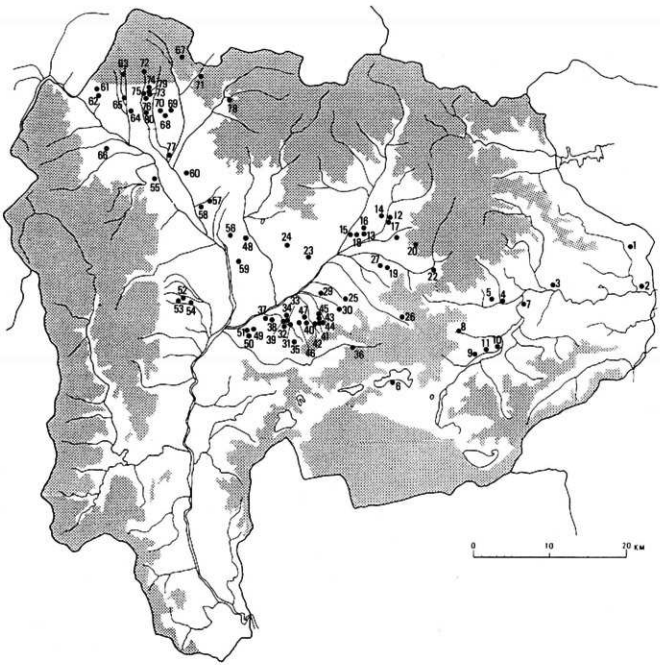
健康村遺跡から発見された第1類、第2類に属する土器群については、長野県において指摘されているように[18]、山梨県においても集合沈線と浮線文を中心とする一群が分布している。第1類に示した耳状突起を持つものは少なく、健康村遺跡を含めた北巨摩郡を中心にその分布が知られているが、その数は少なく、皆無に等しい状態である。例えば花鳥山遺跡（東八代郡八代町御坂町・30）においては、棒状貼付の施されるものはあるが、大部分のものは結節浮線文と結節沈線文を施すものに占められているのである。つまりこれらは（新）段階に位置づけられるものである。そもそも下鳥式系の色合いが濃い（古）段階とされる土器群については、群馬県地方で多く発見されており、分布に偏りが在るのではないかと考えられるのである。山梨県内の様相を見る限りでは、あまりに分布の偏りがあることから、地域差と編年差に関して考える必要性があるように思われる。またこのことについて検討を講じてみたいと考えているのであるが、未報告が多く存在するため、今後の課題として取り組んでいかなければならないと考えている。また、この後に続く第3～5類については、分類方法としては非常に有効なのであるが、この分類が遺物の変遷を示したものであるという考え方には鍋屋町系土器群との間で、矛盾があり決着していない[19]。このように、土器の編年的な位置づけが定まらぬ今、分類をとおして並べざるをえないと思う。

山梨県の立地が指し示すことは、遺跡の分布からもほぼ明らかであるが、文化のパイプとしての重要な役割を果たしていることである。当時の文化の交流を考える上には非常に興味深い地点なのである。昨年、中道町の上ノ平遺跡（33）で、日本海沿岸部の特に北陸地方で多く発見されている「の」字状石製品が出土した点である。また第132図の66・67に示したような朝日下層式、新保式の影響を多分に受けた資料も発見されているのである。大泉村の甲ッ原遺跡（73）では第7類の五領ヶ台Ⅱ式の併行期に属する琥珀製の玉とその破片が多数出土している。これは東北地方の久慈・いわき、関東地方の銚子などからもたらされたものと考えられるのである。第5類で示した45～49については濃内地方から流入したものである。このようなことから小笠原諸島の八丈島にある倉輪遺跡の様相に近い在り方を示しており、当時の活発な交流関係を伺い知ることができるのである。

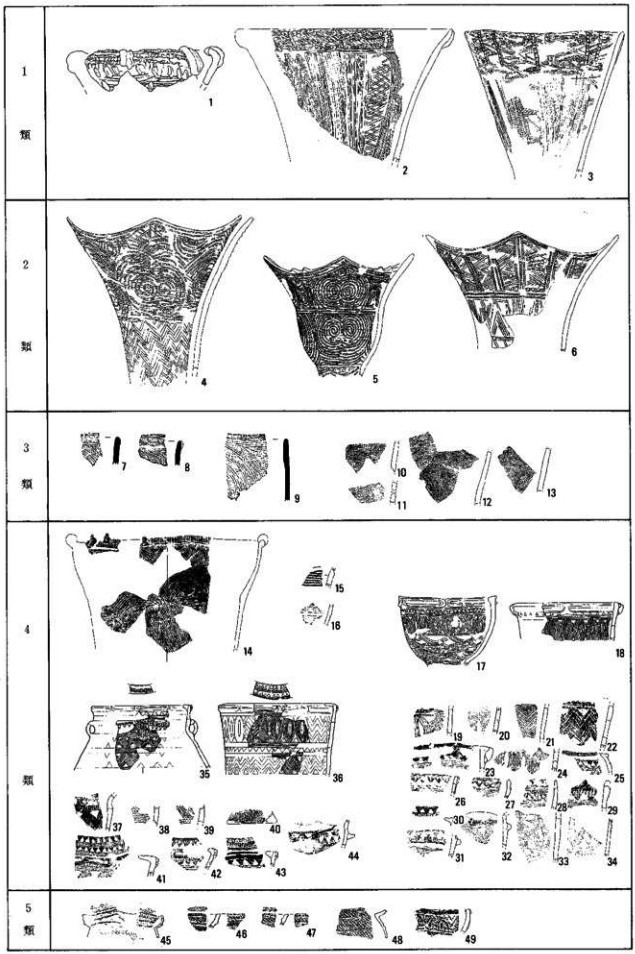
今後の問題としては、編年的・分布的な点で多くの問題点が指摘されている点について、これらの早期解決が望まれる。山梨県の場合、関東的な在り方に比べれば、かなり濃密な分布と内容を持っており、研究対象としては大変興味深い所であると思う。このことは、未開拓分野の一つである本県の動向について研究に当たっていけば、前述の問題点解決と文化的な内容の解明につながっていくものと思われるのである。

註

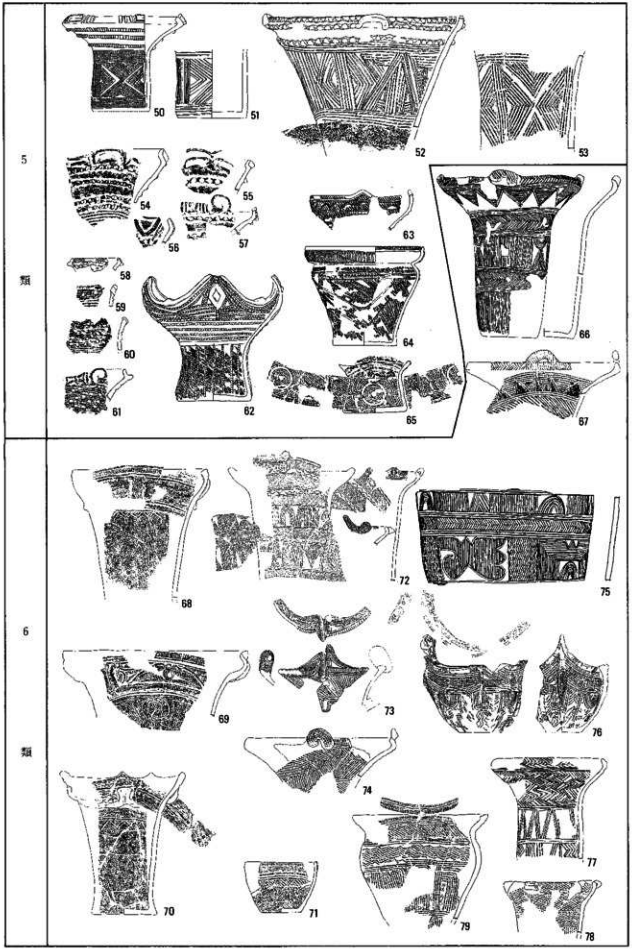
(1) 山口 明「縄文時代前期末葉鍛屋町系土器群の動態」(『長野県考古学会誌』39、1980)
(2) 今村啓爾「諸磯式土器」(『縄文文化の研究』3 雄山閣、1982)
(3) 長沢宏昌「第4節 花鳥山遺跡の諸問題」『花鳥山遺跡 水呑場遺跡』(山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第45集、1989)
(4) 宮坂英一「長野県諏訪郡下島遺跡」(『日本考古学会年報』2、1954)
(5) 会田 進「前平遺跡」岡谷市教育委員会(1974)
(6) 武藤雄六「八ヶ岳南麓における縄文時代前期末の遺跡―長野県諏訪郡富士見町日向遺跡の調査」(『信濃』Ⅲ・18・4、1966)
(7) 鈴木孝志「長野県北安曇郡松川村振穴字桜沢遺跡」(『考古学雑誌』42巻2号、1957)
(8) 山口 明「中部地方における前期末葉上器群と鍋屋町式土器」(『長野県考古学会誌』48、1984)
(9) 武藤雄六「長野県富士見町踊場遺跡の調査」(『考古学集刊』4―1、1968)
(10) 赤星直忠・塚田明治「横浜市室ノ木遺跡」(横須賀考古学会研究報告2、1973)
(11) 戸沢充則・宮坂昭久「宮川村晴ヶ峰発見の土器」(『諏訪考古学』7、1951)
(12) 今村啓爾「五領ヶ台式土器の編年」(『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第4号、1985)
(13) 三上徹也「梨久保式土器 再考」(『長野県埋蔵文化財センター紀要』1、1987)
(14) 今村啓爾・吉田 格「とけっぱら遺跡」登計原遺跡調査会(1974)
(15) 赤羽 仁・三上徹也「中部高地における縄文時代前期末葉土器群の編年」(『第6回 縄文セミナー 前期終末の様相』 縄文セミナーの会、1993)
(16) 三上徹也「大岡遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1』(財長野県埋蔵文化財センター 発掘調査報告書1、1987)



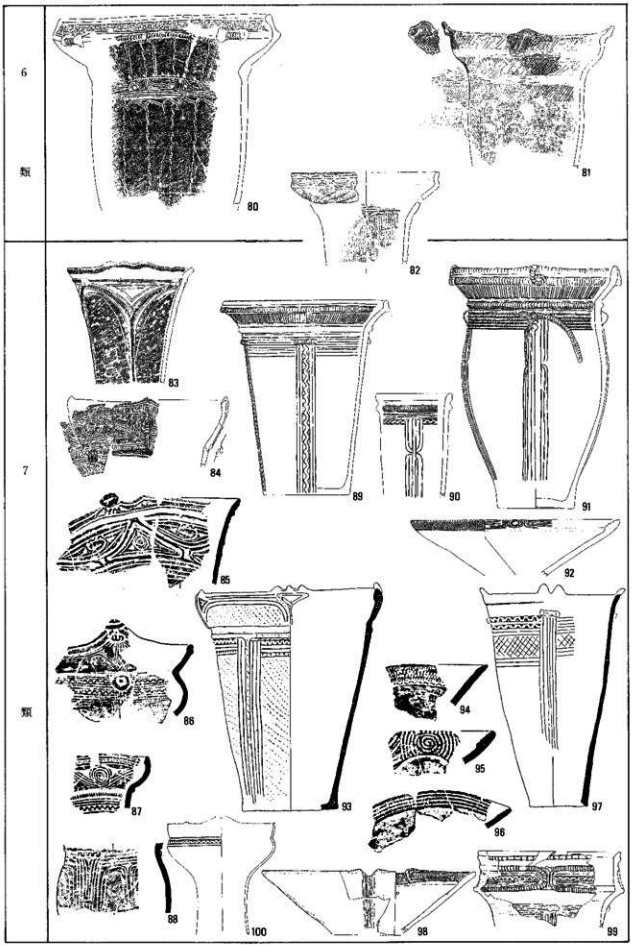
第130図 前期末～中期初頭段階の遺跡分布図



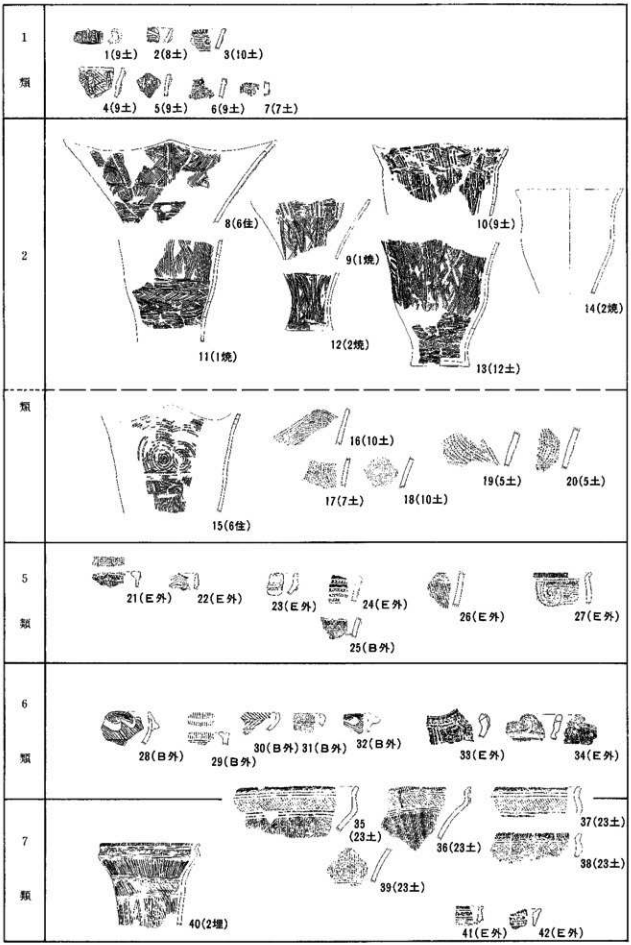
第131図　土器分類図(1)



第132図　土器分類図(2)



第133図　土器分類図(3)



第134図　健康村遺跡土器分類図

第39表　山梨県内縄文前期末～中期初頭段階の遺跡一覧

№.	遺跡名	所在地	分類 一	二	三	四	五	六	七	備考（文献）
1	穴沢	北都留郡上野原町棡原字小伏	○	○	○	○	○		○	上野原町教育委員会『穴沢・カイル遺跡』上野原町埋蔵文化財調査報告書　第3集（1992）
2	桜ヶ丘	北都留郡上野原町上野原		○			○	○	○	上野原町教育委員会『桜ヶ丘遺跡』上野原町埋蔵文化財調査報告書第5集（1992）
3	宮谷	大月市富浜町宮谷字白山							○	大月市教育委員会『宮谷遺跡発掘調査報告』（1973）
4	原平	大月市大月町真木字原平		○				○		山梨県教育委員会『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　大月地内2－』（1975）
5	沢中原	大月市大月町沢中原		○						山梨県教育委員会『昭和46年度発掘調査報告書　沢中原・寺門』（1972）
6	宝司ヶ塚	南都留郡河口湖町小立字宝司ヶ塚		○			○		※大木7a系	山本寿々雄「南都留郡河口湖町小立字宝司ヶ塚出土の土器について」（『富士国立公園博物館研究報告』第15号、1966）
7	田野倉	都留市田野倉						○		山本正則「都留市田野倉出土の縄文式土器」（『甲斐考古』第12巻、第1号、1975）
8	久保地	都留市大幡						○	○	奈良泰史「都留市久保地遺跡における縄文時代中期集落址の様相」（『山梨考古』第2号、1980） 都留市史編纂委員会『都留市史資料編』（1986）
9	山梨原	都留市夏狩字山梨原		○	○	○				都留市教育委員会『山梨原遺跡』都留市埋蔵文化財調査報告 第9集（1982）
10	馬々舟	都留市十日市場字馬々舟	○	○	○	○		○	※踊場系あり	都留市教育委員会『馬々舟遺跡』（1976）
11	おいしがね	都留市十日市場								
12	安道寺	塩山市中萩原		○		○		○	○	山梨県教育委員会『安道寺遺跡調査報告書（概報）』（1978） 住居跡あり
13	町田	塩山市下於曽字町田								中期初頭
14	獅子之前	塩山市千野字獅子之前					○			山梨県教育委員会『獅子之前遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第61集（1991）
15	天神前	塩山市三日市場字天神前				○				前期末　未報告
16	西田	塩山市熊野字西田						○		山梨県教育委員会『西田遺跡－第一次発掘調査報告書－』（1978）
17	中村	塩山市上萩原字中村								中期初頭
18	恵見堂	山梨市東後屋敷字恵見堂								中期初頭
19	釈迦堂	東八代郡一宮町東山梨郡勝沼町							○	山梨県教育委員会『釈迦堂遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第21集（1987）
20	寺平	東山梨郡勝沼町藤井字寺平		○			○	○	○	五領ヶ台Ⅱ式期の住居1軒 寺平遺跡調査会『寺平遺跡発掘調査報告書』（1977）
21	宮の上	東山梨郡勝沼町勝沼字宮の上								中期初頭　未報告
22	田野平	東山梨郡大和村田野					○			大和村教育委員会『田野平遺跡』（1984）
23	桜井畑	甲府市和戸町字桜井畑							○	山梨県教育委員会『桜井畑遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第54集（1990）
24	善光寺	北甲府市善光寺3丁目							○	山梨県教育委員会『善光寺北遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第69集（1992）土坑あり
25	宮の裏	東八代郡御坂町八千蔵字宮の裏						○		末木　健「東八代郡御坂町八千蔵字宮の裏遺跡出土の土器」（『甲斐路』第30号、1977）
26	荒神原	東八代郡御坂町上黒駒字荒神原						○		保坂和博他『八ヶ岳東南麓地遺跡分布調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第85集（1993）
27	北堀	東八代郡一宮町塩田字北堀・中新居・桜地蔵		○		○			○	山梨県教育委員会『北堀遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第7集（1985）土坑あり
28	上の平	東八代郡八代町米倉字上の平		○	○	○	○	○	○	八代町教育委員会『上の平遺跡』（1985）
29	三光神（下長崎）	東八代郡八代町永井字荒神原　下長崎		○		○	○		※[illegible]系あり	八代町教育委員会『三荒神遺跡』（1987）
30	花鳥山	東八代郡八代町竹居字花鳥　御坂町				○				山梨県教育委員会『花鳥山遺跡 水呑場堀遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第45集（1989） 八代町『八代町誌』（1975）
31	下向山	東八代郡中道町下向山					中期初頭もあり？	○	○	吉田　格「山梨県東八代郡中道町下向山」（『考古学雑誌』第48巻、第3号、1963）
32	東原	東八代郡中道町下向山字東原							○	山本寿々雄「山梨県東八代郡中道町東原の中期初頭の縄文式土器－その後判明するもの」（『富士国立公園博物館研究報告』2、1959）
33	上の平	東八代郡中道町下向山					○	○	○	山梨県教育委員会『上の平遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第29集（1987）住居址あり
34	東山北	東八代郡中道町下向山字東山								山梨県教育委員会『東山北遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第79集（1993）
35	上野原	東八代郡中道町右左口字上野原					○			金井安子他「山梨県上野原遺跡第4号住居跡出土の土器について」（『青山史学』第11号、1989）住居跡あり
36	上芦川	東八代郡芦川村芦川		○						今福利恵「東八代郡芦川村上芦川出土の縄文土器について」（『山梨縣考古學協會誌』創刊号、1987）
37	宇山平	東八代郡豊富村大鳥居字宇山平		○		○	○		○	山梨県教育委員会『金川曽根地区大規模農道建設及び畑地帯土地総合改良事業関係埋蔵文化財緊急発掘調査概報』（1973）
38	米倉山B	東八代郡中道町米倉山字下向山								
39	立石	東八代郡中道町上向山字小林の上					○	○		未報告　住居址あり
40	辻	東八代郡境川村藤垈字辻				○	○	○	○	山梨県教育委員会『辻遺跡と割石家遺跡』（1970）
41	寺平	東八代郡境川村小黒坂字手古松		○		○	○		※大歳山式、北白川系土器出土	境川村教育委員会『小黒坂遺跡群』境川村埋蔵文化財調査報告書第3輯（1986）住居跡あり

No.	遺跡名	所在地	分類 一	二	三	四	五	六	七	備考（文献）
42	亀の甲A	東八代郡境川村小黒坂字手古松		○		○	○	○		境川村教育委員会『小黒坂遺跡群』境川村埋蔵文化財調査報告書第3輯（1986）
43	机	東八代郡境川村小黒坂字手古松				○				境川村教育委員会『小黒坂遺跡群』境川村埋蔵文化財調査報告書第3輯（1986）
44	砂原山	東八代郡境川村小黒坂字手古松		○		○	○			境川村教育委員会『小黒坂遺跡群』境川村埋蔵文化財調査報告書第3輯（1986）
45	一の沢西	西東八代郡境川村小黒坂字一の沢					○			山梨県教育委員会『一の沢西遺跡・村上遺跡・後呂遺跡・浜井場遺跡』山梨県埋蔵文化財センター 第16集（1986）
46	柳原	東八代郡境川村小黒坂字柳原		○						境川村教育委員会『柳原遺跡』境川村埋蔵文化財発掘調査報告書第1輯（1984）住居跡あり
47	京原	東八代郡境川村小山字京原				○		○		山梨県教育委員会『京原』（1974） 境川村教育委員会『京原遺跡』境川村埋蔵文化財発掘調査報告書第5輯（1989）
48	金の尾	中巨摩郡敷島町大下条字金の尾		○		○	○	○		山梨県教育委員会『山梨県中央自動車道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 金の尾遺跡・無名墳（きつね塚）』（1987）住居跡あり
49	上野原	中巨摩郡三珠町大塚字上野原				○				山梨県教育委員会『金川曽根地区大規模農道建設及び畑地帯土地総合改良事業関係埋蔵文化財緊急発掘調査概報』（1973）
50	一条氏館	中巨摩郡三珠町上野字一条林				○	○		○	住居址あり 三珠町教育委員会『一条氏館跡遺跡』（1988） 三珠町教育委員会『一条氏館跡遺跡 山梨県三珠町一条氏館跡遺跡第2・第3次発掘調査報告書－』（1991） 三珠町教育委員会『一条氏館跡遺跡 第4次報告』（1993）
51	上野	中巨摩郡三珠町上野					○	○	○ 畿内系・北陸系土器伴出	住居址あり 三珠町教育委員会『上野跡遺跡』（1989）
52	曽根	中巨摩郡櫛形町上宮字曽根		○		○			○	櫛形町教育委員会『曽根遺跡』櫛形町文化財調査報告書No.1（1984）
53	長田口	中巨摩郡櫛形町平岡字長田口							○	未報告 住居跡あり
54	〆木	中巨摩郡櫛形町下市之瀬字〆木					○			櫛形町教育委員会『曽根遺跡』櫛形町文化財調査報告書No.5（1987）
55	宇波円井	韮崎市宇波円井					○	○		都留文科大学考古学研究会「北巨摩地方発見の縄文式時代中期初頭の土器」（『甲斐考古』第五巻、第五号、1968）
56	中尾根	韮崎市穂坂町柳平					○	○	○	甲斐丘陵考古学研究会「韮崎市中尾根遺跡発見の押型文土器」（『丘陵』第8号、1980）
57	坂井	韮崎市藤井町坂井		○		○				志村滝蔵『坂井』地方書院（1965）
58	宮の前	韮崎市藤井町宮の前								前期末 未報告
59	唐松	北巨摩郡双葉町字津谷字唐松							○	未報告 住居跡あり
60	机腰	北巨摩郡明野村小笠原字机腰							○	山梨県教育委員会『寺平遺跡発掘調査報告書』（1977）
61	上平出	北巨摩郡小淵沢町上平出							○	五領ヶ台Ⅱ式期の土壙群 山梨県教育委員会『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』小淵沢地内（1974）
62	沢の田	北巨摩郡小淵沢町岩久保字沢の田					○		○ [illegible]畿内系後続土器	小淵沢町教育委員会『沢の田遺跡』小淵沢町埋蔵文化財調査報告書第2集（1984） 土坑あり
63	小荒間	北巨摩郡長坂町小泉字小荒間								中期初頭
64	健康村	北巨摩郡長坂町中丸字藤塚	○	○			○		○	本報告
65	中込	北巨摩郡長坂町大井ヶ森字中込						○		山梨県教育委員会『中込遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第52集（1990） 土坑あり
66	上北田3	北巨摩郡白州町横手字上北田		○						白州町教育委員会『上北田3遺跡 新居道上遺跡』（1991）
67	丘の公園第5	北巨摩郡高根町清里					○			山梨県教育委員会『丘の公園第5遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第56集（1990）
68	当町	北巨摩郡高根町村山北割字当町						○	○	高根町教育委員会『西原遺跡 当町遺跡』（1987） 土坑あり
69	旭東久保	北巨摩郡高根町村山北割字旭東久保	○?					○	○	高根町教育委員会『旭東久保遺跡』（1985） 土坑あり
70	持井	北巨摩郡高根町村山北割字持井					○		○	高根町教育委員会『持井遺跡』（1992） 住居跡と土坑あり
71	樫山	北巨摩郡高根町樫山								前期末葉 詳細な点は不明
72	小坂	北巨摩郡大泉村谷戸字小坂				○	○	○	○ [illegible]畿内系後続土器あり	山梨県教育委員会『小坂遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第63集（1991） 五領ヶ台期の住居跡と土坑群あり
73	甲ッ原	北巨摩郡大泉村西井出字大林	○	○				○	○	五領ヶ台期の住居跡と土坑あり 山梨県教育委員会『甲ッ原遺跡概報Ⅱ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第83集（1993）
74	天神	北巨摩郡大泉村西井出字天神	○	○					○	未報告 住居跡・土坑あり
75	御所	北巨摩郡大泉村西井出字御所	?	○						山梨大学考古学研究会『御所遺跡』（1979）
76	寺所	北巨摩郡大泉村西井出字寺所		○						山梨県教育委員会『寺所遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第83集（1987）住居址あり
77	塚田	北巨摩郡須玉町大蔵字塚田	○	○						須玉町教育委員会『中尾城・塚田遺跡』須玉町埋蔵文化財調査報告第2集（1984）
78	塩川	北巨摩郡須玉町比志3870外		○			○		○	山梨県埋蔵文化財センター『年報6』（1990） 土坑あり
79	宮地第3	北巨摩郡大泉村西井出1793外		○					○	大泉村教育委員会『宮地第2遺跡 宮地第3遺跡』大泉村埋蔵文化財調査報告書第9集（1991）住居跡あり
80	柳坪	北巨摩郡長坂町大八田字秋田							○	山梨県教育委員会『柳坪遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第13集（1986）住居址あり

第2節　中期後半の土器

今福利恵

本遺跡の中期後半の土器は17号住居跡と遺構外より少数みられる。限られた資料で、多くを語るのは困難であるが、近年の曽利式土器研究の動向の中で問題点をしぼってそれぞれ考えていくことにする。

17号住居跡出土の1・2は地文に斜行する条線と縄文がみられる。斜位の条線が施されるものは胴部に隆線による懸垂文がみられ、蛇行するものを基本としている。また地文に縄文を持つものはX字状の把手を持つ型式の破片と考えられる。1（第11図）は時期的に新しく位置付けられ、曽利Ⅲ式に比定されるもののその他はいずれも曽利Ⅱ式土器に位置付けられる。

遺構外出土の土器（第27図）については、おおよそ曽利Ⅱ式を中心として、一部曽利Ⅲ式がみられる。2は斜格子目文土器の口縁部にあたる。5は地文に結節縄文がみられ、これは曽利Ⅱ式のメルクマールとなる文様である。4は櫛歯状工具による縦位の条線を地文としている。6は17号住居跡の4、5（第11図）と同じX字状把手を持つ大型の破片と考えられ、地文が刺突文となるものである。8は胴部が絞巻のモチーフとなり、曽利Ⅲ式に位置付けられる。

本遺跡においては以上のように曽利Ⅱ式土器が中心にみられる。しかし、曽利Ⅱ式土器は後述するようにその内容において未だ不明確な部分を残している。本遺跡出土の土器からこの点を明確にするのは困難であるが、これらの土器をふまえて問題点を考えてみたい。

曽利式土器は縄文時代中期後半に山梨県を中心として諏訪、静岡、神奈川、東京埼玉西部にかけて分布し、関東地方に広範囲に分布する加曽利E式土器と長野県の伊那地方から諏訪にかけ分布する唐草文土器と併行関係にあり、一部で分布域が重なる。この土器群は八ヶ岳山麓の井戸尻遺跡群の調査により1965年藤森栄一らによる『井戸尻』の中で曽利式土器として設定され曽利Ⅰ式からⅤ式まで細分された。その後、米田明訓や木木健らにより曽利式土器についてその内容が明確にされてきた（米田1978、86、長崎・末木他1979、末木1981、88）。

しかし、曽利式土器の編年は大枠で確立したものの、その細分においてまた様々な見解が示された。米田は曽利Ⅱ式とⅢ式の関係において、地文に注目し、曽利Ⅱ式にみられる結節縄文と曽利Ⅱ式とⅢ式にみられる刺突文について時間差を設定した。つまり結節縄文がみられる段階と結節縄文が消失して刺突文が多用され、弧線文土器が出現する段階に細分したのである。しかし該期において地文となる刺突文は八ヶ岳周辺より北にみられ、八ヶ岳周辺から甲府盆地北部は縄文、甲府盆地東部は条線になる。これらは地域的な特徴として捉えることができ、明確な時間差となりえるかどうか、両者の関係は時間的な差異よりも地域的な差異の可能性がある。

17号住居跡にみられる4・5（第11図）のように地文に縄文を持つものは八ヶ岳西麓から甲府盆地の北西部に多く分布し、さらに結節縄文となるものもみられる。結節縄文は八ヶ岳西南麓にのみ特徴的にみられ、茅野から諏訪周辺では地文には刺突文が多く、X字状把手の付き方も横S字の連続するものとはならない。また甲府盆地から関東西部にかけては結節縄文はほとんどみられずに地文に条線を用いるものが多数をしめ、地文による時間的な差異よりも地域的な差異と捉えることができる。地文に刺突文を持つX字状把手付土器はそのX字状把手が胴部にかけてのU字状のモチーフで連結されるという特徴を持つ。これは曽利Ⅰ式からの人体文の変化として捉えることができ、比較的古い様相を示すものと考えられる。八ヶ岳西南麓においても結節縄文を持つものと刺突文を持つものを比較してみた場合、地文の他、大きな違いはみられず、併行関係にあるとするのが妥当のように思われる。

本遺跡にみられる櫛歯状工具による条線文について、三上徹也は唐草文土器に起源をおき、この土器のⅡ段階で成立したとする（三上1986）が、すでに曽利Ⅰ式の段階からみられる技法である。また曽利式土器と唐草文土器を分離する根拠に施文順序をあげているが、曽利式土器においても隆線→地文の充填が一般的で、その逆は限

られた型式にみられるものである（山形1989）。地文→隆線という施文順序をとるものは、例えば2（第27図）の斜格子目文土器や斜行沈線文土器等にみられるもので、加曽利E式土器の流入に伴って成立し、本来の曽利式土器の周辺的なものとして捉えられている（谷井1987）。

参考文献

藤森栄一、武藤雄六1964「信濃境曽利遺跡調査報告」『長野県考古学会誌』1
藤森栄一、武藤雄六1965『井戸尻』中央公論美術出版
米田明訓1978「曽利式土器編年の基礎的把握」『長野県考古学会誌』30
長崎元広他1979『中部高地縄文土器集成第1集』
長崎元広、木木健他1980、1981「シンポジウム縄文時代中期後半の諸問題」『神奈川考古』10、11号
木木健1981「曽利式土器」『縄文文化の研究』4雄山閣出版
三上徹也1986「唐草文土器の成立とその分布」『歴史手帖』14-2
谷井彪1987「塚原遺跡出土の曽利式土器について」『研究紀要』9埼玉県立歴史資料館
米田明訓1986「中期後半の土器の諸問題」『柳坪遺跡』山梨県埋蔵文化財センター
小野正文1987「曽利式土器」『釈迦堂』Ⅱ山梨県埋蔵文化財センター
木木健1988「曽利式土器様式」『縄文土器大観』3小学館
山形眞理子1989「曽利式土器における施文順序の意義」『甲斐の成立と地方的展開』角川書店
櫛原功一1993「X字状把手付土器の分析」『研究ノート』甲斐丘陵考古学研究会

第３節　縄文時代晩期終末の土器群について

小林青樹

はじめに

健康村遺跡の浮線文土器群は、E地区を中心に集中して検出された。いわゆる氷Ⅰ式土器と呼ばれる土器に相当するものである。土坑一括の他は遺構外出土のものが大半であるが、近接する時期の土器群は検出されておらず、時期的にもまとまっている。

さて、氷Ⅰ式土器といっても、この中には数段階の変遷が捉えられる。本遺跡で得られた資料は、山梨県の特に八ヶ岳南麓地域における該期の変遷を捉える上で良好な資料であり、中部高地における状況（設楽1982・1990、石川1985、中沢1991）との比較によりその位置づけが可能である。今回の報告では、様式を構成する器種の全貌を明らかにし、技法の特徴、そして他の遺跡の資料と比較して、編年的位置についての見通しを述べる。以下の土器番号の表記は、それぞれ試掘（試）、A・E・G地区（A・E・G）、遺構内（内）、遺構外（外）と簡略化した。数字は各土器の実測図の番号を示す。

器種分類

鉢A（E－1～3・試－10）：口縁部が内湾気味に立ち上がる鉢。

A1（E－1～3）：口縁端部に眼鏡状付帯をもつ。端部は丸い。

A2（試－10）：口縁端部加飾なく、頸部が無文の鉢。

鉢B（E－4・6・13）：口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部が外反する鉢。頸部無文帯がやや幅広い。口縁端に突起または刻みを有する。

鉢C（E－11・12）：肩部で屈曲し、口縁部の外反する鉢。

C1（E外－11）：口縁部と肩部に沈線による眼鏡状付帯を有する。口縁部の外反度が強く、長い。

C2（E外－12）：口縁部に沈線による眼鏡状付帯を有する。口縁部は短く外反する。体部に浮線文をもつ。

鉢D（E外－14）：体部が丸みをもち、口縁部の外反する鉢。頸部に凹線状の凹みをもち、肩部でやや屈曲する。口外帯を有する。体部は無文である。

鉢E（E外－16・17）：体部は直線的に立ち上がり、口縁部が外反する鉢。頸部に凹線状の凹みをもつ。口外帯をもつ。

鉢F（E外－18・19）：口縁部がやや内湾気味に立ち上がる無文の鉢。

壺A（E内－5）：口縁部に眼鏡状付帯を有し、頸肩界に文様をもつ壺。

壺B：突帯文を有する壺。

B1（E外－21）：口縁部下に突帯文をもつ。端部が前方に突出するもの。

B2（E外－22）：口肩部の押圧、口縁部下に突帯文をもつ。端部が前方に突出し、口縁部は外反する。

B3（E外－24）：口肩部の押圧、口縁部下に突帯文をもつ。口縁部は直立気味。

B4（E外－20）：体部に太目の突帯文を有する。B1の体部の可能性あり。

B5（E外－23）：口縁部がくの字に外反し、頸部に細い突帯を有する。突帯上に刻みをもつ。

B6（E内－6）：口縁部の直口する、小形の壺。

甕A：頸胴界に屈曲をもつ深鉢を便宜的に甕と呼ぶ。甕Aは体部に丸みをもつ中形の甕。

A1（E外－25）：平縁の口縁で、口縁部と体部に文様を有する。体部以下に細密条痕文を有する。

A2（E外－26）：平縁の口縁で、口縁部と体部に文様を有する。体部以下は無文。

甕B：大形の甕。

B1（E外－27・39）：端部に2山1単位の突起と、体部文様をもつもの。

B2（E外－70）：端部に1山1単位の突起をもつ。体部文様なし。ヘラケズリ・ヘラナデ調整。

B3（A内－4号埋甕2・E外－35～37・40）：平縁のもの。ヘラナデ・ナデミガキ調整。

B4（E外－28）：口縁部に沈線による眼鏡状のモチーフをもつ。口縁部の外反がやや強めのもの。

甕C：やや粗製の甕。体部に細密条痕を施す。

C1（E外－41・42）：口縁部と体部上位にヨコ方向の細密条痕文をもつ。頸部に無文帯をもつ。

C2（E外－59）：頸胴界の屈曲以下に細密条痕文をもつ。

C3（E内－47）：全面に細密条痕文をもつ。

甕D（E外－38）：平縁の甕。口縁部は内湾する。

深鉢A：体部に屈曲をもたない深い鉢を深鉢とした。Aは山形の突起をもち、口縁部に凹線文をもつ深鉢。

A1（E外－30・34）：体部に細密条痕文をもち、帯状ジグザグ文を有する。

A2：体部が無文のもの。

深鉢B：口縁部の外反する深鉢。

B1（E内－29・E外－44・45）：口唇部に加飾なく、体部に細密条痕文をもつ。

B2（A外－18・19・E内－30・40・E外－46～48・50・51・55）：口唇部に加飾し、体部に細密条痕をもつ。

B3（E内－31・33）：無文の深鉢。口唇部に加飾なし。

B4（E外－49・52・53）：口唇部に加飾し、体部無文のもの。

B5（E内－32・45）：口縁端部がはみ出しをもつ。無文。

B6（E外－43）：口縁部が肥厚し、口唇上に沈線、口縁部下に隆線状の突帯をもつもの。体部に細密条痕文をもつ。

深鉢C：口縁部の内湾する深鉢。

C1（E内－34・E外－54）：口縁部はやや肥厚し、体部に細密条痕をもつ。

C2（E外－56）：口縁部の内湾がきつく、端部に前方に突出する突起を有する。無文。

器種組成

本遺跡で検出した晩期終末の土器群について、先の分類に基づき個体数を算出した（第40表）。1個体の認定については、口縁部の残存しているものを基準とし、有文の鉢で個体の識別が可能なものは、1個体とした。底部片は個体数にいれていない。

算出の結果、確認できた個体は、総数141個体である。内訳は、甕56個体・深鉢53個体・鉢25個体・壺7個体である。それぞれの比率は、甕（約39.7）・深鉢(約37.6)・鉢（約17.7）・壺（約5）パーセントである。

出土地点について

晩期終末の土器群は、A・E・G各地区で出土したが、遺物の大半はE地区において検出された。E地区においては特に地区の南東部のE－2・3で集中し、同時期の土坑群も存在しており、この付近に包含層が広がっていたようである。やや谷部に廃棄され、集積された状況を呈している。検出時の状況や層位については、第4章第1節ですでに述べた通りである。

大半の土器がE－2・3の出土であるが、これにはずれた地点、あるいはやや離れた地点や周辺から出土した土器も小量存在する。傾向としては、深鉢B類で口唇部に加飾をもつ一群の土器、たとえばB2・B4類が遺物の集中地点からやや離れた周辺から検出されている。このように出土地点を違えて出土するというのは、一つの解釈として時期差を示すと考えることもできるが、他方の解釈として、出土地点の差は生活空間の機能差を示すと考えることも可能である。なお、前者の可能性については後述する。

いずれにしても、晩期終末の土器群がE－2・3に集中しているということを強調しておく。

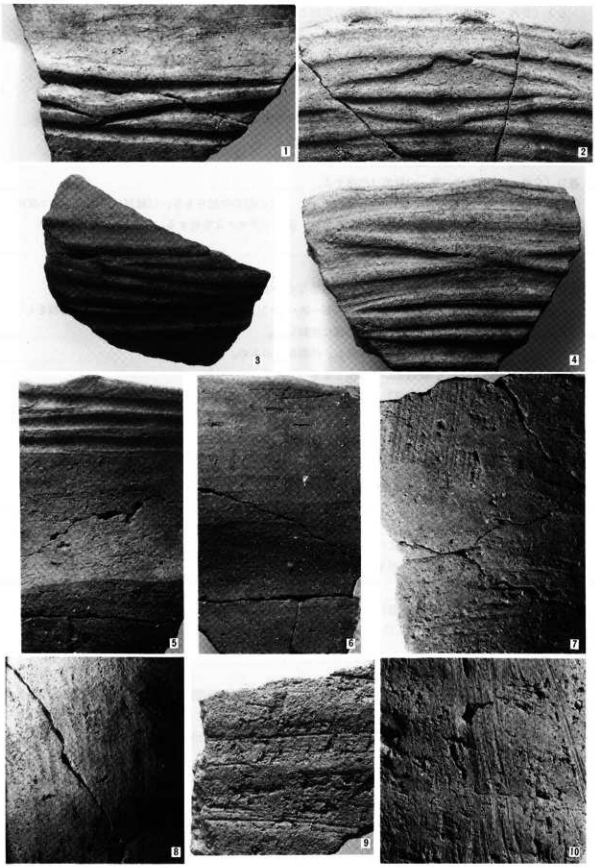


写真1　浮線文〔1(E外－27)・2(E外－1)・3(E外－25)・4(E外－2)〕、
各種調整〔ナデミガキ(5・8)・ケズリ(9)・ヘラナデ(10)・複合(7)〕

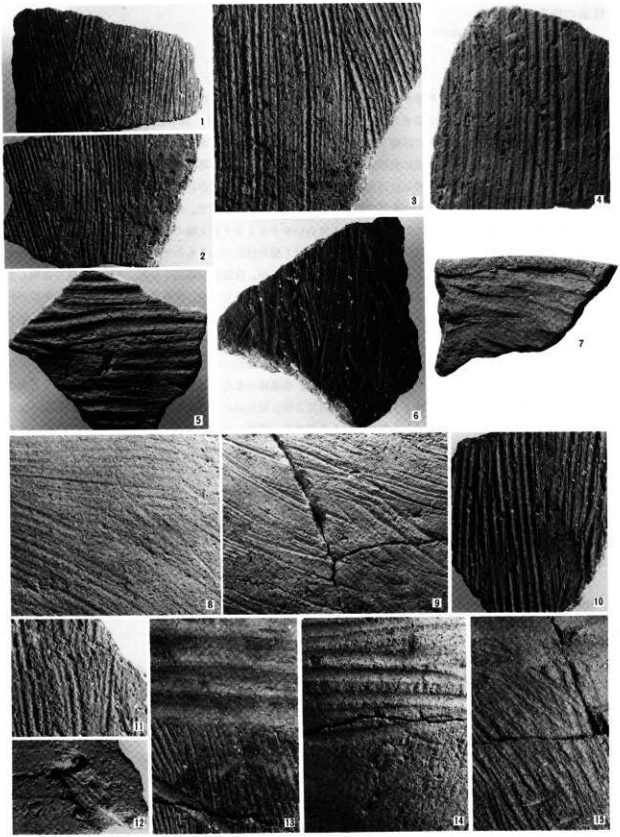


写真２　細密条痕文〔ａ種(1・2)・ｂ種(3・4)・ｃ種(5・7)・ｄ種(6)、
タイミング〔イ種(8)・ロ種(10)・ハ種(6)・ニ種(9)〕、
工具圧痕例(11・12)、複合(13・14)、結状体条痕(15)

技法の特徴

土器にみられる様々な技法についていくつかみてみよう。

1．各種文様の施文技法

（1）浮線文の描出

浮線文の描き方には大きく2種類がある。1つは、沈線を多状に平行に引き、溝の間の隆線を上下に連結させレンズ状や入り組み文を形成する描き方（1種）。もう一つは、あらかじめ、基本となる単位文様ごとにモチーフのアウトラインを描き、その中に浮線文を描き込んでいくというものである（2種）。前者は大洞A式の工字文の描き方に由来し、後者は氷Ⅰ式に典型的なものである。1種が古く2種の方が新しいという傾向はあるが、1種の描き方は各期にみられ、実際には両者は氷Ⅰ式期においては同時に存在する。両者に共通するのは、文様内のミガキ込みである。おそらくやや太目の竹管状の工具、あるいは小石で、乾燥が進んだ段階でなされるが、特に2種の場合に効果的となる。このミガキ込みの度合いやタイミングが文様の出来栄えを左右する。

これらの描き方について具体的にみよう。写真1－1は1種の技法によるもので溝が深く、隆線は鋭角的で丸みをもたず平坦にされている。2・4は基本的には1種によるが、隆線間が幅広くなり、2種の技法を採用して描いている。氷式の場合、隆線間は幅広く、隆線は山形でやや丸みをもつが、実際には2・4のように隆線がわずかに平坦になっていたり、低い山状になっている場合が多い。先に述べたミガキ込みの度合いの差を示すのであろう。2は乾燥があまり進んでいない段階の施文でミガキ込みがないためやや稚拙な表現となってしまった例である。本来はレンズ状に展開していくが、すでに丸みを欠い、菱形の構成になっている。4は完全に直線的な菱形を構成するもの。3は、2種のなかでも他と異なり、氷遺跡の氷式土器に典型的な浮線文の描き方である。変形工字文を模したモチーフのアウトライン内を工具で乙状に切り込んでいくものの一種である。施文順序はモチーフの複雑なものは上→下・下→上と繰り返すものが多く、単純になるほど上→下に統一されていく傾向にある。この種のモチーフは新しくなると、モチーフの一部が独立し、切り込む数が増えて、単位数が増加していく傾向がある。ただし、3の場合は、隆線間が狭く、工具を引いただけで終わらせている点が氷遺跡のものとは異なる。

（2）細密条痕文

今回得られた資料中には、多数の細密条痕文をもつ土器片が存在するが、それら土器片にみられる細密条痕文を分類し、工具圧痕例と施文の仕方について確認できたいくつかの点について簡単に述べておく。

①種類

細密条痕文は、木板状工具で施文されたと考えられ、粗目材の木目の突出した冬目の部分が溝を作り出す。以下では、溝の幅を基準に、他の条痕をも含めて分類した。

a（写真2－1・2）：溝幅約1㎜程度かそれ以下。細密条痕文。

b（写真2－3・4）：溝幅約2㎜程度のもの。これより太目のものも含める。細密条痕文。

c（写真2－5・7）：溝幅約3㎜以上のもの。棒状工具のようなもので施文。

d（写真2－6）：溝幅を計測できないほど不均質なもの。ヘラケズリやヘラナデの際偶然生じたもの。

これらはさらに施文のタイミングや器面に当てる角度や強弱により、変化し、バリエーションが生じる。

②施文のタイミングと強弱

イ（写真2－8）：器面の柔らかい段階での施文で、軽く引いたもの。砂粒の移動は少ない。条痕は浅く、不鮮明である。

ロ（写真2－10）：やや乾燥の進んだ段階の施文で、強く引いたもの。砂粒の移動がみられる。条痕はやや深く、鮮明である。

ハ（写真2－6）：乾燥の進んだ段階の条痕で、部分的に条痕が残るのみ。

ニ（写真2－9）：意図的にかすれたように施文するもの。

③施文の仕方・方向

細密条痕文は基本的に、土器の口縁部を上とした場合に下から上に施文している。器面上の細密条痕文をみると、なかには1単位の端を走る条痕に深く施されたものがある。こうした一本だけ深い条痕は器面の横方向に所々みられる。おそらく、工具を手にもち引く際に力が強く入ったほうに生じたものであろう。この際、工具を左右どちらの手にもっていたかは、完形土器で確認する必要がある。また、器面に残る1単位の幅には上下幅があるようで、必ずしも工具全体が器面に接地していたとは限らない。

④工具の圧痕

器面に残存している工具の圧痕は、極めてわずかである。そんななかで確認しえたものの観察によれば、木口の先端は比較的半らに整えられているが、突出した夏月の部分が明瞭に器面に突き刺さっており、きれいに切り揃えられてはいない（写真2－11）。また、内面に残存していたおそらくヘラナゲリかヘラナデ用の工具の側面の圧痕も確認した（写真2－12）。この圧痕は工具の側面とはいえ、器面に突き刺し、引き抜く際に条線を生じさせるほど冬月の突出が激しい。このような圧痕の例は先端部分の加工に際して冬目の突出を避ける細工があまりなされていなかったことを暗示している。こうした工具の先端部分の加工について考える上で、福岡県福岡市の比恵遺跡で出土した弥生時代前期の刷毛目板の例（福岡市教育委員会1991）は重要な示唆を与えてくれるだろう。この刷毛目板は、割り板をそのまま使用したのではなく、平の一面には表面を削り整えた刀物の痕が残り、他面も同様に仕上げている。器面に接地する面が当初から半らに切り揃えられ、擦過の過程で、この面が平均的に擦り減っていくため冬月の突出が抑えられるのである。つまり、元から条線を器面に生じさせることを月的としていないことを示すのではないか。これに対し細密条痕文の原体は、木遺跡の工具の圧痕例のように冬目の突出が明瞭であるので、はじめから器面に条線を残すことを月的としていたのである。

かつて筆者は、細密条痕について触れた折に、細密条痕の主に調整技法としての側面を強調した。しかし、細密条痕の成立は、主に深鉢における撚糸文施文の模倣にあり、背景に施文の簡略化・手抜きがあった（小林1991）のであり、本来、文様として「細密条痕文」を評価すべきである。ただし、地文としての細密条痕文は、ヘラナデや刷毛目のように器面を整えるなどの実用的な機能をもつことは明らかであり、実際に、ヘラケズリの後に施す場合が多いので、器面調整としての側面をもっていたことは疑いないであろう。しかし、中部高地においては、細密条痕文が出現する以前、突帯文土器の影響を受けてケズリ→ナデという調整法が定着したにもかかわらず、大洞A'式の古段階になり、一気に細密条痕文が盛行する現象は、土器の無文化傾向に逆行したものである。まさにこうした現象は、細密条痕文が文様であったからこそ起きたのであろう。

細密条痕文は、A地区の4号埋甕の土器1のように新しくなると条痕がかすれて残るようになる（写真2－9）。細密条痕文は氷式の段階のように細密で整ったものが徐々に乱れ、かすれたような施文になり、雨弾墓の土器棺などに引き継がれていく。このように細密条痕文が変化していく過程で、西方の刷毛目との接点があったことが考えられるが、細密条痕文は文様としての側面をもつかぎり、両者は全く異なるものである。刷毛目が工具の擦過の過程で生じたものであるとすれば、細密条痕文ははじめから条痕を器面に刻み込むことを意識したもの－文様である。

2．調整技法

調整技法には、ナデ・ヘラナデ・ナデミガキ・ミガキ・ケズリがある。これらのうちナデミガキは剥染みのないものだが、乾燥の進んだ段階にナデで器面に光沢を生じさせるものである（写真1－6・8）。半精製の甕や深鉢に特にみられる技法で、おそらく丹念なケズリに伴う技法であろう。ケズリは、器面を強く抉るように削る例が多く（写真1－9）、砂粒の移動が激しい。ヘラナデは、基本的に器面に条線を発生することは少ないが、写真1－10のように条線の残るものもある。ナデ以外の調整は基本的に同じような工具でなされていると考えられ、写真2－12はその圧痕例である。工具幅約1cmと厚めであり、工具の器面に接地しない面とはいえ、つくりは粗い。写真2－7は甕あるいは深鉢の底部付近であるが、体部の最下位を横方向のケズリ、上にいくにしたがっ

てヘラナデ、ナデと変化していく様子が観察できる。おそらく、力の入れ方や工具の当て方をかえることにより臨機応変に使用していたのであろう。

編年的位置について

1．氷Ⅰ式土器の細分と縄文時代早期後半の編年

長坂町は長野県に近接しており、中部高地における土器編年との比較が有効であろう。設楽博己は、松本盆地という限られた地域における、松本市女鳥羽川遺跡、穂高町離山遺跡、大町市トチガ原遺跡の3遺跡の浮線文土器について、鉢類に施される文様の分析からそれぞれに時期差を認め、3段階の分期を行った（設楽1982・1990）。今回E地区で得られた資料は、これらのうち、第3段階に相当する。

トチガ原遺跡の土器は、浅鉢においては口縁部の内湾するものがほぼ消滅し、新たに口外帯と頸部に無文帯を有する浅鉢が、口縁部と肩部に文様をもつものとともに出現する。さらに、この段階には口外帯をもつ特徴的な甕が新たに加わる。氷Ⅰ式の主体的な部分は、この第3段階に位置づけられる。また、細密条痕文もこの段階から出現し、東海地方の樫王式土器が伴出する。

第3段階は、さらに細別が可能であり、中沢道彦が指摘したように少なくとも前半と後半に分かれる（中沢1991）。しかし、この分期はまだ確定していない。前半は氷遺跡の第一群上器、そして、第一群に平行する第2・3群の上器が相当しよう。ただし、氷Ⅰ式のなかには、入り組み文や平行線のモチーフをもつ土器があり、大洞A式の新段階に遡る可能性がある。これに関して、最近、石川日出志が新潟県の六野瀬遺跡の上器の分析のなかで、従来の鳥屋2b式のなかから大洞A式新段階に遡る一群の土器を分離した（石川1993）が、この段階と直接比較しうる良好な資料がいまのところないので、将来の単純資料の出現まで結論は出せない。

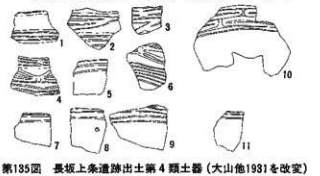
第3段階の後半は、松本市石行遺跡の上器集中区の資料が典型的である。浅鉢にみられる頸部無文帯の発達、無文の浅鉢の増加、口唇部に刻みをもつ甕の出現、などの特徴がある。特に際だつのは、ケズリだけの甕が増加し、浅鉢の組成比が著しく減少することである。浅鉢の比率は氷遺跡で約30パーセント、石行遺跡で約11パーセントであり、いかにその変化が著しいかがわかる（第41表）。この段階にみられる在地型の突帯文壺が、巣たしてこの段階から出現したかどうかについては、まだ確定していない。

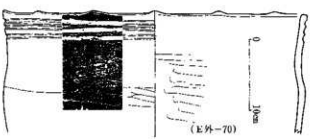
本遺跡で得られた資料は、結論的に述べると第3段階でも後半までは下がらない段階に位置づけることができる。浅鉢をみてみると、鉢A・Bのモチーフは単段化の傾向にあり、また、先に述べたように直線的な菱形の構成をとっており、第3段階でも前半の様相を呈している。他の浮線文については、典型的な氷Ⅰ式は少ないが、鉢Aなどは静岡県山王遺跡のものに類似し、山梨県でもよくみられ、中部地方を南北に分割すれば南部型の特徴をもつといってよい。氷式は主に北部型の典型である。第3段階にこうした地域色があるとすれば、他の浮線文も、おおむね同時期とみた方がいいだろう。また、土坑群の一括出土の上器群を参考とすれば、大部分の器種がほぼ同時期である可能性が高い。ただし、先に、出土地点のところでも述べたが、口唇部に押圧をもつ土器群である深鉢B3・4類は、やや時期的に後出する可能性もある。なぜなら、押圧の仕方も口唇部の上から施すものとやや斜め上、あるいは横から押圧するものの2種類があるが、石行遺跡において後者が多く、本遺跡でも後者が地点的に離れて出土しているからである。いずれにしても、これら新しい様相の土器群を差し引いた残りは、1段階を構成する土器群として揃わないであろう。器種組成も先にみたように石行遺跡よりも古い様相を示す。

さて、山梨県においてこの縄文時代早期後半はどのように位置づけられるのであろうか。八ヶ岳南麓地域にかぎってみてみると中山誠二が指摘した金生遺跡17号住出土資料に近い（中山1985）。ただし、この住居には様々な時期のものが混在しており、良好とはいえない。また、浅鉢は単位数が多く上下に切り込む浮線文であり、やや新しい様相を呈し、石行遺跡により近い様相を示す。在地型突帯文壺も突帯の押圧が弱く、横に延びており、本遺跡のものより後出的である（第136図－22）。この段階の資料としては、他に菲崎市宮の前遺跡の上器のうち、中山が宮の前1期とした上器群の一部が相当しよう（中山1993）（第136図－16～21・23～29）。ところで、この地域では、縄文時代前期に遡る資料はかつて長坂上条遺跡において出土していた（大山他1931）（第135図）。その報告

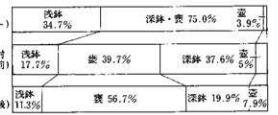
器種	A			B			B			B			C			D	E	F	その他	小計
	A1	A2	A3	B1	B2	B3	B4	B5	B6	C1	C2	C3								
壺		2			2	1	8(2)	1		2	1	1		1					10	56
深鉢	7	7		6	10	7	4	4	1	2	3									53
鉢	3	1					3			1	1				1	2	2	12		26
他		1			1	1	1	1			1									7

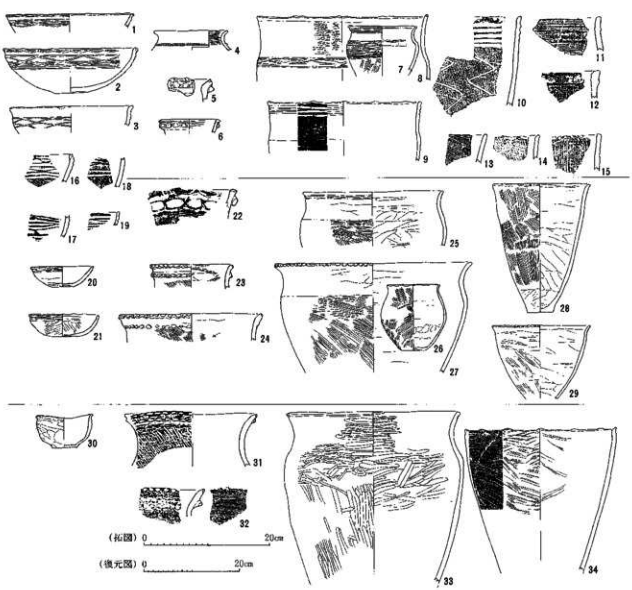
第40表　個体数（上）・第41表　器種組成グラフ（右上）





第135図　長坂上条遺跡出土第４類土器（大山他1931を改変）





第136図　八ヶ岳南麓地域における浮線文土器第３段階の細別と直後段階
上段〔第３段階前半(健康村１～15)〕、中段〔第３段階後半(宮の前16～21・23～29・金生22)〕、下段〔直後段階(柳坪A30・31・宮の前32・健康村33・34)〕、(中山1985・1991・1993を改変)

時の図をみるかぎりにおいて、入り組み文や爪字文の土器がみられ、大洞A式に遡ることがわかる。

以上から、八ヶ岳南麓地域においては、長坂上条遺跡（第2段階）→健康村遺跡（第3段階前半）→金生遺跡17号住（第3段階後半）という変化が捉えられ、金生遺跡段階は宮の前遺跡の資料で補うことができる（第136図）。健康村遺跡段階の東海地方の影響については、壺B2・B3・B4、深鉢B5・B6の資料が注意される。壺については、B2は押圧がしっかりしておりやや古い様相を呈する。B5のタイプは、樫王式の壺を模倣したものである。このタイプは新しくなると端部と突帯の間が広くなり、外反する口縁部となる。押圧もこじんまりとなっていき、刻みもみられるようになる。深鉢B5の端部のはみだす特徴は、東海では古くからみられ、樫王式段階でもみられる。また、B6のように口縁部が肥厚し、口唇部に沈線を施すものも東海でみられる特徴である。この段階に壺以外の器種に東海の影響がみられることは注意される。

次に、この段階以降、つまり氷式の終末については、宮の前遺跡の2号水田を切っている4号溝状遺構中の資料の位置づけが問題となるが、第3段階の終末に位置づけることができる可能性がある。この直後の段階には、長坂町柳坪遺跡A地区16号住の資料が相当し、本遺跡A地区の4号埋甕が同時期にあたる。群馬県の沖II式段階に平行し、弥生時代前期におさまるであろう。宮の前遺跡の水田直上の在地型突帯文土器もこの段階に相当する。在地型突帯文土器は、先に述べたような変化の方向性からみれば、かなり端部と突帯の間が広がり、押圧もこじんまりとなっている。樫王式に類似していたものから、在地で変化していく過程が読み取れよう（第136図）。

2．まとめ

以上、簡単に健康村遺跡出土の縄期土器について述べてきたが、E地区で集中して出土した土器群は、健康村遺跡段階として一段階を画する資料であり、中部高地における浮線文土器の第3段階の前半に位置づけられることを指摘した。

ところで、山梨県においては、韮崎市宮の前遺跡において、第3段階の後半、あるいはその直後の段階の水田が発見されており、他にも、さらに遡る時期の籾痕土器や、土器胎土中のプラントオパールもみつかっている。これらの存在から、山梨県では古くとも第3段階には水稲耕作が開始されていた可能性があるが、土器の組成をみると、浅鉢の急激な減少を評価すれば、第3段階の直後に画期が想定される。しかし、浅鉢の減少傾向は第3段階の後半から顕著になるので、ゆるやかな変化の過程を経たことがわかる。さらに、本遺跡でみられたように、東海系の土器の影響が少しずつ浸透していき、在地で変化していく様相がみられることは、水稲農耕の開始にあたって東海地方の影響が重要な要素であったことを物語っている。八ヶ岳南麓地域においては、まだ、第3段階以前の資料が良好ではないので、今後の資料の増加をまって浮線文土器全般にわたる編年の確立をする必要があることを最後に記しておく。

資料の検討に際し、設楽博己氏、田多井用章氏には多くの御教示を得た。感謝申しあげる。

引用参考文献

石川日出志1993「島屋2b式土器再考」『古代』95
大山柏他1931「山梨県日野春村長坂上条遺跡発掘調査報告」『史前学雑誌』13−3
小林青樹1991「浮線文系土器様式の細密条痕技法」『国学院大学考古学資料館紀要』7
設楽博己1982「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃』34−4
島田哲男・設楽博己1990『一津』大町市教育委員会
中沢道彦1991「長野県の概要」『東日本における稲作の受容』第1回東日本埋蔵文化財研究会
中山誠二1985「甲斐における弥生文化の成立」『研究紀要』2
1993「山梨県における稲作関連遺跡の現状」『山梨県考古学協会誌』6

第4節　健康村遺跡出土の土師器について

瀬田正明

健康村遺跡では平安時代に属する住居址が14軒検出された。山梨県における当該期の土器については既に多くの研究がなされてきている[35]。ここではそれらの研究成果をもとに各遺構から出土した土器を概観し、その編年的位置付けを見ていく。そのうえで、健康村遺跡の土器群が示す問題点について考察していきたい。

1．土器の分類

健康村遺跡から出土した土器の種類は土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器が認められる。黒色土器はいずれも内面のみを黒色処理した黒色土器A[36]であり、以下の記述では繁雑さを避けるためすべて黒色土器の名称で統一していく。ここでは器種、大きさ、整形及び器面調整の技法によって分類を行った。胎土・色調などもまた重要な観察事項であるが、それらについては特に問題とすべきであろうと思われたときに述べていくことにした。

（1）土師器

土師器には坏・皿・椀・甕・小形甕・小形壺・羽釜・置きカマドの各器種がある。

a．坏　いずれもロクロ整形による坏で、底部や内面の調整技法によって次の3つに分けられる[38]。

坏A　ロクロ整形で作られ、底部及び口縁部外面下半にヘラ削りを施すのを特徴とする。内面に放射状の暗文を持つものもある。いわゆる甲斐型坏である。甲斐型坏は大きく次の3期に分けられている。

1期　器体部内外面の横ヘラミガキ、同下半の小幅の横位ヘラ削り、同内面及びみこみ部の暗文。

2期　みこみ部の暗文及び器体部のヘラミガキが消失し、器体部下半斜めヘラ削りと同内面放射状暗文の嚆行する段階。

3期　甲斐型坏の要素のうち、器体部下半斜めヘラ削りが残るのみで、内面の放射状暗文が消滅する時期、としている。

ここではそれぞれA1、A2、A3と細分して記述していくが、本遺跡からはA1は出土していない。

坏B　ロクロ整形で作られ、底部外面に回転糸切り痕を未調整のまま残すが、内面にヘラミガキあるいは粗雑な暗文を施している。坏Aの暗文と異なる点は、第1に原体が太くて粗雑なことと、第2に坏Aのみこみ部と口縁部との区別を明確にして、それぞれ独自に施しているのに対して、坏Bでは両者の区別が明瞭でなく、口縁部からみこみ部まで連続するか、両者にまたがるように施されている点にある。

坏C　内外面ともロクロナデで仕上げられ、底部外面に回転糸切り痕を未調整のまま残す。法量、口縁部・体部の形態、胎土など細部にわたって非常にバラエティーに富んでいる[39]。

b．皿　皿も坏と同様にすべてロクロ整形によって作られている。底部の調整技法から次の2つに分類できる。

皿A　ロクロ整形による皿で、底部及び体部外面下半にヘラ削りを施している。甲斐型の皿である。底部のヘラ削りが回転ヘラ削りによるもの（A1）と手持ちヘラ削りによるもの（A2）とに細分できる。

皿B　ロクロ整形による皿で、底部に回転糸切り痕を未調整で残すもの。坏Cと同様に、胎土・色調などバラエティーに富んでいる。

c．椀　ロクロ整形による椀で、高台は底部端に貼り付けている。内外面ともロクロナデで仕上げた後、内面にはヘラミガキあるいは暗文を施す。暗文は坏Bのものと技法・形状が類似している。

d．甕　甕は器面調整の技法によって次の2つに分類できる。

甕A　器面調整は外面が頸部から底部端まで縦方向のハケ目、内面は口縁部から底部まで横方向のハケ目が施され、口縁部には内外面とも横ナデが施される。底部には木葉痕が無調整で残っている。胎土は石英・長石・雲母など花崗岩系の鉱物粒子が多量に含まれ、特に金色をした雲母が目につく。甲斐型の甕である。保坂康夫氏は口縁部の形態によって薄口縁型・厚口縁型・末広口縁型に分類しているが[39]、ここではそれぞれをA1・A2・

A３と細分しておく。

甕B　体部内外面ともナデ調整による甕で、１点だけ出土している。口縁の形態は甕Ａ２の厚口縁に類似しており、甲斐型の系譜上にあるものと考えられる。

e．小形甕　口径が15cm以下のものを小形甕とした。整形・調整技法によって次のように分類される。

小形甕Ａ　調整・胎土ともに甕Ａに類似する。甲斐型の小形甕である。

小形甕Ｂ　ロクロ整形による小形甕。底部には回転糸切り痕が無調整で残る。口縁・体部内外面ともロクロナデで仕上げられるものが多いが、体部外面にカキメが施されるものが１点だけある。

小形甕Ｃ　体部外面に横方向のヘラ削りが施される。全体に丸みを帯びた体部である。

f．小形壺　口径5.8cmの小さな壺で、丸い体部から口縁が短く外反している。内外面とも横方向のヘラミガキ、体部外面下半と底部にはヘラ削りを施している。

g．羽釜　口縁から鍔部にかけての破片が１点だけ出土している。内面に横方向のハケ目を施し、外面は口縁部から鍔部にかけて横ナデ。胎土は石英・長石・雲母など花崗岩系の鉱物粒子が多量に含まれ、特に金色をした雲母が目につく。甲斐型の羽釜である。

h．置きカマド　鍔部の破片が１点だけ出土している。内面には斜め方向のハケ目を施している。甕Ａや羽釜と同様に石英・長石・雲母などを多量に含んだ胎土で、甲斐型の置きカマドである。

（２）黒色土器

黒色土器には坏・皿・椀の各器種がある。

a．坏　いずれもロクロ整形によって作られ、底部や内面の調整技法によって次の２つに分けられる。

坏Ａ　ロクロ整形の坏で、底部及び口縁部下半に手持ちヘラ削りを施している。内面には暗文が施される。坏Ａに類似しており、「甲斐型系黒色土器」[※]と呼ばれるものである。

坏Ｂ　ロクロ整形で、底部に回転糸切り痕を未調整で残す。内面にはヘラミガキや暗文を施している。暗文は土師器坏Ｂのものに類似する。

b．皿　ロクロ整形の皿である。内外面ともロクロナデで、底部には回転糸切り痕が未調整で残る。

c．椀　ロクロ整形の椀で、高台を底部端に貼り付けている。外面はロクロナデ、内面にはヘラミガキか暗文を施している。暗文は土師器坏Ｃのものに類似する。

（３）須恵器

本遺跡から出土した須恵器は非常に少なく、坏と甕の破片が出土しているが、図示したのは坏だけである。

（４）灰釉陶器

灰釉陶器は皿と椀が数点ずつ出土している。詳細については各遺構ごとに概観していく。

２．出土土器の概観

次に各遺構から出土した遺物について概観していきたい。

２号住居跡

土師器坏Ａ２と甕Ａ１が出土している。坏Ａの中には内面の暗文を持たないものもあるが、法量からみても同時期のものとして問違いはないだろう。坏Ａ２の法量は口径10.7～11.3cm、器高4.0～4.3cm、底径4.6～5.7cmで、底径／口径比が41.1～52.3%の範囲にある。甕Ａ１は口縁部が体部と厚さがほとんど変わらない薄口縁で、端部は角形となる。口径24.3cm。

３号住居跡

土師器皿Ａ２と甕Ａ２が出土している。皿Ａ２は口縁部が肥厚せず丸いままで、内面の口縁部と底部の境は不明瞭である。底部及び体部外面に手持ちヘラ削りが施される。口径12.2cm、器高2.4cm、底径3.2cm。体部外面に墨書「伴」が逆位で記される。甕Ａ２は３個体が図化されている。口縁部はいずれも体部より厚めで厚口縁と考えられる。口径29.0～31.6cm。底径9.1cm。

11号住居跡

土師器坏Ａ２の破片のみ出土している。口径10.5cm、器高4.2cm、底径5.0cm。底径／口径比は47.6%。

13号住居跡

土師器皿Ｂが１点だけ出土している。口径に比較して大きな底部から、口縁部が短く開く。口縁端部の外面が大きく内彎して仕上げられている。全体的に厚手の皿である。口径8.2cm、器高2.4cm、底径5.4cm。

15号住居跡

この住居は新旧２つの住居址が重複していた。遺物は現場では一括してとりあげ、整理段階になって２つに分けたものである。それぞれ15号住居跡古期・新期として説明する。

古期には須恵器坏、上師器坏Ａ２、甕Ａ１、小形甕Ａ・Ｃが出土している。

須恵器坏は内外面ともロクロナデを施し、底部外面に回転糸切り痕を未調整で残す。色調は黄褐色を呈する。口径13.2cm、器高4.1cm、底径7.6cm。

土師器坏Ａ２は口径10.8～11.2cmのものと口径約13cmの大型のものとが図示されているが、大型のものはいずれも破片から復元したものであるため確実な資料ではない。全体が復元できるものは口径10.8～11.2cm、器高4.1～4.3cm、底径4.8cmで、底径／口径比が42.9～44.4%になる。甕Ａ１は薄口縁で、口縁部が緩やかにカーブして外反する。口径26.6cm。小形甕Ａは口縁部と体部がほぼ同じ厚さで、口縁端部が角口縁となる。口径16.2cm。小形甕Ｃは全体に丸みがあり、口縁部が緩やかに外反している。口径12.0cm。

新期には上師器坏Ｃ・皿Ｂ・椀・甕Ａ２、黒色土器坏Ａ・坏Ｂ・椀が出土している。

土師器坏Ｃは口径14.9～15.0cm、器高4.3～5.1cm、底径6.8～7.1cmのものと口径11.6～12.6cm、器高3.2～3.8cm、底径5.2～6.5cmのものに分けられる。口縁部は直線的で、端部がわずかに肥厚するものが多い。胎土に赤色粒子を含むものが多い。皿Ｂについては坏との区別が不明瞭であるが、ここでは先に甲斐型土器の皿で検討したように器高が口径の1／4以下のものを皿としている[7]。口縁部は直線的で、坏Ｃと同様に胎土に赤色粒子を含むものが多い。口径11.9cm、器高2.5cm、底径6.0cm。椀は底部の破片だけである。高台はやや高めで、端部は丸い。内面にミガキを施している。高台径6.0cm。甕Ａ２は口縁部の形態が厚口縁であるが、体部との接合部分でやや肥厚し、下膨れ状になっている。口径28.0～31.0cm。

黒色土器坏Ａは体部外面下半にヘラ削りを、内面に放射状や束状・螺旋状の暗文が施されている。体部は全体に内彎し、口縁端部がわずかに肥厚している。口径16.0～17.0cm、器高6.7cm、底径6.4cm。坏Ｂは坏Ａにくらべて浅めの形態をとり、全体に内彎している。内面にはヘラミガキが施される。口径17.3～18.4cm、器高5.1～5.4cm、底径6.8～8.0cm。椀は土師器と同様に底部だけしか出土していないが、高台もやや高めで、端部は丸い。内面は全面にヘラミガキか、底部中央に粗い放射状の暗文を施している。高台径6.0～6.4cm。

16号住居跡

土師器甕Ａ２のみ出土している。口縁部は体部より厚い厚口縁である。口径31.7cm。底径8.4～9.8cm。

18号住居跡

土師器甕Ａの底部破片が出土している。器壁はやや厚手で、わずかに内彎しながら開いている。底径10.0cm。

19号住居跡

上師器坏Ｂ・甕Ａ１・小形甕Ａ・Ｂ、黒色土器坏Ｂが出土している。

土師器坏Ｂは内面にヘラミガキが施されている。体部がやや内彎する。口径12.7cm、器高3.9cm、底径6.2cm。同じ住居から出土した黒色土器坏Ｂに技法・形態ともに類似している。黒色土器の坏や椀が多く出土する松木周辺では、黒色土器の内面が埋蔵状態によっては消失することもあり、内面のミガキをもって土師器と区別しているという。そうなればこの上師器坏も黒色土器と考えるべきなのかもしれない。甕Ａ１は薄口縁の甲斐型甕で、端部が角口縁となっている。体部の開きは少ない。直線的に伸びる。口径23.6cm、底径9.8cm。小形甕Ａは体部が直線的で、やや外傾して開く。口径14.8cm。小形甕Ｂは内外面ともロクロナデが施され、底部には回転糸切り痕が未調整で残る。口径11.0cm、底径6.7cm。

黒色土器坏Bは先述したように土師器坏Bと類似する。口径13.2cm、器高4.3cm、底径5.7cm。

20号住居跡

土師器坏B・坏C・椀・小形壺・甕A・甕B・小形甕A・羽釜、黒色土器皿・坏B・椀、灰釉陶器椀・皿が出土している。

土師器坏Bは図示できたのは1個体だけで、みこみ部中央から口縁部にかけて十字状暗文を施すものもある。坏Cは破片が多い。口径が小さく身の深いものと、口径が大きくて身が浅く皿に近いものとがある。前者には全体を窺えるものはない。後者は口径11.9～12.8cm、器高3.1～3.2cm、底径5.4cm。口縁端部は比較的尖形である。胎土に赤色粒子を含むものはほとんどない。椀は口縁部が内彎するものとやや直線的なものとがあるが、端部はいずれも外反している。高台は幅広で端部が丸いものと、断面三角形になるものとがある。内面には暗文を施したものとヘラミガキを施したものとがあり、暗文は粗い放射状のものと、放物線状のものとがある。口径13.8～14.0cm、器高5.4～6.0cm、高台径6.5～6.8cm。小形壺は丸い体部に短い口縁部がついたもので、底部及び体部下半はヘラ削り、外面上半及び内面には横方向のヘラミガキを施している。口径5.8cm、器高5.7cm、底径5.0cm。甕Aは底部の破片だけが出土している。底径9.2cm。甕Bは体部内外面ともナデで仕上げられており、甲斐型とは異なる。しかし口縁部は甲斐型の厚口縁に類似しており、甲斐型の系譜を引くものと考えられる。小形甕Aは短い口縁部がやや丸みを持った体部から外反しており、口径は13.4cmに復元できる。羽釜は口縁部から鍔部の破片であり、外面は横ナデしか見られないが、体部は内外面ともハケ目調整が行われているものと考えられる。

黒色土器皿は1点のみ出土している。無高台の皿で、厚めの底部から口縁部が開く。体部外面がやや屈曲気味に外反する。内外面ともロクロナデを施し、底部外面には回転糸切り痕が未調整で残る。口径13.5cm、器高2.2cm、底径5.6cm。坏Bは内面横ナデの後、みこみ部周辺に暗文を施すものが多い。暗文は放物線のように描かれるものが多い。完形品が無く全体の様子は不明であるが、口径11.4cmと14.3cmの2種があるようだ。底径は5.5cm～5.9cm。椀は内面横ナデの後、みこみ部を中心に十字状あるいは放射状の暗文、体部上半から口縁部にかけて横方向のヘラミガキを施すものがある。高台は断面三角形を呈するものが多い。口縁端部は外反する。口径14.7cm、器高6.0cm、高台径6.5～7.8cm。

灰釉陶器の椀は1点だけ出土している。体部はやや内彎し、高台は幅広で端部が丸い。口径16.0cm、器高4.8cm、高台径8.0cm。皿も高台は低く、幅広で端部が丸いものが多いが、断面三角形になるものもある。口径12.3～13.6cm、器高2.3～2.8cm、高台径6.4～7.3cm。

21号住居跡

須恵器坏、土師器坏A3・坏C・甕A2・置きカマド、灰釉陶器皿が出土している。

須恵器坏は底部の破片である。

土師器坏A3は体部が丸みを持って内彎し、口縁端部は肥厚して玉縁になる。坏Cも体部が丸みを持って内彎し、口縁端部が肥厚して玉縁になり、坏A3に類似している。甕A2は厚口縁の甲斐型甕で、口径29.6cm。

置きカマドは竈部の破片である。

灰釉陶器皿は口縁端部に強いナデを施している。高台は低く、外面を面取りをしている。釉薬は口縁部内外面にハケ塗り。内外面とも硯に転用し、墨痕が見られる。口径15.8cm、器高3.0cm、底径7.8cm。

3号石組土坑

土師器皿A1と甕A2が出土している。

土師器皿A1は底部に回転ヘラ削りを施した皿で、内面の底部と口縁部の境は不明瞭。口径12.4cm、器高2.4cm、底径4.9cm。甕A2は厚口縁の甲斐型甕であるが、口縁と体部の接合部分がやや下膨れ状を呈している。口径28.6cm。

3号石組土坑は16号住居跡と重複した石組土坑であり、遺物も16号住居跡のものが混入しているようなので、以下では一括して扱う。

3．編年

前節では各遺構から出土した土器を概観してきた。次にこれまでの研究成果を参考に本遺跡出土土器を時期別に分類し、その変遷を見ていきたい。本遺跡出土の土器は次のように5期に分けられた。

健康村1期

2号住居跡、11号住居跡、15号住居跡古、19号住居跡が該当する。須恵器坏、上師器坏A2・（坏C）・甕A1・小形甕A・B・C、黒色土器坏Bが出土している。土師器坏A2の底径／口径比は2号住居跡で41.1～52.3%、11号住居跡で47.6%、15号住居跡古で42.9～44.4%である。また甕Aの口縁部の形態もすべて薄口縁であり、甲斐編年Ⅷ期に相当するものと思われる。須恵器の坏は坂本美夫氏の分類による坏C-2類に相当し[9]、甲斐編年Ⅷ期に伴うものとされて、土師器と若干のずれが生じている。先に甲斐編年Ⅷ期には820～840年と考えておいた[10]、健康村1期の年代は9世紀の前半から中頃にかけてと推定できる。

健康村2期

3号住居跡、16号住居跡（3号石組土坑を含めて）、21号住居跡が該当し、図示されなかった破片遺物からは18号住居跡、10号住居跡もその可能性がある。灰釉陶器皿、土師器皿A1・皿A2・坏A3・坏C・甕A2・置きカマドが出土している。出土遺物の中には少ないが、土師器坏A3に特徴付けられる時期である。21号住居跡からは須恵器の底部も出土しているが、時期的には須恵器が消滅した後なので混入の可能性が高い。

この時期には3軒の住居址を一括した。しかし3号石組土坑では土師器皿A1と甕A2が出土しているので、甲斐編年X期の終わりからXI期の始め、3号住居跡では土師器皿A2と甕A2からXI期、21号住居跡では坏A3とよく似た坏Cが出土しているので、XII期の終わり頃といったように、かなりの年代幅があると思われる。そのため年代についても甲斐編年XI期の9世紀末頃からXII期の10世紀中頃までという幅広い年代を推定しておきたい。この時期に各住居址が2軒以上併存していた可能性は薄く、それぞれ独立して営まれていたのではないかと考えられる。

また、21号住居跡からは灰釉陶器の皿が出土しているが、これは内外面に釉薬をハケ塗りしていることから篠岡4号窯式第2型式に位置付けられる[36]。篠岡4号窯式に併行する猿投窯K－90号窯式は研究者によって9世紀後半から10世紀初頭まで多くの年代観が提出されているが、この皿を出土した21号住居跡は健康村2期の中でも終わり頃、10世紀中頃に位置付けられるので、転用硯として使用されていることからも伝世したものと考えられる。

健康村3期

15号住居跡新の遺物が該当し、破片遺物からは1号住居跡、12号住居跡、14号住居跡もその可能性がある。土師器皿B・坏C・椀・甕A2、黒色土器坏A・坏B・椀が出土している。

これらの遺物の中で年代を推定する資料としてあげるのは土師器皿Bと坏Cである。これらの土器は口縁端部が肥厚し、胎土にも赤色粒子を多く含むなど、甲斐型坏の要素をよく受け継いでおり、甲斐型坏からヘラ削りが消失した直後の段階であることが推定できる。一方、他の土器を見ると甕A2や黒色土器Aなど甲斐型のまま維持している。これらのことから健康村第3期の年代を10世紀の後半と考えておきたい。

健康村4期

20号住居跡が該当する。灰釉陶器皿・椀、土師器坏B・坏C・椀・甕A・甕B・小形甕A・小形甑・羽釜、黒色土器皿・坏B・椀が出土している。

土師器皿B・坏Cともに胎土に赤色粒子を含むのがほとんどなくなり、甲斐型の系統から完全に脱却した段階と言える。また、同様に甕も甲斐型の甕Aからナデ調整の甕Bへと変化する。一方、土師器坏B・椀と黒色土器椀が上器群に占める割合が多くなっている。

灰釉陶器は破片ばかりであるが、椀・皿ともに虎渓山1号窯式の範疇でとらえることができる。

この時期の年代は坏・皿から甲斐型土器が完全に消滅し、甕も甲斐型甕が衰退していく段階である。また灰釉陶器が虎渓山1号窯式と推定されるため、10世紀の終末をあてておきたい。

健康村５期

13号住居跡が該当するが、遺物は土師器皿Ｂが１点だけ出土している。

この皿は全体的に厚手で、大きな底部から開く口縁部にあまり鋭さは見られない。類例をあげれば西田町遺跡（勝沼バイパス319地点）４号住や東畑遺跡（勝沼バイパス279地点）３号住などで、大きく12世紀中頃に位置付けられるだろう。

４．甲斐型土器と長野系土器について

先に上器の分類を行ったときそこには甲斐型上器が多く見られた。甲斐型土器は大きく坏類と甕類とに分かれる。坏類は緻密で赤色粒子を含む胎土で、赤褐色から黄褐色の色調、ロクロ整形で、体部外面から底部にかけてヘラ削りを多く施し、内面に暗文を施すことが多いという特徴がある。坏・皿・鉢・高台付坏・黒色土器坏・同高台付坏の各器種がある。一方、甕類は金色雲母や白色粒子を多量に含む花崗岩系の胎土で、色調は赤褐色から黒赤褐色を呈し、技法的には外面に縦方向、内面に横方向のハケメを施すことを特徴としている。器種としては甕・小形甕・刺釜・鍋・置きカマドがある[11]。健康村遺跡では土師器坏Ａ・皿Ａ・甕Ａ・小形甕Ａ・羽釜・置きカマド、黒色土器坏Ａが甲斐型上器に相当する。

一方、健康村遺跡では、ロクロ整形により、底部外面に回転糸切り痕、内面にヘラミガキあるいは粗雑な暗文を施すことを特徴とした一群の土器が出上している。上師器坏Ｂ・椀、黒色土器坏Ｂ・椀がそれである。このうち黒色上器坏Ｂは長野県内で見られる黒色上器と形態・技法などが酷似した土器で「長野系黒色土器」[12]とされたものに相当する。そこで技法的に共通したこれらの土器を、「長野系土器」と呼んでおく[13]。

甲斐型土器・長野系土器に属さない器種としては上師器坏Ｃ、皿Ｂ、甕Ｂ、小形甕Ｂ・Ｃ、小形壺、黒色上器皿、それに須恵器、灰釉陶器がある。健康村遺跡出上の土器はこれら３つの群に分けられる。次にこれらの３群の上器の構成が時期ごとにどのように変化していくのか食膳具と煮沸具に分けて見ていきたい。

健康村第１期では食膳具・煮沸具ともに甲斐型土器が主体となっている。長野系土器は上師器・黒色土器の坏Ｂが１点ずつ見られるだけである。それ以外の土器としては須恵器坏、上師器小形甕Ｂ・Ｃが見られるがいずれも１点ずつの出土である。

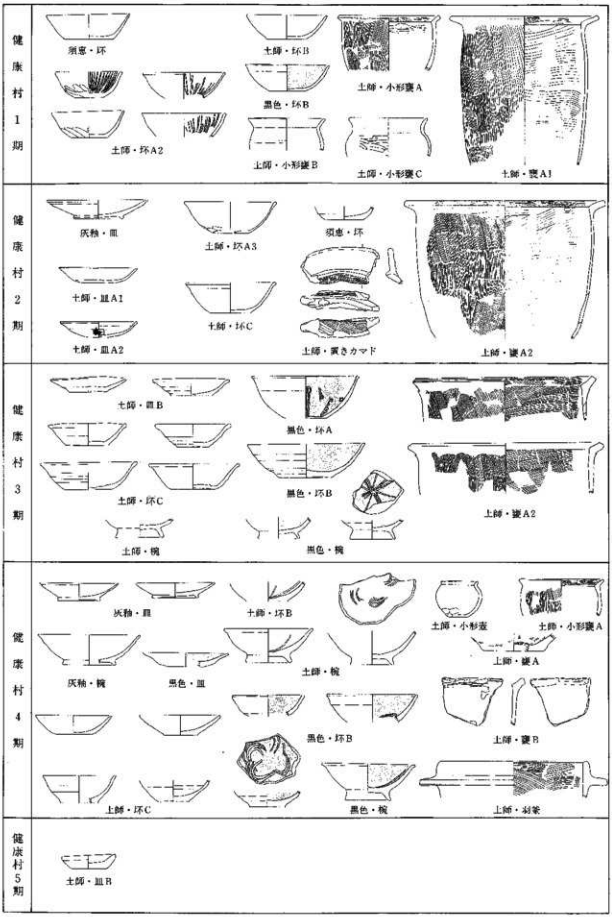
健康村２期には食膳具・煮沸具ともに置きカマドを含めて、ほとんどが甲斐型土器のみで土器群が構成されている。土師器坏Ｃもわずかに見られるが、赤色粒子を含んだ甲斐型の特徴を持つ胎土であり、甲斐型の系譜上にあるものと考えられる。このほかの上器としては灰釉陶器の皿が見られるだけである。

健康村３期には甲斐型土器は土師器坏・皿が姿を消し、食膳具では黒色土器の坏Ａを残すだけとなる。食膳具の主体をなすのは土師器の坏Ｃ・皿Ｂである。しかしこれらの土器は編年の項でも述べたように、胎土・形態の上で甲斐型土器の系譜上でとらえることができるものである。一方、長野系土器も再び登場してきて、土師器椀、黒色上器坏Ｂ・椀が見られるようになる。煮沸具のほうは依然として甲斐型土器の甕に占められている。

健康村４期には食膳具は土師器坏Ｃ・皿Ｂの一群と長野系上器との両者がほぼ半々で構成されるようになる。土師器坏Ｃ・皿Ｂの胎土には赤色粒子が見られなくなり、甲斐型土器の系譜から脱却している。一方、煮沸具のほうも土師器甕Ｂのように甲斐型上器以外のものが登場してくる。そのほかには土師器小形壺や灰釉陶器の椀・皿が見られる。特に灰釉陶器は破片が多いが、この時期になって増加してくるようである。

以上をまとめると、煮沸具に関しては１期から４期まで一貫して甲斐型土器に大部分が占められているが、４期には甲斐型土器の甕（大形）が姿を消し変化の兆しが見られる。一方、食膳具に関しては１期から３期までは甲斐型土器とその系譜を引く土器群が主体をなす。長野系上器は１期に数点見られた後は２期に姿を消し、３期になって再登場してくる。そして４期には甲斐型土器は完全に姿を消し、長野系土器とロクロ未調整の坏・皿とで構成されるようになる。甲斐型土器と長野系上器との関係で言えば、３期を境に甲斐型土器が消滅し、長野系上器の占める割合が増加していることになる。

次に長野系上器について長野県地域の土器編年の中でどのように位置付けられているのか見ていきたい。



第137図　健康村遺跡　編年

健康村1期とした19号住居跡から出土した黒色土器坏Bについては、松本平を中心とした中央自動車道の調査によって作成された編年と法量を比較してみると中央道6～7期に相当する[04]。中央道松本地区の報告では中央道編年の各期に伴う甲斐型坏が集成されているが、中央道5・6期に伴う甲斐型坏として甲斐編年Ⅶ～Ⅷ期の甲斐型坏があげられているので[05]、健康村1期との併行関係が確認できる。年代的にも中央道6～7期は9世紀中頃を中心とした年代が与えられており、問題は無い。しかし、10世紀後半とした健康村3期にも黒色土器坏が存在するが、中央道編年では黒色土器の坏は9世紀代でほぼ消滅しており、整合性が認められない。この第3期とした15号住居跡新は健康村1期の住居址と重複しているため、遺物が混入した可能性もあるが、黒色土器の坏は次の健康村4期にも存在しているので、やはり10世紀末まで残る可能性が高い。この時期に坏や椀に施された暗文の中には弧状のものなど他に例を見ないものもあり、在地産の可能性を否定できない。

今回の調査では黒色土器を中心にして胎土分析を行っている。詳細は別項に譲るが、この分析では健康村遺跡から出土した資料が長野でサンプルとした資料に近く、搬入品の可能性が高いということがわかってきた。しかし、今述べたように健康村3期・4期に存在する黒色土器の中には在地産の可能性を否定できないものもある。今後、この地域における長野系土器の在り方を検討して見る必要があるだろう。

註

1）坂本美夫・末木　健・堀内　真　1983　「甲斐地域－シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題　第Ⅱ版」『神奈川考古』第14号
坂本美夫　1986　「甲斐国における古代末期の土器様相」『神奈川考古』第21号
甲斐型土器研究グループ　1992　『甲斐型土器－その編年と年代－』　山梨県考古学協会
などを参照した。

2）黒色土器A類と黒色土器B類の語は田中　琢　1967　「窯業－概内」『日本の考古学』Ⅳ　河出書房　により、内面のみ黒色処理されるものをA類、内外面とも黒色処理されるものをB類としている。

3）坂本・末木・堀内（前掲註1）

4）甲斐型土器研究グループ（前掲註1）では坏Cのなかでも胎土・色調によっては甲斐型に属するものもあるとしているが、今回は体部・底部のヘラ削りの消失をもって甲斐型坏の消滅とした。

5）保坂康夫　1989　「古代の甲斐型甕をめぐって」『甲斐の成立と地方的展開』　角川書店

6）平野　修　1992　「黒色土器」『甲斐型土器』（前掲註1）

7）瀬田正明　1992　「皿」『甲斐型土器』（前掲註1）

8）坂本美夫　1989　「甲斐型坏－編年について（1）」『山梨考古学論集』

9）瀬田正明　1992　「甲斐型土器の年代」『甲斐型土器』（前掲註1）

10）灰釉陶器については斎藤孝正氏にご教示していただいた。

11）平野　修　1992　「甲斐型土器の定義」『甲斐型土器』（前掲註1）

12）平野　前掲註6

13）ここでは長野県に系譜が求められる土器といった程度の意味で「長野系土器」と呼んでおく。

14）小平和夫　1990　「古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4－松本市内その1－』
（財）長野県埋蔵文化財センター

15）同上

第5節　水洗選別

石川　郁

はじめに

水洗選別法とは、サンプリングした土壌をウォーターセパレーションにより洗浄し、フルイを使用して回収した残渣遺物の中から微細遺物を選別する方法である。この方法は、かつては旧石器時代の遺跡や貝塚等において、発掘調査時に検出が困難な微小な遺物を回収する目的でしばしば行なわれてきた。新宿区で行なった調査においても、鈴正寺川No.1遺跡[123]でこの目的により水洗選別を行ない、多くの微細礫を検出することができた。

近年の発掘調査の成果により、調査方法が見直され、従来から行なわれていた旧石器時代の遺跡や貝塚以外の遺跡においても水洗選別法が取り入れられるようになった。新宿区で水洗選別法が盛んに行なわれるようになったのは、平成元年5月から翌2年1月まで発掘調査が行なわれた戸山遺跡[125]からである。戸山遺跡では、炭化種子等の採集を目的として水洗選別法を導入した。その結果、炭化米319点を含む4,282点の炭化種子のほか、ガラス小玉3点等が検出された。以後、下戸塚遺跡[124]、穴八幡神社遺跡[126]、北新宿三丁目遺跡[135]、高田馬場三丁目遺跡[130]、南町遺跡[127]等、弥生時代後期から古墳時代初頭の遺跡を中心に水洗選別を行ない、炭化種子やガラス小玉が検出される等、多大な成果を納め、その有効性が確認された。

本遺跡においても、遺構総数71基のうち、住居跡9基、焼土坑2基、石組土坑6基、土坑1基、屋外炉5基の23遺構から土嚢袋にして649袋と12号土坑出土土器(第16図－7)内土壌のあわせて650サンプルを採取した。

本稿においては、本遺跡とこれまで新宿区で行なってきた水洗選別の方法および成果を比較しつつ、その問題点等について検討してみたい。また、炭化種子の検出状況についても、若干触れてみることにする。

なお、本稿で比較対象とする遺跡は、新宿区内の遺跡で既に報告書が刊行されている戸山遺跡、下戸塚遺跡、穴八幡神社遺跡、北新宿二丁目遺跡とする。また、本遺跡で行なったサンプルではサンプル方法の相違により遺構間でサンプル数にかなりの差があるため、本稿における分析においては、遺構の帰属時期、性格およびサンプル方法ごとに行なった。

1．調査方法

(1)　サンプリング

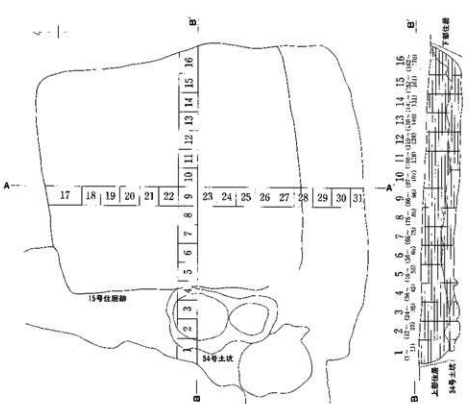
これまで新宿区において行なってきたサンプリングは、その方法に多少の差異はあるものの、多くの場合、セクションベルトを機械的に区切る柱状サンプリング法であった。また、通常はすべての住居跡についてサンプリングを行なってきた。しかしながら、本遺跡においては、人的・時間的諸制約等もあり、サンプリングを行なう遺構を目的に応じて抽出せざるを得なかった。

本遺跡においても、従来行なってきた水洗選別と同様に、その目的は炭化種子等、微細な遺物の検出にあった。従って、住居跡、土坑(石組土坑は除く)については、炭化種子検出の可能性が比較的高いと思われる炉、カマド、焼土を中心としたサンプリングを行なった。但し、15号住居跡に関しては、本遺跡で検出されたなかで最も遺存状況が良好な住居跡であり、また、中層より炭化材が検出されたため、幅30cmに設定したセクションベルトを利用した柱状サンプリングを行なった。長さ30cm、厚さ5cmに機械的に区切って、計298サンプルを採取した(第138図)。石組土坑に関しては、発掘当初は墓と考えられていたため、炭化種子の検出に加え、装飾品等の検出の可能性も想定して、検出された6基についてすべての遺構から全土壌をサンプリングした。

なお、遺構ごとのサンプリング方法を別表に記した(第42表)。

(2)水洗選別

採取した土壌は、以下の手順をおって処理した。



第138図　15号住居跡サンプル設定図

第42表　サンプリング方法一覧表

遺構名	時代	サンプリング方法
1号住居跡	平安	2か所の焼土の広がりを分けてサンプリング
6号住居跡	縄文	炉跡及び南北それぞれの焼土だまりをサンプリング
13号住居跡	平安	2つの炉跡をそれぞれサンプリング
14号住居跡	平安	焼土が検出されたピットのみ一括サンプリング
15号住居跡	平安	十字のセクションベルトを利用した柱状サンプリング，カマドの一括サンプリング
17号住居跡	縄文	ピット一括サンプリング，炉跡をセクション面を基準に南北に分け，裏込土もサンプリング
19号住居跡	平安	カマドの一括サンプリング
20号住居跡	平安	カマド，袖跡，ピット，焼土の拡がりをそれぞれ一括サンプリング
21号住居跡	平安	カマド，炉跡をそれぞれ一括サンプリング
2号土坑	時期不明	焼土部分を一括サンプリング
12号土坑	縄文	土器（第16図－7）内土壌
1号焼土土坑	縄文	焼土を中心に一括サンプリング
2号焼土土坑	縄文	焼土を中心に一括サンプリング
1号石組土坑	中世	セクション面を基準に南北に分け，更に裏込土も順次土嚢につめた
3号石組土坑	中世	覆土を一括して順次土嚢につめた
4号石組土坑	中世	覆土を順次土嚢につめた
5号石組土坑	中世	セクション面を基準に東西に分け，順次土嚢につめた
6号石組土坑	中世	セクション面を基準に南北に分け，順次土嚢につめた
7号石組土坑	中世	セクション面を基準に南北に分け，順次土嚢につめた
6号屋外炉	時期不明	焼土を中心に一括サンプリング
7号屋外炉	時期不明	焼土を中心に一括サンプリング
8号屋外炉	時期不明	焼土を中心に一括サンプリング
9号屋外炉	時期不明	焼土を中心に一括サンプリング
10号屋外炉	時期不明	焼土を中心に一括サンプリング

第43表　水洗選別残渣遺物記録用紙

サンプルNo.	メッシュ	炭化種子	炭化物	土器片	石器	陶磁器類	石	骨	貝	その他
	粗									
	中									
	細									

①水洗作業

採取した土壌に任意のサンプリング番号を振りながら、市販のセパレーターを使用してウォーターセパレーションを行なった。その際、残渣遺物回収のために5㎜、2.5㎜、1㎜メッシュのフルイ[285]を使用した。

②乾燥

フルイにたまった残渣遺物を乾燥させた。

③選別作業

乾燥作業終了後、各残渣遺物をメッシュサイズごとに選別作業を行なった。選別作業にはピンセットを使用し、炭化種子、炭化物[286]、土器片、石器、陶磁器類、石、動物遺存体、その他の遺物に分類し、カウントして記録用紙(第43表)に記録した。なお、炭化物に関しては、大半のサンプルで確認されたものの、かなり脆弱なために作業中に破損することも多く、その量を大量、多量、中量、少量に分けて記録するにとどめた。また、石の中には自然石および黒曜石を含み、石器は定形的な石器のみとしている。

なお、選別した炭化種子は、パリノ・サーヴェイ株式会社に同定を依頼した（第6章第1節参照)。

2．調査結果

本遺跡において採取したサンプル数は土嚢袋で650袋を数える。また、水洗選別によって得られた残渣遺物は、炭化種子594点、動物遺存体79点、土器片2,361点、石器2点、陶磁器類・金属製品13点、石10,111点であった。遺構別の詳細は別表の通りである(第44表)。

また、柱状サンプルを行なった15号住居跡は単独に考え、遺構の帰属時期および遺構の性格ごとの組成は、石組土坑(中世)および時期不明遺構で炭化種子の占める割合がやや高いほかは、ほとんどが土器片であった(第139図)。

(1)遺物検出状況

①住居跡（縄文)

6号住居跡

炉跡、2か所の焼土だまりからそれぞれ1袋ずつ、計3サンプルを採取したが、炭化物が少量検出されたのみである。

17号住居跡

炉跡から17袋分、ピットから1袋分の計18サンプルを採取した。炭化物少量と土器片が検出されたほか、同定不能な炭化種子が1点、炉跡より検出された。

②住居跡（平安)

1号住居跡

2か所の焼土の拡がりからそれぞれ1袋ずつ、計2サンプルを採取したが、炭化物が少量検出されたのみである。

13号住居跡

2つの炉跡からそれぞれ1袋ずつ、計2サンプル採取したが、炭化物が少量検出されたほか、貝片が3点検出された。

14号住居跡

焼土が確認されたピットからのみ、3袋分採取した。炭化物が少量検出されたほか、土器片少量と炭化種子1

点が検出された。

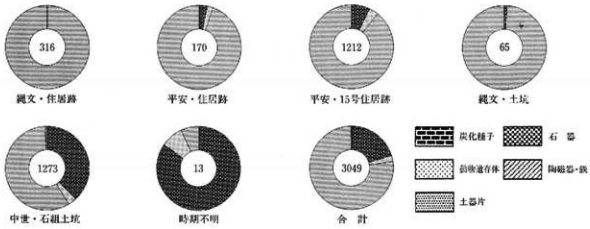
15号住居跡

柱状サンプルにより298サンプル、カマドより2袋分、計300サンプル採取した。

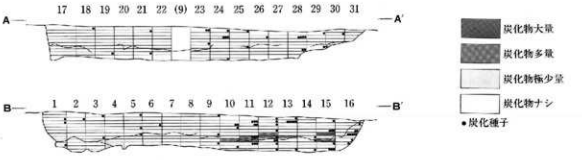
本遺構は34号土坑を切り、また、構造が若干異なる2つの住居が重複していた。サンプリングを行なったカマドは上部住居に属するものである。この3つの遺構は、セクション面からも確認できたが、一部に上部住居と下部住居の境界が明瞭にし得ない箇所があり、また、機械的な区分を行なったために、どの遺構のサンプルか不明瞭なもの、2遺構にまたがるサンプルもあり、純粋な遺構覆土と考えられるサンプル数は、上部住居166、下部住居75、34号土坑6の計247であった。

第44表　遺構別サンプル数および残渣遺物一覧表

	サンプル数	炭化種子	動物遺存体	土器片	石器	陶磁器・鉄	石
1号住居跡	2	0	0	0	0	0	13
6号住居跡	3	0	0	0	0	0	21
13号住居跡	2	0	3	0	0	0	5
14号住居跡	3	1	0	7	0	0	4
15号住居跡	300	93	41	1,076	1	1	2,829
17号住居跡	18	1	0	315	0	0	607
19号住居跡	1	1	0	3	0	0	0
20号住居跡	10	4	1	150	0	0	398
21号住居跡	2	0	0	0	0	0	19
1号焼土土坑	1	0	0	1	0	0	2
2号焼土土坑	1	0	0	0	0	0	12
12号土坑土器内	1	1	0	63	0	0	10
1号石組土坑	24	45	13	149	0	0	627
3号石組土坑	5	3	0	110	0	3	92
4号石組土坑	30	27	3	85	0	0	945
5号石組土坑	80	79	8	86	0	8	1,089
6号石組土坑	121	291	8	164	1	0	2,633
7号石組土坑	31	37	1	71	0	1	449
6号屋外炉	1	0	0	0	0	0	2
7号屋外炉	1	5	0	0	0	0	17
8号屋外炉	1	2	0	0	0	0	0
9号屋外炉	1	1	0	0	0	0	5
10号屋外炉	1	1	0	0	0	0	1
2号土坑	10	2	1	1	0	0	331
合　計	650	594	79	2,261	2	13	10,111



第139図　残渣遺物組成



第140図　15号住居跡炭化物および炭化種子検出状況

炭化種子は同定可能55点、同定不能６点、不明32点[注30]の計93点が検出された。１サンプルで検出された炭化種子数は最高５点と、特に集中した傾向はみられなかったが、全体的にみると、東西ベルト東側にやや集中した傾向がみられた。また、炭化物に関しては東側の上部住居と下部住居の境界付近に集中した傾向が認められた。更に、全く検出されないサンプルおよび極少量しか検出されないサンプルは西側にやや集中した傾向がみられた（第140図）。炭化物の同定は行なわなかったが、木道構の北東部中層より炭化材（コナラ属）が検出されており[注31]（第47図）、これらも同様のものと思われる。

また、動物遺存体も全体の半数以上にあたる41点が検出された。このうち40点は貝片、１点は魚鱗であった。

19号住居跡

カマドから１袋分採取した。炭化物少量と土器片が３点検出されたほか、不明な炭化種子が１点検出されたのみである。

20号住居跡

カマド、炉跡、ピットから１袋ずつと焼土の拡がりから７袋分の計10サンプル採取した。炭化物の検出状況は、他の住居跡よりやや多い。炭化種子は不明なものが４点検出されたのみである。

21号住居跡

カマドと炉跡から１袋ずつ、計２サンプル採取したが、炭化物が少量検出されたのみである。

③焼土坑（縄文）

２基の焼土坑から１袋ずつサンプリングしたが、炭化物が少量と１号焼土坑から土器片が１点検出されたのみである。

④土坑

12号土坑（縄文）

縄文土器（第16図－７）内の土壌をサンプリングした。炭化物が多量に検出されたが、炭化種子は同定不能なものが１点検出されたのみである。

２号土坑（時期不明）

覆土を10袋分サンプリングした。炭化物が少量検出されたほかは土器片１点、魚鱗１点、炭化種子２点、貝片１点が検出された。

⑤石組土坑（中世）

１号石組土坑

覆土14袋分、裏込土10袋分の計24サンプル採取した。炭化物は少量の検出であった。動物遺存体は13点と、本遺跡のなかでは15号住居跡に次いで多い。すべて同定不能な貝片である。炭化種子は45点検出された。

３号石組土坑

覆土を５袋分採取した。炭化物は少量の検出であり、炭化種子も３点検出されたのみである。

４号石組土坑

30袋分採取したが、このうち遺構覆土は10袋分であり、20袋分は自然層のものである。炭化物は少量検出され、炭化種子は遺構内で７点、自然層で20点検出された。

5号石組土坑

覆土を80袋分採取した。炭化物は少量の検出であり、炭化種子が79点検出されたほか、8点と、本遺跡においては比較的多くの動物遺存体が検出された。すべて同定不能な貝片である。また、鉄片が8点検出された。水洗選別により鉄片が検出されたのは本遺構のみである。

6号石組土坑

覆土を121袋分採取した。炭化物は、石組土坑のなかでは多く検出された方である。また、炭化種子は291点と、本遺跡のなかでは最も多く検出された。そのうち、同定し得た炭化種子の9割以上に当たる208点はアカザ属であった。また、貝片が8点検出された。

7号石組土坑

覆土を31袋分採取した。炭化物は少量の検出であり、炭化種子は37点検出された。

⑥屋外炉（時期不明）

6号～10号屋外炉

覆土を1袋分ずつ採取した。いずれも炭化物が少量検出された。炭化種子は6号では検出されなかったが、7号で5点、8号で2点、9号と10号で1点ずつ検出された。

(2)残滓遺物回収率

遺構の性格・時代別に、水洗選別によって回収された遺物をメッシュの大きさで比較してみる(第141図)。但し、柱状サンプリングを行なった15号住居跡は単独で考えることにする。また、石は自然石と黒曜石が含まれており、今回の分析からは除外した。

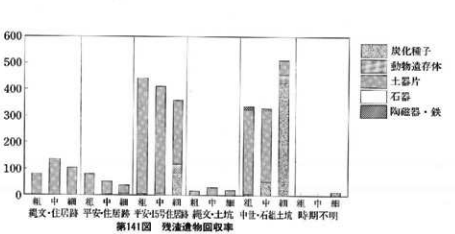
粗・中で回収された遺物はほとんどが土器片である。炭化種子も検出されているが、モモ、ウメの核等であり、炭化種子のほとんどが細で検出された。サンプルを多く採取した15号住居跡、石組土坑においては細の炭化種子が占める割合が高く、特に石組土坑に至っては8割以上が炭化種子となっている。サンプルを多く採取した遺構は炭化種子が多く検出されており、また、炭化種子はほとんど細で採取されているため、細における炭化種子の占める割合が高くなっているといえる。

3．対　比

これまで新宿区が調査を行ない、既にその成果が報告されている遺跡と本遺跡について、その方法、成果等を比較してみる。更に、植物遺存体の検出傾向についてもここで若干触れてみることにする。

(1)サンプル方法

新宿区で行なったサンプル方法には若干の相違点はあるものの、主に次の4方法で行なわれてきた。即ち、i)セクションベルトを利用した柱状サンプル、ii)セクションベルトを利用した層位サンプル、iii)覆土全サンプル、iv)付帯施設の全土壌サンプル、である。



第141図　残滓遺物回収率

ⅰ)の方法でサンプルを行なったのは戸山遺跡、下戸塚遺跡である。戸山遺跡ではⅰ)のほかにⅳ)を併用した。下戸塚遺跡では基本的にはⅰ)およびⅳ)であるが、遺構によってはⅱ)やⅲ)、あるいはⅰ)とⅱ)の併用といった方法で行なった。特に、1号住居跡および3号住居跡で行なった覆土全サンプルは、新宿区で初めての試みであった。穴八幡神社遺跡ではⅱ)の方法で行なっている。また、北新宿三丁目遺跡では、独自の方法でサンプリングを行なった。住居跡に小グリッドを設定し、それぞれのグリッドごとの床面直上約10cmの覆土を採取するという方法である。本遺跡では、15号住居跡でⅰ)、石組土坑でⅲ)の方法でサンプリングを行なったほかは付帯施設のサンプルであった。

サンプル方法による植物遺存体検出頻度をみてみると、当然のことかも知れないが、覆土全サンプルを行なった遺構からは多くの植物遺存体が検出されている。つまり、本遺跡では石組土坑で全体の約44.8%にあたる291サンプルを採取し、同じく約81.1%にあたる482点の炭化種子が検出されている。また、下戸塚遺跡の1号住居跡および3号住居跡では全体の約46.6%にあたる1,630サンプルを採取し、同じく約60.4%にあたる2,813点の炭化種子が検出されている。このことだけをみると、サンプル数と植物遺存体の検出数は比例していることになる。

(2)覆土と付帯施設

本遺跡は、15号住居跡および石組土坑以外は付帯施設のサンプルが中心であった。それぞれのサンプル数は、遺構覆土546、付帯施設103であった。そのうち、付帯施設から検出された炭化種子は14号住居跡から検出された1点(アカザ属)のみであった。これまで炉跡、カマド等からは炭化種子等が検出される可能性が高いと考え、付帯施設は全サンプルを行なってきたが、この結果からは必ずしも付帯施設から植物遺存体が多く検出されるとは言い難い。また、今回比較対象とした遺跡のなかには、遺構覆土と付帯施設それぞれのサンプル数を報告したものはなく、サンプル数に対する炭化種子検出数は明瞭にできない。しかし、戸山遺跡および下戸塚遺跡では検出された炭化種子を覆土と付帯施設に分けて報告されている。

戸山遺跡からは付帯施設から5種55点に対して覆土からは10種480点、下戸塚遺跡では付帯施設から2種223点に対して覆土から10種4,431点検出された。この結果からみると、付帯施設からはそれほど検出されていないように思われるが、当然、覆土と付帯施設は採取したサンプル数にかなりの差があるため、この結果からは一概には付帯施設から検出されにくいとはいえない。また、本遺跡の結果からも分かるように、付帯施設の結果だけみても、全体的な傾向を知ることはできない。

(3)サンプル数と植物遺存体の検出状況

遺跡全体のサンプル数と検出された炭化種子の状況を観察してみると、戸山遺跡では5,290サンプル採取し、検出された炭化種子は45種4,282点であった。戸山遺跡は埋没谷を伴う弥生時代後期の遺跡であり、住居跡と谷部のサンプルを行なった。検出された植物遺存体は、住居跡ではイネが圧倒的に多く住居跡全体の約57.7%にあたる305点であった。また、谷部は住居跡ではほとんどみられなかったモチノキ属、ホタルイ属、タデ科、スゲ属等が多く検出されている。下戸塚遺跡では詳細なサンプル数は報告されていないが、約3,500サンプル採取した。その結果、炭化種子が11種4,654点検出された。そのうち、種の同定をし得たものは11種973点であり、そのなかで約97.3%にあたる947点がイネであった。穴八幡神社遺跡では703サンプルを採取し、4種44点の炭化種子が検出された。同定可能であったもののほとんどがイネであった。北新宿三丁目遺跡では1,242サンプルを採取し、6種277点の炭化種子が検出された。このうち、約37.9%にあたる105点がイネであった。本遺跡は、650サ

第45表　遺跡別炭化種子検出状況表

遺跡名	時　代	サンプル数	炭化種子数	同定可能数	主　要　種　名　(検出数)
戸山遺跡	(包含層) 弥生、奈良 埋没谷	5,290	45種4,282	4,132	(住居跡) イネ (305)、アカメガシワ (37)、アカザ属 (34)、 (埋没谷) モチノキ属 (1,022)、ホタルイ属 (489)、タデ科 (442)、スゲ属 (326)、ニワトコ (178)、 サンショウ (148)、カナムグラ (129)、スミレ属 (117)
下戸塚遺跡	弥生、奈良	3,500	11種4,654	973	イネ (947)、ブドウ属 (7)、タデ科 (5)
穴八幡神社遺跡	弥生	703	4種　44	17	イネ (14)
北新宿三丁目遺跡	弥生	1,242	6種　277	214	イネ (165)、アカザ科 (36)、ブドウ属 (6)、モモ (4)
健康村遺跡	縄文、平安、中世	650	12種　594	413	アカザ科 (345)、アワ (22)、イネ (16)、オオムギ (15)、モモ (4)、タデ科 (3)、クリ (3)

ンプル採取し、12種594点の炭化種子が検出された。そのうち、約58.1%にあたる345点がアカザ属であり、ほかの遺跡で最も多く検出されたイネは17点と少なかった(第45表)。

多くの遺跡で検出された炭化種子のうち、食用となり得るものはイネ、オオムギ、アワ、ウメ、モモ、サンショウである。また、本遺跡で多く検出されたアカザ属は食用になるものもあり、人為的に住居に持ち込まれた可能性も否定できないが、雑草として普通にみられる種類が多く、また、本遺跡の場合はその大半が石組土坑から検出されており、当時の植生によるものと思われる。

これらの食用となり得る植物遺存体がどのような検出状況を示すのか、今までの結果からはデータが不足しており、明確にはし得ない。

(4)炭化種子の同定可能度

炭化種子の同定可能度をみてみることにする。戸山遺跡では4,282点のうち同定可能なものは4,132点あり、約96.5%の炭化種子が同定できたことになる。下戸塚遺跡では4,654点のうち973点しか同定できず、全体の約20.9%しか同定できなかったことになる。穴八幡神社遺跡では44点中約38.6%にあたる17点が同定できた。北新宿三丁目遺跡では277点中全体の約77.3%にあたる214点が同定できた。本遺跡の場合は594点中約69.5%にあたる413点が同定できた。炭化種子のなかには炭化が著しく、同定が困難なものも少なくない。また、ウォーターセパレーションは土壌サンプルに水を注ぎながら攪拌するわけであるが、その際、脆弱な炭化種子が破損してしまうこともあり得る。この、同定可能度の差は何に由来するものかは一概にはいえないが、例えば、戸山遺跡では一部にセパレーションを併用した。90%を越える同定可能率はこの成果かも知れない。

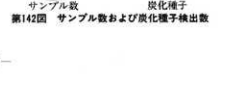
4. まとめ

新宿区内の遺跡で行なってきた水洗選別では、炭化米・炭化種子等の植物遺存体のほかに、ガラス小玉等、微細な遺物の検出といった成果が報告されている。本遺跡においては、その主目的が炭化種子の検出にあり、サンプル数も少なかったため、微細な遺物の検出には至らなかった。しかしながら、合計594点の炭化種子を検出することができ、当初の目的は十分に達することができたといえる。ただ、本遺跡で唯一柱状サンプリングを行なった15号住居跡からは約15%の炭化種子しか検出することができず、覆土をすべてサンプリングした石組土坑からは約81%の炭化種子を検出することができた(第142図)。このことは、当然のことであるが、覆土すべてをサンプリングした方がより多くの資料を得ることができるということを示している。

当初は炭化種子が検出される可能性が高いと思われていた炉跡、カマド跡、焼土の拡がりのサンプルしか行なわなかった住居跡からの検出は少なかった。このことは、それらのサンプルだけでは決して十分といえるものではないということを示している。

また、本遺跡において最も多くのサンプルを採取した遺構は15号住居跡であるが、検出された炭化種子が最も多かったのは6号石組土坑であった。このことは、単にサンプル数の多さと炭化種子の検出状況は必ずしも比例するものではないということを示している。ただ、6号石組土坑もサンプル数が決して少なかったわけではない。石組土坑のなかでも、3号石組土坑は採取サンプル数も5袋分と少なく、検出炭化種子も3点と、少ない。全体的にみて覆土をすべて採取した石組土坑からは検出数が多い傾向にあるのは確かであるが、炭化種子の検出数は、むしろ、遺構の遺存状況、遺構の体積に対するサンプル体積の占める割合に比例するのではないだろうか。今回の調査では明らかにし得なかった今後の検討課題でもある。

今回検出された炭化種子は11種594点であるが、そのうち、約68%にあたる406点は同定可能なものであった。この数は比較的保存状況が良好であったと言えよう。より多くの且つ正確なデータを得るには、サンプル、水洗選別、あるいは保管といった作業において、



第142図　サンプル数および炭化種子検出数

十分な注意が必要である。また、本遺跡も含めて、これまでサンプルを行なってきた遺跡においても言えることであるが、それらから検出された植物遺存体のなかには覆土上面から検出されたものもみられる。これは後世の落ち込みによるものも含まれている可能性も否定できない。サンプル採取にあたっては、攪乱中の不純物が混入しないように、サンプリングを行なう際の層位の十分な認識と慎重さが必要である。

おわりに

サンプリング、ウォーターセパレーションには多大な労力と時間を費やすものである。しかし、そこから得られる成果も大きい。今回の調査では、覆土をすべて採取した石組土坑において炭化種子が特に集中した検出がみられた。しかし、時間的・人的諸制約がある遺跡調査においては、遺構すべての覆土を採取することはほとんど不可能なことである。そのためにも、サンプリング、水洗選別を行なう際には、計画性と十分な注意が必要となってくる。

新宿区の調査における水洗選別は、弥生時代が中心であり、本遺跡で行なった縄文時代や平安時代、中世に関しては、該期の遺跡が希薄なこともあり、あまり行なわれていない。本調査においては、検出された炭化種子の8割以上が中世の遺構であり、縄文の遺構からはたった2点検出されたのみであった。また、炉跡やカマド跡等からの検出数も少ない。しかし、水洗選別の有効性は既に確認されており、縄文時代の遺構からも炭化種子が検出される可能性は十分に考えられる。また、サンプル方法、遺構の時期・性格、更に、遺構の遺存状況と炭化種子の検出状況の問題も含めて、今後も水洗選別による比較データが得られることを期待したい。

(註1) 妙正寺川No.1遺跡調査会『妙正寺川No.1遺跡』1987
(註2) 戸山遺跡調査会『戸山遺跡』1991
(註3) 新宿区西早稲田地区遺跡調査会『下戸塚遺跡』1993
(註4) 穴八幡神社遺跡調査団『穴八幡神社遺跡』1993
(註5) 新宿区福祉部遺跡調査会『北新宿三丁目遺跡』1993
(註6) 1994年3月、報告書刊行予定
(註7) 1994年3月、報告書刊行予定
(註8) 便宜上、5㎜メッシュを粗、2.5㎜メッシュを中、1㎜メッシュを細とした。
(註9) 炭化種子以外の炭化物を総称して炭化物とした。
(註10) 不明とは、選別作業中は炭化種子としたが、同定の結果、炭化種子と確定し得なかったものを示す。
(註11) 本遺跡において炭化材35点を同定した(第6章第1節参照)。その結果、ほとんどがコナラ属の一種であった。

参考文献

石川郁「水洗選別」『下戸塚遺跡』新宿区西早稲田地区遺跡調査団、1993
富田達也「水洗選別の方法と成果」『北新宿二丁目遺跡』新宿区福祉部遺跡調査会
戸山遺跡調査会『戸山遺跡』1991
妙正寺川No.1遺跡調査会『妙正寺川No.1遺跡』1987
諸田康成「微細遺物」『穴八幡神社遺跡』穴八幡神社遺跡調査団、1993

第8章　総括

谷川章雄・板倉歓之

はじめに

健康村遺跡の調査成果について、時代毎にその概観と問題点を述べると共に、遺跡の立地という点から全体をまとめることとする。

縄文時代

縄文時代の遺構としては、A・E・Gという3つの地区全体で24基を紹介した。

前期末（諸磯c式期）のものとしては、A地区の6号住居跡、土坑群（1・3～12号土坑、1・2号焼土坑）があり、中期初頭（五領ヶ台Ⅱ式期）のものとしては、A地区の2号埋甕、E地区の23号土坑がある。また、中期後半（曽利Ⅱ～Ⅲ式期）のものとしては、A地区の17号住居跡と1号埋甕がある。さらに、晩期末（氷Ⅰ式期）のものとしては、A地区の4号埋甕、E地区の26号土坑、28号土坑、29号土坑、30号土坑、G地区の13号竪穴状遺構、14号竪穴状遺構がある。

A地区において検出された、前期末の住居跡と土坑群との関係及び、中期後半の住居跡と埋甕との関係は、住居跡の軒数が少ないものの、一般的に見られる様相であると考えられる。しかし、中期初頭の単独で存在する埋甕は、とても一般的なものとは言えないようである。というのは、屋外に営まれている埋甕は、普通、住居群との関係の中で捉えられることが多く、本遺跡の様に、埋甕だけが検出されることはあまり多くないものと考えられるからである。

野代氏は、土器の変遷に基づく分類によって、前期末のものと、中期初頭のものとの間に時間差を想定している（第7章第1節）が、この間の土器については、地域差として捉える考え方もあり、研究者の一致した見解とはなっていないようである。仮に、この間に時間差が無く、継続するものと考えると、中期初頭の埋甕は、前期末の集団が最後に残したものと考えられないこともない。

前期末（諸磯c式期）から中期初頭（五領ヶ台Ⅱ式期）にかけては、全国的にも、遺構の掘り込みが浅いなど、遺構の遺存状態が悪いようである。これは、定住期間が短いことによるものと考えられており、社会的に不安定な時期であるとされている（註1）。なぜ、このような状況になるのかは不明であるが、植生や気候の変化は理由にならないようである。

晩期末の遺構・遺物は、E地区においてその大半が検出された。小林氏による上器群の検討から、これらはいわゆる氷Ⅰ式上器と呼ばれるもので、中部高地における浮線文土器の第3段階の前半に位置づけられ、八ヶ岳南麓地域においては、健康村遺跡段階として、一段階を画する資料であることが判明した（第7章第3節）。また、A地区の4号埋甕は、ほかの土器とは多少の時間差をもち、第3段階末に位置づけられるものであると共に、上器棺墓として捉えられることが可能なもので、山梨県内では初めての検出例となった。遺構としては、A地区の上器棺墓、E地区の土坑、G地区の竪穴状遺構であり、全体的に貧弱である。さらに、E・G地区の遺構とA地区の遺構との間にも、時間差があるようで、A地区に土器棺墓を営んだ集団の生活痕跡は、見いだせなかった。

今回、縄文時代晩期末として報告した上器群の作られた時期は、西日本の様子から、弥生時代前期中葉（板付Ⅱ式期、綾内第1様式期）に比定される時期である。本遺跡の出土資料の中にも、東海地方（樫王式）からの影響を受けたと考えられるものがあると共に、籾圧痕を有する土器が検出されている（図版96）。また、土器の器種組成に壺が加わり、本遺跡を営んだ集団も弥生文化の風を受けていたと考えられる。このため、時代呼称としては、弥生時代前期としても良いと考えるが、時代区分論における尺度が共通認識となっていない（註2）と考えられるため、今回は、従来どおりの時代呼称を用いた。

平安時代

平安時代の遺構は、A地区において検出された住居跡14軒のみであった。これらの住居跡はA地区の平坦部に位置するもので、3号住居跡と16号住居跡は堆積層を覆う黒色土中に、12号住居跡も同様の黒色土中に営まれていた。

出土遺物は全体的に少なく、それぞれの住居跡の帰属時期を決定するのに苦慮したが、土器の検討を行った瀬田氏によると、これらは5期に分けられるようである（第7章第4節）。健康村1期から4期にかけては、ほぼ9世紀前半から10世紀終末にあたるもので、住居跡は同時に1・2軒が営まれただけであったが、細々とだが継続していたと考えられる。健康村5期はほぼ12世紀中頃にあたるもので、前4期とは時間差をもっており、集団の断絶があったことが考えられる。なお、15号住居跡は2軒の住居が重複した状態で検出されているが、その時期は健康村Ⅰ期（9世紀前半～中頃）と3期（10世紀後半）と考えられており、その差は1世紀以上ある。出土遺物の編年観に間違いがない限り、同一の住居の建て替えとは考えられない。

14軒の住居跡のうち、確実にカマドを伴うものは、3・10・11・14・15・16・18・19・20・21号住居跡の10軒であり、カマドとは判断できなかったものの、石を配置していたものが2・12号住居跡であり、1・13号住居跡にいたっては、一般的な住居とは構造から異なるものであると考えられる。1号住居跡は、帰属時期を決定することが不可能な状態であったが、遺物としては鉄片または鉄滓と考えられるものが多く検出されている。また、13号住居跡からは鉄鏃が2点検出されており、周辺からも鉄滓が検出されている。このことから、1・13号住居跡は、鍛冶関連遺構として捉えることが可能なものと考えられる。この遺構の性格が、時期的にほかの住居跡と時間差をもつことに関連するものかは不明である。

3号住居跡から「伴」と読める文字の書かれた墨書土器が検出された。文字の鑑定を行った平川　南氏は、大伴氏が伴氏に姓名変更すること（823年）に関連することを示唆されたが、土器そのものが健康村2期（9世紀末から10世紀中頃）に比定されるものであることと齟齬はなく、今後の地域史研究に新たな光を与えるものと考えられる。

15・20号住居跡を中心に、内面黒色処理の行われた土師器が検出されている。これらの土器は、長野県内で見られる黒色土器と形態・技法などが類似したもので、「長野系土器」と呼ばれるものである。この土器は、「甲斐型土器」における黒色土器とは胎土・製作技法が異なるものであるが、「甲斐型土器」の影響も多少見られることから、在地産であるのか、長野からの搬入品であるのかが注目されていた。

今回、これらの「長野系土器」について、蛍光X線による胎土分析を実施した（第7章第2節）。この際には、集落内に土器焼成遺構をもつ山梨県北巨摩郡須玉町の大小久保遺跡と、長野県松本市の小原遺跡を、山梨と長野の基準資料として、その他、数件の遺跡の黒色土器を比較資料として利用した。この結果、それぞれの基準資料は、その遺跡内で製作されたと考えられるほど分析データーにまとまりをもち、かつ、双方の差は明瞭であり、山梨型、信州型と分けられる状態であった。健康村出土の土器は、若干、信州型の範疇に入るものがあるものの、大半は不明領域に含まれるものであった。全体としては、より信州型に近い傾向を示しており、信州側からの搬入品であったことが考えられる。

胎土分析の結果から、「長野系土器」が信州からの搬入品であることが想定されることとなったが、このことは月下見て分類するという考古学特有の方法と、自然科学の分析結果とが一致した例として大きな意義をもつものである。この問題については、今後、不明領域の究明を行うことによって、更に進展するものと考えられる。

中世

中世の遺構としては、A地区の6基の石組土坑と2基の内耳土鍋を出土した土坑があげられる。石組土坑は長径1.26～2.7m、短径1.1～2.0m、深さ20～70cmと規模にはやや ばらつきが見られるが、長径1.3～1.4m前後、短径1.1～1.3mのものが半数を占めている。いずれも覆土中に自然の礫を組み、かつ積んだものである。この石組土坑の分布を見ると、1号石組土坑だけが東にやや離れているが、他はD～F－6～8グリッドの範囲に集中している。遺物は7号石組土坑から内耳土鍋の口縁部から底部の破片が出土しており、このことから石組土坑

の時期を中世と判断した。

さて、この石組土坑の性格については調査時の所見からは確定できなかった。墓の可能性もあるが、人骨は骨片も含めて全く検出されていない。遺物も上記の内耳土鍋の破片のみであるところから、石組土坑の性格を決するのは難しいのである。

以上のように、健康村遺跡の調査の成果を時代ごとにとりまとめてきたが、この遺跡の特徴のひとつは標高約750～780mという高地に立地していることであろう。そのため、遺跡のある丘陵および斜面は著しい侵食作用の影響下にあったと言える。A地区で検出された住居跡が浅い埋没谷の谷底周辺に集中して分布していたのは、あるいは侵食を受けながらも削り残された結果を示しているのかもしれない。いずれにしても、こうした標高の高い丘陵および斜面の遺跡を考える上で、侵食作用の影響は無視できないと思われる。

また、遺跡周辺の環境を復元する目的で、埋没谷の黒ボク土中の植物珪酸体の分析を試みた（第6章第1節）。その結果黒ボク土の上部ではクマザサ属の減少が顕著であり、畑作や森林伐採など人間による植生に対する干渉が考えられるという。この植生干渉の年代を詳しく知ることはできないが、石組土坑の覆土から栽培植物の炭化種子が多く検出されていることを考えると、中世の可能性が高い。おそらく溯っても住居が継続的に営まれる平安時代のことであったと考えられる。

（註1） 山梨県埋蔵文化財センター　野代氏の御教示による。

（註2） 時代区分をする際に、新しい文化要素が揃うことを条件にする点では一致していると考えられるが、そのスタートを全国一律とするのか、地域差を認めるのか、また、その場合前期、中期といった呼称を全国的に揃えるのか否かといった点で、研究者の間で共通認識が形成されているとは認められないのが、現状のように感じられる。

図　　版

図版1　A地区遠景（南西から）

図版2　B地区遠景（南から）

図版3　E地区遠景（西から）

図版4　G地区遠景

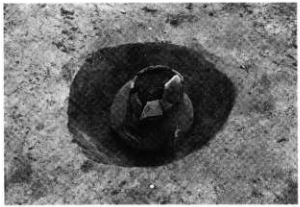
図版5　6号住居跡・土坑群

図版6　17号住居跡

図版7　17号住居跡炉

図版8　17号住居跡ピット

図版9　1号埋甕



図版10　2号埋甕

図版11　4号埋甕

図版12　35号土坑

図版13　1号住居跡

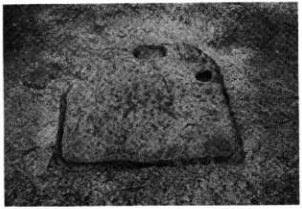
図版14　1号住居跡 ピット

図版15　2号住居跡

図版16　2号住居跡カマド

図版17　3号住居跡

図版18　10号住居跡



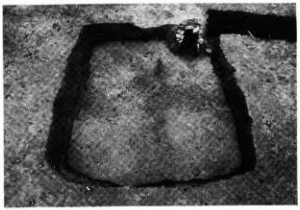
図版19　11号住居跡

図版20　12号住居跡

図版21　13号住居跡

図版22　14号住居跡

図版23　15号住居跡



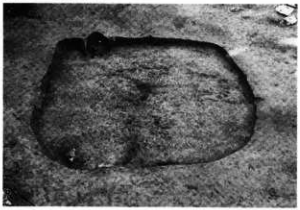
図版24　16号住居跡

図版25　16号住居跡カマド

図版26　18号住居跡

図版27　19号住居跡

図版28　20号住居跡 炭化物出土状況



図版29　20号住居跡

図版30　21号住居跡

図版31　1号石組土坑

図版32　3号石組土坑

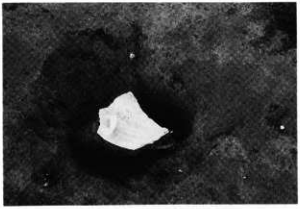
図版33　4号石組土坑

図版34　5号石組土坑

図版35　6号石組土坑

図版36　7号石組土坑

図版37　36号土坑

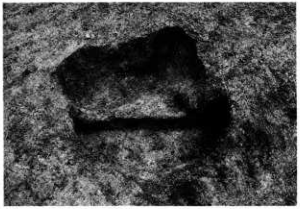


図版38　37号土坑

図版39　22号土坑

図版40　23号土坑

図版41　24号土坑



図版42　25号土坑

図版43　26号土坑

図版44　28号土坑

図版45　29号土坑

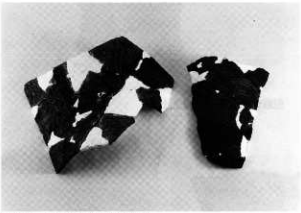
図版46　30号土坑

図版47　13号竪穴状遺構

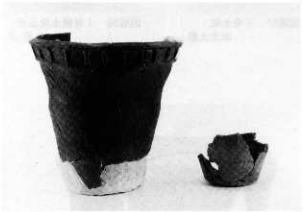
図版48　14号竪穴状遺構

図版49　試掘調査出土土偶

図版50　試掘調査出土石器



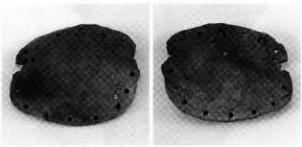
図版51　6号住居跡出土土器



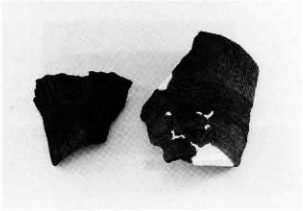
図版52　17号住居跡出土土器(1)

図版53　17号住居跡出土土器(2)

図版54　9号土坑出土土器



図版55　6号土坑出土土製品



図版56　1号焼土坑出土土器(1)

図版57　8号土坑出土土器

図版58　1号焼土坑出土土器(2)

図版59　12号土坑出土土器

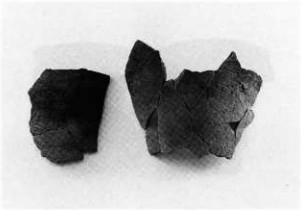
図版60　2号焼土坑出土土器(1)

図版61　2号焼土坑出土土器(2)

図版62　35号土坑出土土器

図版63　1号埋甕

図版64　2号埋甕

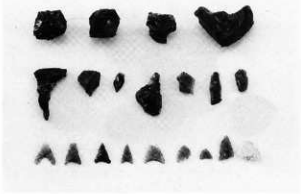


図版65　4号埋甕(1)

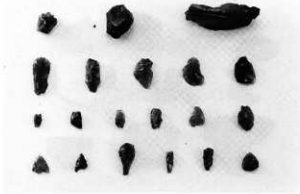
図版66　4号埋甕(2)

図版67　23号土坑出土土器

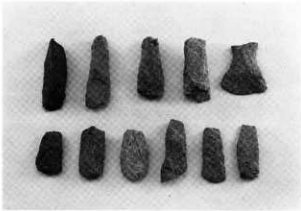
図版68　E地区遺構外出土土器



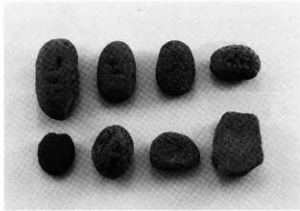
図版69　A地区遺構外出土石器



図版70　E地区遺構外出土石器(1)



図版71　E地区遺構外出土石器(2)

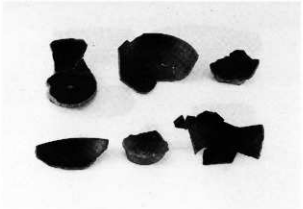


図版72　E地区遺構外出土石器(3)

図版73　2号住居跡出土土器

図版74　3号住居跡出土土器

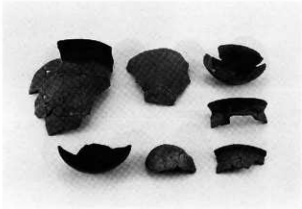
図版75　15号住居跡出土土器(1)



図版76　15号住居跡出土土器(2)

図版77　15号住居跡出土土器(3)

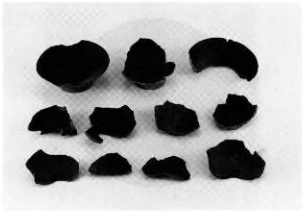
図版78　16号住居跡出土土器



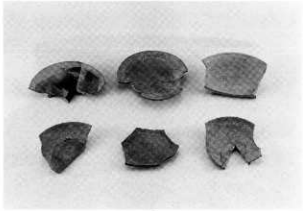
図版79　19号住居跡出土土器

図版80　21号住居跡出土遺物

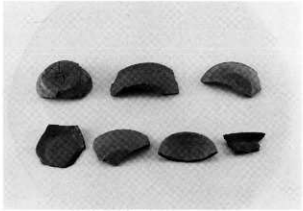
図版81　20号住居跡出土土器(1)



図版82　20号住居跡出土土器(2)



図版83　20号住居跡出土灰釉陶器



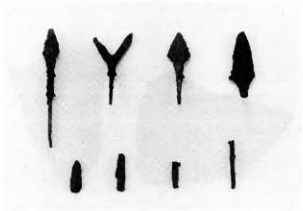
図版84　A地区遺構外出土土器

図版85　3号石組土坑出土土器

図版86　36号土坑出土土器

図版87　7号石組土坑出土土器

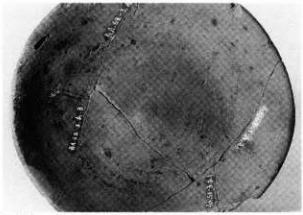
図版88　37号土坑出土土器



図版89　鉄製品

図版90　3号住居跡出土墨書土器

図版91　土器細部写真（第49図9　線刻）



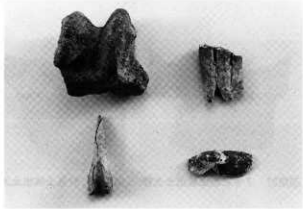
図版92　土器細部写真（第70図2　爪状圧痕）

図版93　土器細部写真（第62図3　線刻）

図版94　土器細部写真（第62図9　輪積み痕）

図版95　土器細部写真（第63図31　輪積み痕）

図版96　粗圧痕土器



図版97　動物遺存体

山梨県北巨摩郡長坂町

健康村遺跡

－（仮称）東京都新宿区立区民健康村建設事業に伴う発掘調査報告書－

1994年3月31日

編集・発行　新宿区区民健康村遺跡調査団

印　　刷　神田印刷株式会社